

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第84集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

田 篠 上 平 遺 跡

後期古墳と奈良・平安時代の集落跡の調査

1 9 8 8

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

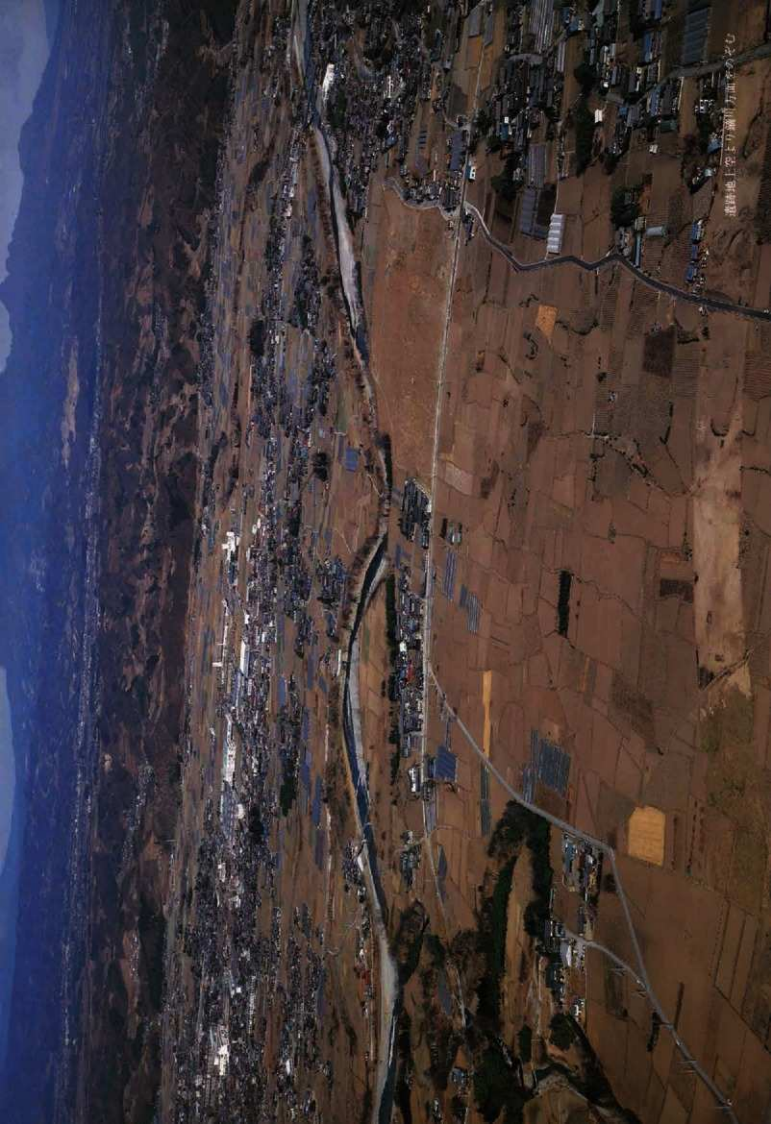
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第84集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

田 篠 上 平 遺 跡

後期古墳と奈良・平安時代の集落跡の調査

1 9 8 8

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



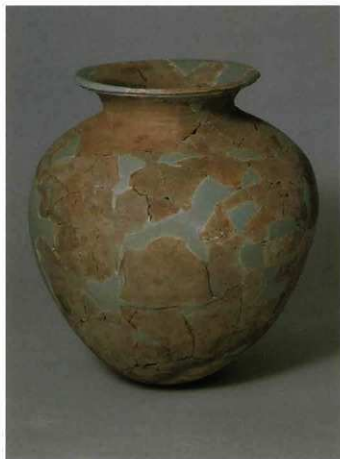
東洋の空と大地の風景



1号墳全景



1号墳出土長頸瓶



1号墳出土大甕



41号住居跡竈



11号住居跡出土遺物

序

日本海側と太平洋側を結ぶ高速自動車道はすでに関越道新潟線が完成していますが、高速自動車道建設の要請はなお強くその第二の事業として長野県を経て群馬県と新潟県とを結ぶ上信越線が甘楽の谷に計画され事業が始まりました。

この地域は古代東国文化の中心地の一つでありまして、国特別史跡の多胡碑、上野国の一の宮であります貫前神社などが存在する貴重な歴史の宝庫であります。発掘調査は昭和61年度から開始され、多くの重要な発見がなされ記録として保存されました。これらは順次整理をし報告書として広く活用する計画であります。

田篠遺跡は遺跡地東方を北流する雄川が形成した氾濫源の中央部分に位置します。縄文中期の配石遺構と奈良～平安時代の集落と古墳二基の調査でした。本報告は古墳と奈良～平安時代の集落址の部分についてであります。この調査によって、扇状地中央部に集落や古墳を造営した人々の生活の様子について貴重な資料を得ることができました。

調査の実施に当たりまして種々ご配慮、ご指導を頂きました群馬県教育委員会、日本道路公団東京第二建設局を初めとする関係各位に感謝するとともに直接発掘整理に当たられた関係者の労をねぎらいます。

本報告書が甘楽の谷を中心とする古代群馬解明の資料として役立てられ、県民の皆様は歴史学習の資料として多少なりとも役立つことができますれば光栄であります。

昭和63年12月25日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「田篠上平遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 田篠遺跡は、整理上、O区・I区の縄文時代の遺構の出土した部分を「田篠中原遺跡」として、II区・III区・IV区古墳・奈良～平安時代の集落部分を「田篠上平遺跡」とした。
3. 田篠上平遺跡は、群馬県富岡市田篠616番、他に所在する。
4. 本発掘調査は、日本道路公園の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
5. 実際の発掘調査にあたっては、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台所在）が担当した。
6. 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年5月28日～昭和62年10月27日
調査担当者 依田治雄（専門員） 右島和夫（専門員） 菊池 実（調査研究員）
飯塚 聡（調査研究員）
 - (2) 整 理 整理期間 昭和63年4月1日～平成元年3月31日
整理担当者 依田治雄
 - (3) 事 務 常務理事 白石保三郎、事務局長 井上唯雄（昭和61、62年度）、松本浩一
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄、調査研究部長 上原啓巳
関越道上越線調査事務所長 井上 信、総括次長 片桐光一、次長 原田恒弘（昭和62年度）、徳江 紀、課長 長谷部達雄（昭和61年度）、鬼形芳夫
庶務課 係長代理 黒沢重樹、主任 固定 均
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、町田康子、本城美樹
7. 報告書作成関係者
担当編集 依田治雄
本文執筆 徳江 紀（I-1） 右島和夫（III-1～5） 須田 茂（III-6）
飯塚 聡（II-1、IV-1（後半）） 依田治雄（上記以外）
遺構写真 依田治雄、右島和夫、飯塚 聡
遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）
遺物観察 依田治雄、右島和夫
整理補助 入江由美、宇田川千恵、小島八重子、本間敏子、森 節子、山本秀子、横尾友子
一場喜久雄
委託関係 墨書土器の鑑定は国立歴史民俗博物館助教授 平川 南先生に依頼した。
航空写真は韓シン航空・韓国際航空に、遺構測量・遺物のトレースは韓調研に依頼した。
水田土壌の分析は古環境研究所、また炭化材の同定は韓パリノ・サーヴェイ、土器の胎土分析は群馬県工業試験場にそれぞれ依頼した。
8. 本書使用の地形図は国土地理院発行、2.5万分の1（「富岡」、「上野吉井」）の地形図を編集して用いた。

9. 本遺跡の地層については、群馬大学教育学部新井房夫教授の御教示を得た。
10. 出土遺物・図面は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
11. 報告書作成にあたり、下記の諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝す次第である。



(敬称略)

新井房夫、石守 晃、井上 太、大江正行、鬼形芳夫、鹿沼栄輔、木津博明、斉藤清松、坂口 一、
沢口 宏、陣内圭一、須田 茂、田口正美、徳江 紀、中沢 悟、三浦京子、茂木正一、谷中 隆

12. 発掘調査従事者

浅香時子、浅香法子、浅香春造、浅香重作、新井種次、新井ミツ、新光江、新井美代、新井重幸、新井英子、飯間 操、井野口久代、岩井みち子、岩井幸雄、井田松寿、飯塚君子、飯塚豊作、飯塚リキ、飯塚静枝、江原秋枝、江原恵子、大野かつ子、折茂たき子、帯川よう子、加藤あい子、金田キヨ子、木戸ふち子、黒沢利次、黒沢 広、黒沢富久子、工藤和枝、久保みち子、高間まき、小林忠男、後藤徳治、斉藤君代、佐藤利政、清水きよ子、清水道雄、篠崎かほる、神宮政江、神宮儀一、鈴木ふじ江、鈴木みや、須賀隆雄、関谷ろく、関口治郎、高間幸子、高橋ふさ、高橋和子、田村梅之祐、田村嘉三郎、田村カメ、田村ふみ、谷川あさ子、中野セツ、中野初次郎、中野道子、中野利一、中村保男、野口勝己、橋本メ雄、深沢恒一、福田玄十郎、布瀬川千代松、布瀬川はつ子、堀口 巖、松井キクヨ、松井シズ江、松井昌子、松井洋子、松浦みや、丸沢君枝、山内勝広、山本房二郎、山田カツ、山田けさ子、山田茂樹、山田タケ、山田長治、山田ツネ、八木はな、渡辺一女 計83名

凡 例

1. 各遺構実測図の縮尺は次のとおりである。
住居跡 $\frac{1}{60}$ 、カマド $\frac{1}{60}$ 、掘立柱建物跡 $\frac{1}{60}$ 、土坑 $\frac{1}{60}$ を原則とした。その他の遺構については、その都度スケールを配し、基準を示した。
2. 各遺構実測図、断面図等に記した基準線は標高を示す。
3. 遺構図中の方位記号は座標北を表す。
4. 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
土器一坏・埴類 $\frac{1}{2}$ 、甕類 $\frac{1}{2}$ を原則とした。スケールは $\frac{1}{2}$ 用であるが、大型土器の場合のみ $\frac{1}{4}$ 用のスケールもある。石器 $\frac{1}{2}$ 。その他、大きさ不統一のため、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$ 等の縮小もある。
5. 遺構及び遺物図中のスクリーントーンは下記のことを示す。
 遺構下  焼土・灰釉
6. 出土遺物実測図については全て遺物観察表を作成した。(観察表目次は省略した。)
7. 遺物観察表中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修勲日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
8. 住居跡実測図中の示す番号は挿図・遺物観察表・写真図版に一致する。
9. 土器の実測は原則として四分割法をとった。残存量が二分の一以下の遺物の場合は180°展開して図上復元とし、中心線は一点鎖線で示した。
10. 住居跡の面積値は、プランメーターで三回計測し、その平均値を採った。

目 次

I 発掘調査の経過	
1. 発掘調査に至る経過	3
2. 調査の経過と方法	
(1) 発掘調査の経過	4
(2) 発掘調査の方法	8
(3) 基本層序	9
(4) 整理の経過	10
II 遺跡の立地と環境	
1. 地理的環境	11
2. 歴史的環境	
(1) 周辺の遺跡	13
(2) 善慶寺古墳群と田篠古墳群	15
(3) 甘栗郡の郷名について	20
III 古墳時代の遺構と遺物	
1. 1号墳の調査	21
(1) 墳丘及び外部施設	22
(2) 主体部	25
(3) 古墳構築過程解明のための調査	30
(4) 出土遺物	37
2. 2号墳の調査	
(1) 墳丘及び外部施設	38
(2) 主体部	39
(3) 古墳構築過程解明のための調査	42
(4) 出土遺物	47
3. 3号墳の調査	
(1) 墳丘及び外部施設	49
(2) 出土遺物	50
4. その他の遺構	
(1) 1号墳南円形落ち込み遺構	51
(2) Be-Cb グリット周辺出土の埴輪	53
5. 考 察	
(1) 横穴式古墳の構築過程について	54
(2) 古墳の築造企画と使用尺度について	62
6. 1号墳周堀内出土の瓦について	
(1) 出土資料	69
(2) 瓦の分類と年代観	71
(3) 瓦出土の意味と遺跡の性格	72
— 田篠廃寺の推測 —	
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物	
1. 住 居 跡	74
2. 掘立柱建物跡	202
3. 配 石 遺 構	
(1) 上部石敷遺構	221
(2) 配石遺構	223
4. 水 田 跡	
(1) 水田跡の状況	225
(2) プラント・オパール分析報告	227

(3) 土層の堆積環境について……………	229
5. その他の遺構	
(1) 溝……………	234
(2) 土坑……………	242
(3) 円形周溝……………	245
(4) 石敷遺構……………	246
(5) グリット出土遺物……………	248
6. 考 察	
(1) 住居跡の重複……………	253
(2) 住居跡の分類……………	255
(3) 土器の分類……………	257
(4) 集落の変遷……………	266
(5) 住居跡関連資料……………	270
(6) 炭化材の樹種……………	287
(7) 胎土分析……………	294
V 近世以降の遺構……………	299
VI ま と め……………	300

表 目 次

第1表	整理工程表……………	10
第2表	遺跡の概要……………	14
第3表	善慶寺古墳群……………	16
第4表	田篠古墳群……………	16
第5表	壁使用石材法量一覧表(1号墳)……………	35
第6表	壁使用石材法量一覧表(2号墳)……………	46
第7表	各掘立柱建物跡柱穴間の距離計測表……………	219・220
第8表	試料I、18あたりのプラント・オパール個数……………	230
第9表	イネの生産量の推定……………	231
第10表	顕微鏡写真リスト……………	233
第11表	住居跡の分類……………	255
第12表	①住居跡一覧表……………	271
第13表	②住居跡計測値一覧表……………	272
第14表	③住居跡出土遺物総数……………	274
第15表	④カマド石の計測値および石の種類……………	275
第16表	⑤掘立柱建物跡一覧表……………	277
第17表	⑥「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」(富岡市教育委員会 昭和56年)抜粋……………	278
第18表	田篠遺跡出土炭化材の樹種……………	290
第19表	田篠遺跡出土炭化材の住居跡別の樹種構成……………	293
第20表	胎土分析資料観察表……………	294
第21表	胎土分析成分表……………	296
第22表	土器器類の成分……………	297

挿 図 目 次

第 1 図 発掘区配置図	8	第 60 図 7号住居跡出土遺物実測図②	96
第 2 図 基本順序	9	第 61 図 8号住居跡実測図	97
第 3 図 遺跡周辺地形	12	第 62 図 8号住居跡出土遺物実測図	98
第 4 図 周辺の主な遺跡	13	第 63 図 9号住居実測図	100
第 5 図 善慶寺・田藤古墳群の分布	15	第 64 図 9号住居跡出土遺物実測図	101
第 6 図 甘泉郡郡廳配置図(富岡市史より)	20	第 65 図 10号住居跡実測図	102
第 7 図 1号墳と2号墳の位置関係	21	第 66 図 10号住居跡出土遺物実測図	103
第 8 図 1号墳周壁および墳丘断面	22	第 67 図 11号住居跡実測図	105
第 9 図 1号墳全体図	23・24 (折り込み)	第 68 図 11号住居跡かマド実測図	106
第 10 図 1号墳石室閉塞	25	第 69 図 11号住居跡出土遺物実測図①	107
第 11 図 1号墳石室	26・27	第 70 図 11号住居跡出土遺物実測図②	108
第 12 図 1号墳前庭	28	第 71 図 12号住居跡実測図	110
第 13 図 1号墳排水施設	29	第 72 図 12号住居跡出土遺物実測図①	111
第 14 図 1号墳裏込の構造	31	第 73 図 12号住居跡出土遺物実測図②	112
第 15 図 1号墳埴形と壁石の設置状態	33	第 74 図 13号住居跡実測図	114
第 16 図 1号墳石室使用石材実測図	34	第 75 図 13号住居跡出土遺物実測図	115
第 17 図 1号墳出土土器実測図	36	第 76 図 14号住居跡実測図	116
第 18 図 1号墳出土鉄器	37	第 77 図 14号住居跡出土遺物実測図	117
第 19 図 1号墳周壁断面	38	第 78 図 15号住居跡出土遺物実測図	118
第 20 図 2号墳全体図	39	第 79 図 15号住居跡実測図	119
第 21 図 2号墳石室	40・41	第 80 図 15号住居跡かマド実測図	120
第 22 図 2号墳前庭	42	第 81 図 16号住居跡実測図	121
第 23 図 2号墳裏込の構造	43	第 82 図 16号住居跡出土遺物実測図	122
第 24 図 2号墳埴形と壁石の設置状態	44	第 83 図 17号住居跡実測図	123
第 25 図 2号墳石室使用石材	45	第 84 図 17号住居跡出土遺物実測図	124
第 26 図 2号墳出土土器実測図	48	第 85 図 18号住居跡実測図	125
第 27 図 2号墳出土鉄製品	49	第 86 図 18号住居跡出土遺物実測図	126
第 28 図 3号墳全体図	50	第 87 図 19号住居跡実測図	127
第 29 図 3号墳出土土器実測図	51	第 88 図 19号住居跡出土遺物実測図	128
第 30 図 1号墳南円形墓ち込み遺構全体図	52	第 89 図 20号住居跡実測図	130
第 31 図 Bo・Cb 奥辺出土埴輪実測図	53	第 90 図 20号住居跡出土遺物実測図	131
第 32 図 善慶寺・田藤古墳群分布図	55	第 91 図 21・22号住居跡実測図	133
第 33 図 奥原古墳群分布図	55	第 92 図 21号住居跡出土遺物実測図	134
第 34 図 横穴式石室構築過程概念図	56	第 93 図 22号住居跡出土遺物実測図	135
第 35 図 1号墳石室35cm方取適合状態	64	第 94 図 23号住居跡実測図	137
第 36 図 1号墳墳丘175cm方取適合状態	65	第 95 図 23号住居跡出土遺物実測図	138
第 37 図 2号墳石室35cm方取適合状態	66	第 96 図 24号住居跡実測図	139
第 38 図 2号墳墳丘175cm方取適合状態	67	第 97 図 24号住居跡出土遺物実測図	140
第 39 図 1号墳周壁出土及び遺跡周辺採掘の瓦	70	第 98 図 25号住居跡実測図	141
第 40 図 墨書土器	73	第 99 図 25号住居跡出土遺物実測図	142
第 41 図 全体図	74・75	第 100 図 26号住居跡実測図	144
第 42 図 1号住居跡実測図	75	第 101 図 26号住居跡出土遺物実測図	145
第 43 図 1号住居跡出土遺物実測図	76	第 102 図 27号住居跡実測図	146
第 44 図 2号住居跡実測図	77	第 103 図 27号住居跡出土遺物実測図	147
第 45 図 2号住居跡かマド実測図	78	第 104 図 28号住居跡実測図	147
第 46 図 2号住居跡出土遺物実測図①	79	第 105 図 28号住居跡出土遺物実測図	148
第 47 図 2号住居跡出土遺物実測図②	80	第 106 図 29号住居跡実測図	149
第 48 図 3号住居跡実測図	82	第 107 図 30号住居跡実測図	150
第 49 図 3号住居跡出土遺物実測図	83	第 108 図 31号住居跡実測図	151
第 50 図 4・5号住居跡実測図	84	第 109 図 31号住居跡出土遺物実測図①	152
第 51 図 4・5号住居跡かマド実測図	85	第 110 図 31号住居跡出土遺物実測図②	153
第 52 図 4号住居跡出土遺物実測図	85	第 111 図 32号住居跡出土遺物実測図	154
第 53 図 5号住居跡出土遺物実測図	87	第 112 図 32号住居跡実測図	155
第 54 図 6号住居跡実測図	89	第 113 図 33号住居跡実測図	155
第 55 図 6号住居跡南側石垣実測図	90	第 114 図 34号住居跡かマド実測図	156
第 56 図 6号住居跡出土遺物実測図①	91	第 115 図 34号住居跡実測図	157
第 57 図 6号住居跡出土遺物実測図②	92	第 116 図 34号住居跡出土遺物実測図①	158
第 58 図 7号住居跡実測図	94	第 117 図 34号住居跡出土遺物実測図②	159
第 59 図 7号住居跡出土遺物実測図①	95	第 118 図 35号住居跡出土遺物実測図	160

第119 区	35号住居跡実測図	161	第182 区	水田跡実測図①	225
第120 区	36号住居跡実測図	162	第183 区	水田跡実測図②	226
第121 区	36号住居跡出土遺物実測図	163	第184 区	試料採取地点(富岡・田藤遺跡)	229
第122 区	37号住居跡実測図	164	第185 区	イネのプラント・オパール密度	231
第123 区	37号住居跡出土遺物実測図	165	第186 区	おもな植物の推定生産量①	232
第124 区	38号住居跡実測図	167	第187 区	おもな植物の推定生産量②	233
第125 区	38号住居跡出土遺物実測図	168	第188 区	Ⅲ区1号溝実測図	234
第126 区	39号住居跡実測図	169	第189 区	Ⅲ区2号溝実測図	235
第127 区	39号住居跡出土遺物実測図	170	第190 区	Ⅲ区1・2号溝出土遺物実測図	235
第128 区	40号住居跡実測図	172	第191 区	Ⅳ区1号溝実測図	237
第129 区	40号住居跡出土遺物実測図	173	第192 区	Ⅳ区1号溝出土遺物実測図	238
第130 区	41号住居跡実測図	175	第193 区	Ⅳ区2号溝実測図	240
第131 区	41号住居跡カマド実測図	176	第194 区	Ⅳ区3号溝実測図	241
第132 区	41号住居跡出土遺物実測図	176	第195 区	Ⅳ区3号溝出土遺物実測図	242
第133 区	42号住居跡実測図	178	第196 区	土坑実測図①(1～5号)	243
第134 区	42号住居跡出土遺物実測図①	179	第197 区	土坑実測図②(6～7号)	244
第135 区	42号住居跡出土遺物実測図②	180	第198 区	1号土坑出土遺物実測図	244
第136 区	43号住居跡実測図	182	第199 区	円形周溝実測図	246
第137 区	43号住居跡出土遺物実測図	183	第200 区	Ⅳ区石敷遺構実測図	247
第138 区	44号住居跡実測図	184	第201 区	Ⅳ区石敷遺構出土遺物実測図	247
第139 区	44号住居跡出土遺物実測図	185	第202 区	Bグリッド出土遺物実測図	248
第140 区	45号住居跡実測図	186	第203 区	Cグリッド出土遺物実測図	250
第141 区	45号住居跡出土遺物実測図①	187	第204 区	Dグリッド出土遺物実測図	251
第142 区	45号住居跡出土遺物実測図②	188	第205 区	重複関係図①	253
第143 区	46号住居跡実測図	189	第206 区	重複関係図②	254
第144 区	46号住居跡出土遺物実測図	190	第207 区	I期の土層(7号住居跡)	257
第145 区	47号住居跡実測図	191	第208 区	I期の土層(11号住居跡)	258
第146 区	47号住居跡カマド実測図	192	第209 区	I期の土層(1・6・38・50号住居跡)	259
第147 区	47号住居跡出土遺物実測図	193	第210 区	II期の土層(8・36・47号住居跡)	259
第148 区	48号住居跡実測図	194	第211 区	II期の土層(22号住居跡)	260
第149 区	48号住居跡出土遺物実測図	195	第212 区	Ⅲ期の土層(25・40・43号住居跡)	260
第150 区	49号住居跡出土遺物実測図①	196	第213 区	Ⅲ期の土層(31号住居跡)	261
第151 区	49号住居跡実測図	197	第214 区	Ⅳ期の土層(37号住居跡)	262
第152 区	49号住居跡出土遺物実測図②	197	第215 区	Ⅳ期の土層(42号住居跡)	263
第153 区	50号住居跡実測図	199	第216 区	V期の土層(21号住居跡)	264
第154 区	50号住居跡出土遺物実測図	200	第217 区	Ⅵ期の土層(35号住居跡)	265
第155 区	1号竪立柱建物跡実測図	203	第218 区	交差図①	266・267
第156 区	2号竪立柱建物跡実測図	203	第219 区	交差図②	268・269
第157 区	3号竪立柱建物跡実測図	204	第220 区	I区全体図	279・280(折り込み)
第158 区	4号竪立柱建物跡実測図	204	第221 区	Ⅱ区全体図	281・282(#)
第159 区	5号竪立柱建物跡実測図	205	第222 区	Ⅲ区全体図	283・284(#)
第160 区	6号竪立柱建物跡実測図	205	第223 区	Ⅳ区全体図	285・286(#)
第161 区	7・8号竪立柱建物跡実測図	207	第224 区	焼失家屋実測図	291
第162 区	9号竪立柱建物跡実測図	208	第225 区	触土分析した土器	295
第163 区	10号竪立柱建物跡実測図	208	第226 区	Ⅳ区墓実測図	299
第164 区	11号竪立柱建物跡実測図	209	第227 区	動物の墓実測図	299
第165 区	12号竪立柱建物跡実測図	209			
第166 区	13号竪立柱建物跡実測図	210			
第167 区	14号竪立柱建物跡実測図	212			
第168 区	15号竪立柱建物跡実測図	212			
第169 区	16号竪立柱建物跡実測図	213			
第170 区	17号竪立柱建物跡実測図	214			
第171 区	18号竪立柱建物跡実測図	214			
第172 区	19号竪立柱建物跡実測図	215			
第173 区	20号竪立柱建物跡実測図	216			
第174 区	21号竪立柱建物跡実測図	217			
第175 区	22号竪立柱建物跡実測図	217			
第176 区	23号竪立柱建物跡実測図	218			
第177 区	竪立柱建物跡出土遺物実測図	218			
第178 区	上郷石敷遺構実測図	221			
第179 区	配石遺構実測図①	222			
第180 区	配石遺構実測図②	223			
第181 区	Ⅲ区石敷遺構出土遺物実測図	224			

図 版 目 次

- PL 1 航空写真 (遺跡地上空より)
PL 2 航空写真 (雄川上流を望む)
PL 3 航空写真 (下仁田方面を望む)
PL 4 土層 (II、III区)
PL 5 古墳 (調査古墳全景)
PL 6 1号古墳 (全景)
PL 7 1号古墳 (石室全景)
PL 8 1号古墳 (石室入口)
PL 9 1号古墳 (羨道左壁の裏込め状態)
PL10 1号古墳 (石室の解体調査)
PL11 1号古墳 (排水施設)
PL12 2号古墳 (全景)
PL13 2号古墳 (石室および前庭)
PL14 2号古墳 (裏込め除去後の石室全景)
PL15 3号古墳全景
PL16 航空写真 (II区全景)
PL17 住居跡 (II区全景)
PL18 住居跡群・掘立柱建物跡群
PL19 住居跡 (1・2号)
PL20 住居跡 (3・4・5号)
PL21 住居跡 (6・7号)
PL22 住居跡 (8・9号)
PL23 住居跡 (10・11号)
PL24 住居跡 (12・13号)
PL25 住居跡 (14・15号)
PL26 住居跡 (16・17号)
PL27 住居跡 (18・19号)
PL28 住居跡 (20・21号)
PL29 住居跡 (22・23号)
PL30 住居跡 (24・25・26号)
PL31 住居跡 (27・28号)
PL32 住居跡 (29・30・31号)
PL33 住居跡 (32・34号)
PL34 住居跡 (35・36号)
PL35 住居跡 (37・38号)
PL36 住居跡 (39・40号)
PL37 住居跡 (41号)
PL38 住居跡 (42・43号)
PL39 住居跡 (44・45号)
PL40 住居跡 (46・47号)
PL41 住居跡 (48・49号)
PL42 住居跡 (50号)
PL43 掘立柱建物跡 (1・2・3号)
PL44 掘立柱建物跡 (4・5・6号)
PL45 掘立柱建物跡 (7・8・9・10号)
PL46 掘立柱建物跡 (11・12・13号)
PL47 掘立柱建物跡 (14・15・16号)
PL48 掘立柱建物跡 (17・18・19号)
PL49 掘立柱建物跡 (19・20・21号)
PL50 掘立柱建物跡 (22号・2・4号遺物)
PL51 配石遺構 (III区石敷・配石)
PL52 配石遺構
PL53 水田遺構
PL54 プラントオパール標本
PL55 溝遺構 (III区1・2号、IV区1号)
PL56 溝遺構 (IV区1・2・3号溝)
PL57 土坑 (1～7号)
PL58 円形周溝
PL59 石敷遺構、その他
PL60 現地説明会
PL61 1・2号古墳遺物
PL62 2・3号古墳遺物
PL63 古墳遺物 (鉄器・歯) 墨書土器
PL64 瓦・墨書土器
PL65 住居跡出土遺物 (1・2・3号)
PL66 住居跡出土遺物 (4・5号)
PL67 住居跡出土遺物 (6・7号)
PL68 住居跡出土遺物 (7・8号)
PL69 住居跡出土遺物 (9・10号)
PL70 住居跡出土遺物 (11号)
PL71 住居跡出土遺物 (12・13号)
PL72 住居跡出土遺物 (13・14・15・16・17号)

PL73 住居跡出土遺物 (18・19・20号)	PL81 住居跡出土遺物 (46・47・48・49号)
PL74 住居跡出土遺物 (20・21・22号)	PL82 住居跡出土遺物 (49・50号)
PL75 住居跡出土遺物 (20・21・22・23・24・25・ 26号)	掘立柱建物跡出土遺物 (2・4・12号) 溝 (Ⅲ区2号・Ⅳ区1号)
PL76 住居跡出土遺物 (26・27・28・31号)	PL83 その他の遺構出土遺物
PL77 住居跡出土遺物 (31・32・34・35・36号)	PL84 グリット遺物
PL78 住居跡出土遺物 (36・37・38・39・40号)	PL85 炭化材同定標本(1)
PL79 住居跡出土遺物 (40・41・42号)	PL86 炭化材同定標本(2)
PL80 住居跡出土遺物 (43・44・45号)	PL87 炭化材同定標本(3)

挿入写真目次

1 発掘調査開始 (抜根作業)	5
2 Ⅲ区 21・22号住居跡付近の調査	5
3 1号墳の調査 (前庭部)	6
4 2号墳の調査 (石室内)	6
5 Ⅳ区 39・40号住居跡付近の調査	7
6 石室入口 (天神塚) 一南より	17
7 石室内部 (木塚) 一南より	17
8 石室入口 (善慶寺古墳群No8) 一南より	18
9 石室入口 (善慶寺古墳群No11) 一南より	18
10 羨道部からみた玄室 (善慶寺古墳群No12) 一南より	18
11 奥壁前から羨道部を見る (善慶寺古墳群No14)	19
12 墳丘全景 (天王塚古墳) 一南西より	19
13 航空写真 (笹森稲荷塚古墳)	19
14 遺跡付近を流れる雄川	57

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡の調査期間は、昭和61年5月28日から昭和62年10月27日までである。本遺跡は富岡市の南東部に位置し、甘楽郡甘楽町に境している。この地域は鑛川の支流雄川によって形成された扇状地のほぼ扇状部にあたる。遺跡地を含む地域には古墳が点在し、田篠古墳群、その南に善慶寺古墳群が続く。北東1.8kmに甘楽地方最大の前方後円墳である笹森稲荷塚古墳が存在する。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
古 墳	古 墳	3	7C中葉～後半（うち1基は周堀のみ）
住 居 跡	奈 良 ・ 平 安	50	壁に石組を覆む住居跡数軒
掘 立 柱 建 物 跡	奈 良 ・ 平 安	23	入口施設をもつもの5軒
橋 礎	奈 良	1	
土 坑	奈 良 ・ 平 安	7	
溝	奈 良 ・ 平 安	5	
水 田 跡	平 安	1,000㎡	浅間B軽石下
墓 地	近 世	1	

3 まとめ

①古墳時代

1号墳の墳丘は耕作による破壊が著しい。主体部は川原石による横穴式両袖型石室である。全長5.9mで、玄室部2.1m×2.8mの平面規模を有する。盗掘のためか、まったく副葬品はない。わずかに墓前祭祀に供されたと思われる須恵器が石室入口前の前庭部周辺及び周堀から出土している。（7世紀中葉）

2号墳は墳丘径12mを有し、基底部より1.2mの高さまで遺存していた。主体部である横穴式両袖型石室も、天井石を欠くものの玄室部では天井面に近い高さまで遺存していた。石室全長5.2m、玄室部2.1m×2.4mの平面規模である。石室内からは棺釘、鉄刀片等が出土し、前庭部周辺から須恵器・土師器が出土している。（7世紀後半）

なお3号古墳は周堀部だけの調査であった。

②奈良・平安時代

壁穴住居跡は砂礫混じりの黒色土層から、砂礫層にかけて掘り込まれている。カマドは北壁につくられたものと、東壁につくられた住居跡と2種類あり、北カマドは、おおむね奈良時代に、東カマドは平安時代に分類できる。

掘立柱建物跡は、2間×2間、2間×3間の小さな建物跡が多い。その中に入出口の施設と考えられる柱列が見られるのは興味深い。

祭祀跡と考えられる遺構は2号墳の西側に検出された。上面はこぼし大の焼石があり、その間に土師器の破片が多数出土した。敷石状の焼石の直下から、平石、丸石を花弁状に刺すように立てかけ、中央部に花芯のように丸石を積んだ、あたかも牡丹の花のような石組が検出された。

土坑はいずれも砂利層を壁として、埋没土中に5～10cmの石が含まれる。

水田跡は、住居跡が散在する台地から一段下がった調査区東端の低地である。その一部で約200㎡に渡って、浅間B軽石層が残存する区域がありその直下には、プラント・オパール分析の結果から、水稻耕作のおこなわれていた可能性の高い土壌が検出されている。

瓦が2点出土し、遺跡地近くでも5～6点採集できたことから、近くに寺院址が存在する可能性がある。

田篠上平遺跡

I 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経過

関越自動車道上越線は東京練馬を基点に、同新潟線を併用し群馬県藤岡JICから長野県を経て新潟県上越市に至る高速自動車国道として、日本道路公団東京第二建設局により建設されている。群馬県内は、藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町・妙義町・松井田町を通過し長野県佐久市までの69kmが当面の工事区間となっている。

同線建設による埋蔵文化財の取り扱い、群馬県教育委員会文化財保護課が行い、路線内の分布調査をもとに昭和60年、上越線地域埋蔵文化財調査計画を策定した。発掘調査は昭和61年度からはじまり、㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査範囲を藤岡市～富岡市の区間とし、同事業団は、上越線埋蔵文化財調査を専門とする組織を「関越道上越線調査事務所」として、吉井町南陽台に設置した。

昭和61年度調査地は、矢田・神保羽田倉（旧羽田倉）・田篠上平他（旧田篠）・内匠諏訪西他（旧内匠下高瀬）各遺跡とし、4班体制の調査となった。4遺跡の選定は、発掘地点を集中させないこと・大きな遺跡からとりかかるとを前提に、用地買収及び公団の工事工程の関係を考慮し保護課・公団の協議によるものである。

田篠上平・田篠中原遺跡を中心とする地域は、稲合山から北流する雄川と、額部地域から同じく北流する下川にはさまれた扇状地上にあるが、行政的には甘楽町と富岡市の境界が入り組んだ地域になっており、行政境界を区切りとし、東から雄川西（甘楽町）、田篠上平・中原（富岡市）、善慶寺早道場（甘楽町）に3分割した。

田篠上平・中原遺跡の調査実面積42,200㎡、発掘調査を必要とする面積（想定面積）を27,670㎡とし、調査期間を21ヶ月と見込んだ。

昭和61年度調査は実面積22,000㎡をⅠ区～Ⅲ区に区分し、62年度はその両端を東西に延長、Ⅰ区・Ⅳ区とし田篠上平・中原遺跡全体を5つに区分した。田篠上平遺跡はⅡ・Ⅲ・Ⅳ区にあたり、田篠中原遺跡はⅠ区にあたる。

61年度の調査は5月に始まり、炎天下・寒風の中でⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の調査を終了した。Ⅱ・Ⅲ区の雄川をつくる扇状地上の竪穴住居は大小の礎のある地山を掘り、崩れやすい壁を石積みで補強したり、あるいは小規模の古墳の築造、Ⅰ区の粘性のある黄褐色土上には縄文中期後半の集落の共同墓地として環状列石及びその周辺の墓地・敷石住居等を検出した。62年度の調査はⅠ区の西のⅠ区、Ⅲ区の東のⅣ区と広がり、縄文の環状列石の西側への延長、奈良平安時代の竪穴住居等の延長が確認された。

調査は、全体的には62年12月27日付をもって終了したが、Ⅳ区調査は9月末にはほぼ終了し、Ⅰ区が12月となっている。この遺跡は、上越線調査の初年度からであり、高速道路建設の工事に直接追われることはなかったが、62年度に入ると、富岡市南蛇井に所在する南蛇井増光寺遺跡（旧井出遺跡）の鋼川橋梁部分にかかる埋蔵文化財の先行調査問題が持ちあがり、保護課・事業団・公団で協議を繰り返すこととなった。その結果、田篠上平・田篠中原遺跡は、9月末で調査の約半分が終了したことから、当該班の一部が南蛇井増光寺の調査にあたることになり、後に神保植松班からも加わった。従って、田篠中原遺跡は10月以後南蛇井増光寺と併行調査を行うかたちとなった。

上越線整理事業は、昭和63年度から3班体制で南陽台で行うこととなり、田篠上平・中原遺跡は63年度か

I 発掘調査の経過

ら2年強の期間で計画された。今回報告するものは、古墳と奈良平安時代の遺構を中心とする田籾上平遺跡(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区)で、63年度は整理事業のみを計画したが、進捗がはかられ報告書の刊行に至ったものである。

調査に関係された地域の皆様・富岡市教育委員会・富岡市農協・道路公団・文化財保護課をはじめとして多くの関係者及び、発掘調査・整理事業にたずさわった方々の御苦労を感謝いたします。

2. 調査の経過と方法

(1) 発掘調査の経過

田籾遺跡は、昭和61年4月、関越道上越線調査事務所開設と同時に発掘計画が進められた。本遺跡は群馬県教育委員会文化財保護課による分布調査で、中央部(濃密部分)22,800㎡、そこを挟んで、東に分布の薄い地区、10,900㎡と、西に要試掘区約9,000㎡と、3分割されていた。中央部には、石室の露出している横穴式古墳が2基存在していた。また、本遺跡内には南北に走る市道2本、農道2本があり、それによって分割される部分を西から、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区とした。さらに要試掘区は61年度調査の結果、遺構の継続が予想され、本調査区となり、0区とした。

本遺跡は、路線内に古墳が2基存在したことから、当初、古墳時代の遺構が予想されたが、調査が進むにつれ、Ⅰ区からは縄文時代中期末の埋設土器、配石遺構が発見された。やがて、それらが、環状列石を囲む、一群の遺構であることがわかった。また、Ⅱ区～Ⅳ区にかけて奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、Ⅳ区に浅間山B軽石下木田が約1,000㎡検出された。

以下、調査日誌から、古墳と奈良・平安時代の遺構に関するものを中心としてまとめておく。

61年 5月13日、日本道路公団富岡工事事務所へ打ち合せ。発掘場所の図面、その他の資料をいただく。16日、農協と事務所用地借地の件で打ち合せ。富岡市教育委員会と発掘作業員雇用条件について協議。18日、作業員募集の広告を行う。事務所用地契約を行う。21日、事務所地の桑の抜根作業及び整地。23日、事務所建設。24日、発掘調査工程について公団と打ち合せ。また、そのことについて農協へも連絡。26日、作業員雇用受付。27日、試掘トレンチ設定。桑の収穫終了まで、調査にはいれない畑もあり調査会議にかけて、地層把握のため、試掘トレンチを設定する。28日、作業員が本日より、出勤。試掘トレンチの発掘調査を開始。29日、基準杭打ち作業(測量会社委託)。発掘機材搬入。

6月 3日、桑の収穫終了した畑から重機による抜根開始。4日、1号墳、周堀確認のためのトレンチを入れる。北側から、1号墳、2号墳とする。3号墳は古墳と認定できるかどうか、はっきりしない

部分があるが、一応、3号墳とする。(その後、古墳でないことが判明)9日、1号墳石室精査。10日、本部から、管理部長、調査研究部長来跡して、作業員に対して、安全に関する講話を行う。11日、1号墳の裏込め被覆が出る。13日、桑の抜根終了部分から遺構確認作業を開始。16日、1号墳石室部検出。2号墳、周堀範囲がはっきりしない。Ⅰ区で、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1軒を確認。19日、1号墳周堀は傾斜がなだらかに立ち上っている。玄室精査が床面まで達したが遺物は皆無。25日、Ⅱ区は、黒色土面での遺構確認作業が困難なので、ジョレンで深く削る。竪穴住居跡5軒確認。今月は雨が多く、作業遅れる。

7月 1日、遺構確認作業続く。19日、住居跡調査に移る。1号墳、葦石精査。チェーンブロックを使用して、原位置を動いていた2石を排除(石室使用石と思われる)。18日、Ⅰ区1号住居跡調査、Ⅱ区住居跡遺物が出始める。23日、4・5・7・8・12

号住居跡調査。25日、掘立柱建物跡の調査開始。29日、I区さらに掘り下げ遺構確認作業。30日、1号墳全景写真撮影。

8月1日、引き続き住居跡、掘立柱建物跡の調査。1号墳、周堀の調査。5日、住居跡実測作業、写真撮影、遺物取り上げ作業続く。7日、1号墳周堀東部にブリッジ状の高まり確認。周堀内遺物取り上げ作業。27日、カマド精査。図面作業。1号墳墳塞部図面終了。墳塞部石をはずす。28日、3・5・11号住居跡、精査、掘立柱建物跡精査。29日、3・12・15号住居跡精査。2号墳の調査準備。

9月1日、3・15号住居跡床面精査。13号住居跡掘り下げ。2号墳清掃、調査開始。1号墳羨道部、前庭部精査。3日、台風。4日、昨日の片付け。5日、2・13号住居、2号墳、墳丘掘り下げ。8日、I区の中央部北側敷地外に古墳があり、その周堀のみが、道路敷にかかる。これを3号墳とする。この周堀の調査を開始。2・13・15号住居跡掘り下げ。9日、4・5号住居跡写真撮影。2・6・12・15号住居跡掘り下げ。2号墳墳丘調査。10日6号住居跡掘り下げ。2号墳石室掘り下げ。11日、11号住居跡、写真撮影、遺物取り上げ。6号住居跡掘り下げ。16日、11・13号住居跡カマド調査。18日、1号掘立柱建物跡調査終了。4・5・12号住居跡カマド写真撮影。2号墳、葬石を確認。東部は削られていて、残りが悪い。19日、2号住居跡と6号住居跡の複合部分掘りすぎる。1号墳、周堀内遺物取り上げ。22日、I区う回路をもうける。先いう回路部分の調査を行う。4・5・6・11・12号住居跡カマド調査および遺物取り上げ。24日、2号墳、石室内、羨道部根石検出。25日、2号墳石室内、棺釘2本を出土。30日、6号住居跡、埋没土が深く、やっと住居地層断面図作成に至る。

10月5日、航空写真撮影。10・11日、現地説明会、TBS、NTV、写真新聞社来跡、330名余り見学に訪れる。15日、9・15号住居跡、住居内を埋めていた石を取り上げる。16日、2号住居跡、思ったより床が下りそう。8・13号住居跡床下調査。17日、



1 発掘調査開始(抜根作業)



2 III区 21・22号住居跡付近の調査

3号墳周堀セクション図、写真撮影。2号住居跡、木炭が出土する。焼失家屋のようである。2号墳前庭及び葬石調査。27日、III区、16号住居跡掘り下げ。29日、2号墳北、周堀確認のため黒色土掘り下げ。III区古墳東側、溝部分黒色土掘り下げ。30日、II区、住居跡群調査進む。31日、I・II区全景写真を撮影。

11月4・5号住居跡床下調査。2号墳、崩落していた石の片付け。5日、2号墳、葬石とりはずし。6日、掘立柱建物跡断面図作成。7日、II区住居跡床下調査、1号墳基盤調査。10日、2号住居跡木炭とり上げ。2号墳前庭調査。IV区、試掘トレンチ設定。11日、試掘トレンチ調査開始。A軽石堆積が厚い。南側のトレンチで住居跡が確認された。12日、2号墳全景写真撮影。2・4・11・12号住居跡カマド調査。14日、IV区トレンチ全体図作り協議の資料とする。II区、住居跡終了部分から埋めどしを開始。17日、III区東溝掘り下げ、IV区試掘終了。21日、

I 発掘調査の経過



3 1号墳の調査(前庭部)



4 2号墳の調査(石室内)

6号カマド調査。1号墳基盤調査。25日、2号墳実測。IV区試掘区について協議。遺構が認められず、地層的にもその可能性のない東側3,000㎡については調査しないことに決定。26日、IV区、試掘区内、B軽石下水田を広げて確認する。28日、II区、西側と南側で通路に使用していた部分の表土掘削を開始。

12月 1日、1号墳裏込め調査、2号墳実測。16~19号住居跡精査、写真撮影、水田調査。2日、III区住居跡調査。4日、II区西部遺構確認作業。8日、2号墳墳丘をたち割る。2号墳北側遺物取り上げ。9日、1号墳解体作業、壁石の計測。11日、1号墳壁石計測終了。III区終了部分埋めもどし開始。16日、III区南西部に石敷遺構を検出。17日、II区西部、14・23号住居跡掘り下げ。III区石敷遺構下から、円形の石組が出現。祭祀遺構か。18日、23号住居跡は焼失家屋とわかる。1号墳、墳丘下断面掘り下げ。2号墳、地層断面図作成。19日、2号墳、墳丘排除。

22日、20~22号住居跡実測。23日、2号墳裏込めとはずし作業。20・21号住居跡カマド実測。25日、周辺整理、大そうじ。

62年1月 8日、III区基地東精査。12~16日、II区西掘立柱建物跡、住居跡、III区基地周辺住居跡(28~31号)調査。19日、II区南側道路部分住居跡(25・26号)調査。20日、1号墳地基石とりはずし後の全景写真。IV区、遺構確認作業にはいる。2号墳、床面を割って実測。21日、IV区で住居跡一軒確認。23日、III区、基地周辺の調査。27日、2号墳、石室石材計量。19~22号住居跡(III区溝の黒色土中)の写真撮影。29日、2号墳の使用石の移動。30日、II区、III区住居跡調査。2号墳使用石材整理。

2月 2日、II区掘立柱建物跡写真撮影。3日、雪。4日、雪はき。6日、1号・2号墳の地形整理。9日、航空撮影。10日、2号墳床下セクションをとるためトレンチを入れる。12日、III区の29~32号住居跡掘り下げ。16日、基地改葬終了し、基地部分重機により掘削。古墳調査終了。20日、25・26号住居跡全景写真撮影。III区宅地南側掘り下げ。23日、II区西部掘立柱建物跡遺物、柱穴写真撮影。24日、III区石敷遺構調査。II区掘立柱建物跡実測の補足。26日、32号住居跡遺物取り上げ。

3月 2日、II区、6・23・26号住居跡調査。III区溝の黒色土掘り下げ。3日、石敷遺構写真撮影。墓地付近掘り下げ。5日、III区1・2号溝遺物取り上げ。6日、26号住居跡西壁確認。III区1号溝全景写真撮影。9日、石敷遺構、組んでいる石をはずし、図面補充。10日、26号住居跡平面図実測。III区、溝黒色土掘り下げ。12日、III区南東部土坑掘り下げ。13日、石敷遺構実測。21・27号住居跡のカマド実測。16日、26号住居跡床下掘り下げ。III区石敷遺構掘り方写真撮影。21・27号住居跡カマド実測。17日、III区中央部黒色土中出土の動物の骨、実測、取り上げ。II区、III区終了。本年度の発掘調査は本日で終了。この後、遺物、図面、写真の整理を行う。

62年4月 14日、IV区(以後、すべて作業はIV区)西側溝部、掘り下げ。15日、溝中より住居跡確認。

円形周溝実測。17日、「安全に関する講話」総括次長。22日、大溝の北部、遺物取り上げ作業。28日、東側溝掘り下げ。30日、西側の遺構確認作業。

5月6日、遺構確認作業続く。7日、西側中央部から石の列が出る。古墳の基石の基部の残存かと思われたが、後で、そうでないことが分かる。13日、住居跡のありそうな部分を限定して、黒色土部分を掘り下げる。18日、黒色土中より、5軒の住居跡を確認。19日、34～40号住居跡まで確認、掘り下げ作業。20日、住居跡セクション図をとり始める。22日、100分の1全体図を作成する。中央北側下2軒確認。26日、40号住居跡南、36号住居跡北に1軒づつ確認。44・45号住居跡とする。27日、Ⅲ区うめもどし3日間。28日、46号住居跡確認。29日、豚舎が立ち退いたので、重機による表土掘削を行う。引き続き遺構確認作業。

6月1日、豚舎下から、江戸～明治時代の墓が出る。豚舎下黒色土部分掘り下げ。2軒住居跡が確認できそうである。昨日の墓墳、写真撮影、実測。3～5日、住居跡調査続く。8日、大溝黒色土部掘り下げ。10日、Ⅳ区東端区水田跡(?)部分の草刈作業。11日、住居跡、実測、写真撮影。12日、住居跡(カマド、床下掘り下げ)の調査。16日、39・42・49号住居跡全景写真。18日、大溝北部掘り下げ。22～30日、水田調査、大溝精査。30日、41・45号住居跡全景写真。

7月1日、草刈作業(水田跡部分)。大溝内土器取り上げ。6日、水田表土除去作業。8日、42・44・45号住居跡全景写真。9日、44・45号住居跡、床下調査。49・50号住居跡全景写真。10日、47・48号住居跡遺物取り上げ。13日、水田面調査。50号カマド調査。43・48号住居跡、範囲確認するため境界まで延ばす。20日、水田調査。21～23日、水田調査。南部の方がB軽石の堆積がはっきり見られる。24日、B軽石を残して、掘り進める。27日、34・36・41・49・50号住居跡、レベリング床下図面、写真撮影。28～31日、水田面調査。30・37・38・43・44・45・50号住居跡、床下調査、全景写真。



5 Ⅳ区 39・40号住居跡付近の調査

8月3日、水田面調査。38・50号住居跡床下実測。5日、水田面調査。34号住居跡床下調査。42・43号住居跡レベリング。6日、水田面調査。7日、43号住居跡カマド調査。11日、水田面のB軽石の範囲写真撮影。12日、水田面B軽石除去。13日、水田部分全景写真。17日、3号溝、掘り下げ。19日、大溝部清掃。20日、大溝部実測。21日、水田跡実測。26日大溝写真撮影。47号床下調査。現地説明会のための古代住居復元作業(一9月2日)27日、大溝実測終了。31日、1号溝写真撮影。3号溝実測。

9月2日、3号掘立柱建物跡実測。35号住居跡床下セクション図作成。3日、2号溝東側精査。7日、水田土壌、プラント・オパール分析の試料採取(古墳研究所)。9日、2・3号掘立柱建物跡実測。12・13日、現地説明会を実施。2日間で、456名の見学者あり。天気に恵まれ、前年よりも盛況であった。16日、41・47・50号住居跡床下調査。42号住居跡カマド調査。17・18日、引き続き住居跡カマド実測。21日、48号住居跡、工作台と思われる石の実測。36・44号住居跡カマドの実測。22～24日、36・38・44・45・47号住居跡掘り方の写真撮影。28日、住居跡のカマド石取り上げ、掘り方実測。29～30日、34・38・39・40・44・50号住居跡、掘り方写真撮影。実測作業員のみ残り、他の作業員は井出遺跡へ移動する。

10月1日、34・37号住居跡掘り方実測。41号住居跡床下実測。2日、41号住居跡石垣断面実測。9日、35号住居跡カマド実測。41号住居跡北側壁石垣除去。12日、35・48号住居跡カマド実測。煙道部石

I 発掘調査の経過

材取り上げ。13日、35・42・43号住居跡カマド石材取り上げ、掘り方平面図。14日、34号住居跡4軒掘り方全景写真撮影。調査終了。20日、42・43号住居跡掘り方全景写真調査終了。21日、39・50号住居跡終了。27日、40・45号住居跡終了。この日をもって、奈良・平安時代関係の調査は終了。

(2) 調査の方法

調査対象地は、富岡市と甘楽町の境界付近で、甘楽町早道場から雄川に至る約650mの間である。

この路線に5m四方のメッシュをかぶせられるように雄川の近く、発掘区の南東約200mに原点を設けた。(国家座標 基準X=26700、Y=-82100が原点。グリッドは南東コーナーの杭をもって呼称した。)北方向へ5mごとに1づつ増え、西方向は100mごとにA、B、Cというように大区画を作り、その中の5mごとにa、b、cというようにアルファベット順に20区画を設定した。なお、グリッドの設定水準点の移動は観測研が対応した。

調査工程は昭和61年度、I・II・III区、昭和62年度、O・IV区の順である。I・II・III区は遺構濃密部分で、O・IV区は試掘をしてからということで、前年、試掘を行い、翌年実施した。

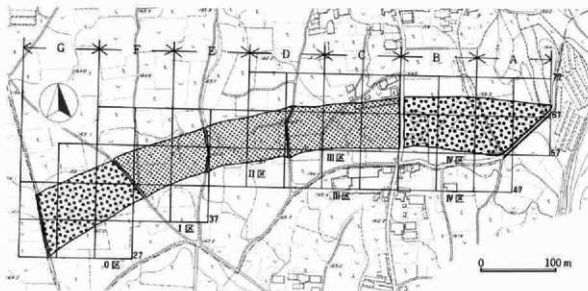
O・I区は縄文時代の遺跡で、II・III・IV区は、古墳・奈良・平安時代の遺跡である。したがって、今回の報告はII・III・IV区が中心となっている。

住居跡の調査は遺構範囲確認後、十字状の土手を残した発掘区を設定して掘り下げていくこと、住居埋没土中の遺物類はすべて出土地点を測量して番号をつけて、取り上げること、調査終了面で遺物出土状態を合せて、20分の1の実測図を作成すること、地層堆積図を作成すること、残存状態のよいカマドについては展開図を作成すること、また、床下遺構がある場合は、その記録をとることを原則とした。なお、カマド実測図は10分の1で作成した。

古墳の調査は、築造されたと考えられる手順の逆を追って調査し、最終的には地形のみとなった。そのひとつひとつの過程において、詳細な図面を作成し、使用石材種々の計測、岩石の種類も実施した。

その他の遺構についても、住居跡の調査方法を準拠として行った。特に溝については等高線による実測を実施した。

写真撮影は白黒写真は6×7と35mm、カラーライドは35mmを標準とし、遺構によって、6×7を使用した。



第1図 発掘区配置図

(3) 基本層序

鍋川の段丘は、基盤層として、吉井層と呼ばれる(新第三紀、中新世堆積)泥岩と粘性土が分布している。雄川と下川に挟まれたこの地では、その基盤層の上に、段丘堆積層(第4紀洪積世堆積)の玉石混じりの礫層が堆積している。この段丘堆積層が本遺跡でVI層とした層に一致する。この堆積層は、場所によって多少異なるが、さらに1m程の厚みをもって基盤層に続く。

遺跡地は西が高く、東に向かって低くなっており、その比高差は約10mある。したがって、それぞれの地区において基本土層の厚みが異なることが見られる。

耕作土はそれぞれ同様の厚みである。

I区においては、IV・V層の堆積が厚く、浅間B軽石、それを含む黒色土は全く見られない。

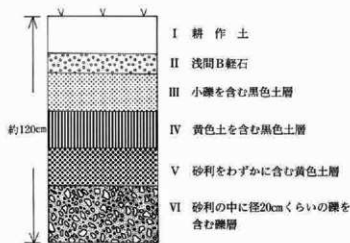
II区はI区から比高差1mあり、堆積の状況が異なる。西から東まででまた1mの傾斜を持ち、耕作土下に所々、段丘堆積土層の露頭が見られる。この部分に掘り込まれた住居跡の壁は当然、砂礫層となる。しかし、II区の一一般的な堆積状況は、基本層序に近い。

III区は、古墳の立地している区域であるが、全体的にVI層の上部層がうすく、耕作土下は一部を除いてほとんどVI層(段丘堆積層)となっている。古墳の立地する部分のみ、道路用地を横切るように黒色土の堆積が見られ、VI層は深くなる。

中央部に、VI層が傾斜をなして1m程の段差をつくるところでIII層が厚く堆積するが、幅15mで、再び、VI層が露頭してくる。III区においては、この黒色土堆積部分から、多くの遺構が検出されている。

IV区は、平坦面で約2mの比高差があり、水田面は、それからさらに3m下にある。

IV区も耕作土下ほとんどVI層の露頭が見られる。1号溝の最深部に浅間B軽石の堆積が見られること



第2図 基本層序

から、浅間B軽石を含む黒色土は耕作土となっていると考えられる。IV区にも、III区同様黒色土の厚く堆積している部分が見られた。この部分は、用地を横断するように、42・43号住居跡から、34・41号住居跡を通り、比較的遺構の多い場所になっている。

1号溝の東は耕作土もうすく、すぐにVI層が露頭してしまう場所で、竪穴住居跡1ヶ所を除いては、不明確なものも多く、住みにくい場所であったと思われる。

IV区東端の水田跡は、浅間B軽石の堆積があり、その下に、粘性の茶褐色土(水田土壌)、その下にシルト質で茶色の斑点をもつ灰色土層の堆積が見られ、この部分だけは遺跡内において異質な地層であった。したがって基本層序はほとんどあてはまらない。この場所から、東100mに雄川が流れており、雄川の影響を後世まで受けていた部分と思われる。

特にIII・IV区の耕作土下は、ほとんど川原に近い様相を呈していた。

I 発掘調査の経過

(4) 整理作業の経過

田篠遺跡の発掘調査は昭和61年5月から、昭和62年10月にかけて実施された。

その後、整理事業について、O・I区を中心とする縄文時代の遺跡を田篠中原遺跡とし、1年6ヵ月の整理期間、II・III・IV区を中心とする古墳、奈良・平安時代の遺跡を田篠上平遺跡とし、1年の整理期間が決定された。

関越自動車道上越線の埋蔵文化財調査のための整理事業が吉井町南陽台にある調査事務所敷地内に整理棟を建設し、昭和63年4月より開始された。したがって、本遺跡の整理事業は、上越線関係の初年度事業である。

主な作業の流れ

- 4月 備品・用具の整理
住居跡遺物の接合復元（1～11号住居跡）
- 5月 住居跡遺物の接合復元（～19号住居跡）
遺構写真コピー→版組
- 6月 住居跡遺物の接合復元（～35号住居跡）

- 7月 住居跡遺物の接合復元（～49号住居跡）
中旬より遺物実測開始（1～11号住居跡）
- 8月 住居跡・古墳・グリットの接合復元
遺物実測（住居関係終了）土器観察
遺構写真版組
- 9月 古墳・グリットの接合復元・実測。住居遺物版組。遺構えんぴつトレス。土器彩色。
- 10月 鉄器実測。住居跡版下。遺構写真版下終了。
1日研修（矢田遺跡、県立歴史博物館）
遺物写真撮影。土器観察表消書。
- 11月 遺物版下終了。住居跡版下。全体図、その他の遺構版下。遺物写真版組。原稿。
- 12月 遺物写真版下。住居跡版下。原稿。古墳版組版下。古墳遺物版組版下。脱稿・入札（予定）

主な遺構数

古墳3基（うち1基は周堀半周のみ）。竪穴住居跡50軒。掘立柱建物跡23棟。配石1基。水田1,000㎡溝5条。

第1表 整理工程表

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考	
土器	接合	■													
	復元	■													
	実測				■										
空	トレス						■								
	版下作成								■						
	写真撮影								■						
遺	写真版下作成								■						
	原図整理								■						
	トレス								■						
構	版下作成								■						
	写真版下作成								■						
	土器観察表								■						
原稿	本文									■					
	その他										■				
														修正(臨時)用等	

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本遺跡は、群馬県富岡市田篠字上平に所在する。ここは、甘楽郡甘楽町善慶寺に隣接する富岡市の東南端の地域で、かつて甘楽郡福島町（現甘楽町）の一部を成していた地区で、昭和34年富岡市に編入されて現在に至っている。調査地域は甘楽町善慶寺地区に舌状に張り出す田篠南部の富岡市域内を対象とし、東は雄川左岸段丘上にはじまる東西700mの区域で、田篠字上平・中原・細田地区にわたって立地する。そのうちの東半部地区が田篠上平遺跡である。南方には関東山地へと連なる多野山系の山並が迫り、その北麓、本遺跡より南方1kmには城下町小幡、南西3kmに国峰城跡、その後方に稲倉山（いなくらやま）を眺め、西方0.5kmに内匠城跡を真近に望む。東北方約1.5kmには笹森稻荷塚古墳及び神社の森が望まれ、北方約1～1.5kmで鯛川ならびに国道254号線に達するほか、古道「鎌倉街道」の伝承を伝える道筋が北方約0.6km付近を東西に通過している。

「甘楽の谷」と呼ばれる鯛川沿岸地域は、藤岡市上落合から下仁田町馬山に至るまで上下二段の大規模な河岸段丘が見られ、特に鯛川南岸にて顕著に発達している。これは地殻の傾動運動による鯛川南岸の相対的な隆起に起因し、徐々に鯛川が北へ移動しつつ起こされた浸食作用の結果形成されていったものと考えられている。上位段丘面の標高は、富岡市内匠・高瀬付近では200mから240mで、南へ向って高く傾斜する。下位段丘面との比高差は約40～50mである。上位段丘面が形成されたのは数万年前から十数万年前の洪積世末期とされ、その後浅間火山による上部ローム層が上位段丘面に堆積する頃には下位段丘面を鯛川が流れていたと考えられている。従って、下位段丘面にはローム層の堆積は見られない。更に、傾動運動による北方への鯛川の移動に伴い、南の多野山系から流れ下る河川はやがて上位段丘を浸食・分断して北へ延び、鯛川に合流する。このう

ち、鯛川に次ぐ支流である稲倉山（標高1370m）東麓に源泉を発す雄川は、甘楽町秋畑地区の山岳地を東北方向に流下し、小幡南部で平野部に達し、ここを扇頂とする大規模な扇状地を形成しながら北方に流下し鯛川に注いでいる。この扇状地は「小幡扇状地」と呼ばれ、雄川をその主たる形成要因の河川とするほか、かつて富岡市額部・岡本を東流していたと推察されている旧野上川や、現在内匠地区に残る上位段丘の残丘東涯下を北流する下川によって形成された扇状地と考えられており、その領域は甘楽町小幡付近を扇頂部とし、東は甘楽町福島、西は下川、南は原田篠、下田篠地区にて鯛川下位段丘面に接する、南北約2～2.5km・東西約2kmにわたっている。標高は扇頂付近が約200m、扇端部が約160m程である。上位段丘面より低く、下位段丘面へなだらかに傾斜する様相を見せる。

本遺跡はこの小幡扇状地の中央やや北寄り、扇尖端から扇端部にさしかかる部分に相当する位置を東西に横断する形で立地している。扇状地の土層は、鯛川上位、下位段丘面とほぼ同様に砂礫層の厚い堆積が見られるが、雄川・下川・野上川等の河川の上流域の山岳地帯が、即ち馬山金井線と呼ばれる構造線の南側に広がる三波川変成帯に属しているため、そこから運ばれてくる小幡扇状地の堆積物には、三波川結晶片岩と総称される変成岩類がかなり含まれていることが特色である。なお、鯛川下位段丘面と同様に、上位段丘面にて見られる上部ローム層の純層としての堆積は扇状地には見られない。砂礫層の上には黒褐色土が数十センチ程度堆積しており、耕作土として利用されているが、高濃な土地柄ゆえ、主に桑畑とこんにゃく畑等が広がっており、富岡市高瀬や甘楽町福島など鯛川下位段丘面や、旧野上川流域の額部、岡本地区など、小幡扇状地を囲む周辺部で一様に見られる水田耕作は、雄川河床低地沿い

II 遺跡の立地と環境

に一部行われている他は、扇状地域内では殆ど行わ

れていない。



スタリントーンは標高200m以上

●は田塚遺跡

第3図 遺跡地周辺の地形

2. 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

富岡・甘楽地域は鍋川の浸食によってできた下位段丘、その背後にある上位段丘によって構成されている。

遺跡の分布を大きく見ると、鍋川の北側上位段丘には22ヶ所、南側上位段丘面には20ヶ所の縄文時代の遺跡の分布が見られる。

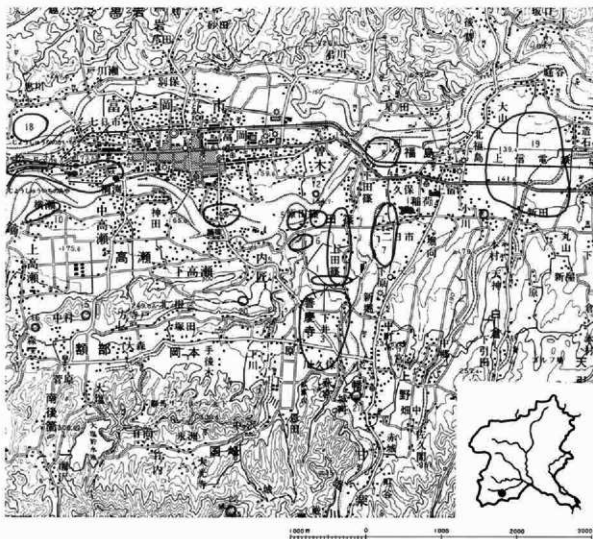
弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡より、低地に移り、上位段丘と下位段丘の境目付近に位置しているが、その数は6ヶ所と少ない。

下位段丘面には南蛇井古墳群から、下流に向かって多くの古墳群が分布している。

この面に最近の調査による、奈良・平安時代の集落跡の分布がある。

上位段丘の峰には、室町～戦国時代にかけての城跡も多く分布している。

大島上城・塩之入城（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査）は今回の関越道上越線の関係で調査が実施され実態が明らかになった。その他、内匠城・国峰城といった室町～戦国の山城が数多くあり、保存さ



第4図 周辺の主な遺跡（2万5千分の1「富岡」「上野吉井」）

II 遺跡の立地と環境

第2表 遺跡の概要

No.	遺跡名	時代/類別	遺跡の概要	備考
1	田篠遺跡	縄文・古・奈～平	中期末加曾利E期の環状列石。配石遺構、敷石住居跡、屋外埋設土器その他。古墳、7世紀中葉、横穴式石室の円墳2基。奈良～平安時代の集落。平安時代水田跡。	本遺跡。群馬県埋蔵文化財調査事業団調査 S61.5～S62.12
2	上田篠古墳群	古墳	古墳時代後期の群衆墳。現在30数基存在している。富岡市教育委員会によって、5基調査。	富岡市教育委員会調査 S57.6～S58.3
3	善慶寺古墳群(甘栗町)	古墳	古墳時代後期の群衆墳。かつては50基以上が存在していたが、構造改善事業により破壊。現在は約20基残っている。	
4	原田篠遺跡	古墳・奈～平	古墳～平安時代にかけて住居跡。中世の土塼。工業団地造成によって、昭和57年4月富岡市教育委員会調査。	報告書発行 S59.12
5	布和田古墳群	古墳	原田篠古墳群と隣接しているが、約5mの段丘で隔された一段下位の段丘上であり、10基程の存在が認められるが、石室等、古墳といえないものもある。	上毛古墳総覧福島町第31～37号墳
6	原田篠古墳群	古墳	原田篠遺跡の西に隣接しており、7基確認できる。6世紀代からの築造。	上毛古墳総覧福島町第27～30号墳
7	二日市古墳群(甘栗町)	古墳	銅川の下位段丘面上の縁辺部に位置しており、現在、20基程の円墳が残る。5世紀後半頃からの築造が考えられる。	上毛古墳総覧福島町第2～22号墳
8	厚原古墳群	古墳	銅川の下位段丘に位置する。20基程の円墳から成る。7世紀代の築造と考えられる。	上毛古墳総覧福島町第38～52号墳
9	芝宮古墳群	古墳	銅川流域中最大の古墳群。100基以上の円墳から成る。すべて横穴式石室をもつ。6世紀～7世紀代の築造と考えられる。	上毛古墳総覧、90基が記載。第8～97号墳
10	横瀬古墳群	古墳	銅川北岸の高瀬段丘面の北西部に古地。27基が分布している。横穴式石室をもつ。7世紀代の築造と考えられる。	上毛古墳総覧高橋村第3～21号墳
11	七日市古墳群	古墳	高岡段丘面上で、銅川の縁辺部に位置している。26基が確認されている。御三社古墳の前方後円墳で他は円墳である。いずれも横穴式石室をもつ。6世紀中頃から7世紀代の築造が考えられる。	上毛古墳総覧第1～7号墳
12	久保遺跡	古墳	銅川に突出する低い段丘上に立地している。祭祀遺跡。青石製模造品、銅製・鉄製の製品も多数出土している。	富岡市教育委員会調査 S57
13	笹森塚古墳(甘栗町)	古墳	銅川の南のゆるい段丘上にある。甘栗地方最大の前方後円墳で軸長100m、周長をもつ。石室は両袖型横穴式石室をもつ。6世紀後半の築造。(種高神社が墳丘上に祀られている。)	上毛古墳総覧福島町第1号墳
14	天王塚古墳(甘栗町)	古墳	笹森塚古墳の北東400mに位置している。後円部が大きく、前方部が未発達な古い形で、竪穴式の主体部と思われる。5世紀前半の築造。	上毛古墳総覧福島町第2号墳
15	北山茶臼山古墳	古墳	銅川の上位段丘の高さ約70mの丘陵が東西に通っている。この丘陵の最高所の頂上に位置している。径40mの円墳と推定される。竪穴式石室で、粘土層である可能性が高い。神人竜虎御像(宮内庁所蔵)が出土。4世紀後半の築造と考えられる。	上毛古墳総覧藤原村第1号墳
16	茶臼山西古墳	古墳	茶臼山古墳と同じ丘陵上の西約500mの山頂上に位置する。墳丘20mの小形円墳とされていたが、昭和81年の調査で前方後円墳と確認された。仿製彫刻が発見されていたが、今回の調査でさらに仿製の方格規矩線が出土した。4世紀末頃の築造と思われる。	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査 S61.9～S62.3
17	笹遺跡(甘栗町)	弥生～古墳	銅川の南岸の第2河岸段丘上に位置する。弥生後期～古墳時代の集落跡。滑石製模造品が多数出土している。	群馬県立博物館調査 S36.10～12
18	小塚遺跡	縄文～中世	縄文～前期滑石式～中期初頭五領ヶ台式の遺構。弥生～中期後半の遺構。古墳～集落跡。平安～末期の集落。中世～独立建物跡等。	富岡市教育委員会調査 S59.8～S60.3
19	甘栗系里遺跡(甘栗町)	古・平・江	銅川の南岸の第1河岸段丘上に位置する。古墳時代のミニ水田跡。平安時代の糸重制水田、江戸時代の水田が確認されている。	甘栗町教育委員会調査 S59より数次にわたる。
20	内匠城跡	室町～戦国	富岡市の南、東西に長く続く丘陵の東南端にあり、本丸が方100m、土塁で囲まれている。小幡氏国峰城の本陣である。	「群馬県古戦城址の研究」山崎 一著
21	小幡城跡(甘栗町)	江戸	雄川の右岸の崖上に位置する。陣跡通りで実際は城ではない。現在茶山園として、近衛園が残る。	上に同じ。
22	国峰城跡(甘栗町)	戦国	田篠遺跡の南にあって、標高430mの山の頂上に築城。小幡氏の居城。天正8年幕城。	富岡市教育委員会調査 S59.9～S60.3

れている。

田篠遺跡を中心とする遺跡の分布を見るとまず上田篠古墳群と善慶寺古墳群を挙げられる。上田篠古

墳群と善慶寺古墳群は、実際には両古墳群を分ける

境界はなく、あえて挙げれば単に行政区画が異なるということしか見当らない。

遺跡の立地する本地域は鑷川の段丘上にあつて、雄川と下川に挟まれている。この段丘上には前述の2古墳群の他に原田篠古墳群、布和田古墳群も所在しており、一大古墳群をなしている。しかし近年、開墾・構造改善事業等で破壊が進み、その数の減少は著しい。

本遺跡の東方、1kmの雄川の対岸に、甘楽・富岡地区の首長墓と考えられる天王塚古墳(5世紀前半)笹森稲荷塚古墳(6世紀後半)という大前方後円墳がある。

この時代本地域はこれらの古墳を築造した首長の勢力集団であつたことがうかがえる。その後、政治的変化で首長墓としての大型古墳がつくられなくなるが、引き続き中小の古墳が築造され、7世紀後半まで連続して続き一大古墳群を形成した。

古墳時代の特異な遺跡として久保遺跡がある。本遺跡の鑷川対岸にあり、祭祀遺跡とされ、多くの滑石製模造品・銅製品・鉄製品・水晶製切子玉・ガラス玉等が出土している。

また、富岡市一の宮の郷土遺跡は石垣に囲まれた古墳時代の豪族の居館址(昭和53年富岡市教育委員会調査)として、近年脚光を浴びている。さらにこの遺跡は奈良・平安時代の集落も調査されている。

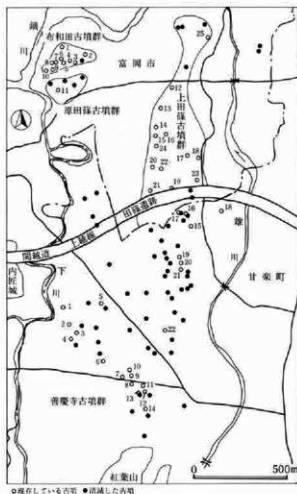
原田篠遺跡(田篠遺跡北200m)で古墳時代～平安時代に至る住居跡の調査がなされている。

この雄川の台地にはその他にもこの時代の遺跡の分布があると思われる。

(2) 善慶寺古墳群と田篠古墳群

善慶寺古墳群はかつて百塚といわれたほど古墳の数があつたが、昭和43年の構造改善事業によって、多くの古墳が消滅した。しかし、もともとこの地区の古墳は「上毛古墳総覧」にも9基しか記載はなく、他はすべて、記載もれ古墳である。さらに、数少ない9基のうち紅葉山の麓にあつた第7号墳も消滅している。

昭和44年2月「かぶら4号」(富岡高等学校郷土部誌)に、吉田豊子氏が、善慶寺古墳群についてまと



第5図 善慶寺・田篠古墳群の分布

めておられる。

それによると「現在善慶寺の古墳は、構造改善事業によりその幾つかは既に破壊され、また総数53基ほどの「塚」が消滅する予定です。残されるものは、この事業に関係のない位置にあるものと、わずかに指定を受けた1～2のものだけです。53基といえはこの地域に現存する塚の約9割に当たります。では、事前の調査、記録等はないのでしょうか。いいえ、町ではそんな計画はないとのこと。これでは善慶寺の古墳群は人々に永久に、ここに古墳群があつたということさえ忘れ去られてしまいます。」というように、かなりの数の古墳が消滅した。

吉田氏の図をもとに現在の善慶寺古墳群を歩いて次のような図を作成した。(第5図)

田篠古墳群は、富岡市教育委員会井上太氏の図を

II 遺跡の立地と環境

もとに作成した。田籬地区も例外でなく、多くの 徐々に削られ、古墳かどうか明らかでないものも古墳が消滅している。また、この場合は畑の耕作 多い。

第3表 善慶寺古墳群

図No	概	略
1	破壊が進んでいて、形状はわからないが、円墳であろう。工場と民家の間にある。	
2	通称薬師塚。墳頂部に石製のほころあり。径20m余の円墳。	
3	通称庚神塚。墳頂部に庚神塔あり。道路の交差点に位置している。	
4	3号のすぐ西隣にある小円墳。高さ2m弱。	
5	通称十石塚。墳頂部まで耕やされており、草、野菜が植っている。上毛古墳総覧小幡町第9号墳十石塚となっている。現在140mの方形になっているが、方墳ともいえない。	
6	民家の庭続きにあって、墳頂に梅の木がある。屋敷神が祀られている。10m弱の小円墳であるが、古墳でない可能性もある。	
7	県道下仁田線沿にあって、南に向かって開口している。石室は物置に利用されている。扇灰岩の自然石の面を削ってそろえている。四軸型の石室。奥道前は破壊。上毛古墳総覧小幡町第5号天神塚。なお総覧によれば前方後円墳となっている。	
8	県道下仁田線の南側。墳丘の北側は削られている。	
9	天神塚の北東にあって、小波多神社が祀ってある。奥道前は破壊されているが、玄室は残っている。壁は自然石乱石積で、奥壁のみ扇灰岩を使用している。	
10	木塚の北に所在し、竹藪になっている。古墳でない可能性もある。	
11	県道下仁田線の南にあって、石室が開口している。基壇上に入口をもつ。積石をもつ。自然石乱石四軸式石室。	
12	竹藪にあって、屋敷神が祀られている小円墳。	
13	民家の敷地内、南に向かって開口している。石室は扇灰岩と自然石を使用。奥道前から玄室部の境界が明確でなく、袖無型にも見える。	
14	県道下仁田線と紅雲山との中間にある。石室が南に開口している。壁自然石乱石積、ころびをもつ。割製の石室である。上毛古墳総覧小幡町第6号金比羅塚。墳頂部に神社がある。総覧によれば、前方後円墳。	
15	古墳とすれば、墳丘はすでにない。崩壊を防ぐため、周囲を石垣で積んでいる。長方形の石垣。	
16	工場の敷地の続きにある。径20m程度の円墳と思われる。	
17	16号よりさらに北寄り。草間との境にある。径15m程度の円墳。	
18	畑川的一段段丘にある。墳頂部に割の木があって、かなり原状をとどめている。円墳。	
19	墓地になっている。破壊が著しい。	
20	石が寄せた状態。径10m程度である。古墳でない可能性もある。	
21	クワイ畑の中にある。墳頂部に石室の石の露頭がある。	
22	墳頂部に庚神塔がある。周囲は削られていて、石を寄せ、石垣にしている。円墳と思われるが、現状は方形。	

第4表 田籬古墳群 (含布和田・原田籬・上田籬古墳群)

図No	概	略
1	畑川の河岸段丘、最下段に位置する。楕円状を呈しているが、古墳ならば円墳。古墳でない可能性もある。	
2	墳頂部に、扇灰岩(長1m×幅50cm×厚み60cm)の加工石が出ている。径7～8mの円墳。	
3	石寄せ場になっている。奥道部が崩れ落ちたようになっている。石室の使用石と思われる自然石(2m×1.2m×35cm)が露頭。	
4	現在、周囲が削られて、方形状を呈している。16×10m。	
5	雑草がすく、規模がわからないが、小円墳。	
6	破壊が進んでいて、周囲の石が寄せられた状態。古墳とすれば、径7.8mの円墳	
7	墳丘中央部が窪んでおり、あたかも石室の陥没を思わせる。	
8	破壊が著しい。径7～8mの円墳と思われるが、東側の石垣は現代のもの。	
9	径7mの円墳。	
10	径9mの円墳。墳丘2.5～3m。	
11	墓地の西にあって、墳丘が荒れている。	
12	南北に長い楕円形。長径17m、短径12m。1m弱の低い丘状の墳丘。現状は委細。	
13	庚中塚。墳頂に6基の庚中塔がある。上毛古墳総覧福島町23号墳。	
14	円墳。南北に長い楕円形。長径22m、短径13m。荒地。	
15	円墳。墳頂に自然石の大石(1.60m×60cm×60cm)が露頭している。石室材と思われる。	
16	円墳。周囲が石垣で囲まれている。石垣の中に石室材と思われる石がある。浅間A軽石ののっている。	
17	7×5mで石が寄せられている。古墳でない可能性もある。	
18	石を寄せている。砂利がおおっている。古墳でない可能性もある。	
19	円墳。径9.4m。今回の発掘調査で周囲が踏検内にかかり調査を実施。(周囲のみの調査)	

図No	概	略
20	石垣を積んで方形にしている。東西15.8m、南北12.8m。通称「坊塚」	
21	周辺の石を寄せている。古墳でない可能性もある。	
22	東側に浅間A軽石が寄せられている。石室の天井石が3枚露出している。おそらく羨道部と思われる。	
23	円墳。径16m。破壊が著しく、石室まで崩壊している。墳頂部に大石(1.20m×65cm×55cm)がある。	
24	円墳。径7m。破壊が著しい。現状桑畑。	
25	墳頂部に石碑が立っている。周囲を石垣で積んでいる。	
26	円墳。径15m。東に埴肥小塚がある。現状桑畑。	

開口している古墳と大型古墳



6 石室入口(天神塚) 一南より

善慶寺古墳群 No.7 (天神塚)

径約18mの円墳である。

主体部は横穴式両袖型石室であり、石材には主として粒子の細かい砂岩の切石を使用している。玄室は長さ4.15m、幅1.80mで若干胴張りを有しており、板状の石を立位にした玄門を備えている。壁体を構成する石材は、大ぶりであり、奥壁は二段構成である。天井部は、玄室を奥行3mの巨石1石と1mの石でおおっている。天井面は羨道から玄室へかけて直線的に連なっている。7世紀前半の築造が推定される。



7 石室内部(木塚) 一南より

善慶寺古墳群 No.9 (木塚)

径約20mの円墳であり、墳丘上半は削平されている。

主体部は両袖型横穴式石室であり、羨道部は削平され失っている。玄室長3.40m、幅1.96m、高さ1.50mを有している。玄室側壁は自然石乱石積の多石構成であり、奥壁は砂岩の大石を2段に積み上げている。玄室の天井部は3石で構成され、そのうちの手前と奥寄りの2石でほぼ主要部分をおおっている。

II 遺跡の立地と環境

善慶寺古墳群 No8 (結城家所有)

墳丘の南寄り写程をかろうじて残している小円墳である。

主体部は小型の横穴式石室であったと推定され、その羨道部分のみを残している。現在は玄室部分にあっていた部分にも石が積まれて石室様をなしているので一見すると本来のものと見紛うほどであるが、近年の破壊後の組み直しの確認が得られた。

羨道は幅1.2mで奥行2.3mまでを残している。小ぶりの川原石を小口積にしており、奥よりに楣石を有している。



8 石室入口 (善慶寺古墳群No8) 一南より

善慶寺古墳群 No11 (黒沢家所有)

径約20m前後の円墳と推定される。

主体部は横穴式両袖型石室であり、現状で全長約6.05m、玄室長3.50m、同幅1.70m、同高1.80mを有する。羨道部は幅0.8m、長さ2.55mである。羨道部は小ぶりの川原石を使用し、玄室にはこれより大きめの石材を使用している。天井部は、羨道から玄室へ直線的に連なり、羨道の奥寄りには楣石を架構している。



9 石室入口 (善慶寺古墳群No11) 一南より

善慶寺古墳群 No12 (黒沢家所有)

小型の円墳で、横穴式両袖型石室を有するものである。羨道入口寄りには土砂が流入しており不明であるが、玄室は長さ3.10m、幅前寄りで1.40m、奥寄りで1.80mで、高さ1.70mを有している。羨道は奥寄りで幅0.90mである。全体に大ぶりの石材を使用しており、奥壁は砂岩1石からなる。天井部寄りの壁体には両袖の区分が見られず、天井面も羨道から玄室にかけて段をなさないものである。



10 羨道部からみた玄室 (善慶寺古墳群No12) 一南より



11 奥壁前から後道部を見る（善慶寺古墳群No14）

善慶寺古墳群 No14（金比羅塚）

善慶寺古墳群の中では最も南奥寄りに位置する小円墳である。

主体部は横穴式両袖型石室であり、後道部がほぼ埋没してしまっている。玄室は長さ3.60m、幅前寄りで1.50m、奥寄りで2.10m、高さ2.10mを有している。壁体は自然石乱石積であり、基底に大よりの石を配し、それより上は多石構成で、内傾が著しい。



12 墳丘全景（天王塚古墳）—南西より

天王塚古墳

鑄川の上位段丘面に位置しており、主軸をほぼ東西とし、後円部を東側にする前方後円墳である。全長約80m、後円部径約50m、高さ10m、前方部前幅約39m、高さ7.5mを有している。

古墳の占地状況や墳丘の形態から竪穴系の主体部が推測されしかも埴輪の設置の痕跡が認められないことから古墳時代前期に位置づけることが可能である。この付近では最も古い前方後円墳である。



13 航空写真（笹森稲荷塚古墳）

笹森稲荷塚古墳

鑄川中、上流域にあっては最大の前方後円墳である。全長約100m、後円部径約60m、高さ8m、前方部前幅約65m、高さ9mを有している。周囲には大型の周堀と堤の存在を推定させる。

後円部の中心に位置し、南に開口する横穴式両袖型石室は、全長16m、玄室長7.2m、幅2.4m、高さ2.5mの規模で、壁石には粒子の細かい砂岩を、天井石にはいわゆる天引石（凝灰質砂岩）の巨石を使用している。

石室の構造的な特色から6世紀後半の築造と推定される。

III 古墳時代の遺構と遺物^①

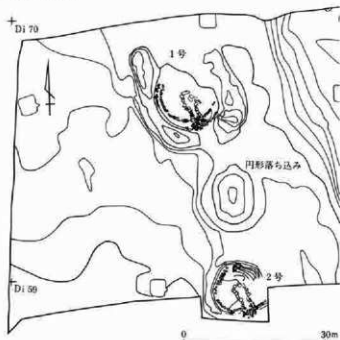
田篠遺跡の調査において確認された遺構は、横穴式古墳2基（田篠1号墳、田篠2号墳）、横穴式古墳と推定される古墳1基（田篠3号墳）の古墳3基と、明らかに人為によると思われる円形の落ち込み（適当な呼称がないので「1号墳南円形落ち込み」と仮称している）である。また、調査区のⅢ区とⅣ区の境界付近に複数個体分の埴輪片が採集されていることから、近くにこれを樹立していた古墳が存在することは明らかであるが、調査区内では確認されていない。

調査した3基の古墳は、昭和13年刊行の『上毛古墳総覧』^②には、該当古墳が見当たらないので、今回の調査に際して、雄川寄りで南北に連なる2基のうち、北側のものを田篠1号墳、南側のものを田篠2号墳としこれらより西約200mに位置するものを田篠3号墳（以下、1号墳、2号墳、3号墳と略称する）と命名した。これらのうち、1号墳、2号墳については、ほぼ全面的に調査を行い、3号墳については、調査区域内にかかる南側の周堀部分のみの調査である。

1. 1号墳の調査

現在の雄川の河岸から約350m西の段丘上に位置している。南方30mには2号墳が位置している。古墳が占地する部分は、1号墳から2号墳にかけて南北に沖積土が存在する部分であり、古墳の周囲にはこの土壌がなく、砂礫層が露出している。レベル的に見て、古墳築造当時においても、この砂礫層が地表面をなしていたと考えられるから、古墳の占地がわずかに沖積土が存在する部分を選んだ意図的なものであったことがわかる。

古墳の周囲は調査前の段階には、桑およびこんにゃく畑として利用されており、畑地への土砂の流出を防止するためお茶の木が掘全体に植えられてい



第7図 1号墳と2号墳の位置関係

なお、2号墳の調査では、当初の調査予定地内にかかるのは、古墳全体の $\frac{1}{2}$ ほどであったが、横穴式石室の奥寄り $\frac{1}{2}$ を分割して調査することは至難であったので、県文化財保護課の対応と地権者の好意により残り部分についても調査したので、併せてここに報告する。

墳丘の削平は著しく、当初の裾野よりかなり中心部寄りにまで及んでいた。また、横穴式石室に使用されていた石材もかなり持ち去られており、天井石は一石も原位置に現存していなかった。

調査の結果、自然石乱石積の横穴式両袖型石室を有する径約10.4mの小型円墳であることが明らかとなった。墳丘周囲に不整形な周堀をめぐらし、石室入口前には前庭が付設されている。

石室内は床面に至るまで後世の手が及んでいるため副葬品等は皆無であった。

墳丘周囲から出土した土器から、およそ七世紀後半の築造が考えられる。

III 古墳時代の遺構と遺物

(1) 墳丘及び外部施設

既述のように墳丘は後世の破壊が著しいためその全貌を知ることは不可能である。破壊は特に東から北東側で著しく、ほとんど石室にまで達していた。

墳丘の裾部は、周堀の墳丘側の掘り込み部分がそれにあたる。しかし、周堀は、石室前にあたる南側と背後にあたる北側は途切れてしまうことから、全体に円を描いていない。この裾部には、列石状に小児頭大の円礫が配置されて、古墳の区画を表現していたことが、墳丘北西側や南東側の遺存部分からわかる。周堀がめぐらない部分にもこの列石による円形の区画だけはなされていたものと思われる。

墳丘の盛土はこの列石による裾部から直接は始まらない。列石から約80cmのテラス面においてそれより内側に盛土が行なわれるわけである。テラス面は当時の地表面であるから、本来的な基壇面とは異なるが、堀と一体となって、視覚的には二段築成の古墳に見える効果を出している。盛土は、その表面を丹念に円礫による葦石でおおっている。墳丘の削平が著しいことから、葦石の遺存はよい部分で50cm程の高さまでであるが、大半は1～2段を残すのみである。削平がひどい北から東側部分には全く残っていない。この葦石の根石部分をたどると前の列石と平行しており、ほほきれいな正円を示している。

墳丘の盛土は、当時の地表面の上に直接行なわれている。そのため土は、周堀を掘削することによって得られたものであり、他の地から運んできたような特別な土は見られない。そのため、周堀の形状をきちんとするために掘るのではなく、明らかに、盛土の材量を得るために、できあがる形状を無視し

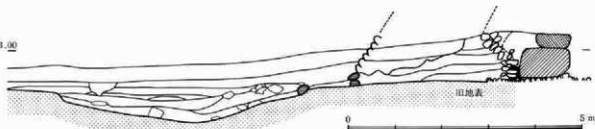
て掘ったと思われる部分も認められる。盛土の工程は、横穴式石室の構築過程と密接に結びついている。詳しくは、石室の調査について報告したのちに、これとあわせて述べることにする。

周堀は石室前と背後が欠ける「こ」の字を横にしたような平面形状に近い。このうち石室入口前は、周堀を掘らないことによってブリッジ状の通路を確保したことが明らかである。北西端は、「こ」の字の形にさらに付け足すようなかたちで周堀が北にのびている。これは、明らかに、周堀を墳丘に沿って円形にめぐらすことを無視したものであり、周堀の形状の整備とは別の意図を推測させる。

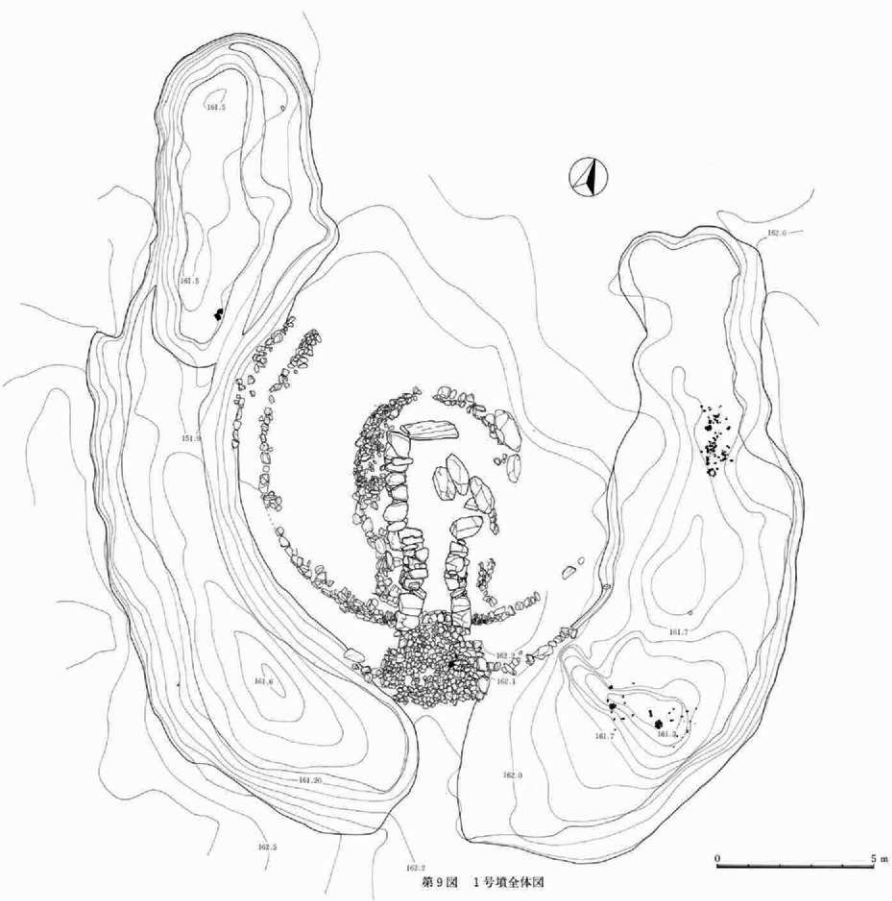
前述したように、古墳の周堀は、当時であっても砂礫面が露頭していたり、若干掘り込んだだけで砂礫面に達してしまふ。そのような中で沖積土が深く堆積している部分にうまく周堀プランがトレースできる位置選定をしたものと思われる。周堀の深さを見てみると、石室入口への通路をなす部分の両側が80cm前後で最も深い。一つには、古墳の正面から見て立派に見せる視覚的效果を図ったものと思われる。他の部分は30～50cmと浅く、特に、墳丘東側はすぐに砂礫面となってしまうのでより浅いものとなっている。そのような中で、前述した墳丘北西側で付け足すように掘られた部分は、80cmと深く掘られている。当初予定していた周堀部分では、盛土がまかない切れなかったため、予定変更して、盛土用に掘り足されたものであろう。

墳丘の規模は、周堀の内側掘り込み部分の列石の位置で計ると径12.2mであり、葦石の根石部分で計

163.00



第8図 1号墳周堀および墳丘断面



第9图 1号坟全体图

ると径10.4mを有している。

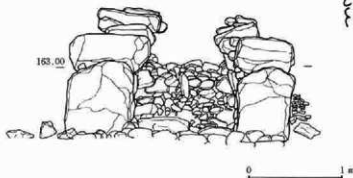
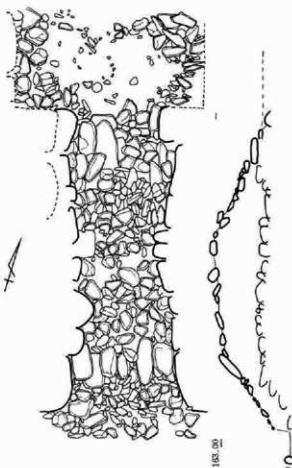
周堀の規模は、内側にくらべて外側の掘り込み部分が不揃いであるが遺存状況のよい西側で測ると幅4.5～5.5mで、外側の掘り込み面で径23mである。

(2) 主体部

主体部は、いわゆる自然石乱石積の横穴式両袖型石室である。調査前に既に大幅に破壊を受けており、天井石と玄室右壁を全て失っていた。残りの部分は比較的遺存状況が良く、また、壁体を補強する裏込め構造や、石室床面下の基礎構造も良く残っていた。そこで、主体部の調査は石室の構築過程をできるだけ具体的に把握できるような基礎的データをより多く得ることに主眼をおいて実施した。

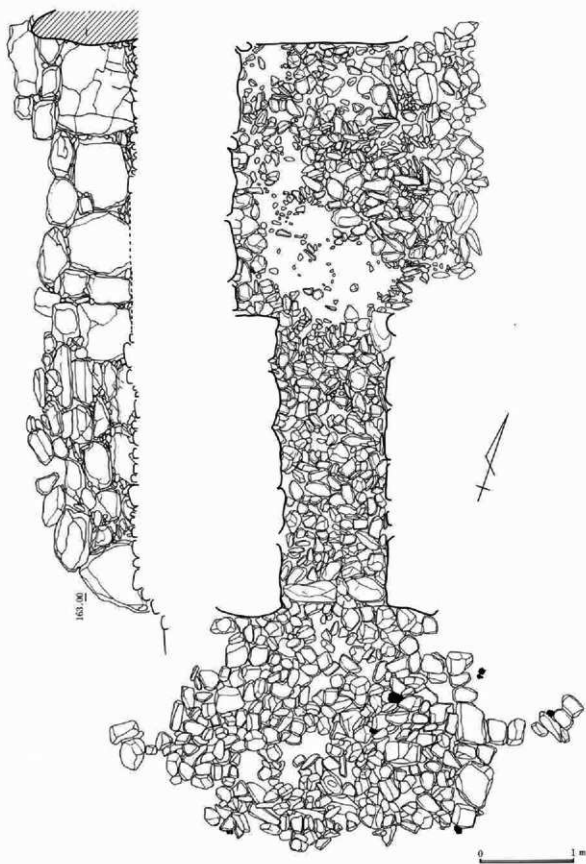
閉塞施設 石室の閉塞は、ほぼ羨道部全体にわたって、中小の礫をつめ込む通有のものである。古墳周辺の畑地の耕者が耕作中に出る小礫を絶えず古墳に寄せつけていたらしく、石室内にも多量に流入した小礫が認められた。これと築造当初の閉塞の小礫との区別は、後世のものが黒色土や天明3年噴火の浅間軽石と混じる状態なので容易にできる。検出された閉塞施設の状態からするとほぼ旧状を残しているものと思われた。

閉塞の順序をみると、まず形状や大きさの不揃いな礫を厚さ羨道中心部で約50cmで、前後にいくに従い薄くなる山形に盛りあげる。次に、これの崩落を防ぐために前後端の斜面に前のものより大きめの板状の礫を寄せ掛けている。閉塞施設が旧状を残しているという理解が正しいなら、想定される天井面と閉塞施設との間に50cm前後の隙間があったことになる。

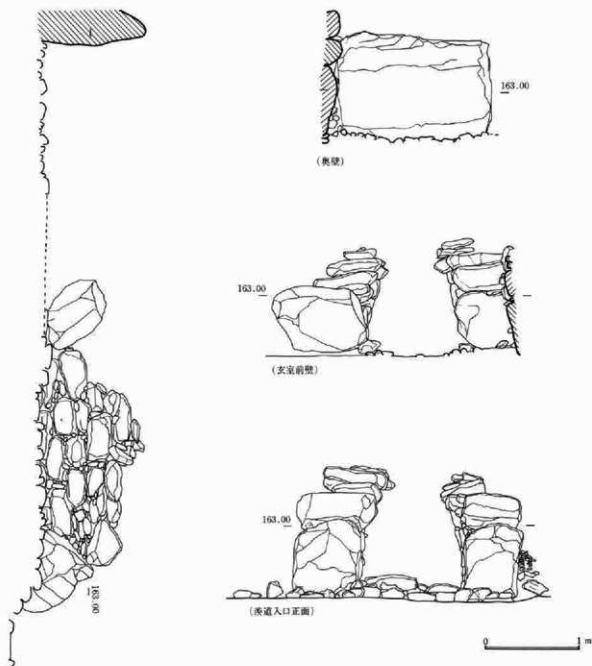


第10図 1号墳石室閉塞

III 古墳時代の遺構と遺物



第11図 1号墳石室（ぬりつぶしは土器）



石室 全長5.9m、玄室長2.9m、玄室幅2mほどの大きさの両袖型石室である。天井石は全て抜き取られており、玄室右壁を欠いている。壁体で使用されている石材は全て雄川から得られる結晶片岩系のものである。石室の周辺にころがっている大型の石材や破砕された多量のかけらが凝灰質砂岩であることから、天井石にはこれが使用されたものと思われる。当地に残る横穴式石室で天井石の認められるものに

は、この石材が多く使用されていることもこの推定が正しいことを物語っている。

羨道部は、長さ3m、幅1.15mの狭長な長方形を呈している。羨道いっばいに閉塞石が詰められていたことから、密封するべき空間としての機能しか有していない。これを除去すると、かなり乱雑ではあるが石室底面より15cm前後の高さまで径20cm大の比較的扁平な礎を敷きつめて床面としている。後述する

III 古墳時代の遺構と遺物

が、壁体の基底石が設置される石室底面の下は、20cm前後の厚さで礫を敷いて基礎地形を当時の地表面上に行なっている。埋葬時の床面は、地表面より30cm前後高かったことになる。羨道入口部には、床面に奥行約20cmで横長の板状の石2石を一列に置いて、入口部の区画をしている。

羨道部の壁体は、左右とも床面より高さ約1mまで残っていた。現状では天井石を欠くが、左右とも上端がほぼ水平であることから、天井石設置面に近い高さを残しているものと思われる。

入口部の左右には、石室側の面が三角形を呈するほぼ同形同大の大ぶりの石を配して、羨門石としている。入口手前から見ると、石の前面が約60°の傾斜をなしており、その上にのる石もこの傾斜面に合わせておかれている。この傾斜は、墳丘の葺石面と同じ傾斜をなすもので、入口前から見て石室使用時に露出していた面であることがわかる。天井石の最前端的の位置は、この傾斜と壁上端の水平線との交点に一致するはずであるから、床面での石室最前段より約70cm奥へ入っていたことが推定される。

羨道最奥部の袖石にあたる石材は、大ぶりの石材を縦位に据え、その上に高さを調整するための小ぶ

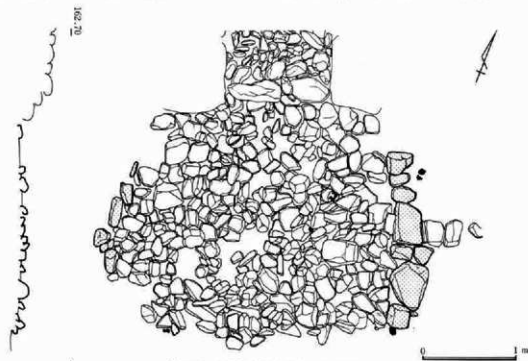
りの石材を置いている。羨道壁の面に連なるものがあるが、大きさや据え方からして明らかに玄門石としての機能を有するものである。

羨門石と玄門石の間に挟まる部分の壁体には、これらより是一段と小さい石材が使用されている。その積み方は、全て横方向に長くなる重箱積みであり、大まかな傾向としては、下位に比較的大ぶりの石を配している。石の目地を見ると、ヨコの目地はほぼ通り、タテは斜めに通る部分が多いことから互目積を意図しているものであろう。また、石材相互の境目には隙間が生じる部分が多いが、そこは、棒状の小礫で全て充填されている。壁面は、約10°内傾しているが、天井石の無い状態でも比較的安定していた。

玄室部は長さ2.4m、幅2.05mの長方形プランである。右壁を欠くが、壁石が取り除かれた痕跡を残していたので、壁体の元の位置を知ることができる。

床面は羨道部と同じく、扁平な小礫を雑然と敷きつめたものであり、その高さはほぼ羨道部と同じである。手前寄りには後世に床面が取り除かれてしまったらしく、同じレベルで石敷が見られない。

壁を残しているのは、左壁と奥壁である。左壁の奥部が最も高い所まで残っており、床面から1.35m



第12図 1号墳前庭（ぬりつぶしは土師）

を測る。天井面は少なくともこの高さ以上であったことは明らかであるから、護道の天井面から玄室で一段高くなる天井構造であったことがわかる。

壁体の構成を見ると、左壁では、第一段に大ぶりの石3個と、足りない部分を調整したと思われる手前寄りの小石1個を配して基底部分とし、その上にこれより小き目の石を2～3段に重箱積みしている。横の目地はほぼ水平にきれいに通っており、加えて、それらが護道壁や奥壁とも連動しているように見える。後述するが、このことは、裏込めや墳丘の築成工程とあわせて時、構築過程の中で意味あるものであることがわかる。

奥壁は板状を呈する結晶片岩の巨石一石を横積みにして据えている。この上端の高さは、左壁の最高位より30cmほど低いことから、この上に高さを調整するように小石が1～2段積みあげられて、天井面に至っていたものであろう。

石室内は玄室床面にまで及ぶ後世の擾乱があったため副葬品等は皆無であった。

前庭 石室入口前に施設された前庭構造は、群馬県内で一般的に見られる形態とは、若干異なる。赤城山南麓や榛名山麓を始めとして、県中部で見られるものが、平面が台形状を呈する前庭部分を区画するのに、石を積みあげた壁体を石室の入口方向に向かって左右に配するのに対し、本墳の場合、台形状の石敷で区画をしている。石敷の両側は、石材を列状に配することによってその内側に敷かれているものと区別できる。最大幅3.5m奥行き2.4mを測る。使用される石材は、石室床面と同じ結晶片岩の小礫である。敷かれた状態から見ると雑然とした感じは否めないが、必ず平の面を出して敷き並べているので、転がり込んだ礫とは容易に識別できる。区画に使用されている石はこれより大ぶりであり、その描くラインは内側にむかってやや弓なりとなっている。

石敷面に接して須恵器坏類を中心とした土器片が散乱したような状態で出土している。これらは小破片が多く、完形品が全く認められなかった。

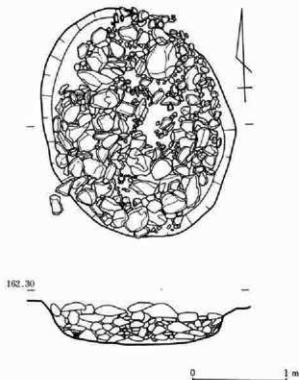
排水施設 本墳の石室は、当時の地表面上に礫敷

の地形を羽子板状に行なって、その上に構築されている。この地形面と同じ検出面において、地形面の南東隅寄りに接するようにして（第15図参照）排水施設ではないかと思われる円形土坑が確認された。

土坑の形状は長軸120cm、短軸95cmの南北方向に長い楕円形を呈しており、断面はナベ底状である。深さは40～50cmを測る。この土坑内には、底面から上端までいっばいに中小の円礫が詰められていた。この状況からすれば、排水的な機能を果たす施設と考えるのが最も当を得ていると考えられる。

現状では、この部分にあることによっていかなる部分の排水をしたのかは明らかにしたいが、推測をたくましくするならば、裏込めを被覆する石組を伝わって、盛土中から浸透してくる水が石室外に逃げるように機能していると考えられなくもない。

県内の古墳の調査例を見わたしてみると、群馬町の庚申d号墳の石室脇に本例と類似した土坑が認められている。なにしろ、確認されたものが少ないので今後の資料の増加に期したい。



第13図 1号墳排水施設

III 古墳時代の遺構と遺物

(3) 古墳構築過程解明のための調査

調査の方法と概要 1号墳の石室は天井石と玄室右壁を除くと石室を構成する各要素がよく残っており、また2号墳は天井石と羨道部を除くと石室の各部分によく旧状をとどめていた。鍋川流域から藤岡市域にかけての古墳が、その周囲にある豊富な石材を十分に駆使して、構造的に非常にしっかりした横穴式石室を築造していることは、一つの大きな特色としてあげることができる。その理由として、古墳構築面を強固にする禱使用の基礎地形や壁体背後を補強するための入念な裏込めや裏込め被覆の構造がある。もちろん、田窪古墳群が形成された7世紀には、群馬県内でも広く横穴式石室が築造されるようになり、墳丘と横穴式石室を一体として構造的に合理的な築造法が定着したであろうことも考慮しておく必要がある。

従来、横穴式古墳の構築過程の復元を目指して行なわれた調査は多いが、その場合、時間的な制約や問題意識の限界から、実際の構築過程を具体的に復元するためにはまだデータ不足の感は否めない。また、完成された構造物としての横穴式石室からの構造的データの集積のみでは、具体的な工程ごとの労働行為を復元するにはあまりにも限界がある。

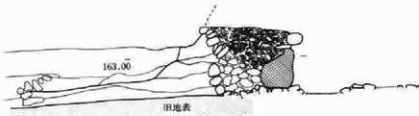
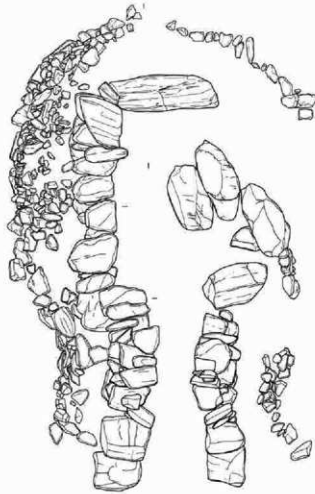
今回の調査では、調査後の道路建設工事により完全に平夷されてしまうという事情もあったので、できる限り古墳構築工程の最小単位にまで分解することに努めた。すなわち、バウムクーヘンを外側から一枚ずつ順を追ってはがしていくような作業を繰り返して、可逆的に横穴式石室の構築過程を跡づけたわけである。このような調査ができたのは、筆者がこの調査法を一度行なってみる必要を痛感していたこともあったが、と同時に発掘作業員の中に甘楽町秋畑在住の新井種次氏(65才)というこの調査に好都合の人物がいたおかげであった。氏は、この発掘に参加する前までは、長く石工を職業としており、石室を安全にしかも技法を解明しながら解体していくのにはうってつけであった。解体調査とあわせて、今回の調査の中では石室に使用されている石材につ

いて、一点一点その法量(長軸長、短軸長、重量)を測定した。重量の測定は、人がかかえられるような大きさのものは台ばかりを使用し、それ以上のものは写真図版(P.L10-2)に示すように、チェーンブロックと石をつり下げるワイヤーとの間に重量計を介在させる計量器を使用した⁵⁾。この法量測定は、1号墳、2号墳に使用されている石材の全てについてできたわけではない。例えば、1号墳では、壁石材と地形に使用されているもののみであり、2号墳では、これに裏込めと裏込め被覆に使用された石についても実施した。これに墓石、前庭使用石材を含めれば、ほぼ全体の使用石材に及ぼせるので今後の調査に期したい。なお、天井石や盛土のデータがそろえば、1基の横穴式古墳についての労働総量の基礎的データが完全にそろえることになるわけであるから、これも今後の課題である。

裏込めと墳丘 後世の削平が著しいため墳丘の築成状況がわかるような部分はわずかであったが、これとて、高さ1mほどまでの遺存にすぎなかった。

裏込め被覆は、石室の壁体の補強としてその背後になされる裏込めが崩壊しないようにその周囲をさらに石垣状に補強するもので、機能的には裏込め構築の一部として把握することができるが、古墳によって、あるいは地域によってこれがないものも存在するので特に名称を付しているわけである。本墳を含めて、鍋川流域では横穴式古墳に川原石を使用した裏込め被覆が存在するのが一般的である。

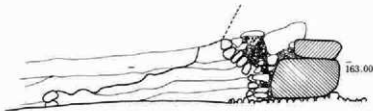
裏込め被覆の遺存する部分にのみ、これに覆される裏込め部分も残存しており、その確認された範囲は、石室の奥壁から左壁に対応する部分であった。裏込め被覆に使用されている石材は、主として小児の頭大ほどのものであり、奥壁から玄室左壁を経て左袖石にいたるまでの範囲は、被覆の断面を見ると最下部から40cmの高さまでは、ほぼ垂直に立ち上がり、それより上は、内側に向かって「く」の字形を呈する。くの子に屈曲する位置は基底より高さ約1mのところである。これに対して残りの羨道左壁部分



(左室左壁)



(右室右壁)



(左室左壁(軸石部分))



第14図 1号墳表込め構造

III 古墳時代の遺構と遺物

では、根石から頂部までやや内傾する直線に葺きあげられている。玄室に関わる部分と羨道のそれと異なる単位として進められたことを物語っている。

西側部分にわずかに残る墳丘断面の状態から、墳丘築成の工程は、石室構築過程に密接に結びついていることがわかる。盛土の工程の単位が裏込め被覆の前の2ヶ所の屈曲点に対応しているからである。その場合、裏込めにかかわる工程が、くの字に折れ曲がる位置までは、盛土→裏込め被覆→裏込めという順序であるのに対し、それより上は、裏込め→裏込め被覆→盛土と逆になっている。前者の工程では、盛土と裏込め被覆によって壁石との間に掘り方のような空間をつくり、そこに裏込めの砂礫をつめ込むことになる。後者の工程では壁石に裏込めの砂礫を寄せつけることがむずかしいので、その外側にやや粘性の黒色土でおさえ込むようにして、さらにその外側に裏込め被覆を施工方法で解決している。

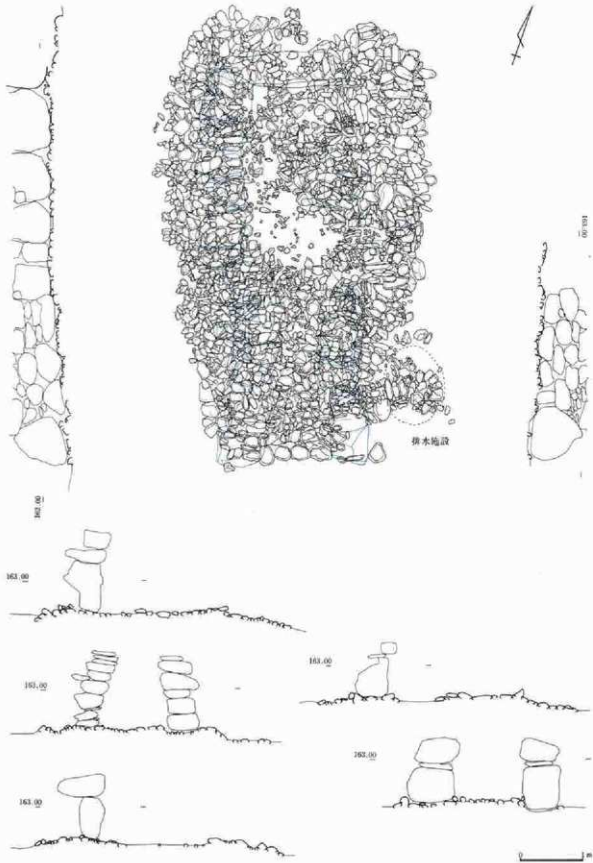
壁体と下部構造 石室の構築面は、当時の地表面に拳大から小児の頭大ほどの礫をバラまきように敷きつめて基礎地形を行なっている。その範囲は、長さ7mで、幅玄室側で4.3m、羨道側で2.7mを測り、角の丸くなった羽子板のような形状をしている。これは、石室の規格に合わせて地形の範囲をきめていった結果によるものであるが、玄室から羨道へかけて漸次幅を狭めているので、石室の形状と全くの相形というわけではない。

次に地表面への壁石の基礎石の設置の状態から見ていくこととする。壁石に使用されている結晶片岩系の川原石は、その美しい色合いと変化に富んだ形状から、広く庭石としてもはやされているものがあるが、反面、壁体に積みあげていく場合には、その形状がわざわざいし、また、大きさの割には非常に重量があることもあり、かなりの技術を要することになる。一つの壁石を積み上げる際に最も優先されたのは、石室内面に、積み上げようとする石材のどの面をどのような傾きで置きたいかということであったようである。そのため石材のまわりにきかんに小礫による支い物をしてそのことを実現している。

石室をおおっていた盛土や裏込めを身ぐるみはがした時、まずおどろいたのは、この支い物の多きであった。この所作は、設置するべき石材が大きくなればなるほど念入りであった。特に目立ったのは、奥壁と袖石についてである。とりわけ、奥壁は板状の大石であるから、これを横積みになるとなると不安定きわまりないものである。奥壁石と支い物だけになったところで慢身の力を込めて押してみたがビクリとしなかった。ところが支い物の隙を外した途端、巨象が倒れるように横倒しになってしまった。補強としての効果のほどがよくわかる。もう一つ、興味ある設置状況は、羨道入口の左右の石に見られた。この位置にくる石は、左右とも三角おむすびのような形をした大石であり、これより奥にくる壁体と、天井石の前への荷重をしっかりと受けとめるために意図的に選定された形状の石材である。この場合、前への荷重をさらに強固に受けとめるために石材の前端の下部に支い物をしていく。(写真図版P L 10-4) この支ってある石のことを地元の石工の間では「やらず石」といっており、拳ほどの石を支っただけでも、前方への力を完全に食い止める効果絶大の石であるとのことである。

壁石の設置の順序を見ると石室入口の左右の羨門石(第16図の石材番号の38、92、以下のゴシックの番号は同様)、袖石(34、97)、奥壁石(99)の4石がまずおかれていることが、設置状況と石材の大きさからわかる。その後、4石に挟まれた部分の壁面を水平な一定の単位ごとに築成していくわけである。この単位には、壁石、裏込め、裏込め被覆、盛土の作業が一体としてあり、これが繰り返されて天井石架構のための壁面上端部まで至ることになる。壁体の構築状況を背後から見てみると、どの部分も一様に積み上げられているのではなく、重点的に複数の箇所を強固に築き、他はこれより簡略なものとなっていることがわかる。それらの位置は、奥壁とこれに交わる玄室側壁部分、袖石、石室入口の6ヶ所であり、前述した壁石設置工程の中で最初に置かれる5石に対応している。壁体が完成すると天井石

1 1号墳の調査



第15図 1号墳埋地地形と壁石の設置状態

III 古墳時代の遺構と遺物

が架構されるわけであるが、この段階での多大な重量の負荷は、基本的には、この6ヶ所で支持する構造になっていることがわかる。このことは、次項で見る、壁体で使用されている個々の石材の法量を比較していくとさらに明らかになる。

使用石材の法量測定 石室に使用されている石材は、天井石を除くと全て片岩系のものであり、主として緑泥片岩が大半を占めている。これらは、本墳のすぐ東側を南から北へ流れている雄川に属するものであり、現在でも容易に採集できる。一方、裏込めに使用されているものは、純粋な砂礫層に基づくことから、堆積している該当層を掘り出してそのままモッコ等で運搬してきたものと考えられる。

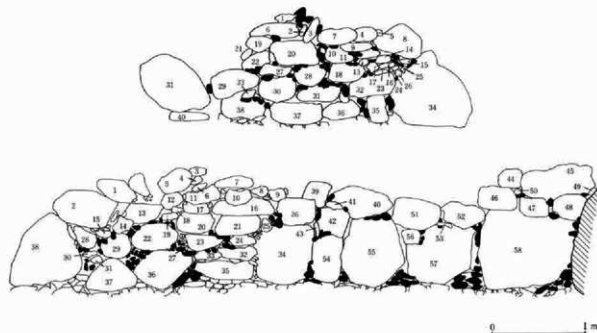
壁石として使用されている石材については、石室内部から壁石を正面にして、その左右と上下の長さおよび、奥行の最大値を測定した。

測定の結果からすると、設置される部位によりいくつかの傾向を見い出すことができる。まず、羨道壁の羨門石と袖石の間に配置される石材のほうが玄

室壁に配置されるものより大幅に小ぶりである。これに応じて、羨道部のもものは重量が平均して100kg以下であるのに対し、玄室部の主要なものは平均して200kgをこえている。明らかに羨道用と玄室用の区分があったことがわかる。さらに羨門石とされる両者、袖石(玄門石)とされる両者はほぼ同形同大であり、調査に際して、現地で似たような1組ずつの石が測定されたことがわかる。

羨道左壁はほぼ築造時に近い遺存状態で、総重量3,913kg、玄室寄りの一部欠く右壁は2,907kgであった。壁体のろほどを欠く玄室左壁は総重量2,938kgであった。これらに奥壁を加えた総計は11,384kgとなり、相対する壁体と同重量であるとして、復元的に壁体部分の総重量を概算すると約20tとなる。

本墳の場合、壁体以外に使用されている石材のうち、地形面に敷かれた小礫と石室床面に並べられた礫について重量測定したが、その総計は7,220kgであった。これに裏込め、裏込め被覆、葺石、前庭のデータを取るべきであったが徹底できなかった。



第16図 1号墳石室使用石材実測図

(ぬりつぶしは隙間にあとからうめた石)

羨道左壁

番号	重さ kg	左右 cm	上下 cm	奥行 cm
1	38.7	36	9	46
2	410.0	62	40	78
3	6.7	16	3	39
4	3.1	10	6	38
5	55.4	36	9	55
6	6.3	16	4	40
7	19.7	40	5	46
8	18.5	20	7	51
9	39.2	24	12	68
10	47.5	24	14	64
11	81.0	36	19	53
12	40.0	17	15	56
13	96.8	42	15	58
14	18.7	20	12	39
15	8.8	18	6	40
16	89.4	45	18	60
17	30.5	27	10	42
18	12.4	18	5	66
19	8.0	15	7	38
20	89.0	50	18	51
21	97.5	43	20	56
22	125.0	48	26	54
23	85.0	42	23	50
24	32.5	25	11	45
25	11.4	15	4	45
26	180.0	45	26	72
27	4.8	12	3	34
28	56.3	32	8	57
29	58.2	32	12	43
30	9.3	17	5	40
31	10.0	15	6	43
32	53.2	36	12	50
33	20.5	28	6	44
34	875.0	72	60	107
35	160.0	65	24	50
36	225.0	63	35	68
37	165.0	50	33	37
38	745.0	73	70	103

玄室左壁

39	68.5	24	18	60
40	205.0	62	20	87
41	8.5	16	6	40
42	95.3	25	24	59
43	8.1	15	5	44
44	53.5	25	17	74
45	255.0	66	35	67
46	110.0	39	22	75
47	75.0	31	24	67
48	175.0	43	21	71
49	11.2	14	9	49
50	21.7	22	15	51
51	130.0	42	32	48

玄室右壁

番号	重さ kg	左右 cm	上下 cm	奥行 cm
52	125.0	44	25	67
53	7.4	21	5	44
54	63.3	28	15	53
55	295.0	67	33	70
56	29.6	19	16	48
57	350.0	59	54	88
58	840.0	75	62	100

羨道右壁

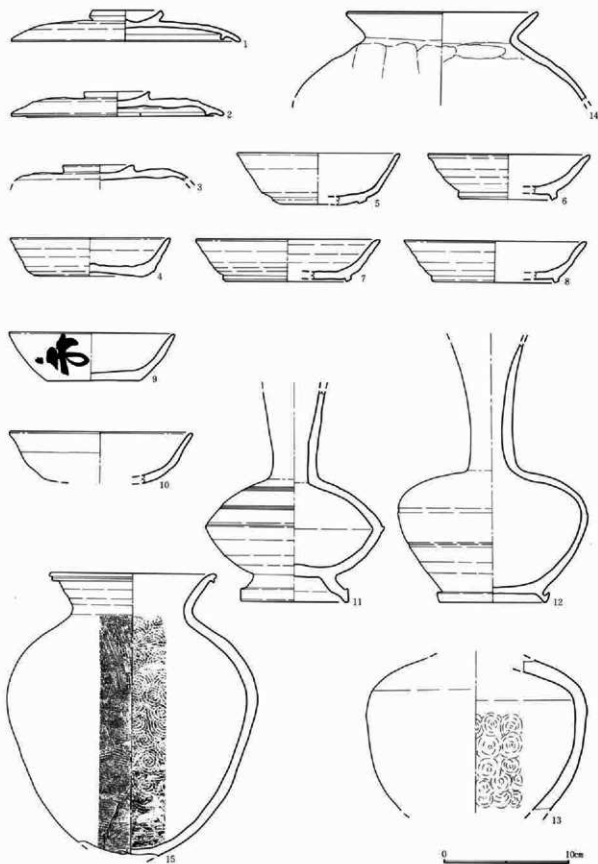
59	9.0	20	5	38
60	2.8	9	2	33
61	16.8	18	8	46
62	21.5	13	9	50
63	5.0	10	4	32
64	88.5	53	15	60
65	53.4	47	12	41
66	160.0	42	38	57
67	25.6	32	8	48
68	3.5	10	5	40
69	54.0	31	16	51
70	17.3	26	8	50
71	4.6	14	7	34
72	15.3	17	8	52
73	5.4	16	6	43
74	7.3	20	5	37
75	6.5	9	9	31
76	45.7	35	20	40
77	48.7	28	15	70
78	120.0	46	28	56
79	16.6	19	7	59
80	41.9	33	11	51
81	4.7	14	4	28
82	2.1	12	4	23
83	4.0	8	6	38
84	5.1	9	5	37
85	33.1	36	11	37
86	65.0	56	21	56
87	58.0	38	26	38
88	85.0	43	22	43
89	70.0	43	15	43
90	87.5	42	20	42
91	9.3	40	8	40
92	745.0	76	66	76
93	55.0	41	16	41
94	75.0	44	15	44
95	115.0	25	42	25
96	120.0	44	40	44
97	580.0	100	40	100
98	24.5	28	8	28

奥壁

99	1,625.0	117	46	122
----	---------	-----	----	-----

第5表 壁使用石材法量一覧表(1号墳)

III 古墳時代の遺構と遺物

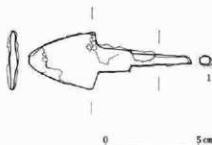


第17図 1号墳出土土器実測図

(4) 出土遺物

出土土器のうち13は墳丘東側の周堀底近くよりのもので完形に近い。他の土器は前庭部よりの出土である。後述する平瓦片は、鉄鍬とともに墳丘北西側の周堀中位から出土したものである。

出土土器からするならば、大筋で7世紀後半から末葉にかけてのものと考えられる。



第18図 1号墳出土鉄鍬

1号古墳出土遺物観察表

図 No	土器種 器種	出土位置	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器 蓋	周堀東部	①18.4 ②横5.4 ③2.65 ④ㄥ	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤整形。	
2	須恵器 蓋	周堀東部	①17.0 ②横5.1 ③1.9 ④ㄥ	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤整形。	
3	須恵器 蓋	周堀東部	①— ③横5.6 ④— ④ㄥ	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤整形。	
4	須恵器 坏	周堀東部	①12.8 ②3.0 ③8.5 ④ㄥ	①青灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤成形。底部寛切後、寛調整。	
5	須恵器 高台付坏	周堀東部	①(13.0) ②4.0 ③(6.3) ④ㄥ	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤成形。削出高台、底部寛調整。	
6	須恵器 高台付坏	前庭部東 南	①(13.0) ②3.5 ③7.9	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤成形。高台取付後、寛調整。	
7	須恵器 高台付坏	周堀東部	①14.4 ②3.3 ③10.1 ④ㄥ	①青灰色 ②良(硬)還元 焰	轆轤成形。高台取付後、寛調整。	
8	須恵器 高台付坏	周堀東部	①14.4 ②3.2 ③10.1 ④ㄥ	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③緻密	轆轤成形。高台取付後、寛調整。	
9	土器 坏	周堀東部	①13.2 ②3.7 ③7.5	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	口縁部・内部横溝で、体部・底部寛削り。	患者「毒 (佛)」
10	土器 坏	周堀東部	①(12.6) ②4.0 ③7.0 ④ㄥ	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	口縁部・内部横溝で、体部・底部寛削り。	
11	須恵器 長頸瓶	周堀 南東部	①— ②22.0 ③11.3 ④口縁部欠	①灰オリーブ ②良(硬) 還元焰 ③緻密	轆轤整形。	
12	須恵器 長頸瓶	周堀 南東部	①— ②27.3 ③11.3 ④口縁部欠	①灰色 ②良(硬)還元 焰 ③細砂粒混入	轆轤整形。	
13	須恵器 壺	周堀東部	①— ②— ③— ④ㄥ	①中・褐色。外・灰色 ②良・還元焰③細砂粒混	轆轤整形。内面青海灰を残す。	
14	土器 壺	周堀東部	①20.4 ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	口縁部から内部横溝で、外面胴部寛削り。 外面に赤色顔料を塗彩している。	
15	須恵器 大 甕	周堀東部	①26.0 ②46.0 ③— ④胴ㄥ欠	①灰色 ②良(硬)還元焰 ③緻密	外面平行印目。内面青灰被文。	

2. 2号墳の調査

1号墳の南約30mに位置し、1号墳を一回り小さくした規模の小円墳である。墳丘の遺存状態は1号墳よりはよいが、やはり耕作等により削平が深く及んでおり、特に南側が著しい。

(1) 墳丘及び外部施設

本墳の場合も墳丘は当時の地表面上に直接構築している。墳丘がかろうじて遺存していたのは、奥壁背後にあたる北側から、玄室左壁の西側にかけての部分で、他はほとんど遺存していなかった。その中で盛土の築成状況がある程度観察できるのは、奥壁背後の東半分のみであり、基底面より1m程の高さを残していた。

墳丘の斜面には盛土の崩壊を防ぐために葦石が施されている。当初は、墳頂部にいたるまで全面に葦かれていたことが推測されるが、確認できたのは、墳丘西側寄りであり、そのうちのほとんどの部分が葦石根石のみか、その上に2段ほど積み上げた部分までである。使用されている石材は、結晶片岩の川原石で、拳大ほどから人頭大ほどまでさまざまであり、これらが大小を選らばず雑然と葦かれており、できあがった面も強固なものとなっていない。この葦石の根石のラインをたどると、ほぼ石室の奥部に中心をおいての円を描いている。このことから、墳丘規模は径約10mであったと推定される。

この葦石の根石から直接周堀へとつながるのではなく、幅約40cmのテラス面がめぐる外側に周堀が掘削されている。テラス面は、当時の地表面を掘り残すことによって生み出されるもので、周堀の外側か

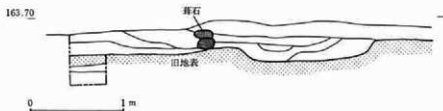
ら見れば、一種の基壇としての視覚的效果がある。築造には、墳丘の周囲の大半を周堀が取り巻いていたものと推測されるが、後世の削平や調査区の制約から、検出できたのは西側半分であった。幅は上端で約1.4m、深さは30cmほどである。この深さですでに砂礫層が顔を出し始めている。

ら見れば、一種の基壇としての視覚的效果がある。

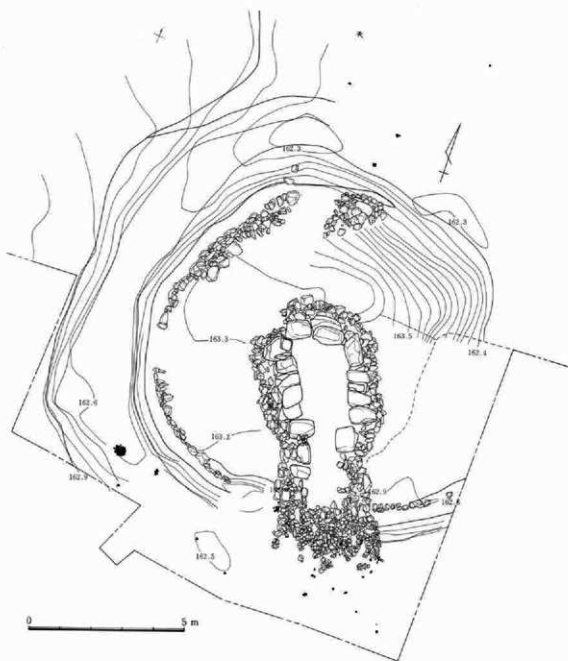
築造には、墳丘の周囲の大半を周堀が取り巻いていたものと推測されるが、後世の削平や調査区の制約から、検出できたのは西側半分であった。幅は上端で約1.4m、深さは30cmほどである。この深さですでに砂礫層が顔を出し始めている。

なお、石室入口前には、1号墳と同様の礎石の前庭施設が確認されたが、その南への広がりや、周堀の想定される位置まで達しているの、石室入口前には周堀が掘削されず、石室への外からの通路となっていたことが推測された。

周堀を掘削することによって、墳丘築成のための盛土用材が確保されるのが、古墳築成の一般的なあり方と考えられるが、本墳の周堀規模では到底盛土に必要な量をまかない切れない。盛土の状況を見ると、全て土のみからなっているので、すぐに砂礫層に達してしまう本墳の周囲での材料の確保をあきらめて、他所へ求めたのではないかと推測される。そこで想起されるのが、この2号墳と1号墳の間に位置する、その形状のみからは用途が不明であった大型の円形の落込みみである。この部分の掘削により、盛土の材料を確保した可能性はきわめて高い。



第19図 2号墳周堀断面



第20図 2号墳全体図

(2) 主体部

石室 1号墳と同じく結晶片岩系の石材を壁石に使用する両袖型の横穴式石室で、主軸をN30°Wとしている。羨道部の大半を失っているが、壁石の基底の石の設置の痕跡と床面の遺存から、平面規模についてはほぼ確定することができる。石室全長は約5.25mで、羨道部は長さ2.7m、幅0.7m、玄室部は長さ2.

55m、幅は奥部で2.1m、前部で1.73mを有している。プランの形状からすると、羨道の方向と玄室右壁のラインは一体であるのに対し、玄室左壁は入口から奥へ向かって西へ開いている。玄室の平面形は、基本的には直線の組み合わせによってつくられているが、左壁に若干別張りの傾向が見られる。

III 古墳時代の遺構と遺物

天井石を全て失っており、遺物もわずかであったことから、盗掘にあっているものと思われるが、床面は当時のままをほぼ残しているようである。この面を床面としたのは、鉄製釘、鉄直刀の鞘金具、歯等が出土していることと、その面が安定したフラ

ットな面をなしていたからである。玄室部の床面の構造を見ると石室の構築面である礫地形面にまず10ないし30cm大ほどの板状の礫を敷き、そのあと小円礫をまいてならしたものである。砂や土等は一切使用しない。床面のレベルは、古墳周囲の当時の地表

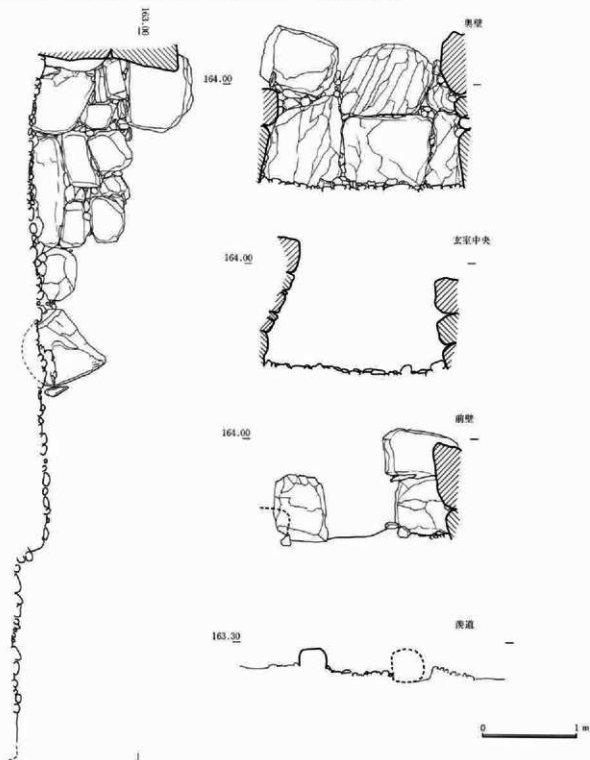


第21図 2号墳石室（ぬりつぶしは土器）

面よりは約30cm高くなっている。床面よりの出土遺物は、前述のもののみで、他には小破片すら見いだされないことから、たとえ盗掘にあったとしても、本来的に少なかったものと思われる。

羨道部の壁体は、奥よりの一部を除いて全て持ち去られている。右袖石は羨道入口寄りに倒れ込んで

いるが、それを起こしてみると、左右とも同じ形状のやや大ぶりの石材が立位でおかれていたことがわかり1号墳同様、玄室入口部を意識した配置が推測された。これより手前に残る壁石からすると羨道のほうが玄室より小ぶりの石で壁体が築かれていたことと推測される。



III 古墳時代の遺構と遺物

玄室部の壁体は、大略タテ、ヨコの目地が通し目積であり、また重箱積を基調としている。両側壁の壁面構成を比較して見ると、向かい合う両壁が左右対称の構成を取っている点が注意を引く。奥壁は3列で2段目までを残す多石構成である。幅との関係からして、天井面までは高さを調整するためにさらに小ぶりの石を1ないし2段積み上げていたと考えられる。玄室部では、床面から1.7mの高さまで壁体を残しており、当初の高さは2mほどであったと推定される。羨道部は幅との関係から玄室の高さまでは到底なかったものと推定される。左袖部の高さで羨道の天井面に達する二段構造であったと推測される。

天井石に使用されたと思われる石材は全て持ち去られたため実体はつかめないが、小破片の凝灰質砂岩が付近に散乱していたことと、壁体にはこれを使用していないことから、天井石のなごりと推定している。

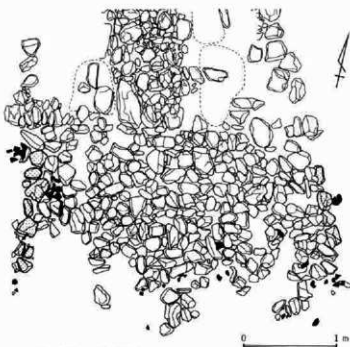
前庭 本墳の場合も石室入口前に直接取り付く形で礎を敷きつめた前庭が確認された。1号墳ほどに明瞭ではないが、台形状に区画する石材を配した内側に10~20cm大のやや扁平な礎を雑然と敷きつめて

(3) 構築過程解明のための調査

本墳の場合には、玄室部は天井石を除き比較的よく残っていたが、羨道部は大半が削平されており、良好なデータは得られていない。また、時間的な制約もあり、壁体の解体に際しての調査は1号墳ほどに詳細に見ることはできなかった。

使用石材の法量測定は、裏込めと裏込め被覆についても実施した。この場合の重量の測定法は、一輪車に適当な量の石材をのせて、それごと台ばかりで測り、一輪車の重量を引いたものを総計した。

裏込めと墳丘 2号墳の場合も当時の地表面をそのまま構築面としていることは1号墳と同様であ



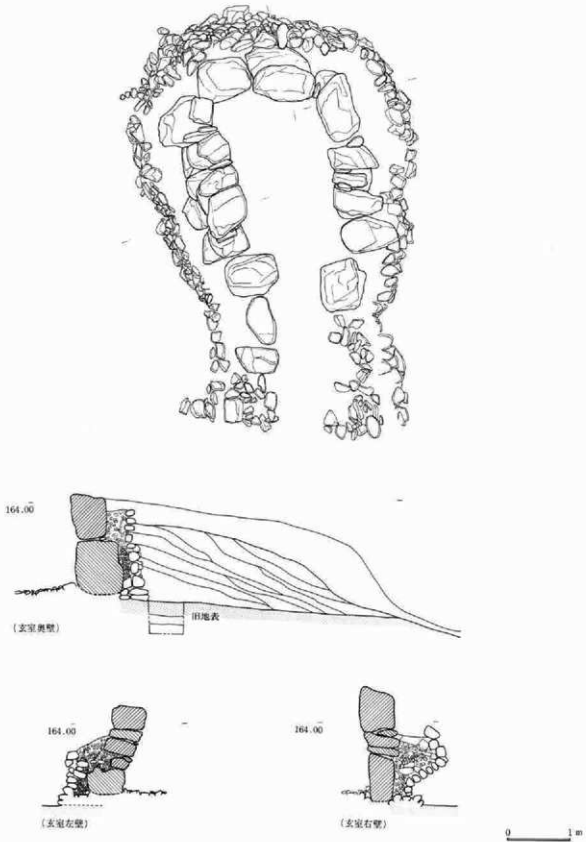
第22図 2号墳前庭(ぬりつぶし土器)

いる。最大幅約3.5m、奥行約2mを測るが、手前寄りには後世の攪乱が及び完全ではない。この礎面に接するようにして、須恵器片が出土しているが、破片が多く、完形品は存在しなかった。

本墳に関係して得られた出土遺物の中には、その出土位置からは古墳に伴う土器と区分できないが10世紀以降の時期に位置づけられることから、明らかに直接は伴わないものがかなり出土している。後世に土器の廃棄の場とされたものであろうか。

裏込めの範囲は、石室の形状にほぼ比例したものである。1号墳の場合が玄室から羨道へむけて漸次幅を狭めていったのに対し、2号墳では、羨道部の袖石の手前の位置で明確にくびれており、平面がしゃもじ形を呈している。

裏込めの厚みは、被覆する位置によってかなり異なっている。大まかには、玄室両側壁に対応する部分で最も厚く、約80cmであるのに対し、羨道側壁、奥壁の順に厚みを減じている。ただし、後述するがその厚みが必ずしも補強の強さの程度に対応しているとは言えない。特に奥壁の場合補強に使用される



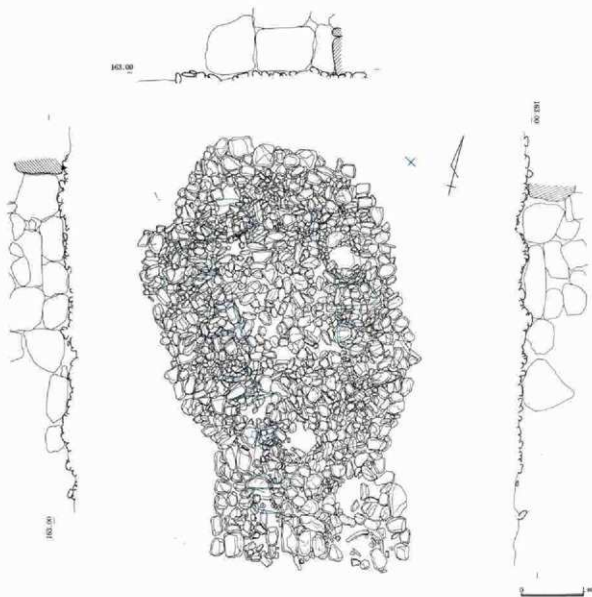
第23図 2号墳裏込の構造

III 古墳時代の遺構と遺物

石材が下半を中心到大ぶりのものであるから、厚みの割には強度が高い。

裏込め被覆の断面形状を見ると、2つのタイプが見られる。一つは、第23図の下段右側のもので地形面から20cmまではほぼ垂直に近く積まれ、その上は外側に向かって高さ60cmまで大きく開き、さらにそこから「く」の字形に内傾して天井の高さまで至るものである。この形状が認められる範囲は、玄室右壁から奥壁の東寄りにかけてである。もう一つは、玄室左壁から奥壁の西寄りにかけて認められるもので、最下部の石から上端までやや内傾気味に直線的に連

なるものである。前者で確認できた2つの屈曲点は積み上げの工程の単位を示していることが明らかであり、少なくとも3工程は確認できたことになる。そして、この3つの工程に対応するように壁石の設置、裏込め、盛土の工程が一体となっていたことがわかる。確認できた3工程のうち、第1番目と第3番目の工程は、壁石→裏込め→裏込め被覆→盛土の流れが推測され、第2番目の工程では、盛土→裏込め被覆→壁石→裏込めの流れが推測される。下から上まで直線的に裏込め被覆がなされる位置では、壁石→裏込め→裏込め被覆→盛土という工程が一定の



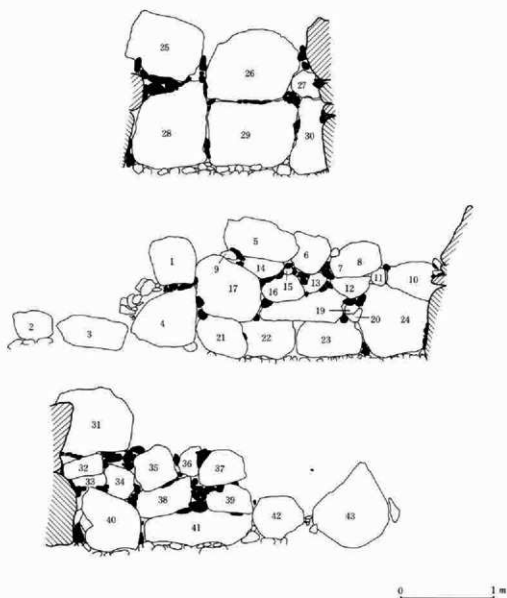
第24図 2号墳礫地形壁石の設置状態

高さごとに繰り返されたものと推測される。

盛土の築成状況が良く観察できる奥壁背後の部分を見てみると、20cm前後の厚さを単位として奥壁に寄せかけるように重ねられていっている。明らかに石室構築の過程と一体となり、壁体を保持する機能を果たしていることがわかる。

壁体と下部構造 外見적으로見ると1号墳と2号墳の石室は随分と異なったもののように思われたが、その解体調査の中で比較してみると、構造的に極めて類似したものであることがわかった。壁石の基底

にくる石材を見ると、やはりポイントになる位置に飛び抜けて大ぶりの石を配している。それは、袖石（玄門石）にあたる両石（4、43）、奥壁の西寄りの2石（28、29）と玄室左壁の一番奥寄りのもの（24）である。羨道入口部両側でも、大ぶりの石材の抜き取り痕とやらず石を確認できたことから1号墳の38、92に似たような石材が設置されたと思われる。このことから、壁体の構成も、1号墳と同様にまず、羨道入口、袖石、奥壁が設置され、石室の企画寸法の基準が設定され、その間を埋めるように全体の石



第25図 2号墳石室使用石材

(ぬりつぶしは隙間をあとからうめている石)

III 古墳時代の遺構と遺物

築室造の本工へ入っていったと推測される。

石室内面に表われた壁面を見ても、2号墳が1号墳に比べてラフな感じを受けた。それは、1号墳が内面に表われるタテ、ヨコの目地の通りを意識し、石材の四角形の面を出すことを目指しているのに対し、2号墳では、このことを強く目指していないこととの差違のあらわれと思われる。このことは、使用する石材を川原で選定する際に、両者の基準に細部で差違があり、1号墳の方が入念な選定作業があったことを物語る。このことを反映して、2号墳の場合、裏込めをはがしてしまうと次々と壁石はくずれてしまうのに対し、1号墳は、この状態でも不安定ながらも積み上げられた状態を保っていた。

使用石材の法量測定 奥壁が多石構成であることの差を除くと、1号墳石室と非常によく似た傾向が見いだせた。それは先に示した石室構造上のポイントになる部分に置かれる石が、他の部分にくる石よ

りも法量が抜きでいることである。これらの石と他の石の違いは特に奥行と重量にあらわれる。この部分をより安定した壁体構造にする石室構築上の要請が石材の法量によくあらわれている。一方、使用石材全体を通じて1号墳のものに比べ奥行が短かいため、裏込め等の背後の補強なしではきわめて不安定である。壁体の1/2程を失っている玄室左壁の総重量は3545kgである。また、1/2程を失っている奥壁は3959kgであった。これらに1号墳の羨道壁の重量を目安にしてみると、壁体全体ではやはり20t前後の重量があったと推定される。裏込めと裏込め被覆に使用されている石材の総重量は約10tであり、一輪車に山盛り近くにして100台分にあたる。これの遺存は玄室部のみであり、その1/2程であったから、これに羨道のそれを勘案すると、この3倍ほどの量が本来のものと思われる。地形の隙は総重量約9tであった。

羨道左壁

番号	重さ kg	左右 cm	上下 cm	奥行 cm
1	307.5	49	49	80
2	190.0	41	30	66
3	240.0	73	32	46
4	730.0	66	60	84

玄室左壁

5	280.0	82	40	70
6	160.0	30	41	70
7	4.2	9	9	40
8	125.0	54	38	53
9	9.5	18	10	38
10	180.0	46	32	53
11	28.3	14	18	48
12	100.0	35	23	53
13	50.0	19	19	77
14	80.0	47	20	50
15	2.5	10	8	38
16	125.0	46	29	50
17	375.0	67	63	48
18	240.0	86	32	64
19	6.9	15	10	30
20	8.8	15	11	38
21	290.0	48	24	54
22	305.0	70	31	62
23	310.0	70	34	48

番号	重さ kg	左右 cm	上下 cm	奥行 cm
24	865.0	69	72	71
25	425.0	80	65	64

奥壁

26	650.0	97	74	58
27	59.0	24	29	45
28	1,150.0	72	81	68
29	1,350.0	92	69	67
30	325.0	30	75	38

玄室右壁

31	652.0	66	71	50
32	90.0	41	21	80
33	43.0	16	11	10
34	140.0	29	33	73
35	220.0	42	44	81
36	59.5	19	30	56
37	200.0	48	36	80
38	210.0	58	26	35
39	125.0	43	30	28
40	410.0	65	60	40
41	480.0	115	35	56
42	400.0	50	33	79
43	580.0	63	85	63

第6表 壁使用石材法量一覧表(2号墳)

以上から算出された重量を基にすると、石室構築に関しては天井石を除いて約50tの重さ一つの目安とした重量の石材が使用されたと推定される。こ

れに天井石、葺石等のデータが得られればトータルの数値が得られることになる。

(4) 出土遺物

土器 全て石室外からの出土である。その大半は前庭部の礎敷上からその西側に位置する周堀にかけて確認されている。

得られた土器のうち、その多くは平安期に位置づけられるものである。追葬等を考慮しても古墳との

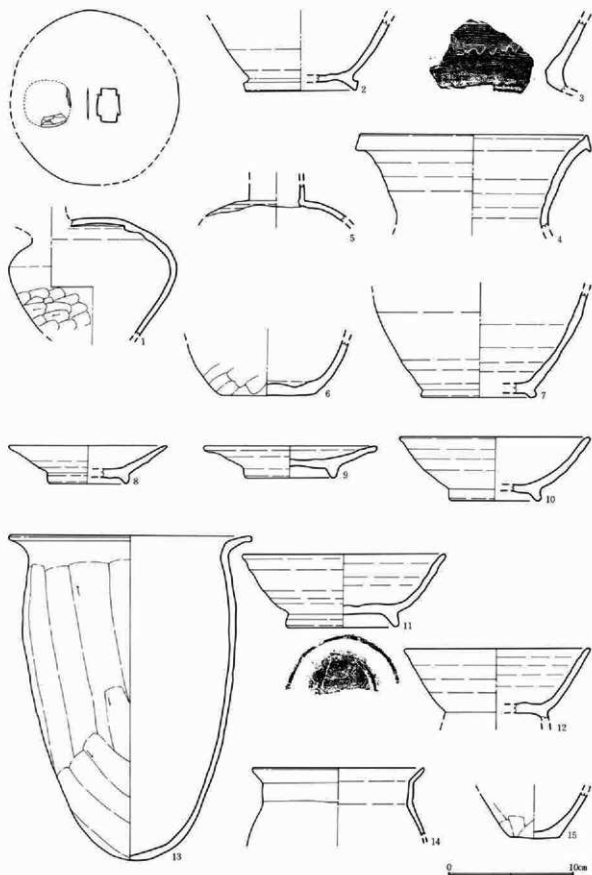
時間的へだたりが大きいので、直接伴なわないものと考えられる。

前庭部分より出土の須恵器平瓶が完形に近いものであり、古墳の時期を知る目安になるものと思われるが、七世紀中葉以降の中におさまるものであろう。

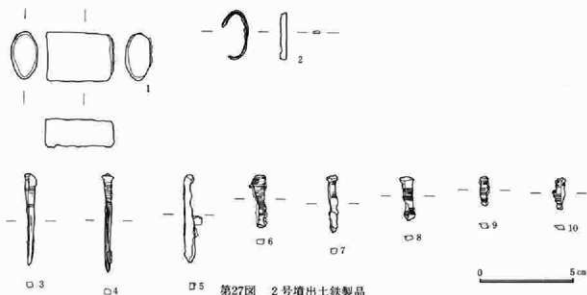
2号古墳出土遺物観察表

図No	土器種類	出土位置	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器 平瓶	前庭部南 西	①— ③—	②— ④片	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	輪轆整形。胴下半箇所調整。	自然軸
2	須恵器 高台付瓶	前庭部東 南	①— ③—	②11.8 ④体部～台	①灰～黒色 ②良・還元焰 ③緻密	輪轆整形。底部高台取付後、荒削り。	
3	須恵器 大壺	—	①— ③—	②— ④口縁部	①灰色 ②良(硬)還元焰 ③緻密	輪轆整形。	自然軸
4	須恵器 大壺	—	①(24.4) ③—	②— ④口縁部	①灰色 ②良(硬)還元焰 ③細砂粒混入	輪轆整形。(やや瓦質気味)	
5	須恵器 短頸壺	—	①— ③—	②— ④胴～肩	①灰色 ②良・還元焰 ③砂粒混入	輪轆整形。	
6	須恵器 壺	前庭部南 西	①— ③—	②(10.0) ④底部	①灰色 ②良(硬)還元焰 ③緻密	輪轆整形。底部箇所調整。	
7	須恵器 高台付壺	—	①— ③—	②(12.0) ④底部	①黒色 ②良(硬)還元焰 ③緻密	輪轆整形。底部高台取付後、磨で調整。	
8	須恵器 高台付皿	—	①(12.6) ③2.95	②6.25 ④片	①灰色 ②良(硬)還元焰 ③緻密	輪轆整形。底部高台取付後磨で調整。 (回転糸切)	
9	須恵器 高台付皿	—	①(13.8) ③2.45	②(7.2) ④片	①灰白色 ②良(軟)還元焰 ③細砂粒混入	輪轆整形。底部高台取付後磨で調整。 (回転糸切)	
10	須恵器 高台付埴	—	①(15.0) ③5.0	②(7.0) ④片	①灰色 ②良(軟)還元焰 ③細砂粒混入	輪轆整形。底部高台取付後磨で調整。 (回転糸切)	
11	須恵器 高台付埴	周堀 北東部	①(16.0) ③5.75	②(8.7) ④片	①灰色 ②良(軟)還元焰 ③緻密	輪轆整形。底部高台取付後磨で調整。 (回転糸切)	
12	須恵器 高台付埴	周堀 北東部	①14.8 ③—	②— ④口～底	①灰色 ②良(軟)還元焰 ③細砂粒混入	輪轆整形。底部高台取付後磨で調整。 (回転糸切)	
13	土器 壺	周堀 南西部	①25.6 ③34.35	②— ④ほぼ完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③粗い砂多量混入	外面割削は荒削り、口縁部・内面は横撫で。	
14	土器 壺	—	①(18.2) ③—	②— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割削は荒削り、口縁部・内面は横撫で。紐作り。	
15	土器 壺	北落ち込 み	①— ③—	②6.2 ④底部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面荒削り、内面は横撫で。	

III 古墳時代の遺構と遺物



第26図 2号墳出土土器実測図



第27図 2号墳出土鉄製品

鉄製品 石室内の床面上から全体に出土している。1は鉄製の鞘尻金具である。断面2.6cm×1.4cmの楕円形で、長さ3.4cmを測る。小さめのつくりであることから、小刀に伴うものと思われる。2は銅製の黄金具であり、恐らく金銅製であろう。大きさからすると1とともに持ち去られてしまった鉄製の小刀に伴ったものであろう。

鉄製品のうちで特に目立ったものは、鉄製の釘である。図示したものを以外にも小破片がかなりの量にのぼっている。表面に付着している木質の状態から

明らかに木棺に使用されたものである。全体を残すもので長さ4.6cmを測る。頭部は側面の一方から折り曲げられたものであり、断面は方形である。表面に付着している木質の状態をみると、頭部から先端へむけて1.2cmのところを境にして、木目が横から縦に変わっている。この1.2cmが木棺に使用されていた板材の厚さである。

この他には、石室内から出た土を水洗によってふるいにかけて際に人の歯が少量発見されたが、専門的な鑑定をまだ受けていない。

3. 3号墳の調査

田籬古墳群に属する古墳の中では、雄川から最も西へ奥まった地点に位置している。現在の雄川の流路から西へ進むにつれて、ゆるやかな階段上に高くなるが、その最高所に位置しており、これより西へは一定の平坦地を介して下川へむけて逆に徐々に低くなっていく。この3号墳と同じ占拠条件を示すものが、その北側へ10m前後の間隔をおいて4基連

なっている。田籬古墳群のまとまりとしては、これらの古墳が最西端に位置するものである。

現在残存している本墳の墳丘部分は全て調査対象地に接する北側に位置しているが、後世における削平を考慮すると対象地内に古墳南側の墳丘裾、周堀がかかることが予測された。

(1) 墳丘及び外部施設

調査の結果、墳丘南側の周堀の一部が確認された。ただし、この付近は後世の削平が深く、遺存しているのはその底面から20cmほどのわずかなものであ

た。周堀の内側部分は明瞭でないが、外側の立ち上がりを基準にすると、径約16m程のものであったことがわかるから、墳丘部の径は10m内外の小円墳で

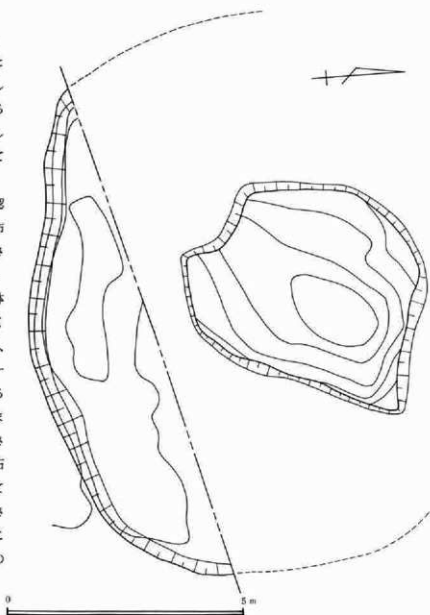
III 古墳時代の遺構と遺物

あったと推定される。

周堀の墳丘側寄りからは、かなりの量の人頭大を中心とした結晶片岩系の礫が出土している。内側寄りに集中すること、石材の大きさからして墳丘斜面の基石が転落してきたものであろう。

周堀内からは埴輪は全く認められず、墳丘周堀にも散布していないことから、設置されなかったものと思われる。

本墳の主体部の内容を具体的に知る直接的なものは全く見い出せなかったが、1号墳、2号墳と同じ田籬古墳群の一角を占めること、推定される墳丘規模が近似すること、また出土土器を下限としておさえた場合等からして横穴式石室を主体部としているとして間違いないところである。さらに、埴輪の出土を見ないことを考慮すれば、7世紀代の築造が推定されてくる。



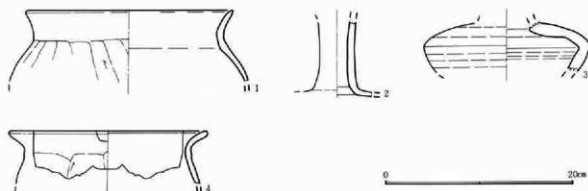
第28図 3号墳全体図

(2) 出土遺物

出土した遺物は、図示した4点の土器が主要なものであり、全て墳丘南側から検出された周堀内の覆土中からのものである。全てのものが個体中のわずかな部分の破片であり、また土師器甕類などは、終

末期の古墳から出土する例はきわめて稀であること等を考えると、これらを積極的に古墳に伴うものとはできない。

4 その他の遺構



第29図 3号墳出土土器実測図

3号古墳出土遺物観察表

図No	土器種類	出土位置	量目 ①口径②底径 ③器高④残存 (cm)	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③砂粒混入	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	—	①(22.2) ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③砂粒混入	外面割部は篋削り、口縁部・内面は横撫で。	
2	須恵器 長頸壺	—	①(4.0) ②— ③— ④頸部	①灰色 ②良(硬) 還元 相 ③緻密	縦輪整形。	自然軸。
3	須恵器 長頸壺	—	①— ②— ③— ④肩部	①青灰色 ②良(硬) 還元 相 ③緻密	縦輪整形。	
4	土師器 甕	—	①(21.3) ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③細砂粒混入	外面割部は篋削り、口縁部・内面割部は横撫で。	

4. その他の遺構

(1) 1号墳南円形落ち込み遺構

1号墳と2号墳の間にちょうど挟まれた位置で、南北約16m、東西約15mで深さ中心寄りで約90cmの浅いすり鉢形の落ち込みが確認された。周囲から明瞭に区別される円形の輪郭と、いずれの側からもその中心に向かって深くなっていく形状からして、明らかに人為的に掘開したものであることがわかる。

その埋没状態を見ると、中心部で底面から約30cmの高さに天仁元年(1108年)降下とされている浅間山B軽石の厚さ3cmの純堆積層が認められた。その上下の覆土の状況にも人為的な埋め戻しの痕跡は全

く認められなかった。

この遺構が、何らかの目的を持って使用されたことを推測させるような施設、遺物は全く認められていないことから、掘開することに目的があったことは容易に想像される。その後、自然にまかせて円形の落ち込みとして放置されている中で徐々に埋没していったものであろう。

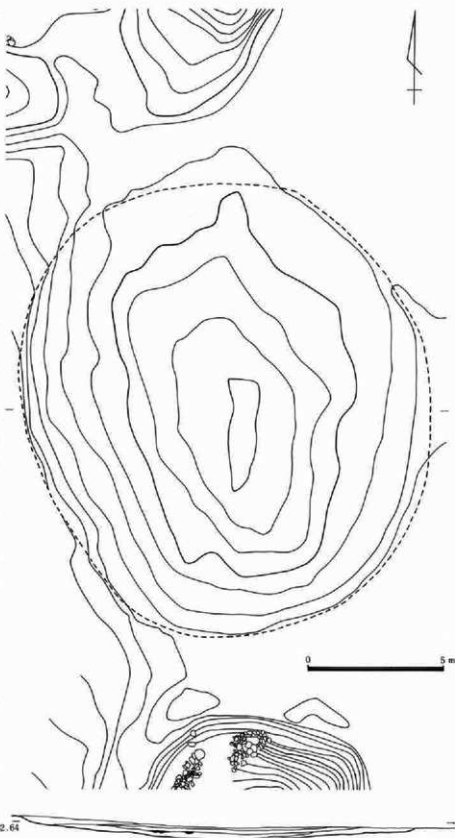
掘開の時期については、とりあえず、少なくともB軽石降下以前であることがわかる。また一定の土砂の埋没後に奈良～平安前期の土器の投棄される

III 古墳時代の遺構と遺物

場所になっていたことから小破片がかなり覆土中より出土しているの、さらに下限をおさえることができる。

既に2号墳の報告の項で、その周堀と盛土の状況を調査してみると、周堀の掘開から生み出される土のみでは、明らかに大幅に盛土の材料をまかなうことができないことと、この北側に隣接する円形落ち込みが盛土材料の獲得のために掘られた可能性が高いことを述べておいた。

この円形落ち込みの形状には、掘開の工程に分節を物語るような部分は認められないことから、これが1度の連続の行為であったと考えられ、2号墳の築造に際してのみのものであったと言える。この遺構の存在は、当地の古墳築造者にとって墳丘築成は盛土によらなければならないと考えていたことを明確に物語っている。1号墳における周堀の形状を無視しての北側への掘り足しも同様の工法的要請に基づくものであった。



第30図 1号墳南円形落ち込み遺構全体図
(ぬりつぶしは浅間B線石)

(2) Bo-C6グリット周辺出土の埴輪

1号埴、2号埴の位置よりさらに雄川寄りの、調査区のⅢ区とⅣ区の境界を中心とした周辺からは、散在した状態ではあるが、ごく限られた範囲から埴輪片が出土している。この付近はかつては若干小高い部分であったが、畑地化に伴ない大幅に削平されたとのことで、現在の耕作土を除去すると、その下は直接砂礫層となっていた。出土する範囲も限られていることから、かつてこの近くに古墳があり、そこに樹立されていた埴輪が散乱してしまったものと思われる。それゆえ、埴輪片以外には古墳の具体的な痕跡は全く見られなかった。実体は存在しないが、田籾4号墳として、1基のうちに数えてもよいであろう。

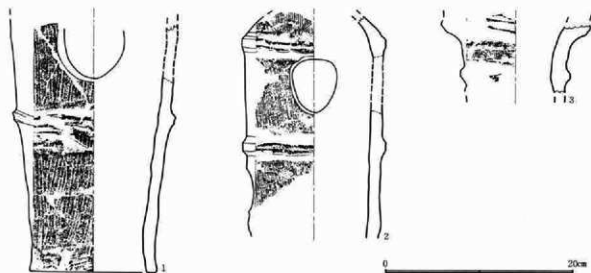
埴輪は、円筒埴輪(1)と朝顔形埴輪(2、3)である。

1は、底径13.3cm、現存する高さ20.5cmである。下から第一段目のタガまでの高さ15cmであり、これより上は不明である。タガは高さ0.8cmの貧弱なものであり、2条の稜線を有するが、下段が低い。その

めぐり方は水平でなく、波を打つ粗雑なものである。2段目には円形の透孔が2個穿たれている。外面はタテ方向のハケ目整形を施しており、ハケ目の数は2cmあたり7本とあらい。内面は確認できる部分までは全てタテ方向の指調整である。

2は、朝顔形埴輪の胴部から下のものであり、底部までは達していない。1よりも焼成が良く、淡赤褐色を呈している。胴部での径が14cm程であるからかなり小ぶりのものである。タガはやはり未発達のものであるが、1よりはしっかりしている。表面に施こされるハケ目は、タテ方向から若干斜めのものも見られる。ハケ目数は2cmあたり14本で、明瞭である。

3は、やはり朝顔形埴輪の頸部付近のものである。法量からすれば、同じつくりの朝顔形埴輪に属するものである。ハケ目の種類、胎土、焼成もよく似ている。これらの埴輪は、その最終段階に近い時期に位置づけられると思われ、横穴式石室を主体部とする古墳が推定されよう。



第31図 Bo-C6周辺出土埴輪実測図

5. 考 察

(1) 横穴式古墳の構築過程について

調査の意義 今回の田篠遺跡の調査では、田篠1号墳、田篠2号墳について、その構築過程をできるだけ可逆的にたどることによって、予想されるその過程をほぼ復元し得るデータを獲得することができた。

今日における汎日本的な開発行為の活性化の中で遺跡の発掘調査は極まるどころを知らない増大の一途をたどっている。そのような中で、調査法、調査技術も一段と進展し、その精度を益々高めている。我々の所属する調査機関でも一遺跡の発掘調査が終了してみると膨大な量のほろ調査データが山積みされるということが日常的となっている。それらのデータの採集が調査の対象となる遺跡、遺構の背後にある人間のさまざまな営みをでき得る限り復元したいという目的に基づいていることは言うまでもない。

さて、このような調査上の視点から、今日行なわれている多くの横穴式古墳の調査を見てみると、その構造上の諸データやそこから導き出される構築技術上の分析結果の量的な少なさに驚かされる。もちろん調査を行なった古墳の大部分は記録保存という名の下に、調査後は破壊、平夷されてしまうわけであるから、今となっては再調査のすべもない。我々が日頃よく目にする竪穴住居址の調査では、最終生活面についての調査が終了すると竪穴やカマド、炉について掘り方まで念入りな調査をして終わるのが一般的である。これを横穴式古墳の調査に帰して考えるならば、調査側の手で石室、墳丘の最後の部分まで調査上の手続きを経て取り除いて古墳構築面まで至るのが望ましい流れと考えられる。

古墳の造営は、当時の地表面上への築造の開始から完成に至り、埋葬が行なわれるまで、その全てが明らかに人間の具体的な行動の集積である。それを1つ1つ抽出していくのは、正に調査法のいかんにかかっていることは言うまでもない。今回の調査で

も、古墳の解体的調査を通して、古墳の構築過程を構成する個々の作業工程を抽出し、築造に伴う具体的な労働行為を明らかにすることができた。そのことから、従来われわれが予測していなかった横穴式古墳構築上の問題点も見出すことができたかと思っている。

現在でも、横穴式古墳の調査は全国で活発に行なわれているわけであるが、その多くの場合、今回のような調査法は取られずに終了し、その後は平夷されてしまっている。その原因としては、いくつかのことが考えられる。

一つには、今回のような調査法を取ると明らかに大幅な調査期間を必要とするからである。しかし、群馬県に限ってみても、かつては1万基以上もあったとされる古墳も、現在ではその%以下に激減しており、その数は、これから先も盛んな開発行為の中でさらに減少の一途をたどることであろう。このことから考えても、残された古墳の数はあまりにも有限であり、その中で十分なデータが獲得されないままに消滅していくことはかえすがえすも悔いの残るところである。繰り返しのきく余地の全くない古墳調査について、今回のような調査法が定着し、既得権を得てもよい時期にきている。

もう一つの原因として、古墳調査に際して、構築技術的視点からの問題意識の低さがある。今回の調査を通して田篠1号墳、田篠2号墳の構造的性質や構築過程がある程度具体的に解明されたとしても、単に2古墳の分析だけに終わってしまう。これが鶴川流域、あるいは群馬県域全体といった形で及ぼされていった時、横穴式古墳の構造的変遷が正しく理解でき、また、古墳の構造的、工法的特色を介しての地域圏の抽出が可能となってくるかと思われる。

今回の調査でも、調査資料の整理や報告書作成の過程で調査に不十分な点が多々あったことを痛感することが何度もあった。その原因の由来するところは、やはり調査時における問題意識の低さに帰結し

てしまう。

以下、今回の調査を通して得られた横穴式古墳の構築過程とそれに付随する諸問題について考察し、あわせて今後に残された課題を検討することとする。なお、基本的には、田篠1号墳の調査を念頭において論を進めたい。(6)

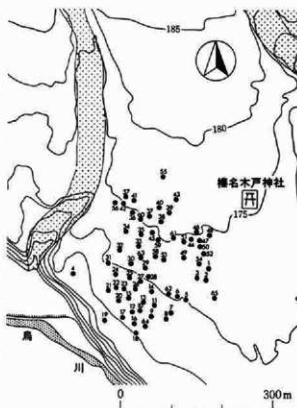
横穴式古墳構築の諸段階 田篠1号墳の構築について、その用地の選定、資材の確保から埋葬直前の完成に至るまでの間を大きくは6段階の過程として捉えてみた。以下、第一段階からそれを構成する個々の労働過程をたどり、あわせて予測される問題点について述べることにする。なお、次ページの田篠1号墳構築過程概念図は、設定した第二段階から第六段階までの各段階の到達点を玄室部横断面で示したものである。

第一段階（築造の準備） 古墳の築造はまず、用地の選定から始まる。さらにつきつめていけば、古墳群に関わる墓域の選定がまずあったわけである。この問題は、単純のようでは意外と複雑な条件を有している。一つには、生活域、生産域と競合しないことであり、一つには、横穴式古墳の構築技術的側面からの地形の条件である。銅川流域から藤岡市周辺にかけての地域の群集墳の墓域の選定には、基本的条件として、個々の古墳が平坦な地形に占地できるという点が厳格にあったようである。目を県内の他地域に転じて見れば、その多くがゆるやかな南下がりの斜面地形を必要欠くべからざる条件としていることは対照的である。このことは、横穴式古墳の構築の工法が両者で大きく異なっていたことと関係している。この場合、工法にあわせて条件に合う土地が選定されたのか、逆に地域の地理的条件の中で独自の工法が生み出されてきたのかは、今後の検討課題である。いずれにしても、その後は、地域に定着した工法が墓域選定上の地形的条件を制約していつていることは明らかである。

このようにして確定した一定の墓域の中に1号墳の築造箇所が特定されるわけであるが、この地が扇状地形で、しかも砂礫面が露頭してしまうというよ



第32図 普慶寺・田篠古墳群分布図



第33図 奥原古墳群分布図
(『奥原古墳群』より)

III 古墳時代の遺構と遺物

第二工程



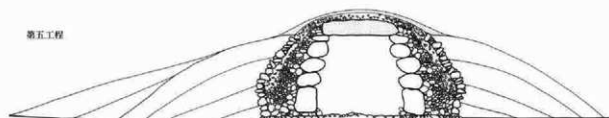
第三工程



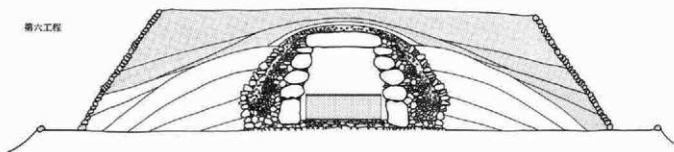
第四工程



第五工程



第六工程



第34図 横穴式石室構築過程概念図

うな場所が多いことから、条件にかなった場所を探すとなると、第32図の古墳分布図に見られるように広い地域に散在するような結果となったものと思われる。しかし、ただ単に点々と散在するのではなく、そこにはいくつかのグルーピングが可能であり、現状では6〜7つのまとまりを指摘することができる。

1号墳の築造に先立って、一定の築造企画が存在したであろうことは、後項での分析により実証されるところであるが、そこには、使用される石材の量的質的把握も事前にも当然件になっていたものと推測される。1号墳の羨道左右の両壁や2号墳の玄室左右両壁の構成を比較してみると明らかに左右対称の壁面構成の意図が読み取れるのであり、これを目指しての石材選定なしには不可能である。1号墳の石室に使用されている石材は、天井石を除くと、古墳の東側に隣接して流れる雄川で得られる結晶片岩系の石材である。近くの雄川の川原に出てみれば、奥壁の大石を除けば、ほとんどの石材が、この近辺で得られることがわかる。現在見られる河岸段丘の最下段で浅間山B経石下の水田遺構が確認されていることから、古墳時代にあっても現在の流路に近いものであったと考えられる。川原での石材の選定は、古墳築造の全体を取りしきるリーダーによって一種の設計図を手にしたま物指しをあてながらなされたことは十分想定される。石材を運搬する距離は少なくとも400mはあったことになる。小ぶりの礫はモッコに入れてかついでいったものであろう。結晶片岩の場合、ひとかかえほどの石で約80kg前後の重量がある。これを差し上げるとなると、我々のところの作業員の中でまあまあ力のある人でもやっつとであり、これをかかえて自由に動くことは困難であった。石屋の新井さんの場合には、多少の余裕を持って動けたが、それでも長つづきはしなかった。ところが、腰を折り曲げてそこへのせるとかなりの余裕で持ち運ぶことができた。この方法によれば、100kg以上についても、慣れれば可能であるとのことであった。これ以上の重量の石となると人の手による直接

的な移動は困難であり、修羅、コロ、等の運搬具によったものと思われる。

天井石に使用された牛伏砂岩（凝灰質砂岩）はこの付近では甘楽町天引の付近で得られることから、別名「天引石」と称されている。これは山からの切り出しによってのみ得られるものであり、鍋川流域の横穴式古墳にはきわめて一般的なものである。この石材が鍋川流域で広く使用されていることから、この石材の産出地を占有していた支配者層との有機的関係の追求の中で分析をしていった時、興味深い問題を多く内包していることがわかる。この産出地を占有していたのは、当地域ではおそらく笹森稲荷古墳に関わる勢力であったであろうことは当然予測されることである。古墳の数に照して見れば、莫大な量の牛伏砂岩の大石が鍋川流域の各地へ搬出されていったことであろう。

第二段階（石室の基礎地形） 礫を敷きつめることによってなされる基礎地形は、石室の平面規模にほぼ比例するような一回り広い範囲で行なわれる。壁石の基礎石のうち、奥壁と羨道入口部の右壁石はその底面が旧地表面上に直接のっていることから、地形がなされる前にまずこの2石が設置されたことになる。これらの石により石室全長の企画寸法が地面に移された後に、これを目安として礫地形がなされたことになる。

鍋川流域から藤岡市周辺にかけての終末期の群集墳では、旧地表面上に礫地形を行ない、その上に石



14 遺跡付近を流れる雄川

III 古墳時代の遺構と遺物

室構築が行なわれるものが多い。他地域では、この前の段階に石室掘り方を石室規模にあわせて穿つことから築造が開始されるのが一般的であるから、掘り方を持たない当地域の古墳とは構築過程が最初から異なることになる。この差異が恐らく前に述べた群集墳の占地形態の相異に関係してくるわけである。ここに、当地域の古墳が基本的に石室掘り方を持たないという大きな地域的特色を見出すことができた。このことは、後述するがその後の石室構築過程に大きく影響し、裏込め構造の他地域との相異等につながってくる。

第三段階（石室の基礎構造の造成）次に礫地形面上に壁石の基礎石が設置されるわけであるが、さきの奥壁、羨門の2石については羨道左壁入口の羨門石、両玄門石がおかれる。この5石によって、企面した平面規模と形状がおさえられることになる。このあとは、その間を埋めるように基礎石がずっと置かれていく。個々の石材を設置する場合、丸味や極端な凹凸のある石であるから、壁面を構成するのに理想的で、しかも安定した状態にする必要がある。これは下部及び周囲に支い物をして実現するわけである。ここであたり前かと思われるかもしれないが次の点については再確認しておく必要がある。石材を設置する際は、それをずらすようにして目的の場所に据えるのではなく、空中につり上げて、傾き、位置を微調整しながら行なっているということである。しかも、それは余裕を持った空中へのつり上げでない理想的な位置と傾きが得られない。我々が石室を解体していった時、いろいろな移動の方法を試みたが、石材の自重が障害となり、結局チェーンブロックを使用した場合のみ、他の箇所を破壊することなくスムーズに作業が進められた。滑車のような道具の使用を想定する必要がある。

このような作業を繰り返して、壁体の基底部分が築かれるわけであるが、その背後の補強となる裏込めや盛土は、特に強固に行なわれている。裏込めには大ぶりの礫が使用されており、裏込め、裏込め被覆を支える盛土は、特に土を選んでの念入りな積み

上げがなされていた。⁽⁸⁾掘り方を有さない当地域の石室では、この段階の盛土部分にその役割を果たせていたわけである。第三段階の工程は、石室全体の基礎構造を強固につくり上げるといえる工程と言いかえることができる。

第四段階（壁体の構築）前段階で石室の基礎構造ができあがると、次はいよいよ壁体の積み上げの作業である。ここではまず、横穴式石室壁体の構造的な理解についての従来の一部に見られる誤りを指摘しておくことにする。壁面が内傾する状態を我々は「転び」あるいは「アーチ状」と称したりしている。この内傾する状態については、内側へ倒れ込むような力がかかっており、天井石が架構されることによってはじめてバランスが保たれると理解している人も多いようである。それゆえ、内傾の角度の大きいアーチ状を呈するものでは、壁体の築成時には内部に土をつめて倒れこまないようにして積み上げを行ない、天井石架構後に土をぬくという工法を想定している見解もある。

田篠1号墳の羨道壁や2号墳の玄室壁を見ると内側に向かってかなりの傾きを示している。これらの天井石は早くに持ち去られてしまったようであるが、それでも壁体は意外にしっかりした状態で保持されていた。このことは天井石の架構によってはじめて壁体のバランスが保たれるのではないことを示している。裏込め構造を取り除いてみると、石室内へ倒れ込むかのように見える一つ一つの壁石材も、その設置状況を見ると外側へ外側へと重心が逃げるようにしており、そのバランスが確保される中で、内側へせり出させているのが観察された。そのような構造的関係の下ではじめて、裏込め、裏込め被覆、盛土によって壁体の背後を強固に補強することの意味があるのであり、石室構築が外側へ及ぼそうとする力をこれらが支持する役割を果たしているわけである。

壁体の構築は、裏込め、裏込め被覆、盛土の作業と一体となって、一定の高さを単位として進められていく。この作業の単位は、石室構築全体の作業面

が、徐々に上へ上へと移動していくことを物語るものである。墳丘の大半が残っていた富岡5号墳の調査では、玄室の壁石上端部までに4工程が確認されている。1号墳の場合も、盛土の状態は削平により確認できなかったが、裏込め被覆の状態から壁体の中途までで3工程を推測できたことから、富岡5号墳とはほぼ同様であったことがわかる。ここで重要な点は、石室の構築と墳丘の築成とが一体となって進められていることである。墳丘が単なる示標としての外見的な意味を有するだけでなく、石室構築上に欠くべからざる位置を占めているわけである。

壁体の構築過程について、もう一つ注意しておく点がある。それは、玄室の壁体構築と羨道のそれが大ききは別単位として進められていることである。裏込め及び裏込め被覆の構造を見ると、袖部を境にして構造的に異なることや、壁体の構成上で羨道と玄室の同壁にまたがるものが一石も存在しないことからこのことは十分に推測されるところである。このことは、この時期の石室の袖部や天井面の構造的特色と大いに関係するものである。群馬県の地域では、その受容期である5世紀末ないし6世紀初頭から6世紀後半の時期までの横穴式石室は、両袖型石室であっても天井面、袖石による玄室と羨道の区分が明確でないことを特徴としている。これは、技術的制約から天井構造が、玄室入口を境にして二段構造にならなかったことと関係している。ここでは、羨道壁と玄室壁は一体として構築されていたわけである。その後の1号墳や2号墳に見られるような袖部の明確な区分と天井面の二段構造の成立によって、はじめて、羨道、玄室同壁の別単位としての構築が可能となったものである。

第五段階(天井石の架構) 壁体の最上端までが積み上げられるといよいよ天井石の架構である。雄川から得られる結晶片岩では、大ききの割に重量があり過ぎるため天井石としては適さないことから、甘楽町天引付近で採れる凝灰質砂岩が広く利用されている。それにしても相当な重量があるわけであるから、墳頂部に近い高さまで引き上げて、壁体に架

構するとすると、石室構築過程全体の中でもクライマックスの段階と言い得る。

架構する位置までの引き上げ作業のために、盛土工程の中に外からのゆるやかなスロープを造成したことが富岡5号墳や観音山古墳の調査で報じられている。その位置は墳丘西側から中心へとびるものであった。

壁体に天井石を架構する作業には、地面をずらすように石材を引っ張って目的の位置に据えるのではなく、一旦空中に引き上げて、微調整をしながら引きおろす位置へ移動し、ゆっくり引きおろし、石材の凹凸のために接触しない部分には支い物をしながら架構したものとと思われる。

1号墳の時期の天井石の構成は玄室部が2～3石の大ぶりの石材で覆うのに対し、羨道部は奥行のあまりない棒状の石材で多石構成とするのが一般的である。そのことと関係して、天井石を支持する壁体構成が両者で大きく異なり、玄室部が一段と強固なものになっていることがわかる。その点、6世紀代の横穴式石室では壁体構成に両者に明確な相異がないものが多く、天井石は羨道から玄室まで均一な奥行のない石材を運れるものとなっている。この天井石構成上の変革は大型石材を自由に移動し得る技術的革新を経て初めてなったものであろう。

天井石が架構されると砂礫により石室の外側を覆い、その上から一定の厚さの粘質土で被覆することが知られている。その上に若干普通の土をかおせることにより、石室構築の基本的な工程は全て終了するわけである。

第六段階(墳丘及び外部施設の整備) 石室の構築が終了すると、墳丘や周堀等の外部施設の最終的な仕上げを行なう。次項で分析するように、石室の築造企画と墳丘、周堀の企画が有機的に関係していることが明らかである。それゆえ、石室の構築に先立ってその企画の縄張りが行なわれた時、これと同時に墳丘、周堀のそれもなされたものであろう。周堀の掘削は、盛土の用材の確保と外部施設との二面性を有していたわけであるが、石室構築時には当然

III 古墳時代の遺構と遺物

前者が優先していたわけであるから、石室構築の作業上支障を来す部分は掘削されなかったし、その形態的な整備も後回しにされたことは明らかである。

同じように墳丘も横穴式石室構築のための工法上のまた構造上の一端を担う側面と古墳の示標としての施設の二面性を有していたわけであるが、石室構築時には当然前者が優先し、それに必要な盛土のみがなされたものと考えられる。

横穴式石室完成後の墳丘と周堀の整備は同時に進められたことは、両者がギブアンドテイクの関係にあることから当然であるが、1号墳の場合、それでは用材が不足してしまうことから、不自然な周堀形状にしてまでも盛土の確保がなされたわけである。この場合、周堀の整備は墳丘のそれにくらべて二義的なものであったことを物語る。他の小型古墳の場合にも、墳丘形状を規定する周堀の内側部分は企画性を重視したものが大半であるが、外側はかなり粗雑な仕上げのものが多い。その中には、石室入口の両側は比較的深くて整然としたものになっているが、北半分へまわると相当の手抜きとなっている。造営者にとって南側から見える部分のみが古墳を整備すべき主たる部分であり、それ以外の部分はいわば舞台裏であった。

横穴式石室築造の背景 ここでは、田籾1号墳、2号墳の調査を通して、石室構築上で気づいた点を述べることにする。

田籾2号墳の使用石材の重量測定からは、天井石と墓石を除いても50tにも達しようという大量の石材が積算された。これに天井石、墓石の重量を加算すれば、恐らく100tに近い量を念頭におかなければならなかったろう。これらの石材は、量的な面から考えれば、日常的な生活の延長上では解消できない労働量を確保しなければならない。と同時に、1号墳の奥壁に見られるように、1個で1.6tにも達する石材や、1tに迫ろうとするものが何個も存在していることは、単純な労働量の集積のみでは、石室構築を実現し得ないことを物語っている。これまで見

てきたように、使用石材の選定の段階ですでに古墳築造の全体を見通すいわば施工管理者的な人材を必要としている。その移動についてもまた同様である。実際、大ぶりの石を移動しようとする、石の性質を熟知し、効率的でしかも安全な作業の運営を必要とした。ここでは、多人数よりはむしろ監督とその意を吸み取って常に手足となって動ける手下のチームワークが必要であった。我々の調査中でも何度か新井さんが休んだ日に、かなり仕事に慣れてきたと思われたので、我々だけで石室の解体や石材の移動を行なってみた日があったが、大物になればなるほど、予期しない障害に遭遇してしまい、「石が全く言うことを聞いてくれない」というみじめな状況を招いた。翌日、新井さんがくると、子供を手の中でやすように石は言うことを聞くのに呆っ気を取られるばかりであった。

筆者もかつて、大学での講義による予備的な知識から、群集墳を構成するような小型古墳ともなれば、当時の村人たちが集まって、みんなで力を合わせて楽しみながら造り上げていったというようなイメージを描いていたことは否定し切れない。それは、高崎市の観音塚古墳や前橋市の総社古墳群の諸古墳のような大型横穴式石室ばかりを念頭に置く中で、何十基、あるいは何百基もの群在からなる小型横穴式石室の構築をあなどっていた感はずいぶんある。

一人の人間がだきかかえて差し上げられる石材はせいぜい80kgどまりであった。それも、相当力のあると思われる人でも余力を欠く状態であった。石室の壁体を構成する石材の中では、この程度の大きさの石はわずかであり、多くの主要な石材はこれをはるかに上回っていた。その築造の行為を具体的にイメージする場合に、やっとつり上げられる状態で積算したのではその完成は困難をきわめたはずで、やはり潜在能力の7～8割の中で仕事が進められていかなければ危険きまわりないし、構築上で最も要求される微調整がきかなくなってしまう。

小規模横穴式石室墳の築造に際しても、組織化された古墳づくりの専門的技術者の存在は不可欠の要

件であった。これを掌握していたのは、群集墳を単位とする集団自体ではなく、これらを統括した前方後円墳に象徴されるような各地域の首長たちであったと考えられる。逆に、横穴式古墳の構築技術上からの厳密な比較検討により、具体的な政治的地域圏の把握も可能であろう。

このように横穴式古墳の築造が専門的な技術者の存在を前提とすること、それらが地域首長によって掌握されていたことを考えていくと、造墓活動に対する支配者による規制が強く存在したことが十分想定されてくる。

構築技術から見た群集墳造営の画期 群馬県の地域に横穴式石室が受容されたのは5世紀末葉から6世紀初頭にかけての時期のことであった。初現的な横穴式石室はまず大型前方後円墳に採用された。小規模古墳に横穴式石室が採用されるのは、これより若干後出する6世紀前半から中葉にかけてのことであり、その数は少なく、しかも地域的にも赤城南麓を中心にかなり限定されたものであった。この種の石室は、竪穴式石室の小口部分を開けたと解されるような袖無型の簡略なものであり、幅が狭く、高さあまりないものであった。大型横穴式石室の導入を契機として、従来からの伝統的な技術の延長上で解消し得る石室構造であったと思われる。赤城南麓を中心とした県東部の地域では、前方後円墳が消滅する6世紀末葉から7世紀初頭の段階までは、小規模古墳では、主として引き続き袖無型石室が一般的であった。しかし、その中でも、使用石材や石室空間が大型化していく技術的改良が進んでいっている。

赤城南麓を中心とした地域で袖無型石室が依然として行なわれていた6世紀後半の段階を中心とした時期に鍋川流域に広く横穴式石室が登場してきたと思われる。ところが、この地域には袖無型石室はほとんど見られず、両袖型石室が一般的であることが大きな特色である。横穴式石室の採用の系譜を明らかに異にしていたことが明らかであり、地域圏を大きく異にしていることを窺わせるものであった。そ

の場合にも、天井構造が羨道から玄室へ直線的に続くことや、両袖の区画が天井部よりでは明確でなくなるなど、構築技術的には隔絶したものではない。

群馬県における群集墳の形成過程を見てみると、この6世紀の段階までに充実した形成を見る地域は、かなり限定されている。ところが、7世紀中葉以降の段階になると、全域的に爆発的な増加を認めることができる。群馬県における古墳全体の多くの部分がこの段階に属するものであり、群集墳形成上の第二の画期にあたっていたことがわかる。

田篠1号墳、2号墳はこの段階にまさに当たっているわけである。この時期には、群集墳形成上の大画期を見い出せるのみにとどまらず、横穴式石室の構築技術上からも最大の画期を迎えていることがわかる。それは、県内全域でほぼ共通した石室形態を有するようになった点に画期性が見い出せる。その構造的特色をあげるならば、両袖型石室で、天井部が玄室入口を境に二段構造になること、使用する石材が全体に大型化し、玄室空間が幅、高さにおいて広がる傾向を見い出せる。また、漢門、玄門の施設を有することや前庭施設を有することも新しい傾向である。

これらの動きの中には2つの注目すべき点がある。第1は、材質的な問題を除くと県内全体が各地域色を脱却して一つの石室形態にまとまっていく傾向である。これは、まさに6世紀から7世紀にかけての上野地域の歴史的動向の中で理解されなければならない。6世紀後半を中心とした時期に各小地域を単位として全長80～100mの大型前方後円墳が割拠的に分布する傾向の中に、他を圧倒するような卓越した勢力の存在を見い出せない点に、この時期の首長層の存在形態の特色が見い出せた。前方後円墳の造営が大和政権による強い介入の中で消滅するのと同様にして、上野の地域は総社古墳群に関わる勢力を頂点とした地域的再編成の動きが7世紀代を通じて進化した。前に見た群集墳形成上の画期はまさにこの時期にあたっていたのであり、上述の歴史的動向の影響下にあったことは容易に想像されるところ

III 古墳時代の遺構と遺物

である。

第2には、このような群集墳形成上の画期をまたらすところの横穴式石室の構築技術上の裏づけが必要であった点である。それは、とりもなおさず、田窪1号墳の構築過程に見られた石室、墳丘、周堀を有機的に一体として進める構築法の出現にあった。そこには、組織化の進んだ専門的技術者の存在が当然伴ったことが予測される。この間に見られる横穴式石室の構造的変化は、従来の築造技術の延長上での改良によりもたらされたものとは考えがたい。この点から大型横穴式石室の変遷過程に目を転じて

(2) 古墳の築造企画と使用尺度について

きわめて重量のある素材を駆使する横穴式古墳の築造に際しては、構造力学的に合理的な築造企画が事前に用意され、それに基づいて具体的な施工を実施していくという想定なしには、その完成は全く困難であることは言うまでもない。事実、従来の多くの横穴式古墳の研究の中でそのことが実証されてきている。⁽¹⁴⁾横穴式古墳の構造的な理解にとっては、個々の築造企画がいかなるものであったかという分析が不可欠の条件の一つである。

また、築造企画に基づいて横穴式古墳の構築が実際に進められていく段階では、その企画が個々の基準尺度を媒介としてなされていったことも明らかにされてきている。すなわち、一定の基準尺度に基づくところの設計図が用意されていたわけである。尾崎喜左雄による一連の研究結果によれば、横穴式石室の構築には、一尺が35cm近似の高麗尺と30cm近似の唐尺が使用され、6世紀後半から7世紀後半の古い段階までは高麗尺が、それ以降は唐尺が使用されたという。⁽¹⁵⁾その後、森浩一により高麗尺以前の使用尺度として一尺が24cm近似の晋尺が推定され、⁽¹⁶⁾柳沢一男によってそれが具体的に追求され明らかなものとなった。⁽¹⁷⁾筆者もかつて群馬県における横穴式石室について、その使用尺度の問題を考える機会があったが、⁽¹⁸⁾詳細に検討していくと尾崎の想定とは異なる点も多々見出しされる結果となった。一つには、高

みると、高崎市観音塚古墳や総社古墳群中の愛宕山古墳に見られる巨石巨室横穴式石室の構造上の特色にまさに対応したものであることが理解される。⁽¹³⁾両墳では、それ以前に上野の地域に見られなかった天井部二段構造と巨石巨室の実現による構造的に完成度の高い横穴式石室の中に大型横穴式石室の構築技術上の大きな画期の一つを想定し得るところであり、この背景には、新来の高度の専門的技術者の存在を考えざるを得ない。このような新たな横穴式石室の構築技術上の波が群集墳形成の上にも及ぼされたのであった。

麗尺の使用は、群馬県の横穴式石室の変遷過程の中では左程古い段階にまで遡らないことと、その使用の契機が高崎市観音塚古墳に代表される6世紀末から7世紀初めにかけての巨石巨室横穴式石室の成立にあったことが明らかとなった。また、一つには、唐尺の使用は7世紀後半から末葉の最終末の段階になっても、宝塔山古墳、蛇穴山古墳をはじめとするきわめて限られたものしかその存在が認められず、大勢は依然として高麗尺使用であったことが明らかとなった。そこには、尾崎が想定した戴石切組横穴式石室の成立を契機とした唐尺使用の出現と普及という図式の存在しなかったことを物語るものであった。

横穴式石室における使用尺度の問題は、単に個々の石室についていかなる基準尺度の使用が推定されるのかという現象的なことのみには留まるものではない。個々の横穴式石室が内包しているタテ軸としての技術的系譜とヨコ軸としての技術的広がりをも端的に抽象したもものとしてあることを忘れてはならない。

群馬県の地域における高麗尺使用の出現は、それ以前の横穴式石室に一貫して見られた壁体、天井石の多石構成や羨道から玄室にかけての天井部の無段構造から、観音塚古墳石室に代表される巨石巨室構成で天井部二段構造への変化に対応するものであっ

た。ここに見られる変化は、伝統的な横穴式石室構築技術の延長線上においてのみでは生じ得ない技術的革新であり、近畿地方よりの新来の技術者の招来があってはじめて成し得たものである。その技術的基礎として高麗尺が存在したことを物語っている。

大型古墳において巨石巨室横穴式石室が採用されると、その後中小の古墳へも相対的に巨石使用で、天井部二段構造の両袖型石室が急速に普及していった。その普及には技術的基礎としての高麗尺が基準尺度として伴ったであろうことは当然予測されることである。この時期がまさに前項で導かれた群馬県における群集墳造営上の画期に一致していることは容易に想像されるところである。

前方後円墳消滅以降の7世紀の横穴式石室をその最終末段階までたどる中で見い出される画期は、7世紀中葉の築造と推定される高崎市山ノ上古墳石室に見られる戴石切組横穴式石室の登場であった。この一連の横穴式石室について使用尺度の観点から見てみると宝塔山古墳、蛇穴山古墳、南下A号墳、南下E号墳等をはじめとするごく限られた石室にのみ唐尺使用が推定され、その他の多くの石室では高麗尺使用が推定される。これを横穴式石室の構造的な特色の比較からすると、7世紀第3四半期から第4四半期にかけての築造と推定される宝塔山古墳石室等に見られるような、石材加工や石室構築技術において一段と完成度の高い石室を実現したものと、これに近接し、直接的な影響を受けたと推定されるものみに唐尺が使用されているものと思われる。唐尺が使用される契機としては、宝塔山古墳の造営と表裏の関係をなす山王鹿寺の造営事業の開始の中で畿内から最新の技術がもたらされたことが想定されよう。

宝塔山古墳の成立した時期には、これと平行して中小の古墳の造営も県内各地で依然として続けられていったわけであるが、両者の間には技術的に直接的連関は見い出せないことと、巨石巨室横穴式石室の影響下に成立した小型横穴式石室の石室づくりの原理を最後まで踏襲したわけであるから、基本的に

は唐尺使用の小型横穴式石室は存在しなかったと考えられる。具体的には、個々の古墳についてそのような分析を経ていないので今後に期したい。

横穴式石室における尺度使用の問題は、現在でもややもすれば等閑視されがちな傾向にあることは、多くの横穴式古墳の発掘調査報告の中で、石室各部位の詳細な計測値が提示されないことや、実際に分析されたものが少ないことがよく物語っている。前方後円墳の調査報告では常に見られる築造企画の分析に見合ったものが横穴式古墳についても必要である。

次に、田篠1号墳、田篠2号墳について、使用尺度の問題をふまえて両者の築造企画がいかなるものであったかを考えてみたい。なお、時間的な制約の事情から、きわめて概括的なものとなってしまったので、詳細は後日に期したい。

1号墳の築造企画 まず1号墳の石室について分析してみることにする。石室壁体の上半部と天井石を欠くため、石室平面の企画について見ていきたい。埋葬時の床面を基準として石室の各部位を計測してみると、次表ようになる。計測値を全体に見てみると、明らかに一尺35cm近似の高麗尺を使用して企画設計がなされていることがわかる。すなわち石室全長を17尺とし、玄室は長さ8尺、幅6尺、羨道は長さ9尺、幅3尺に割りつけている。そこで、35cm方眼を作成し、石室平面プランにスライドさせてその適合状態を見たのが第37図である。これを見ると、石室の各部位が矛盾なくきわめてよく方眼と合致してくるのであり、高麗尺を使用していることが示されている。

次に墳丘について見てみる。1号墳の墳丘で平面的に構造上の分節をなす部分は3ヶ所ある。1つは墳丘の墓石の根石によって区画される盛土の外郭ラインである。もう1つは、墓石の根石から幅約1mのテラスをおいて掘削される周堀の内側の掘り込み部分である。この部分には、礫が列石状に並べられており、区画の意図を明瞭に物語っている。これに対して周堀の外側掘り込み部分は不揃いであり、外域

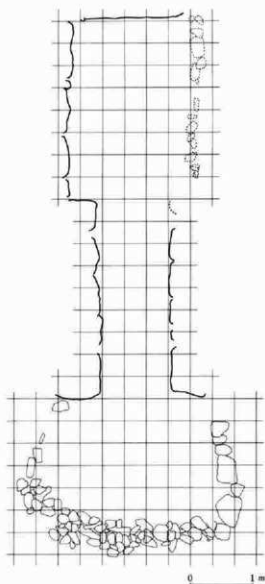
III 古墳時代の遺構と遺物

とを画する役割を果たしているが、前二者に見られるような企画性は認められない。

この中で葦石根石の示すラインが最も整然としており、正円を意図した築成が推された。外形測量によって得られた根石ラインから円の径と中心点の位置を求めてみると、径については約10.5m前後の値が得られた。その中心点は、玄室の奥壁の中心から入口寄りに約70cmほどきた部分がそれにあたっている。径の約10.5mは半径では5.25mとなり、高麗尺に換算すると15尺にあたっている。墳丘の規模を決定する場合には尺を尋に読みかえてなされたことが推定されており、高麗尺の5尺を一尋とした時のちょうど3尋にあたることになる。

このことから1号墳の場合、石室全長を17尺にすることがまず決定され、石室の中心軸線上で奥より2尺入口方向へ寄った位置を墳丘の中心点とし、これと石室入口部との距離15尺（3尋）を墳丘半径として円が描かれたものと推定される。テラス面の幅に企画性を認めるならば、約3尺にとったとも考えられるが、石室の企画との相関や、尋による企画を考えるならば、むしろ、葦石根石に平行させるような形で任意に割り出されたと考えたほうがよさそうである。

群馬県の地域の墳丘の築成法の中では、盛土の裾部と周廻の内側掘り込み部分の間に一定のテラス面をおくのが一つの地域的特徴として指摘できる。筆者は、墳丘の規模を測定する場合、このテラス面の存在が基壇面的な視覚的效果を有していることからテラス面を墳丘規模に含めるべきことを主張してきたが、1号墳の分析からすると、築造者の墳丘規模決定の基準点が葦石根石にあったことが明らかであり、先の見解を修正する必要も出てきているように思われる。

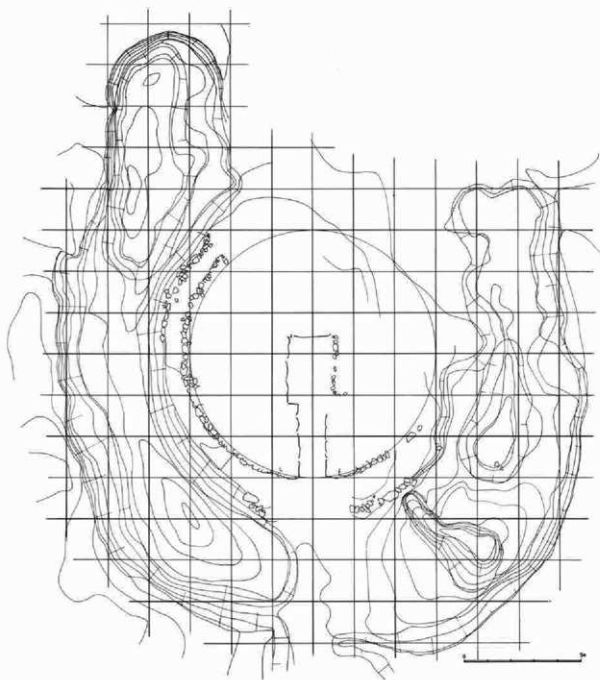


第35図 1号墳石室35cm方眼適合状態

		計測値	復元尺
全	長	594	17
玄室	左	285	8
甕	中	286	8
兵	右	—	8
玄室	奥	(205)	6
幅	中	(205)	6
前	前	(204)	6
羨	左	308	9
道	中	308	9
長	右	310	9
羨	奥	115	3
道	前	110	3
幅		(135)	—
羨	道高	(115)	—

田塚1号墳石室原模

単位cm。復元尺は高麗尺による



第36図 1号墳丘175cm方眼適合状態

2号墳の築造企画 1号墳と同様、石室の平面企画から見てみよう。石室全長や羨道各部の計測値は壁体を基準にできないので、床石のひろがりをもととしている。石室各部の計測値から推定される使用尺度は、明らかに1尺35cm近似の高麗尺である。1号墳の石室プランが直線の組み合わせによってできた矩形平面であったのにくらべると、一見不規則な形状であり、整然とした築造企画を疑わせるような

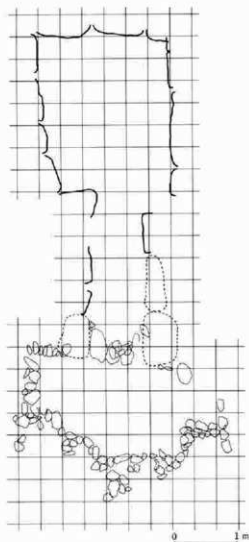
ものであった。しかし、1号墳の場合と同様に、35cm方眼をスライドさせて、その適合状態を見てみると、まさにそのものズバリの全体の適合ぶりを見せていた。この場合、全長を15尺とし、玄室は長さを8尺、幅を奥で6尺、前で5尺としている。これは玄室左壁を奥寄り1尺上げたことによる左右不均等である。玄室入口部分では左袖、入口幅、右袖が順に1.5尺、2尺、1.5尺となっており、1号墳のそ

III 古墳時代の遺構と遺物

れが1.5尺、3尺、1.5尺にしたのに類似する割りつけである。羨道は長さを8尺としており、玄室長より1尺長くとする。これもまた、1号墳の玄室と羨道の長さの関係に類似している。2号墳と1号墳の石室の平面プランの割りつけを比較すると、全長の17尺と15尺に規定されて、2号墳の石室が袖幅以外の各部位についてそれぞれ1尺ずつ寸法が小さく決定されていることがわかる。まさに1号墳を一回り小さくした2号墳の石室規模ということができる。

次に墳丘の築造企画について見てみる。やはり、立体的にこれを分析できるデータが採取できないことから、平面的な企画にしぼって考えてみる。2号墳の場合にも盛土の葦石根石ラインに墳丘規模の基準点がおかれていた可能性は強い。そのラインをたどってみると円型を目指していることは明らかであるが、必ずしも正円を描かないびつな形状である。そのため、ここでは企画段階での墳丘規模の目安を探る程度にとどめておく。基本的には1号墳と同じく、高麗尺の15尺にあたる3畚を墳丘径にしているようである。石室全長の15尺に関連したものである。葦石根石ラインで3畚の円をたどるとその中心点は必ずしも石室の意味ある部分と一致してこないので施工上の墳丘築成の大まかさを物語るものかもしれない。

いずれにしても、1号墳、2号墳で得られた墳丘径15尺（3畚）は、今後同時期の群集墳の墳丘規模を考えていく上の基準とすることができよう。

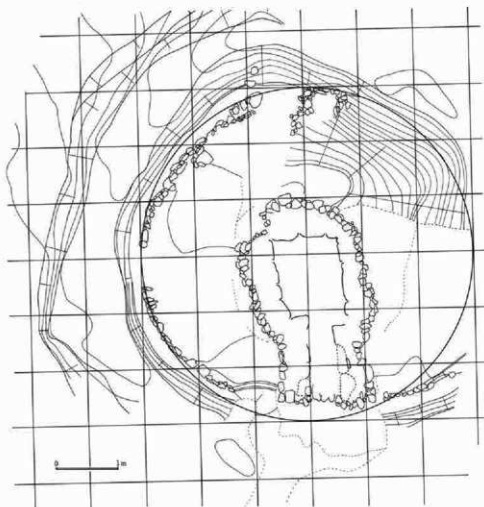


第37図 2号墳石室35cm方眼適合状態

		計測値	復元尺
全	長	522	15
玄 室	左	246	7
	中	248	7
	右	—	7
玄 室 幅	奥	209	6
	中	200	—
	前	173	5
羨 道	長	275	8
	幅	70	2
	玄室高	(185)	—
	羨道高	(110)	—

田原2号墳石室規模

単位cm、復元尺は高麗尺による



第38図 2号墳丘175cm方眼適合状態

註

- (1) 横穴式石室に関する各種の名称は、主として尾崎喜左衛門「横穴式石室編年への一考察」(『史学会報』五輯 1954) 整理による。それゆえ、石室の左右は、入口から奥壁へむかってのものである。
- (2) 「上毛古墳群」群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯 1938
- (3) 別名、平伏砂岩あるいは^{天引石}と称されている。
- (4) 「奥中ノ古墳」群馬県教育委員会 1987また、最近の当事業団による古井町安坪古墳群の調査でも、本例と同様の遺構が確認されている。
- (5) 鬼石町の竹内 一氏よりこの計図を借用することができた。
- (6) ここで従来横穴式古墳の構築過程についての調査、研究について若干整理しておきたい。
横穴式石室の構築過程について最初に本格的な考古学的分析を及ぼそうとしたのは、浜田耕作、末永憲雄による明日香石舞台古墳の調査であった。この巨大な構造物の構築法について調査の諸アークを基に、想定される古墳築造当時の技術段階の中で、具体的にその過程を復元してみようという試みであった。その分析視

点に科学的根拠を与えるために、京都大学工学部の高橋進夫が関わっている点は注目しなければならない。学史上に画期的な調査研究であり、今日でもその分析結果には学ぶべき点が多いが、あくまでも石舞台古墳の分析にとどまったので、復元された構築法の当否や構造的特質は、その後の研究による奈良県や畿内の横穴式石室の構築法の系統的整理の中で進められるべきであったが、実際には長くこの石舞台古墳の段階にとどまってしまった。〔大和島庄石舞台の巨石古墳〕京都帝国大学文学部研究報告14 (1937) その原因として畿内の横穴式古墳のおかれている資料的障壁がある。それは、この地域が古墳時代を通じて圧倒的な地域的優位にあったことにより、豊富な副葬品や古事記、日本書紀をはじめとする文献史料を通じて古墳の歴史的位置を求めていくことが、常に古墳研究の主流であったためである。その後、白石太一郎(「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42・43合併号 1996、「若狭山式の横穴式石室について」『ヒストリア』149 1967) 河上邦彦(「大和大型横穴式石室の系譜」『橿原考古学研究所論集』四 1979) に見られるように横穴式石室への構造的関心が多分に深められていったが、本格的には北垣一郎による構築論の

III 古墳時代の遺構と遺物

展開「横穴式石室構築技法の一考察」『榎原考古学研究所論集』六 1984、「牧野古墳石室構築の検討」『史跡牧野古墳』1987の中で関心がようやく再浮上してきている。しかし、恐らく横穴式古墳の発掘調査が全国的に見ても最も多く行なわれている当地域の調査法に必ずしも構築論の中で設定された課題が反映されていないため、両者が乖離してしまっている点は否めない。

これとは逆に北九州を中心とした地域では、構築技法の側面からのデータをより多く得るための丹念な石室調査が一般的であるため、本格的な横穴式石室の構築論が活発に展開されている。その結果、九州における横穴式石室の特質が明確になり、他地域とのひいては朝鮮、中国との比較検討を具体的に進めることを可能にしている。(この種の調査研究の一つ一つを上げる余裕がないほどの多量なデータを蓄積することとする。)これらの豊富な基礎資料をもとに横穴式石室の構築過程に論を及ぼしていくならば、最もビジュアルな成果が得られる可能性がある。

次にこの方面の研究がいろいろ早く進められた群馬県状況を見てみよう。古墳の構築過程を追求する調査の端緒は、尾崎喜左衛門の一連の調査の中に認められる。具体的にその過程を論述したものはないが、横穴式石室を構成する諸要素について分析し、古墳の編年作業の基準として見ているのであるから、一古墳について抽出された石室の諸要素を労働過程に組み立てれば自らその構築過程は抽出されることになる。しかし、実際には古墳造営の具体的な過程や、構造的、あるいは構築技術上の系統論にまでは展開しなかった。(主として「横穴式古墳の研究」1966)

この点に着目した発掘調査は外山和夫らによる富岡市富岡5号墳の調査であった。この調査は学史的に今後再評価されなければならないものであり、明確に構築過程の復元を調査の中心的課題として進めていったため、墳丘の形成をふまえての横穴式石室のそれが把握されている。(『富岡5号墳』群馬県立博物館 1972)これをうけて坂場一寿は、高岡市山ノ上古墳、同県音山古墳の史跡整備に伴う石室の結核な解体的調査を実施し、後に横穴式石室の構築過程についてまとめている。(『山ノ上古墳』群馬県史資料編 1981、「史跡音山古墳一保存修理事業報告書一」群馬県教育委員会 1981、「群馬県における横穴式石室の構造」『伊勢崎市史研究』2 1984)

しかし、本論でも述べたような成果が得られるような調査法が県内の古墳調査に定着しているわけではない。

(7) 甘楽郡甘楽町天引に露頭する部分があり現在でも切り出しが行なわれている。これを通称「あまびき石」と称している。この石材の得られる層はこれより東南にのびており、現在でも、多野郡吉井町の牛伏山山麓でやはり切り出しが賑々と行なわれている。このことからまた「牛伏砂岩」とも呼称されている。この石材の利用は、鍋川流域から藤岡市周辺で横穴式石室の築造が開始された6世紀中葉以降に始まるものである。その後、群馬墳の造営とともにこの地域では広範に使用されており、石材の需要と供給の関係、石材産地を掌握していたであろう要素の問題等々も興味深い問題を含んでいる。また、この石材はこれより遠隔の観音山古墳で使用されており、また、蛇穴山古墳に存在する同様の石材も興味深い。

このことについては、筆者と津金沢吉茂で現在追跡中であるので稿を改めて評述する準備を進めている。

(8) 一般的には、石室の背後の補強の構造などには関心が向けられなかった時期に川端四郎はこれを丹念に観察し、構造を解明していた。川端四郎「藤岡市二本木古墳調査報告」『史学会報』第18号

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

09 註(6)外山文献
09 註(6)外山文献

6. 1号墳周堀内出土の瓦について

(1) 出土資料

1号墳の周堀から2点の瓦片が出土し(41図の1・2)、また、その他に本道跡の採集資料として5点の瓦片がある(41図の3~7)。ここでは後者の資料紹介も兼ねて資料呈示したい。なお、ここに呈示する瓦は、年代的には奈良平安時代に属するものであるが、発掘調査では古墳の周堀から出土したので本章で扱うこととした。瓦は7片あって、平瓦が5点、丸瓦が2点ある。以下、その観察内容を例記したい。なお、観察にあたっては、平瓦は凹面を表、丸瓦は凸面を表にし、共に狭端部を上を置く形をとった。

41図の1は、平瓦であって、狭端部を上にしてみると、その右下隅部にあたる破片とみられる。凹面は、模骨痕と布目痕があるが、粘土板切り取り痕は不明確である。模骨の単位は幅2~3cmである。布目は、目がやや細かく、1cmあたり8本ほどである。凸面は平行叩きが全面に打たれている。叩きは方向を変えながら重なる形で打たれている。側面はヘラ整形であって、凹面側にヘラによる面取りがなされ、二面整形となっている。下端面(広端面)はヘラ整形による一面整形である。瓦の厚さは中央部で2.7cm、側端近くで3.3cmであって、全体に厚手である。焼成は還元炎焼成であって、やや堅い。色調は灰色を呈す。胎土は細かく、砂粒の混入率は低い。なお、下端面から凹面の一部に粘土板の合わせ目痕がみとめられ、その形状は佐原真氏の分類の「Z型」に該当する。また、本資料は、下端面と側面の角度がほぼ直角をなしていることから、全体の形としては平面形が長方形に近い形をなすもの、つまり狭端面と広端面の幅の広さにほとんど差がないものと想定される。成形は、粘土板を素材とした桶巻造りであろうか。

41図の2は、平瓦の破片であって、狭端部を上にとすると、その右上隅部にあたるものとみられる。形態としては、端面と側面の角度がほぼ直角をなして

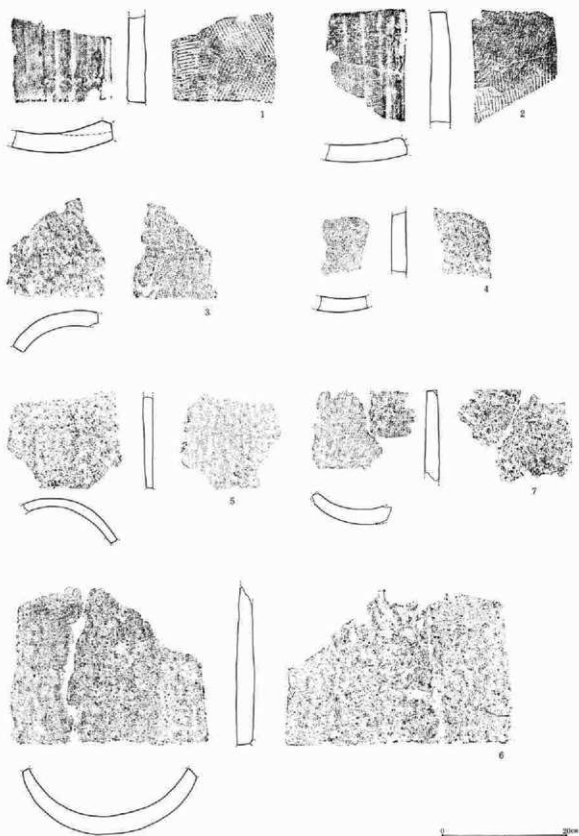
いることから、平面形は長方形に近いものと想定される。凹面は模骨痕と布目痕はあるが、粘土板切り取り痕は不明確である。模骨の幅は1.5~3cmほどである。布目は、資料1と同様に細かい。凸面はほぼ全面に平行叩きが打たれている。叩きの方向は上から下へ一部重なるように打たれている。側面はヘラ整形であって、凹面側に面取りがなされている。上端面(狭端面)はヘラによる一面整形である。瓦の厚さは2.5~2.8cmであってやや厚手である。焼成は還元炎でやや堅く、色調は灰色である。胎土は細かく、砂礫を微量混入する。本資料は、形状や造りなどからみて、資料1と同一個体、少くとも同一類に属する瓦とみなされる。

41図の3は、丸瓦の破片である。狭端部を上にとすると、その左半部の破片である。凸面は、幅3~4cmほどの縦方向へヘラ削り整形が全面に施されている。凹面は、粘土板切り取り痕と布目痕がみられ、模骨痕はみられない。布目は1cmあたり6本ほどであって、やや粗い。側面はヘラにより整形されており、内面側に面取りがあるかのようにも見られるが、磨耗していて判然としない。厚さは2.2~2.5cmであって、やや厚手である。焼成は還元炎であるが、やや甘く、軟質さみである。色調は淡い灰色を呈す。胎土はやや細かい。断面図を採った部位での外面の半径は、約12cmである。

41図の4は、平瓦とみられる破片である。凹面は布目痕はあるが、模骨痕はみとめられず、粘土板切り取り痕も不明確である。布目数は、1cmあたり7本前後である。凸面はナデ整形である。厚さは2.3cmほどである。焼成は還元炎により堅く焼かれており、色調はやや暗い青灰色を呈す。胎土はやや粗く、白色鉱物(石英)の礫を混入する。成形は、模骨痕がみられないことから、一枚造りと見ておきたい。

41図の5は、丸瓦であって、広端部を下にとすると、その右下隅部にあたる破損品である。凸面は、やや不明確ではあるが、平行叩きかとみられる痕跡が全

III 古墳時代の遺構と遺物



第39図 1号墳周堀出土及び遺跡周辺表採の瓦

面にまばらにみられる。凹面は、布目痕はあるが、椽骨痕や粘土板切り取り痕はみられない。布目は、1cmあたり6～7本である。側面はヘラ整形であって、凹面側に浅い面取りがなされている。端面はヘラによる一面整形である。厚さは1.3～1.5cmと薄手である。外周半径は断面を採った部位（下端面から10cmの所で）半径11.7cmである。焼成は還元炎でやや堅く焼かれており、色調はやや暗い灰青色を呈す。胎土はやや粗で、石英とみられる白色鉱物粒をやや多く混入する。

41回の6は平瓦であって、狭端部を上にする、その上半分ほどを欠いた半損品である。凸面は縦方向のナゲ整形が全面に施されている。凹面は布目が全面に良好にみられるが、椽骨痕はみられず、粘土板切り取り痕も不明確である。布目は1cmあたり7～8本ほどである。側面はヘラによる整形であって、内面側にわずかな面取りがみられる。端面の仕上げは側面と同様である。厚さは、中央部で2.8cmと厚く、側端にむかってしだいに厚さが減り(2.2cm内外)、左側端ぎわでは1.5cmほどの薄さとなっている。焼成はどちらかというと酸化炎で、あるいは不完全な還元の低火度焼成であって、軟質である。色調は褐色味をおびたすんだ灰色である。胎土はやや粗で、石英とみられる白色鉱物を少量混入する。本資料は、平面形が台形をなす形態つまり広端部と狭端部の幅に大きな差があるものであり、現状では広端部の幅は25.5cmであるが、これから全体形を推測すると、全長は35cm内外、狭端部の幅は22cm内外のものと推測される。全体としてやや小ぶりの平瓦である。本資料は、上向きのカマボコ状成形台を用いた一枚造りの製作法によるものとみなされる。

41回の7は、破片のため平瓦か丸瓦かの判定が難かしいが、前者であろうとみられる。その場合、平瓦の左上隅にあたるものとみられる。本資料は、形状や造りが資料6と類似するもので同種のものと考えられる。ただし、凹面の布目は1cmあたり6本前後とやや粗めである。また、焼成は6と同様に不良で軟質である。色調は、凸面は炭素吸着により暗灰

黒色を呈し、内部はくすんだ白色を呈す。

(2) 瓦の分類と年代観

本遺跡出土の瓦の内容は上記のようである。これらの資料は、形態や造りにおいて差違が認められ、分類することができるように思われる。後述するように、現状では瓦の分類は危険性が多分にあるが、あえて行えば、下記のように三種（A類・B類・C類）に分類できよう。

A類は、平瓦が資料番号1と2、丸瓦が資料番号3が該当する。A類の特徴は以下のようである。胎土は、砂粒の含有が少なく、比較的粒子の細かい、精選度の良い土である。焼成は還元炎による。強く焼き締められているというほどではないが、良好な焼成である。色調は灰色味を呈す。瓦の厚さは厚手である。全体にいいねいな造りの瓦といえよう。成整形上の特徴としては、平瓦は桶巻造りとみられ、外面には平行叩きがある。丸瓦は凹面に椽骨痕はなく、外面がヘラ削り整形である。

B類は、平瓦が資料番号4、丸瓦が資料番号5がある。本類の特徴は以下のようである。胎土はやや粒子の粗い、白色の石英粒を含有している。焼成は還元炎により高温で堅く焼かれ、色調は暗い青灰色をおびる。平瓦は、凸面はナゲ整形のみとみられ、また凹面は椽骨痕がないことから一枚造りの可能性が想定される。丸瓦は薄手であって、凸面に平行叩きが施されているとみられる。

C類は、資料番号が6・7が該当する。現時点では、平瓦のみがあって、丸瓦は不明である。C類の特徴は以下のようである。胎土は、石英粒を少量含有した、やや粗雑な土である。焼成は低温であって、軟質である。色調はくすんだ灰褐色である。平瓦は平面が台形状を呈した、やや小ぶりの瓦であり、カマボコ形状成形台を用いた一枚造りとみられる。

瓦の分類は以上のようなものである。なお、瓦の分類は、ある程度の量的分析が必要であって、現時点でえられている7点という資料数は分析資料数としては少なすぎ、上記の分類は将来再検討を要することも多

III 古墳時代の遺構と遺物

分に考えられるものである。とはいえ、上記のように分類できたということは、やはり、それぞれの瓦種に応じて製作工人や生産地（瓦窯）の違い、あるいは製作年代の違いなどを示しているのではないかと思われる。

そこで、瓦の分類につづけて、瓦の生産ならびに年代観などにもふれるべきであろうが、現段階では確定的な内容を提示できる状況にはない。よって、以下、それぞれの瓦について推測しうる事項を提示して今後の手だてとしたい。

まず、A類をみると、その平瓦の凸面に平行叩きがあり、これに注目したい。一般的に瓦の叩きは格子や縄目が多く、平行叩きは比較的少なめである。つまり、平行叩きは本来的には須恵器に伴うものである。それゆえ瓦に平行叩きがある場合、その製作にあたって須恵器工人が関与したというふうに見なされる。ところで群馬県域の平行叩きの瓦の分布は、本遺跡の他には、馬庭遺跡（多野郡吉井町馬庭）、桑原跡遺跡（富岡市桑原峰）、田端遺跡（高崎市阿久津）、水窪遺跡（藤岡市篠塚）、でえせえじ遺跡（高崎市山名町）、森下遺跡（利根郡昭和村森下）、金井庵寺（吾妻郡吾妻町金井）、上西原遺跡（前橋市下大屋町）など県域の西部と北部に偏っており、これは瓦製作に関した工人の技術系統によるものと考えられる。また、これらの瓦の年代は8世紀前半代を中心としたものとみなされる。以上、田端遺跡のA類は、群馬県西部域に分布する平行叩きの瓦群の一つとして位置づけることができよう。

また、A類の年代を考える上での根拠の一つに平瓦の凹面の模骨痕がある。つまり、群馬県域では8世紀の中葉を境に模骨痕がほとんどみられなくなるという傾向がある。これによって、模骨痕があるということは8世紀前半以前の可能性が高いという目安となっている。また、A類は厚手で、整形や焼成が良好であるということも古手の特徴である。

つぎに、B類をみると、本類は特徴点がきわめて少ないが、まず、平瓦の模骨痕がないので、一応8世紀後半以降とみなしておきましょう。

ここで、群馬県下の瓦の概要をみると、7世紀から8世紀前半にかけてのものは概して造りが良いが、しだいに粗雑となり平安中後期には軟質なものが多くなる。特に、平瓦についてみると、8世紀中頃に桶巻き造りから一枚造りへと大きく技法が変換し、同時に大ぶりでも重いものから、小さく軽いものへと変わる傾向がある。

これをふまえると、B類は8世紀後半から9世紀にかけてのもののみならずが妥当と思われる。

最後に、C類をみると、本類の平瓦には凹面に模骨痕がないことはもちろんのこと、焼成が不良であって小ぶりであるなど、退化的な特徴がある。よって年代的には平安時代、限定すればその中葉前後かとみられる。

なお、B類・C類とも胎土に石英の礫を含有しているが、これは藤岡市の西城から吉井町の南部の丘陵地帯に分布する窯跡群（多野窯跡群、あるいは藤岡吉井窯跡群）に見られる特徴であって、生産地のひとつの目安になるものと思われる。

(3) 瓦出土の意味と遺跡の性格

— 田窪庵寺の推測 —

本遺跡からは、現状では出土量が少ないものの、数種類のしかも年代を越えた瓦が出土している。しかも、発掘調査範囲内では、瓦に直接関連するような遺構はみられない。このような場合、瓦出土の意味ひいては遺跡の性格をどのように考えるべきであろうか。そこでここでは、遺跡の状況や遺物をからませながら、瓦出土の意味を推測してみたい。

瓦が出土した場合、まず考えるのは生産地か消費地かということであるが、本遺跡はローム台地上に立地し、遺構としては古墳や集落からなっている。よって、前者の可能性は一応消去しておきたい。つぎに消費地とみた場合、もちろんカマドの構築材などの二次利用ということも考慮しておかなければならないであろうが、本遺跡の状況からはむしろ何らかの瓦葺き建物に伴うものとみたらうが妥当と思われる。その場合、古代における瓦葺き建物は、まず

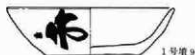
寺院が圧倒的に多く、ついで官衙や都城などに限定されているので、その意味からは本遺跡内あるいは近隣に寺院や官衙の存在した可能性が類推されることとなろう。

これに関して、本遺跡の調査において注目される遺物が出土している。それは「山寺」、「佛」、「大公」などの墨書土器である。特に、「山寺」や「佛」は直接的に寺院や仏教に関連する語である。近年、群馬県下をはじめ、各地の古代寺院跡から「寺」やあるいは仏教に関する用語の墨書土器あるいは文字資料検出例が増加している。いうまでもなく、墨書土器などは、たやすく移搬できるものであるので、寺などの墨書土器の出土をもって、短絡的に当該遺跡を寺と認識してしまうのは危険である。が、寺という墨書土器などが寺院跡などから多く出土していることも一面では事実であろう。そのような傾向をふまえると、本遺跡におけるこの2点の墨書も寺と結びつけて考えておけるのではないと思われる。また、「大公」という語も内容を検討する必要があるが一つには有力者の存在を感じさせるものである。

このように本遺跡の瓦に関しては、現状では古代寺院に結びつけて考えておけそうな要素がうかがわれる。もし仮にこの想定が成り立つとすれば、奈良時代前期から平安時代にかけての寺が存在したといえようか。

ところで、奈良時代前半における上野国域での古代寺院はそれほど多くはなく、律令制の郡に一、二あるかないかという状況である。一般的に言えば、当時の寺院は有力豪族の手によって造立されたものであり、律令制社会の中にあつては郡司や郷長に連なる階層のものである。このように見ると、田圃遺跡に想定される寺は、甘葉郡における初現的なものであつて、郡内の有力者の氏寺の可能性をもつものといえよう。

以上、大胆に推測に推測を重ねた。しかし、検討すべき問題も残っている。すなわち、瓦の出土量が少ないこと、山寺の墨書銘ほどのような内容を指したもののなかつたこと、などがある。特に後者に



第40図 墨書土器

ついてみると、山寺というのは一般的には山中つまり山岳地帯に営まれた寺ということであつて、本遺跡のような台地上という地勢しかも集落遺跡の地という内容にはそぐわない語とみなされよう。

ここでは、これらの検討課題を後日に託して、あえて寺の存在を推測し、「田圃庵寺」の名称を提唱しておくものである。

追記 昭和62年多野宮跡群中の、藤岡市金井の風呂ヶ谷に所在する宮跡において、A類と同様とみなされる瓦の生産が確認されており、A類の瓦生産に関する有力な手がでになるものとみられる(藤岡市教育委員会 古郡正志氏の御教示による)。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

本遺跡内の奈良・平安時代に該当する遺構は整穴住居跡50軒、掘立柱建物跡23棟、祭祀遺構1ヶ所、水田跡1,000m²等である。遺構はI～IV区までの全地区に及ぶが、全体的には偏りが見られる。遺構はII区とIV区の両側に集中している。I区は微高地で古墳の分布が見られ、III区もまた古墳が立地している。時代は異なるが、この分布状況は古墳の立地と無関係とは考えられない。また、IV区の中央には大きな溝があり、何らかの利用も考えられるが、障害にもなったと思われる。したがって、大溝の東には遺構の分布は少なかった。

住居の記述については住居跡の位置、規模、発掘調査の過程、カマド、遺物についてを基本事項とした。また、遺物については観察表を付し出土位置等

も記した。

本遺跡地は、薄い黒色土下の砂礫層中に営まれた遺跡で、その住居壁の崩落を防ぐための施設としての石垣をもった住居跡が数軒検出された。

焼失家屋も3軒あり、そのうち2号住居跡、23号住居跡は、その状況を示す好資料といえる。

カマドの位置は北壁と東壁に大きく分かれ、それぞれ、時代差を反映している。

墨書土器も数点出土し、中には「山寺」「大公」「成」「佛(?)」といった文字が読み取れたものがあつた。瓦片の出土も2点あり、表面採集の瓦片と合せて、寺院跡の所在をうかがわせる資料を得ることができた。

1. 住居跡

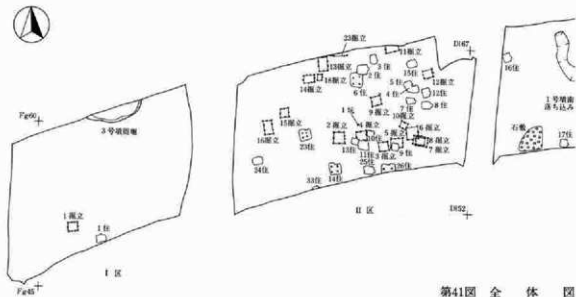
1号住居跡 (PL19・65)

位置 本住居跡はI区中央部のEt-49グリット内に位置する。I区に存在するこの時期の遺構は1号掘立柱建物跡のみで、他はすべて縄文時代の遺構である。

平面形・規模 平面形は東西長4.28m、南北長3.08

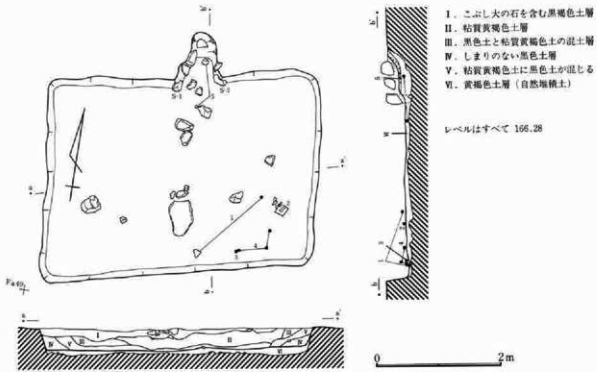
mの東西に長い長方形を呈する。面積は12.1m²。残存壁高は約40cm。主軸方位はN-10°-Wをさす。

概要 やや粘質の黄褐色土層で確認され、埋没土は主に黒色土と黄褐色土の混土である。柱穴、周溝といった施設は検出されなかったが、住居中央南寄



第41図 全体図

1 住居跡



第42図 1号住居跡実測図

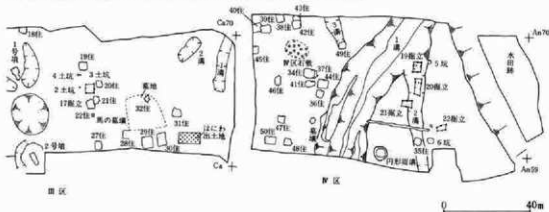
りに縦54cm、横34cm、厚み10cmの扁平な石が出土した。(性格不明)

床面は黄褐色土の自然堆積土で、盛り土は見られず、掘り方と一致する。

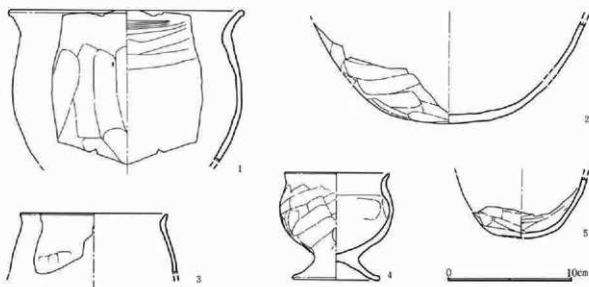
カマド カマドは北壁を掘り込んで築いている。袖部は壁面にほぼそろい、床側に出ている。焚口幅は54cm、焼燃部長は48cm、煙道部は削平されており、残存していない。この付近の地質はやや粘性が

あるので掘り方をそのまま壁として利用している。袖石には川原石を使用しているが、壁面すべてを石で構成していない。壁部分10~20cmにわたって、黄褐色土が赤色に変化しており、長い期間の使用がうかがえる。

遺物 出土総数は土器片96点。須臾器は1点も含まれていない。台付甕が完形に近い他はいずれも破片である。



IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第43図 1号住居跡出土遺物実測図

1号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 甕	南側 床	① (25.0) ② - ③ - ④口径部×	①褐色 ②良・酸化焰 ③細砂粒混入	外面割部は篋形、口径部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。		
2	土 器 甕	東側 +2	① - ② (10.0) ③ - ④底部	①褐色 ②良・酸化焰 ③細砂粒混入	外面割部は篋形、内面割部は篋撫で。紐作り。		
3	土 器 甕	南側 +5	① (15.6) ② - ③ - ④口径部×	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	外面割部は篋形、口径部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。		
4	土 器 台付 甕	中央 +10	①11.2 ②9.2 ③11.3 ④×	①暗赤褐色 ②良・酸化 焰 ③1mm以下細砂粒混	外面割部は篋形、口径部・胴部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。内面指面直あり。		二次焼成直あり。
5	土 器 甕	カマド内	① - ② - ③ - ④底部	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は篋形、内面割部は篋撫で。紐作り。		

2号住居跡 (PL19・65)

位置 本住居跡はII区中央北側のDt-64・65グリットに位置する。南側にある6号住居跡のカマド部から北東隅を切ってつくられている。

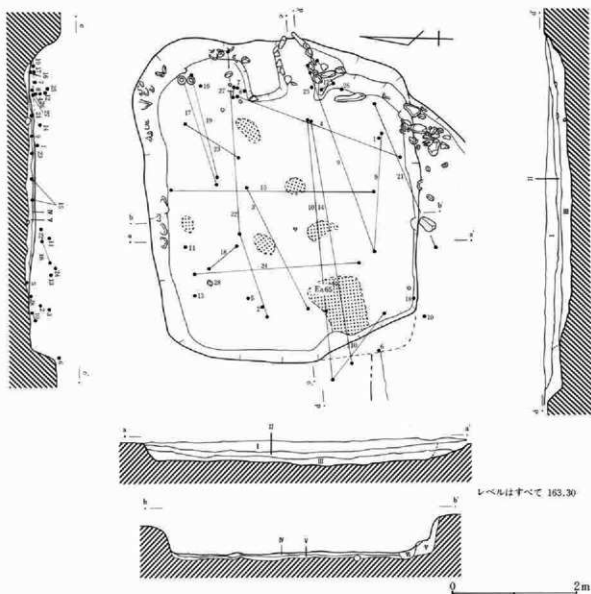
平面形・規模 平面形は東西長4.98m、南北長4.40mでほぼ正方形を呈する。面積は16.18㎡。残存壁高は約60～70cmで比較的深い。主軸方位はN-78°-Eをさす。

概要 本住居跡は遺構確認作業の際、浅間B経石の堆積がほぼ方形に検出された。礫混じりの自然堆

積層中の浅間B経石なので、ほぼ住居跡と推定し掘り下げた。浅間B経石は厚いところでほぼ20cmの厚みがあり、レンズ状の堆積を示していた。40cm程掘り下げたところで硬い面があったが、床面と考えにくいので更に掘り下げたところ、焼土や炭化した木材の出土が多く見られ、焼失家屋であることが明らかとなった。(IV. 6(6)田籬遺跡の炭化材の樹種参照)

床面は砂利層の上に5～6cm程の黒色土を敷いてつくられていた。その他、柱穴・貯蔵穴は検出され

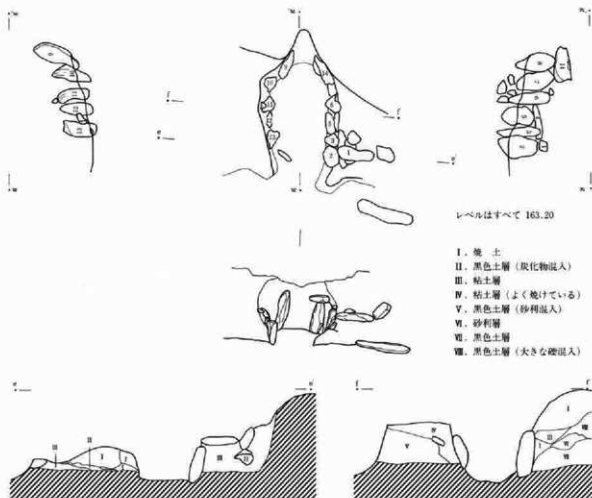
1 住居跡



- I. 洗刷目軽石の純層
- II. 黒味が強く礫を多く含む黒色土層
- III. 上層に比べ礫の混入が少ない赤みのある(色の薄い)黒色土層
- IV. 黒色土層
- V. 砂利層
- VI. 焼土

第44図 2号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



レベルはすべて 163.20

- I. 焼土
- II. 黒色土層 (炭化物混入)
- III. 粘土層
- IV. 粘土層 (よく焼けている)
- V. 黒色土層 (砂粒混入)
- VI. 砂利層
- VII. 黒色土層
- VIII. 黒色土層 (大きな炭混入)

第45図 2号住居跡カマド実測図

0 1m

ていない。

カマド 東側の壁に粘土を寄せかけて構築されていた。壁面すべてを川原石の自然石を張ってつくり、部分的には、裏側に壁面を補強するように石材を重ねて据えていた。高さをそろえるために、上部を欠いている石もあった。

床側に粘土を多く盛ってつくっているの、自然に住居内につくられる型式となり、煙道部のみ、壁の外へ出る形となっている。左前に検出された石は天井に使用された石材と考えられる。周囲の粘土も

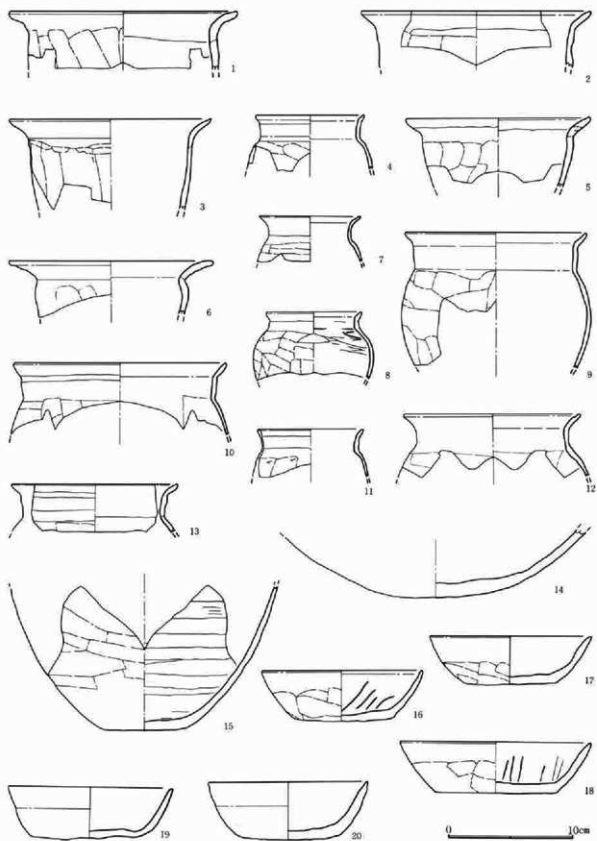
レンガ状に焼け、カマド内の焼土の堆積も20cmと厚い。煙道部は削平されて検出できなかったが、カマド部分の残存状況は非常によい。焚口幅は32cm、燃焼部長は92cm、煙道部は現存で25cm計測できる。

遺物 出土総数は4060点と多い。そのうち、須恵器は66点と少なく圧倒的に土師器が多い。6号住居跡と重複しているの、時期の異なる土器が見られるが、「コ」の字状口縁をもつ甕の時期と考えてよいだろう。

2号住居跡出土遺物観察表(1)

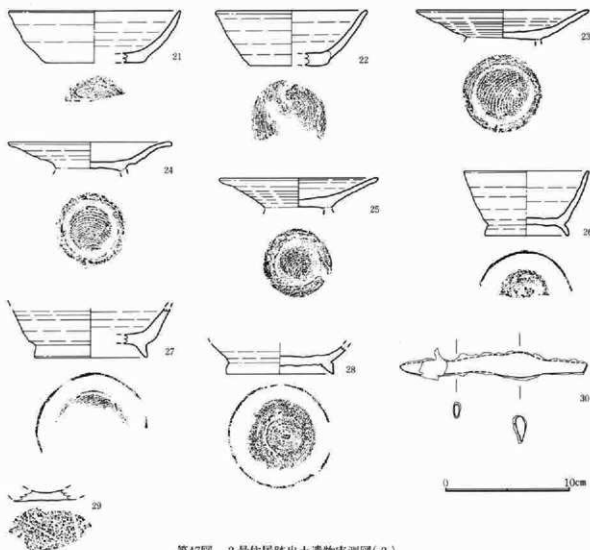
図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③粘土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	南東 +4	① (34.2) ② — ③ — ④口縁部欠	①明赤褐色 ②良・酸化 ③ 1mm程度の砂粒混入	外面胴部は筒形、口縁部は横溝で、内面胴部は腕無で、紐作り。		

1 住居跡



第46图 2号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第47図 2号住居跡出土遺物実測図(2)

2号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
2	土 器 甕	北壁ざわ +11	① (14.2) ② — ③ — ④口縁部欠	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③微細砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は刷毛目整形。紐作り。	
3	土 器 甕	壁ざわ +37	① (21.4) ② — ③ — ④口縁部欠	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③ 1mm以下細砂粒混	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は刷毛目整形。紐作り。	二次焼成 痕あり。
4	土 器 甕	壁ざわ +43	① (11.4) ② — ③ — ④口縁部欠	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	
5	土 器 甕	北東隅 +6	① (19.4) ② — ③ — ④口縁部欠	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	
6	土 器 甕	西壁ざわ +40	① (21.6) ② — ③ — ④口縁部欠	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③ 1mm程度の細砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	
7	土 器 甕	カマド内	① (10.8) ② — ③ — ④口縁部欠	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	

図 No.	土器器 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③部高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
8	土 器 壺	カマド内	① (10.2) ② 一 ③ 一 ④口縁部片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 縦撫で、紐作り。	
9	土 器 壺	カマド内	① (19.0) ② 一 ③ 一 ④口縁部片	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は 横撫で、内面胴部は縦撫で。紐作り。	
10	土 器 壺	カマド内	① (22.4) ② 一 ③ 一 ④口縁部片	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部、 内面胴部は縦撫で。紐作り。	
11	土 器 壺	壁ぎわ +5	① (11.2) ② 一 ③ 一 ④口縁部片	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 縦撫で。紐作り。	
12	土 器 壺	壁ぎわ +2	① (18.4) ② 一 ③ 一 ④口縁部片	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は 横撫で、内面胴部は縦撫で。	
13	土 器 壺	壁ぎわ +42	① (17.6) ② 一 ③ 一 ④口縁部片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は 横撫で、内面胴部は縦撫で。紐作り。	
14	須 恵 器 壺	北西壁ぎ わ+46	① 一 ② 一 ③ 一 ④底部	①灰白色 ②良・還元焰 ③砂粒少量含む	縦輪整形。底部摩耗している。	
15	土 器 壺	壁ぎわ +59	① 一 ②8.0 ③ 一 ④底部	①におよ赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③1mm程砂粒混	外面胴部は篋削り、内面胴部は縦撫で。紐作り。 外面摩耗している。	
16	土 器 器 坏	北東隅 -5	①12.8 ②7.0 ③4.0 ④完形	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③1mm程の砂粒混入	体部・肩部は篋削り、口縁部は横撫で。暗文。底 部は摩耗している。	
17	土 器 器 坏	北壁ぎわ +8	①12.8 ②7.2 ③3.8 ④完形	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③1mm程の砂粒混入	体部・肩部は篋削り、口縁部は横撫で。暗文。暗 文がうすくなっている。	
18	土 器 器 坏	中央 +14	①(15.0) ②(9.2) ③4.0 ④片	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③緻密	体部・肩部は篋削り、口縁部は横撫で。暗文。	
19	土 器 器 坏	壁ぎわ北 東隅+5	①13.0 ②8.6 ③4.0 ④完形	①橙色 ②やや良・酸化 焰 ③1mm以下細砂粒混	体部・肩部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。暗文。 内面に炭化物がこびりついている。	摩耗が著 しい。
20	土 器 器 坏	—	① (12.7) ②8.1 ③4.6 ④片	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	体部・肩部は篋削り、口縁部は横撫で。暗文。	摩耗が著 しい。
21	須 恵 器 坏	南側 +24	①(13.7) ②(7.6) ③4.1 ④片	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	縦輪成形。底部は右回転糸切未調整。	
22	須 恵 器 坏	北東 +19	①12.0 ②6.6 ③4.3 ④片	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	縦輪成形。右回転糸切未調整。	
23	須 恵 器 皿	中央 +8	①13.7 ②5.9 ③ 一 ④ほぼ完形	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	縦輪成形。右回転糸切後付高台。	
24	須 恵 器 皿	北東隅 +35	①13.0 ② 一 ③ 一 ④ほぼ完形	①黄灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③1mm砂粒混	縦輪成形。右回転糸切後付高台。	
25	須 恵 器 皿	東壁ぎわ -5	① (12.6) ② 一 ③ 一 ④片	①灰白色 ②良・還元焰 (軟質) ③細砂粒混入	縦輪成形。回転糸切後付高台。高台欠損。	
26	須 恵 器 高台付焼 土	西側 +33	① (6.5) ② (9.9) ③5.1 ④片	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦輪成形。底部回転糸切後付高台。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

2号住居跡出土遺物観察表(3)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
27	須恵器 高台付埴	カマド内	①— ③—	②9.0 ④底部欠	①灰白色 ②良・還元焼 ③緻密	轆轤成形。回転糸切後付高台。	
28	須恵器 高台付埴	北西隅 +3	①— ③—	②8.4 ④底部完形	①ふいば褐色 ②良・酸 化焼 ③緻密	轆轤成形。回転糸切後付高台。	内黒土器
29	土器 壺	カマド内	①— ③—	②— ④底部	①明褐色 ②良・酸化焼 ③1mm程度の砂粒混入		木屐痕
30	鉄 器	中央 +8	長さ14.8 巾2.0 厚さ0.8ほぼ矩形			刀子	

3号住居跡 (PL20・65)

位置 本住居跡はⅡ区中央部北寄のDs-65・66グリットに位置している。2号住居跡が南西に2m離れてつくられている。

平面形・規模 平面形は東西長3.00m、南北長4.44mで、南北に長い長方形を呈する。面積は約9.8㎡。壁高は35～40cm程である。主軸方位はほぼN-80°-Eと考えられるが、カマドの破壊が著しいので、計測不能。

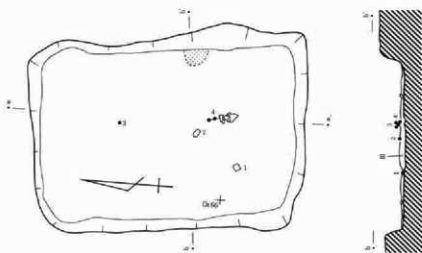
概要 この付近の自然堆積は砂利層で、住居跡範囲には黒色土の埋没土が見られ、検出は容易であった。したがって、壁も掘り方も礫～砂利層で、特に壁面は調査中においても崩落が認められた。柱穴、周溝等施設は検出されなかった。

床面は、砂利層の上の細かい砂利層をそのまま床として使用したと考えられる。

カマド カマドは破壊され原形を全くとどめていないが、粘土塊、焼土が東壁に認められたこと

から、この位置にあったと認定した。自然堆積層が東壁で掘り込まれた様子が認められないので、床側に張り出す型式と考えられる。カマド規模の計測は不能。

遺物 出土総数は202点である。うち須恵器は3点と少ない。墨書土器、「成」がある。

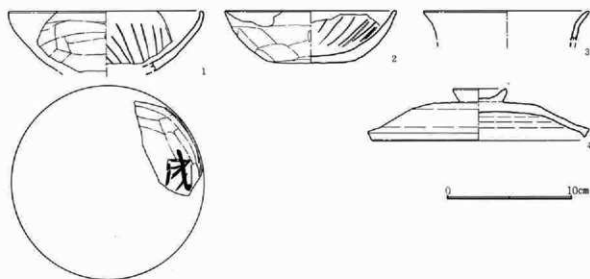


レベルはすべて 163.20

- I. 礫(2-8cm)を多く含む黒色土層
- II. 上層に比して細かい礫を含む黒色土層
- III. 細かい砂利層

第48図 3号住居跡実測図

1 住居跡



第49図 3号住居跡出土遺物実測図

3号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm) ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 杯	西壁より +5	①(15.2) ②— ③— ④口縁~底	①にぶい橙色 ②良・酸 化焰 ③緻密	体部・底部は寛肩り、口縁部は横撫で。器内面は 磨き。暗文。	墨書「成」
2	土 器 杯	中央 +25	①(13.6) ②(6.9) ③4.1 ④片	①橙色 ②良・酸化石 ③緻密	体部・底部は寛肩り、口縁部・器内面は磨き。暗 文。	
3	土 器 蓋	中央 +2	①(17.6) ②— ③— ④口縁部片	①明赤褐色 ②良・酸化石 ③緻密	横撫で。	
4	須 恵 蓋	床	①16.7 柄4.2 ③4.1 ④ほぼ完形	①黄灰色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	縦楕圆形。	

4号住居跡 (PL20・66)

位置 本住居跡はⅡ区東側のDo-63、Dp-63グリットに位置する。5号住居跡と重複しており、周囲に、7・8・12・15号住居跡、12号掘立柱建物跡がある。

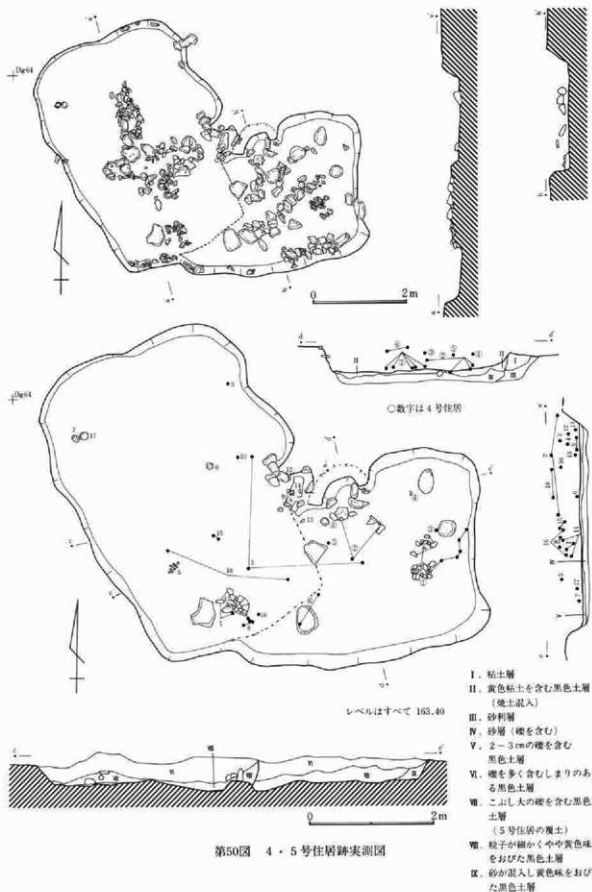
平面形・規模 平面形は東西長3.94m、南北長2.86mの東西に長方形を呈する。面積は約7.3m²と小さい。残存壁高は30~40cm程である。主軸方位はN-21°-Wを示す。

概要 この付近の自然堆積土は砂利・礫層で、黒色土の埋没土が確認できたが、切り合いの状況が把握できずに掘り下げる。地層断面図によって、両住

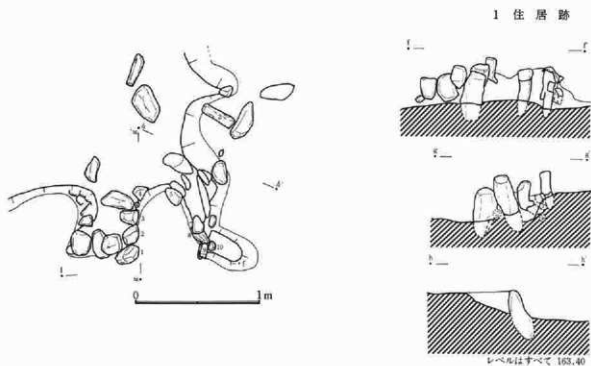
居跡の切り合い関係を確認し、4号住居跡の方が古いことがわかった。埋没土中20~30cmの川原石の転石が含まれていて、当初、大洪水の影響による埋没と考えたが、黒色土中の大きな石で、これは人為的な投げ込みと考えた方がよいだろうという教示を得た(沢口宏氏(群馬県立大泉高校教諭))。住居内コーナー部に平石が据えられたような状態で出土していたが、用途は明らかにできなかった。床面は礫を含む砂層の上に、2~3cmの黒色土を敷いてつくられていた。

柱穴、周溝といった施設は検出されなかった。

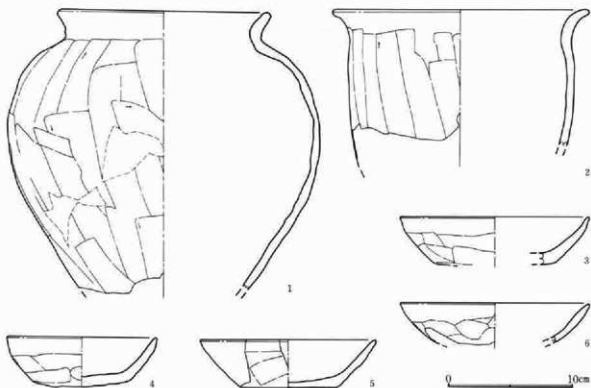
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第50図 4・5号住居跡実測図



第51図 4・5号住居跡カマド実測図



第52図 4号住居跡出土遺物実測図

カマド カマドは破壊が著しく、残存状況は悪い。北壁を切り込んでつくられているが、床側にも張出していることが考えられる。川原石が2石原位置を

とどめていた。支脚と考えられる石が燃焼部中央に横たわった状態で出土した。奥壁に粘土が残っていたことから、粘土と川原石とで構築されたカマドと

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

考えられる。

ない。

遺物 出土総数は257点で須恵器は1点も含まれ

4号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②高径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壺	東北より +32	①22.4 ②— ③— ④ㄥ	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒少量混入	外面割部は篋削り、口縁部は横撫で、内面割部は 篋撫で。紐作り。		
2	土 器 壺	カマド付 近+8	①(27.2) ②— ③— ④ㄥ	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1~2mm砂粒多く混入	外面割部は篋削り、口縁部は横撫で、内面割部は 篋撫で。紐作り。		
3	土 器 環	北東隅 +31	①(14.8) ②(9.4) ③(3.8) ④ㄥ	①にふい・褐色 ②良・體 酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	二次焼成 痕あり。	
4	土 器 環	カマド付 近+26	①11.8 ②7.5 ③4.9 ④完形	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒多く混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗が著しい。		
5	土 器 環	カマド前 +19	①(14.0) ②(7.5) ③3.8 ④口縁~底	①にふい・褐色 ②良・體 酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。		
6	土 器 環	4・5住切 合い+38	①(15.0) ②— ③— ④口縁部	①灰褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。		

5号住居跡 (PL20・66)

位置 本住居跡はII区東側のDp-63・64グリット
に位置する。前述の4号住居跡と重複している。

平面形・規模 平面形は東西長3.30m、南北長4.68
mの南北に長い長方形を呈する。面積は14.08㎡。残
存壁高は、30~40cm。主軸方位はN-65°Eをさす。

概要 4号住居跡と同様な形で掘り進め、重複関
係が地層断面でとらえられたのみで、南東部壁の確
認はできなかった。埋没土は黒色土層で、4号住居
跡と同様に20~30cmの川原石の転石が投げ込まれて
いた。床面は自然堆積の砂礫層の上に2~3cmの黒
色土を敷いてつくられていた。柱穴、その他の施設
は検出されなかった。

カマド カマドは東壁を掘り込んでつくられてお

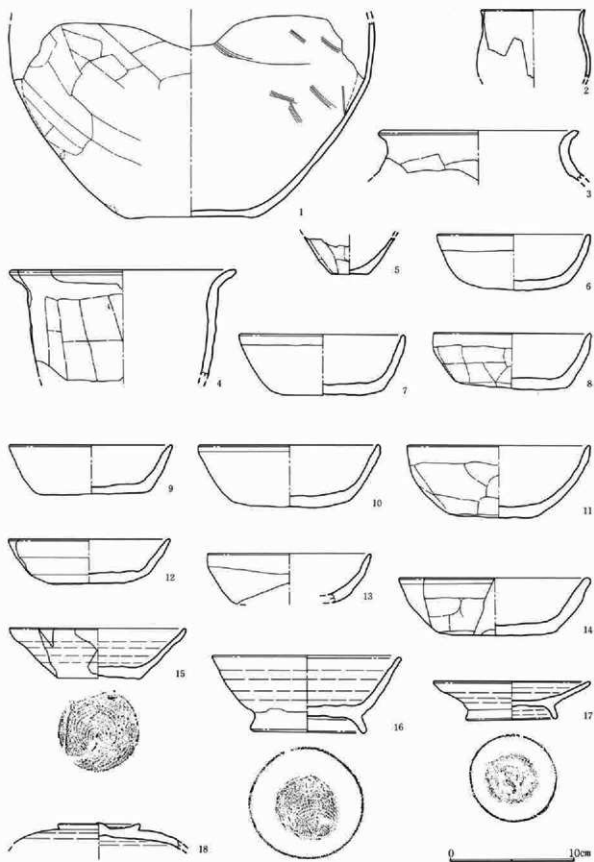
り、燃焼部は床刺りが出てこない型式である。4号住
居跡に比べ、残存状況はよく、燃焼部はほぼ原状を
留めていた。細長い川原石を自然堆積の砂地にさし
て立てて、小さな石や黒色土で補強している。壁面
全体に川原石を使用している。使用しているその細
長い川原石の先端部を欠いて、カマド壁の高さをそ
ろえている。煙道部は削平されて残っていない。焚
口幅は47cm、燃焼部長47cmである。

遺物 出土総数は158点である。須恵器は6点と少
ない。4号住居跡と重複しているので時期の混在が
認められるが、糸切末調整の須恵器環、高台付塊、
皿がこの住居の時期と考えられる。

5号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②高径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 大 壺	東壁より +14	①— ②(13.5) ③— ④割~底	①褐色 ②良・酸化焙 ③1~2mmの砂粒混入	外面割部は篋削り、口縁部は横撫で、内面割部は 篋撫で。紐作り。		

1 住居跡



第53图 5号住居跡出土遺物実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

5号住居跡出土遺物観察表(2)

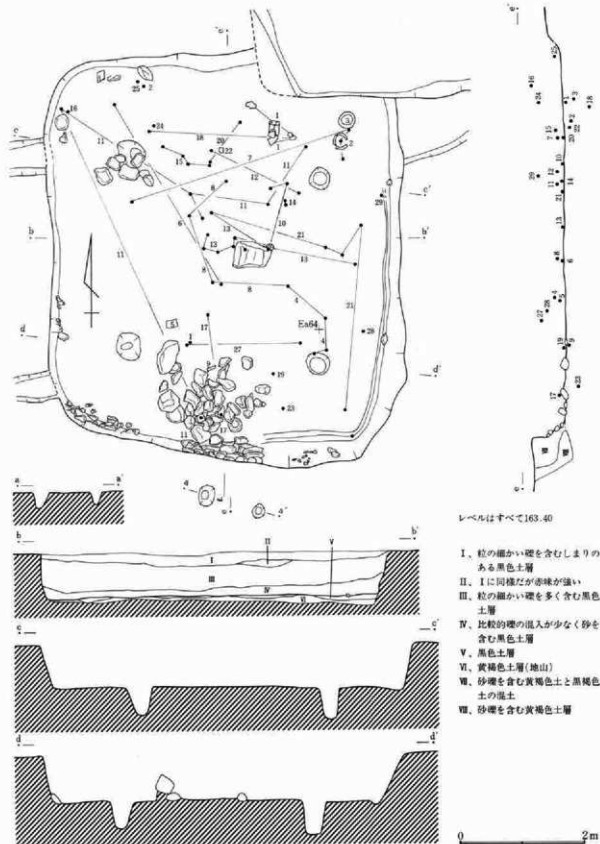
図 No	土器 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
2	土 師 器 壺	切合い部 +11	① (11.0) ② — ③ — ④口縁~胴	①棕色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。紐作り。摩耗し、荒削り痕不明。		
3	土 師 器 壺	北東隅 +28	① (21.0) ② — ③ — ④口縁部	①棕色 ②良・酸化焰 ③1~2mmの砂粒混入	外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。紐作り。		
4	土 師 器 壺	覆 土	① (24.0) ② — ③ — ④口縁部	①にぶい棕色 ②良・酸化焰 ③1~3mm砂粒多混	外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。紐作り。		
5	土 師 器 壺	切合い部 +20	① — ②3.8 ③ — ④底部	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は荒削り、内面胴部は荒撫で。紐作り。		
6	土 師 器 杯	中央 +2	①12.0 ②7.5 ③4.4 ④完形	①棕色 ②良・酸化焰 ③1~3mm砂粒多く混入	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗著しく、荒削り方向不明。		
7	土 師 器 杯	北西隅 床	①13.1 ②8.5 ③4.8 ④完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~3mm砂粒多く混入	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗が著しく、荒削り痕不明。		
8	土 師 器 杯	南壁より +28	①12.4 ②8.7 ③4.4 ④ほぼ完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒多く混入	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。厚手でどっしりとした感じ。		
9	土 師 器 杯	切合い部 -1	①12.8 ②8.5 ③3.9 ④欠	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗著しく、荒削り痕不明。厚手・どっしり。		
10	土 師 器 杯	南西 +24	①14.4 ②9.0 ③4.9 ④欠	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒多混	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗が著しく、荒削り痕不明。		
11	土 師 器 杯	中央 +37	①12.2 ②6.4 ③5.7 ④欠	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒多く混入	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。		
12	土 師 器 杯	カマド付 近+11	① (12.7) ②6.8 ③3.6 ④欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	器内・外面とも横撫で。底部荒削り。		
13	土 師 器 杯	カマド付 近+5	①12.9 ②8.5 ③ — ④欠	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗著しく、荒削り痕不明。		
14	土 師 器 杯	カマド付 近-2	① (15.0) ②8.8 ③4.6 ④口縁~底	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗しており、荒削り痕不明。厚手・どっしり。		
15	須 恵 器 杯	中央 +23	① (14.0) ②6.6 ③3.9 ④口縁~底	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	縦輪成形。底部は右回転糸切未調整。	二次焼成 痕あり。	
16	須 恵 器 高台付陶	中央 +29	①15.0 ②8.8 ③6.1 ④欠	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密(堅い)	縦輪成形。右回転。付高台。		
17	須 恵 器 皿	北西隅 床	①12.4 ②7.1 ③3.1 ④完形	①灰白色 ②良・還元焰 (軟質) ③緻密	縦輪成形。回転厚切後付高台。		
18	須 恵 器 蓋	重なり部 +10	① — ②6.4 ③ — ④欠	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	縦輪整形。		

6号住居跡 (PL21・67)

位置 本住居跡はⅡ区中央部Ea-64グリットを中心に4グリットにかけて位置している。2号住居跡とカマド部および北壁部で重複している。

平面形・規模 平面形は東西長5.50m、南北長5.84mのほぼ正方形を呈する。面積は32.12㎡と広い。残存壁高も70cm、場所によっては1m程の所もあり深

1 住居跡



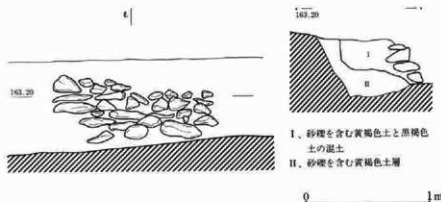
第54図 6号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

い。北壁が重複によって破壊されているが、主軸方位は推定するとN-0°~10°-Wをさすと思われる。

概要 2号住居跡によって北東部が切られている。2号住居跡の埋没土上部は浅間B軽石であったが、本住居跡にはB軽石が全く検出されていない。

埋没土は黒色土であった。柱穴が4本検出され、径30~40cmで深さは50cm程であった。溝溝と考えられる溝が東壁下から南壁下にかけて検出できた。南側床面に川原石の出土があったが、これは南側の石垣の崩壊と思われる。南壁中央部には石垣が積まれている。地山を削って小口に積んでいる。入口に関する施設と考えられるが、用途は不明である。なお、南側住居外に小さな柱穴2個が検出されているので、南壁の崩れの補強の意味もあろうが、入口関連の施設と考えられよう。



第55図 6号住居跡南側石垣実測図

床面は黄褐色土の地山の上に黒色土を敷いてつくられている。

カマドは2号住居跡によって切られているので、計測は不能である。

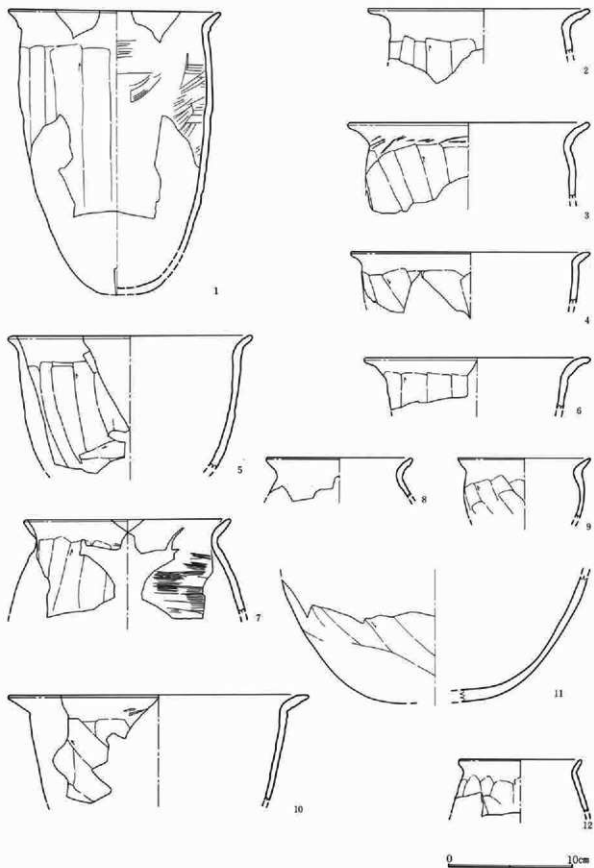
住居北西隅に後世のものであるが、動物の基壇があり、骨片が採取できた。

遺物 出土総数は5464点と多い。のうち須恵器は33点と少ない。壁高が70cmあり、保存状態が良かったので、遺物の量が多かった。

6号住居跡出土遺物観察表(1)

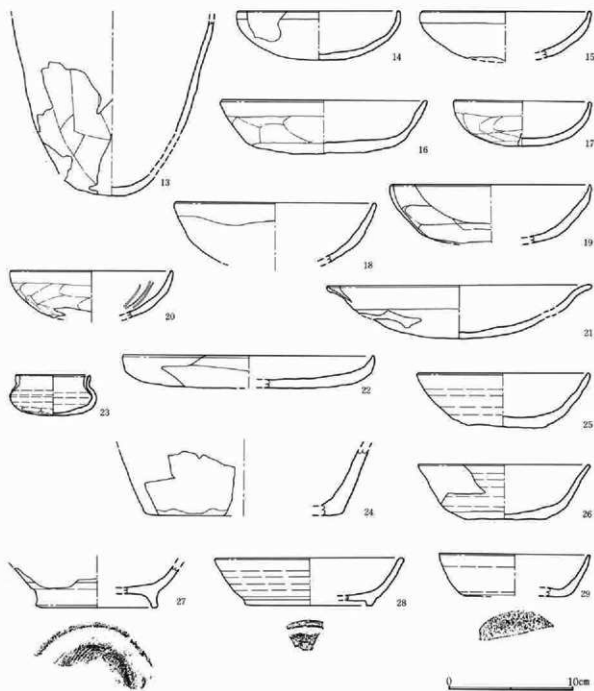
図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器器 壺	カマド前 +16	①(22.4) ②(4.6) ③29.7 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒多く混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は刷毛目整形。紐作り。摩耗箇所あり。	
2	土器器 壺	北東 床	①23.4 ②・③一 ④片(口縁ほぼ一周)	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋削で。紐作り。	
3	土器器 鉢	北東側壁 床	①25.5 ②一 ③一 ④片	①にょい橙色 ②良・酸化焰 ③1mm砂粒少量混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋削で。紐作り。	
4	土器器 鉢	中央 +8	①(25.7) ②一 ③一 ④口縁部片	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋削で。紐作り。	
5	土器器 壺	中央 +25	①(26.0) ②一 ③一 ④口縁部片	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋削で。紐作り。	
6	土器器 壺	中央 +15	①(24.0) ②一 ③一 ④片	①にょい赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋削で。紐作り。	
7	土器器 壺	中央 +18	①(22.0) ②一 ③一 ④片	①にょい赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋削で。紐作り。	

1 住居跡



第56图 6号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第57図 6号住居跡出土遺物実測図(2)

6号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
8	土 師 器 甕	中央 +18	① (15.6) ② - ③ - ④口縁部欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 荒撫で、紐作り。荒削り度は摩耗している。		
9	土 師 器 甕	中央 +6	① (14.0) ② - ③ - ④口縁部欠	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 撫で、紐作り。		

1 住居跡

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
10	土 師 器 壺	中央	① (32.0) ② - ③ - ④ $\frac{1}{16}$	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は筒削り、口縁部は横無で、内面割部は 寛無で、紐作り。	
11	土 師 器 大 壺	中央 +37	① - ② - ③ - ④底部	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	外面割部は筒削り、口縁部は横無で、内面割部は 寛無で、紐作り。	
12	土 師 器 壺	中央 +35	① (13.0) ② - ③ - ④口縁部 $\frac{1}{2}$	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	外面割部は筒削り、口縁部は横無で、内面割部は 寛無で、紐作り。	
13	土 師 器 壺	中央 +16	① - ②3.0 ③ - ④割一直	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒少量混入	外面割部は筒削り、内面割部は寛無で、紐作り。	
14	土 師 器 環	北西 +21	①(13.5) ②(3.0) ③3.9 ④ $\frac{1}{2}$	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒少量混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、 摩耗している。	
15	土 師 器 環	中央 +23	① (15.6) ② - ③ - ④ $\frac{1}{2}$	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、 摩耗が著しく、筒削り痕不明。	
16	土 師 器 環	北西 +58	①(15.4) ②(11.7) ③4.3 ④ $\frac{1}{2}$	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒多く混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、	
17	土 師 器 環	中央 +26	①(11.0) ②(3.0) ③3.6 ④ $\frac{1}{2}$	①にぶい橙色 ②良・酸 化焰 ③1~2mm砂粒少量	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、	
18	土 師 器 環	北東 床	① (16.0) ② - ③ - ④ $\frac{1}{2}$	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、 摩耗している。	二次焼成 痕あり。
19	土 師 器 環	中央 +21	① (16.0) ② - ③ - ④ $\frac{1}{2}$	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒少量混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、	二次焼成 痕あり。
20	土 師 器 環	中央 +7	① (13.0) ② - ③ - ④ $\frac{1}{2}$	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒多く混入	体部・底部は筒削り、口縁部は横無で、器内面は 暗文磨き。	
21	土 師 器 皿	中央 +17	① (21.0) ② - ③4.2 ④ $\frac{1}{2}$	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③1mm以下砂粒多量	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横無で、 表・裏とも摩耗が著しい。	
22	土 師 器 皿	北西隅 床	①(20.0) ②(13.0) ③ (3.0) ④ $\frac{1}{2}$	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒多く混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は無で、	
23	須 恵 器 短 頸 壺	南東 床	① (8.0) ② - ③ (4.3) ④口一直	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	轆轤成形。体部下手は筒削り。	
24	須 恵 器 鉢	北西 +55	① - ② (21.4) ③ - ④割一直	①褐灰色 ②良・還元焰 ③緻密	内面無で、外面筒削り。	
25	須 恵 器 環	北西 +20	① (13.6) ②6.4 ③4.3 ④ $\frac{1}{2}$	①灰白色 ②軟質・還元 焰 ③1mm程の砂粒混入	轆轤成形。右回転糸切未調整。摩耗が著しい。	
26	須 恵 器 環	-	①(13.6) ②(6.2) ③4.3 ④ $\frac{1}{2}$	①灰色 ②良・還元焰 ③砂粒少量混入	轆轤成形。底部糸切後調整。	
27	須 恵 器 高台付埴	中央 +46	① - ② (9.6) ③ - ④底部 $\frac{1}{2}$	①褐灰色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	轆轤成形。糸切後付高台。	
28	須 恵 器 高台付埴	中央 +35	①(15.0) ②(10.0) ③ (3.8) ④口一直	①暗灰色 ②良・還元焰 ③緻密	轆轤成形。糸切後調整。削り出し高台。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

6号住居跡出土遺物観察表(3)

図 No	土器類 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④底径	①色調②焼成③胎土	成 形・ 整 形 の 特 徴	備 考
29	須 恵 器 坏	中央 +57	①(12.0) ②(6.0) ③3.3 ④口縁~底	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	楕圓成形。底部は寛調整。		

7号住居跡 (PL21・67・68)

位置 本住居跡Ⅱ区東側のDo-62、Dp-62グリットに位置する。北側に4・5号住居跡、東側に8・12号住居跡がある。

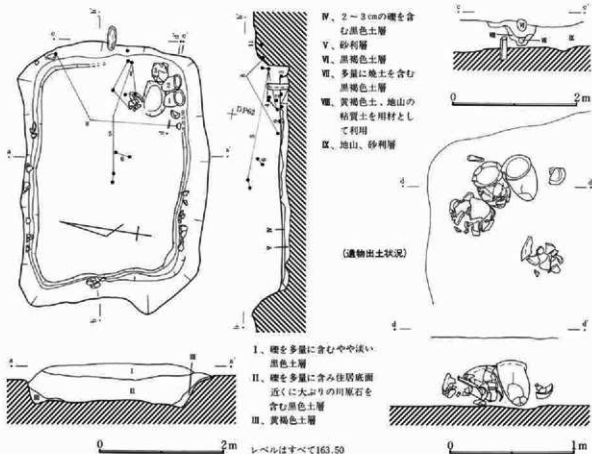
平面形・規模 平面形は東西長3.78m、南北長2.86mの東西に長い長方形を呈する。面積は約8.34m²と狭い。主軸方位は推定であるが、N-80°-Eくらいをさすと思われる。

概要 本住居跡は黒色土中の確認ができず、その下の砂利層で確認された。埋没土は主に黒色土で、中に大きな川原石が含まれていた。周溝が壁下を一

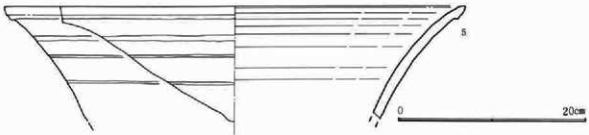
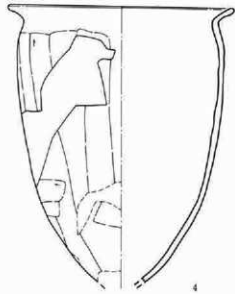
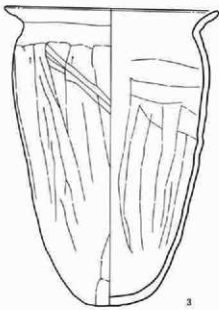
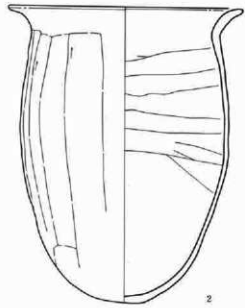
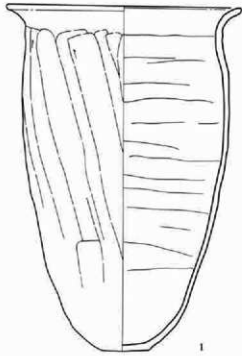
周しているのが検出できた。住居南東隅にはほぼ完形の礎が3個体、壁に立てかけるような形で検出できたが、その他の施設の残存状況は非常に悪い。壁面は疎層で、くずれやすい。

床面は自然堆積の砂利層中に小礫を含む黒色土を敷いてつくられている。

カマド 住居東側の床に立石があり、これを支柱石と考え、東カマドで、住居床側に張り出す型式と考えた。また東壁に焼土の痕跡もあり、東カマドと断定してあやまりないと考える。ただし破壊が著し

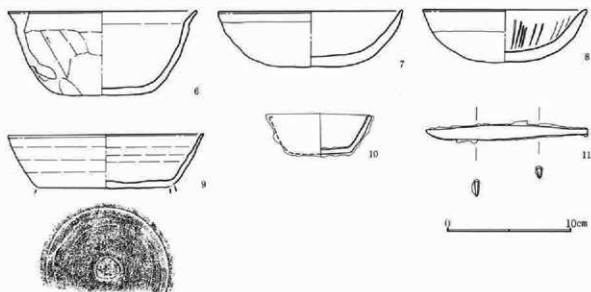


第58図 7号住居跡実測図



第59図 7号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第60図 7号住居跡出土遺物実測図(2)

いので、使用材・計測値は不明である。

回転篋切りの須恵器坏9)、鉄器の坏跡が出土してい

遺物 出土総数は628点である。そのうち須恵器は

る。

13点である。完形の変(1~3)が出土している。

7号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壺	南東隅 床	①24.5 ②5.0 ③36.1 ④完形	①黒褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。組作り。内面回転篋整形。		
2	土 器 壺	南東隅 床	①24.6 ②— ③31.0 ④完形	①黒褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。組作り。		
3	土 器 壺	南東隅 床	①22.4 ②— ③31.1 ④完形	①黒褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。組作り。		
4	土 器 壺	東壁より +29	① (23.6) ②— ③— ④片	①黒褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下砂粒少量混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。組作り。		
5	須 恵 器	東側 +27	① (48.6) ②— ③— ④口縁部欠	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	轆轤整形。		
6	土 器 鉢	中央 +22	①(16.2) ②(8.4) ③8.8 ④片	①黒褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下砂粒少量混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。組作り。		
7	土 器 坏	—	① (14.6) ②6.0 ③4.4 ④片	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒少量混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗しており、量測り値不明。		
8	土 器 坏	南東 床	① (13.0) ②(4.0) ③ (4.1) ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は暗文磨き。 厚手。		
9	須 恵 器 高台付坏	南東隅 床	①15.6 ②11.0 ③4.2 ④片	①黒褐色 ②良・還元焙 ③緻密	轆轤成形。回転篋切り調整。		

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
10	鉄 器	北側 +5	①8.6 ②3.4 ③4.9 ④残形			焼	
11	鉄 器	北側 +32	長さ12.8 巾1.1 厚さ0.25			刀子	

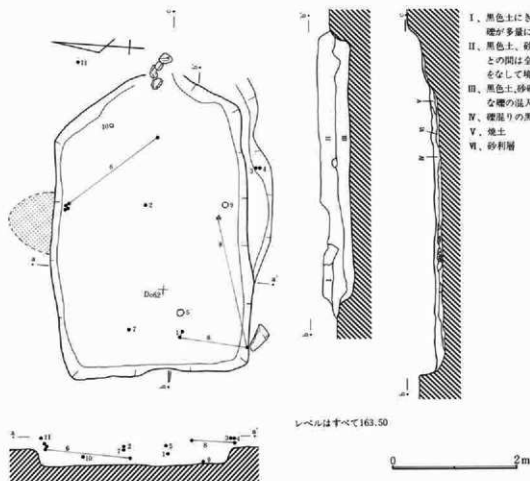
8号住居跡 (PL22・68)

位置 本住居跡はII区東側Dn-61・62グリットに位置している。西に7号住居跡、北に12号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長3.72m、南北長2.86mの東西に長い長方形を呈する。面積は約11.60㎡。残存壁高は2.5～6cmと低い。主軸方位は推定N-85°-E程と思われる。

概要 7号住居跡と同様、黒色土中の確認ができず、砂利層での確認であった。埋没土は主に礫を含む黒色土であり、壁面は砂礫層で自然堆積層がそのまま検出された。柱穴、その他の施設は検出されなかった。

床面は自然堆積の砂利層の上に礫混じりの黒色土を敷いてつくられている。



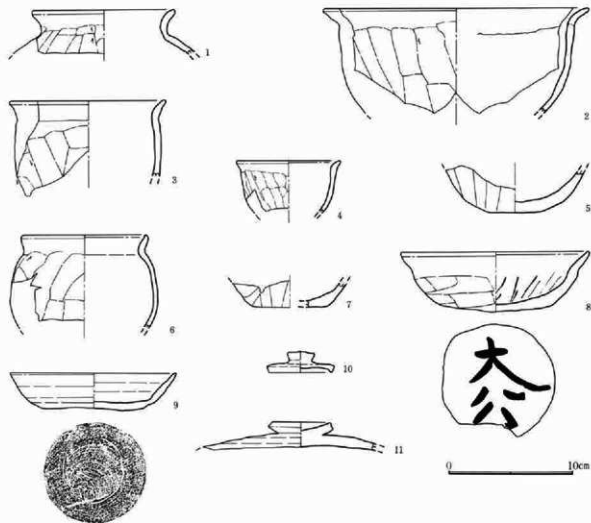
第61図 8号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

カマド 最初、確認面で北壁中央部に焼土があつてカマドとしたが、焼土下の北壁はふつうの壁と変わりなく、壁につくりかけられた痕跡が認められなかった。東壁中央部に焼土が残る部分があり、調査の結果、石組も検出されたが、破壊が著しくカマドの原形をとどめていなかった。しかし、こちらの方

をカマドとした。7号住居跡と異なり、燃焼部を壁の外にもつ型式と考えられる。焚口幅等計測は不能であった。

遺物 出土総数は711点である。そのうち須恵器は10点と少ない。墨書の土師器坏(図8)「大公」が出土している。



第62図 8号住居跡出土遺物実測図

8号住居跡出土遺物観察表(1)

図No	土師器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	西側 +22	①(15.0) ③—	②— ④口縁	①橙色 ②良・酸化相 ③1mm以下細砂粒少量混	外面胴部は旋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 旋削り。	
2	土師器 鉢	中央 +25	①(24.0) —	②— ④片	①にぶい橙色 ②良・酸 化相 ③緻密	外面胴部は旋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 旋削り。	

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 (cm) ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	土 師 器 壺	南東 +44	① (16.6) ② — ③ — ④口~胴	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は旋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 荒撫で。紐作り。	
4	土 師 器 壺	南東 +44	① (10.5) ② — ③ — ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③ 1mm以下の砂粒混入	外面胴部は旋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 荒撫で。紐作り。	
5	土 師 器 壺	西側 +28	① — ②5.4 ③ — ④底部	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③ 1~3mm砂粒多く混入	外面胴部は旋削り、内面胴部は荒撫で。紐作り。 厚手。	
6	土 師 器 壺	カマド内 +26	① (13.0) ② — ③ — ④片	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③ 1mm程の砂粒混入	外面胴部は旋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 荒撫で。紐作り。	
7	土 師 器 壺	西側 +30	① — ② (8.3) ③ — ④底部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③ 1mm以下の細砂粒混入	外面胴部は旋削り、内面胴部は荒撫で。紐作り。	
8	土 師 器 坏	西側 +20	①14.0 ②8.6 ③4.7 ④欠	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③ 1mm程砂粒少量混	体部・底部は旋削り、口縁部・器内面は横撫で後 研文。	底部黒書 「大公」
9	須 恵 器 壺	南側 +27	①13.2 ②8.0 ③2.7 ④光形	①幅広い色 ②良・還元焰 ③ 1mm程の砂粒混入	縦輪成形。右肩転永切後、周縁回転調整。	
10	須 恵 器 壺	北東 +15	①5.0 ②2.1 ③1.7 ④光形	①幅広い色 ②良・還元焰 ③ 1mm以下砂粒少量混入	縦輪整形。	
11	須 恵 器 壺	住居外	① — ②4.5 ③2.0 ④欠	①黄灰色 ②良・還元焰 ③ 1mm以下砂粒少量混入	縦輪整形	降灰による 自然胎

9号住居跡 (PL22・69)

位置 本住居跡はII区中央部南側のDq-57・58グリットに位置する。5号掘立柱建物跡と重複している。周囲には他に3・6・7・8・10号掘立柱建物跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長3.04m、南北長3.28mの正方形に近い形を呈する。面積は約8.14㎡。残存壁高は40cm程である。主軸方位はN-90°-Eで真東をさす。

概要 遺構確認面は黄褐色土層で、埋没土は主に黒色土であった。黒色土を除くと、川原石の投げ込みが見られ、大きなものでは、30cm×60cmという石もあった。その中に礫は混じってはず、川原石の周囲は黒色土ということで、やはり人為的な投げ込みと断定した。

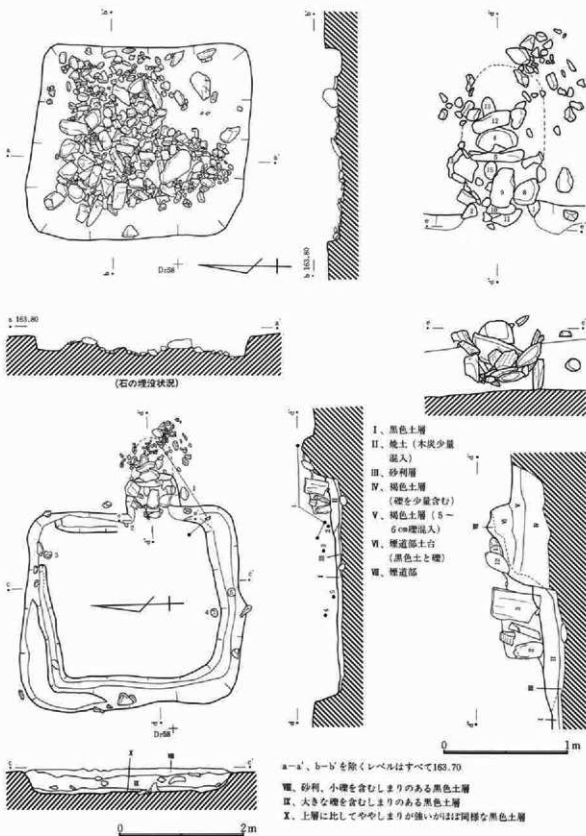
床面は、自然堆積の砂利層の上に黒色土を敷いていたと思われるが、砂利層の露出している部分も見られた。

周溝が幅20cm、深さ4~5cmで、ほぼ一周している。また、北西隅に棚状の遺構が検出できたが、特に用途を示唆する遺物の出土はなかった。

カマド カマドは東壁を掘り込んで築かれていた。袖石が壁の縁にそろう、燃焼部が床の外へ出る型式である。燃焼部に石材の崩落が見られたが、概的残存状況は良好であった。壁面全面に川原石を立て、黄褐色土をつめ、据えている。川原石の大きな石は上部を欠いて、カマド壁の高さをそろえていた状況がうかがえる。天井部にも石材を使用していたと考えられる。煙道部は黒色土と礫で下部をつくり、上部は石でふたをし、煙出し付近では土器を置いて利用していたと思われる。焚口幅40cm、燃焼部長40cm、煙道部長現存で50cmを計る。

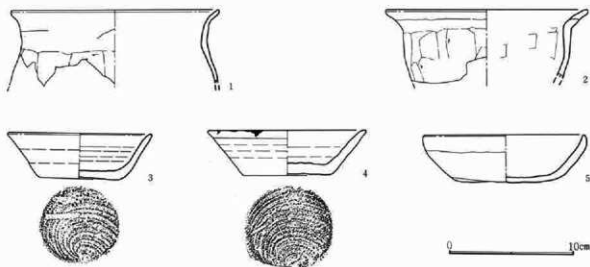
遺物 出土総数は842点である。そのうち須恵器は15点と少ない。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第63図 9号住居跡実測図

1 住居跡



第64図 9号住居跡出土遺物実測図

9号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②胎成③粘土	成形・整形の特徴	備考
1	土 師 器 壺	南東 +26	①12.0 ②— ③— ④口片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状に近い口縁部。外面胴部は瓦削り、 口縁部は横撫で、内面胴部は整面で、紐作り。	
2	土 師 器 鉢	カマド前 +12	①(11.4) ②— ③— ④口片	①褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混入	外面胴部は瓦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 整面で、紐作り。器内あれていいる。	
3	須 恵 器 坏	北東 +1	①11.4 ②6.5 ③3.5 ④ほぼ完形	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混	縦軸成形。右回転糸切未調整。	
4	須 恵 器 坏	南側 +6	①12.5 ②7.0 ③3.4 ④片	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混	縦軸成形。右回転糸切未調整。	
5	土 師 器 坏	南壁ぎわ +8	①12.8 ②8.4 ③3.8 ④完形	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は瓦削り、口縁部・器内面は横撫で。 表面が摩耗していて、瓦削り痕が消えている。	

10号住居跡 (PL23・69)

位置 本住居跡はⅡ区中央部南側のDs-59、Dt-59グリットに位置する。4号掘立柱建物跡と重複し南側には、11号・13号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長3.64m、南北長2.38mの東西に長い長方形を呈する。面積は7.70㎡。残存壁高は30cm。主軸方位はN-7°-Eをさす。

概要 遺構確認面は黄褐色土層で、すぐ下には深層が入りこみ、壁は露が露出している。埋没土は主に黒色土である。柱穴は確認できなかつたが、東南

隅に径80cm、深さ35cmのピットが検出できた。貯蔵穴としては位置がやや不自然であるが、貯蔵穴とした。4号掘立柱建物跡によって、西側壁が一部破壊されている。

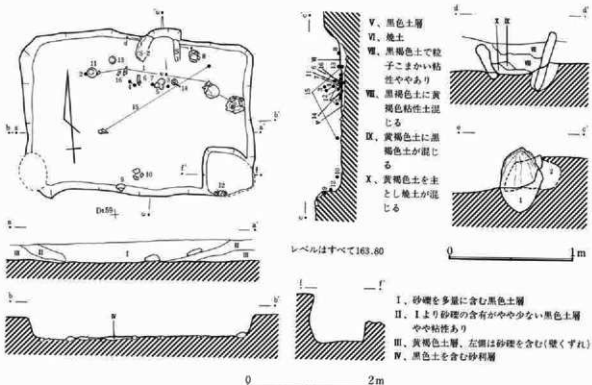
床面は自然堆積の砂利層の上にくすくす黒色土を敷いてつくっている。

カマド 北壁中央部につくられている。平石一枚で袖部分を構成する珍しいつくりである。平石を半分近くうめて据え、この石を芯にして、粘土をは

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

たと思われるが、石材は2石のみ使用ということになる。その石の大きさをだけ床割に張り出す形をとっている。焚口幅50cm、燃焼部長38cmを計る。

遺物 出土総数は476点である。須恵器は2点と少ない。回転寛削りの須恵器の坏、紡錘車の出土がある。

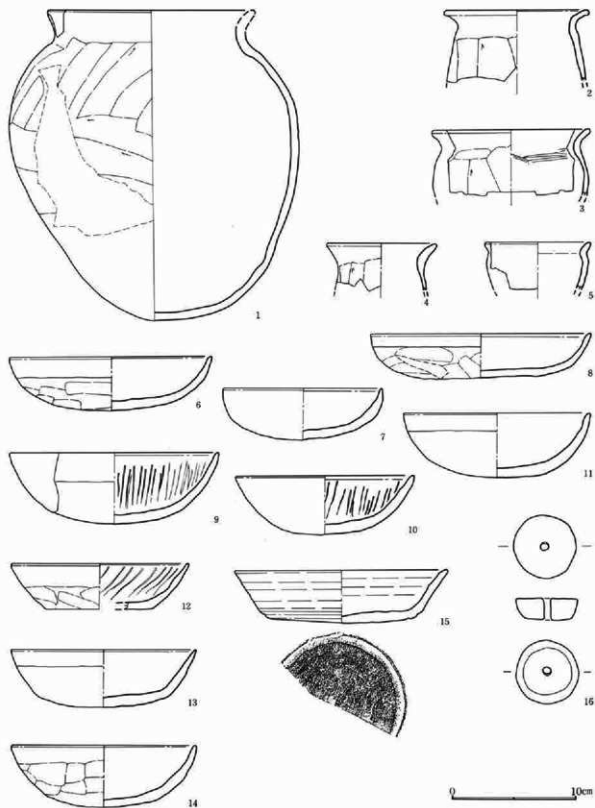


第65図 10号住居跡実測図

10号住居跡出土遺物観察表(1)

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器器 壺	東壁より 床	①21.8 ③37.6	②— ④×	①褐色 ②良・酸化焙 ③1~3mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 横撫で。紐作り。	左右非対 称
2	土器器 壺	北西 +3	①(14.8)	②— ③— ④口縁部×	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 横撫で。紐作り。	
3	土器器 壺	カマド前 床	①(16.4)	②— ③— ④口縁部×	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下細砂粒少量混	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 横撫で。紐作り。	
4	土器器 壺	カマド前 +8	①(11.4)	②— ③— ④口縁部×	①明赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 横撫で。紐作り。	
5	土器器 壺	カマド前 +2	①(11.0)	②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の細砂粒混入	外面割部は寛削り(摩耗している)、口縁部・内面 割部とも横撫で。	
6	土器器 坏	カマド前 +3	①16.0 ③4.2	②8.6 ④ほぼ完整	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の細砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
7	土器器 坏	カマド前 +3	①12.6 ③4.1	②— ④完整	①明赤褐色 ②良・酸化焙 (軟質) ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗が著しく、量削り度が不明。	

I 住居跡



第66图 10号住居跡出土遺物実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

10号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②高さ ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 型 形 の 特 徴	備 考
8	土 器 器 種 環	カマド 東側 床	①19.4 ②11.0 ③3.4 ④×	①赤褐色 ②良・酸化層 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は蓋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
9	土 器 器 種 環	南壁 +21	①(16.6) ②9.7 ③5.6 ④×	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化層 ③緻密	体部・底部は蓋削り、口縁部・器内面は横撫で後 磨文。蓋削り痕が摩耗。どっしりした感じ。	
10	土 器 器 種 環	南壁ぎわ +1	①14.2 ②7.7 ③4.6 ④×	①赤褐色 ②良・酸化層 ③緻密	口縁部・体部・底部は蓋削り、器内面は横撫で後 磨文。どっしりした感じ。	
11	土 器 器 種 環	北西 +2	①15.0 ②4.0 ③5.1 ④完形	①褐色 ②良・酸化層 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は蓋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗していて蓋削り痕不明。	
12	土 器 器 種 環	北東隅 +7	①(14.0) ②(8.4) ③3.6 ④×	①褐色 ②良・酸化層 ③1mm以下の細砂粒混入	体部・底部は蓋削り、口縁部・器内面は横撫で後 磨文。	
13	土 器 器 種 環	中央 +3	①14.6 ②10.7 ③4.4 ④完形	①褐色 ②良・酸化層 (軟質) ③1mm程砂粒混	体部・底部は蓋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗している。	
14	土 器 器 種 環	カマド前 +1	①14.6 ②— ③4.9 ④完形	①褐色 ②良・酸化層 (軟質) ③緻密	体部・底部は蓋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗が著しい。	内部炭化 物付着
15	須 恵 高台付環	カマド前 床	①(17.0) ②11.9 ③4.2 ④×	①灰色 ②良・還元層 ③緻密	横撫成形。底部既調整、削り出し高台。	
16	紡 錘 車	カマド前 +4	上径4.8 底径3.7 ③1.6 ④完形		滑石製。	

11号住居跡 (PL23・70)

位置 本住居跡はII区中央部Dt-57・58グリットに位置する。13号住居跡が北西隅を切っている。4号掘立柱建物跡も北壁に重複しているが、やはり11号住居跡よりも新しい。

平面形・規模 平面形は東西長4.50m、南北長4.10m、東西長がやや長い。実際には、ほぼ方形と考えられる。面積は15.40㎡。残存壁高は50cmを計り、遺物残存状況も比較的良好であった。主軸方位はN-9°-E。

概要 この付近の遺構確認面は黄褐色土と砂利層の部分があり、東側は砂利層である。埋没土は主に黒色土であった。20～30cmの大ぶりの礫の投げ込みがあり、その間に土器片が出土するという状況を呈していた。

柱穴は4本確認できた。径20cmで深さは25～30cmであった。その他の施設は確認できなかったが、西

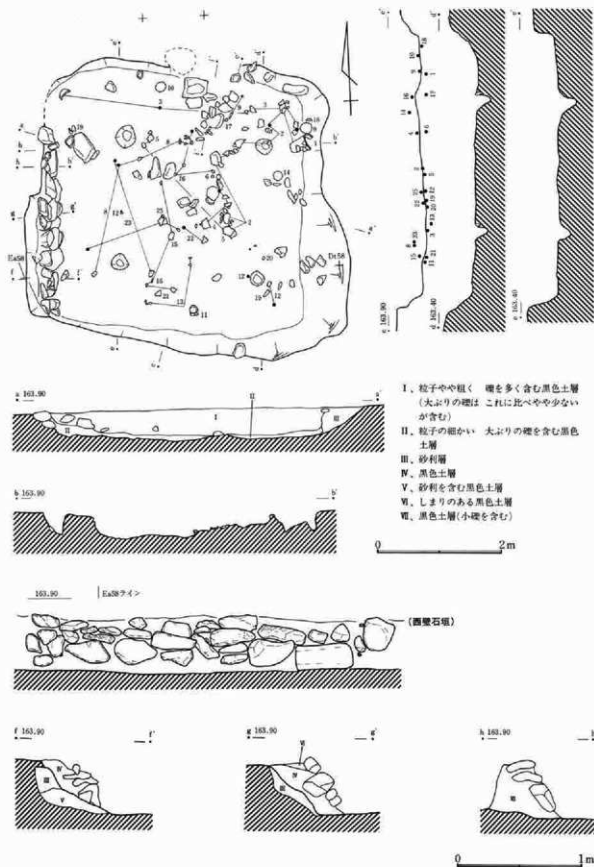
壁には2～3段の石垣が組まれていた。地山が砂利層で崩れが著しいので、それを防ぐために築いたと思われる。いずれも自然石の川原石を壁面に約50°の勾配をつけて組んでいる。他の壁も崩れが見られたが、石垣は西壁のみであった。

床面は掘り方とほぼ一致している。

カマド カマドは北壁につくられていた。袖部分は粘土でつくられており、床側に張り出す型式である。奥壁上部から煙道部にかけて焼けている石もあるので、主に粘土でつくられているが、石も使用している。北壁の自然堆積層である砂利層に粘土をあてて奥壁をつくり、石と土器破片で煙道部へ至る穴を構成していると考えられる。焚口幅35cm、燃焼部長40cmである。粘土袖部高は現存で約20cm程を計る。

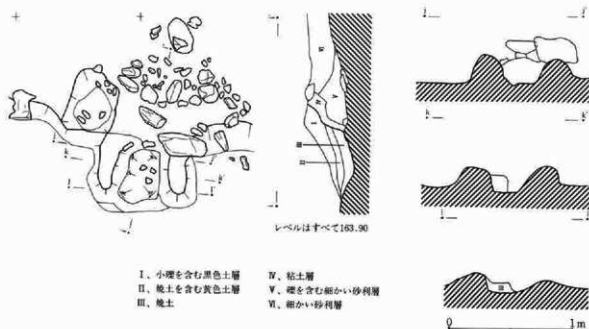
遺物 出土総数は603点である。須恵器は5点と少ない。埴と共に甕が2個体他に環・蓋等出土してお

1 住居跡



第67図 11号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

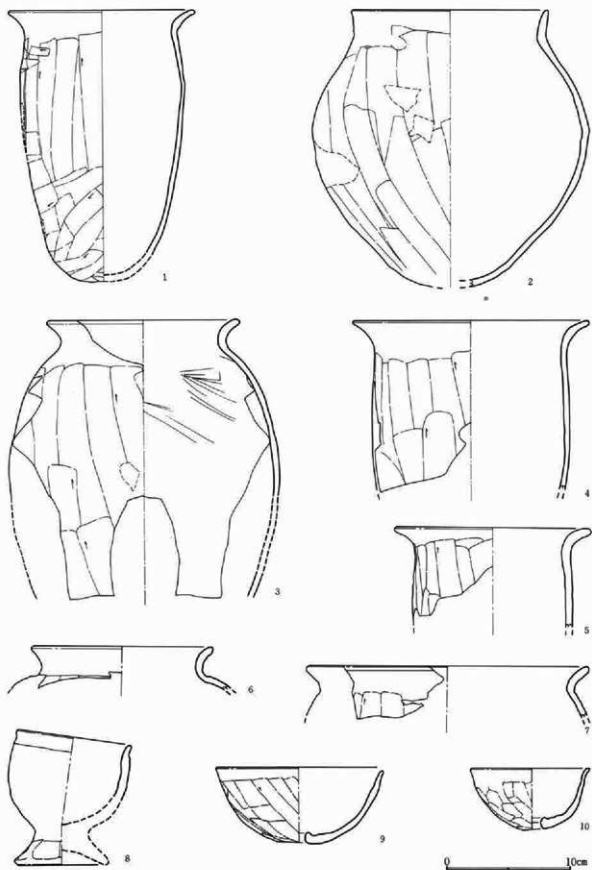


第68図 11号住居跡カマド実測図

り、住居跡のセットとして残存状況が良い住居といえる。

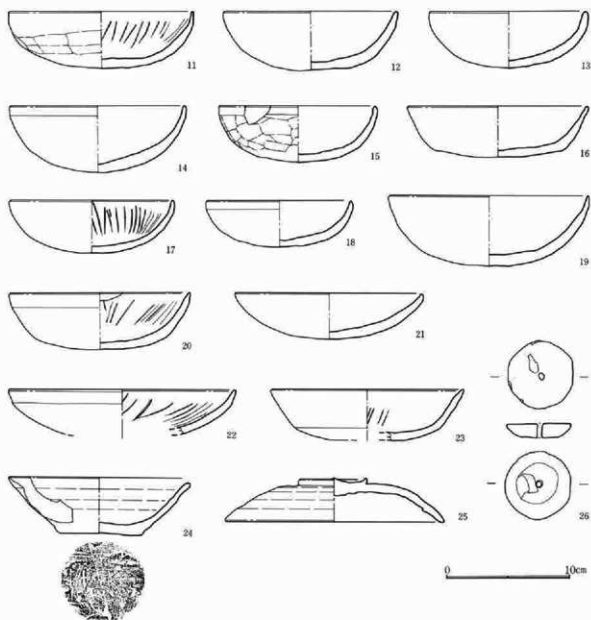
11号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径 ②底径 ③高さ ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	北東壁 びわ床	①20.0 ③28.5	②6.7 ④ほぼ定形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mmの砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
2	土 師 器 壺	中央 +3	①21.0 ③(29.3)	②— ④片	①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③1~2mm砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
3	土 師 器 壺	北東隅 +1	①(20.6) ③—	②— ④片	①橙色 ②良・酸化焰 ③2~3mm砂粒多く混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
4	土 師 器 壺	中央 +16	①(25.0) ③—	②— ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	二次焼成 痕あり。
5	土 師 器 壺	中央 床	①(21.0) ③—	②— ④口縁~胴	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
6	土 師 器 壺	中央 +3	①(19.4) ③—	②— ④口縁部	①によい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
7	土 師 器 壺	—	①(30.0) ③—	②— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
8	土 師 器 台付壺	カマド前 +4	①12.2 ③14.4	②10.0 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は横撫で、胴部は寛削り。内面割部は 寛撫で。器面が荒れている。厚手。	



第69図 11号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第70図 11号住居跡出土遺物実測図(2)

11号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①棕色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の細砂粒混入	成形・整形の特徴	備考
9	土器 甕	カマド付 近+10	①19.6 ②4.9 ③8.0 ④完形	①棕色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の細砂粒混入	外面胴部は荒削り、口縁部・内面胴部ともに横撫で。紐作り。	二次焼成 痕あり。
10	土器 甕	カマド付 近+6	①12.5 ②3.0 ③6.5 ④完形	①棕色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の細砂粒混入	外面胴部は荒削り、口縁部・内面胴部とも荒撫で。紐作り。	二次焼成 痕あり。
11	土器 坏	南側 +1	①14.8 ②— ③4.5 ④ほぼ完形	①棕色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で。	

1 住居跡

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
12	土 師 器 環	中央 +19	①14.0 ②— ③4.6 ④ほぼ完形	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、篋削り痕不明。	
13	土 師 器 環	中央 +17	①12.7 ②— ③4.5 ④ほぼ完形	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③1mm程砂粒混	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、篋削り痕不明。	
14	土 師 器 環	東側 +29	①(14.0) ②— ③5.2 ④%	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗している。	
15	土 師 器 環	中央 +2	①12.6 ②— ③4.4 ④%	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③1mm程砂粒混	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
16	土 師 器 環	中央 +11	①(14.4) ②— ③4.1 ④%	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗している。	
17	土 師 器 近 床	カマド付 近 床	①(13.0) ②— ③(4.1) ④口~底	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面篋削り(摩耗が著しい)、内面暗文。	
18	土 師 器 環	北東壁ぎ わ+3	①11.6 ②— ③3.6 ④%	①明赤褐色 ②良・酸化 焰(やや軟質) ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗している。	
19	土 師 器 環	東側 +9	①(16.0) ②— ③5.5 ④%	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗が著しい。	
20	土 師 器 環	中央 +3	①(14.4) ②— ③(4.5) ④%	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。内・外面とも摩耗が著しい。	
21	土 師 器 環	南側 +3	①(15.0) ②— ③3.6 ④%	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③1~2mm砂粒混	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗している、篋削り痕不明。	
22	土 師 器 環	中央 +4	①(18.0) ②— ③— ④%	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
23	土 師 器 環	中央 +16	①(15.6) ②(6.0) ③(4.0) ④%	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗著しいが、暗文がわずかに残る。	
24	須 恵 器 環	—	①(14.4) ②6.8 ③4.5 ④%	①暗灰色 ②良・還元焰 ③1~2mm砂粒わずか混入	輪縁成形。左回転糸切未調整。	
25	須 恵 器 蓋	中央 +14	①17.4 横5.4 ③3.5 ④%	①灰色 ②良・還元焰 ③1~2mm砂粒わずか混入	輪縁整形。カエリがつく。	
26	紡 錘 車	—	上径5.1 底径3.3 ③1.1 ④完形		滑石製。	

12号住居跡(PL24・71)

位置 本住居跡はII区東側Dn-61・62、Do-61・62グリットに位置する。西側に4号・5号住居跡、南側に7号・8号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長3.28m、南北長3.74mの南北にやや長い長方形を呈する。面積は11.76㎡。残存壁高は20~30cmと比較的浅い。主軸方位は

N-80°-Eと真東よりやや北寄りである。

概要 砂利層中の確認で、埋没土は5~6cmの礫を多く含む黒色土である。カマド前を中心に床面が固く、レンガ色に焼けていた。また、その付近の石にひびが入って欠けているものもある。南西部には炭化した材の出土も見られたことから、本住居跡は

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

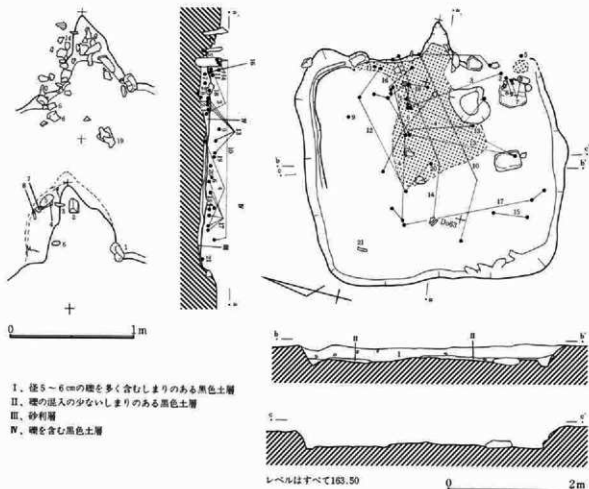
焼失家屋と考えられる。住居跡南東隅に40×50cmの扁平な石が置かれていた。カマドの横という場所からすると調理関係の用途が考えられる。また、中央部南寄りに用途不明の石(30×40cm厚み27.8cm)が据えられていた。柱穴、その他の施設は確認されていない。

床面はレンガ色に焼けた部分とそうでない凹凸の部分があった。礫を含む黒色土を客土して床をつくっていたが、下部の自然堆積の砂利層が露出してしまった部分も認められた。

カマド 東壁を切ってつくられている。袖石が東壁にそろう位置で検出されていることから、燃焼部

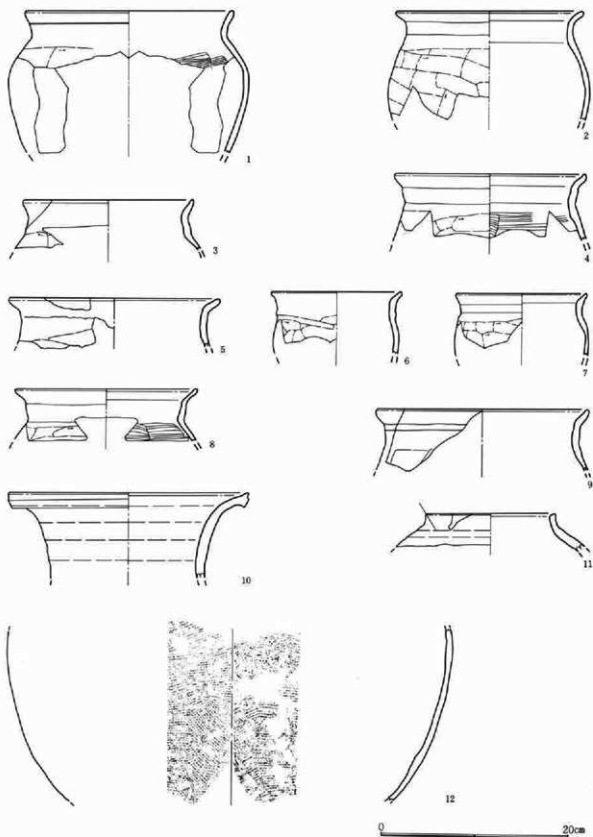
が壁外側に出る型式である。破壊が著しく原形を留めていないが、川原石を使用している型式と思われる。支柱石と思われる石が、燃焼部やや奥に残っていた。壁石も2石検出された。壁石は砂利層に粘土をはって固定している。その粘土を通して、砂利層まで熱が通り赤く焼けていた。焚口幅は現存で40cm、燃焼部長は17cmである。

遺物 出土総数は1213点と多い。うち須恵器は、129点と他に比較すると多くなってきている。磁石・鉄器・木器と種類も多い。木器(図26)は本遺跡内唯一のもので、その形状から先の折れた櫛と考えられる。(IV. 6(6)参照)



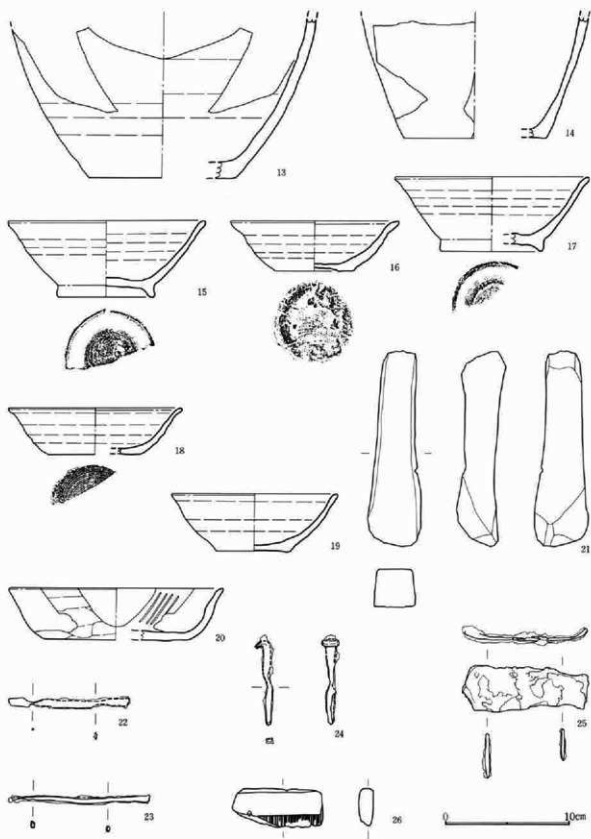
第71図 12号住居跡実測図

1 住居跡



第72図 12号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第73図 12号住居跡出土遺物実測図(2)

12号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 甕	カマド前 +1	① (12.0) ② - ③ - ④口縁部欠	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。「コ」の字状口縁に近い。	二次焼成 痕あり。
2	土 師 器 甕	南東隅 +7	① (19.8) ② - ③ - ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
3	土 師 器 甕	中央 +4	① (9.9) ② - ③ - ④口縁部欠	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
4	土 師 器 甕	中央 +4	① (20.0) ② - ③ - ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横撫で、内面割部は柳状器具撫で。	
5	土 師 器 甕	南東隅 +28	① (12.0) ② - ③ - ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	ほぼ「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁 部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	二次焼成 痕あり。
6	土 師 器 甕	カマド前 +8	①13.6 ② - ③ - ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
7	土 師 器 甕	南東 +12	① (13.8) ② - ③ - ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	二次焼成 痕あり。
8	土 師 器 甕	—	① (19.2) ② - ③ - ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	
9	土 師 器 甕	北側 +6	① (22.4) ② - ③ - ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
10	須 志 器 甕	東側 +13	① (25.4) ② - ③ - ④口縁部	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	縦横整形。	
11	須 志 器 甕	中央 +17	① (12.8) ② - ③ - ④口縁部欠	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦横整形。	
12	須 志 器 甕	カマド前 +13	① - ② - ③ - ④胴部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	外面平行叩き目。内面背側叩き目。平行叩き目。	
13	須 志 器 甕	中央 +6	① - ② (15.4) ③ - ④底部	①黒褐色 ②良・還元焰 ③1mm以下の砂粒混入	縦横整形。	
14	須 志 器 甕	中央 +6	① - ② (15.0) ③ - ④胴一底片	①褐灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横撫で。	
15	須 志 器 高台付椀	南西 +4	① (15.6) ② (7. 6) ③6.9 ④欠	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程度砂粒少量混入	縦横成形。永切袷高台貼付。器内外とも摩耗が 著しい。	
16	須 志 器 坏	東側 +12	① (13.4) ②6.3 ③3.9 ④欠	①黒色・一部灰色 ②良 ・還元焰 ③1mm砂少量混	縦横成形。	
17	須 志 器 高台付椀	西側 +12	①15.4 ② (8.2) ③5.8 ④欠	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	縦横成形。永切り後付高台。	
18	須 志 器 坏	中央 +12	① (13.8) ② (7. 6) ③3.6 ④欠	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	縦横成形。底部回転糸切未調整。	
19	須 志 器 坏	カマド内	① (13.2) ②6.0 ③4.5 ④欠	①黒色 ②良・還元焰 ③緻密	回転糸切未調整。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

12号住居跡出土遺物観察表(2)

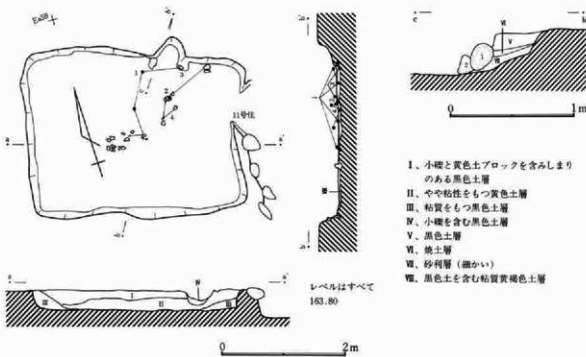
図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②高さ ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
20	土 器 環	中央 +7	①(17.0) ②(11.7) ③4.1 ④欠	①赤褐色 ②良・酸化焼 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横無で、 環文。	
21	砥 石	北西 +4	上市2.5 下巾3.3 ③0.0 ④ほぼ完形	① - ② - ③ -	上面のみ使用。火を受け6ヶに割れている。	砥沢石
22	鉄 器	北西隅 +15	長さ9.5 幅0.4 厚さ0.1		釘	
23	鉄 器	中央 +5	長さ10.8 幅0.4 厚さ0.3		釘	
24	鉄 器	北東 床	長さ6.5 幅0.6 厚さ0.4		釘	
25	鉄 器	北東 床	長さ10.0 幅3.5 厚さ0.7		鎌	
26	木 器	住居内 覆土	長さ4.9 幅2.0 厚さ0.8		櫛の破片	

13号住居跡 (PL24・71・72)

位置 本住居跡はⅡ区中央部Dt-58、Ea-58グリットにかけて位置する。11号住居跡に重複し、11号住居跡より新しい。また、4号獨立柱建物跡の柱穴が埋没土中より確認されていることから、この掘

立柱建物跡よりも古い。

平面形・規模 平面形は東西長3.52m、南北長2.74mの東西に長い長方形を呈する。面積は7.61㎡。残存壁高は30cm程である。主軸方位はN-31°-Eをさ



第74図 13号住居跡実測図

1 住居跡

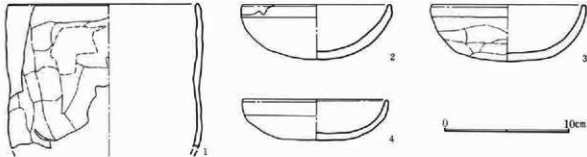
す。

概要 遺跡確認面は黄褐色土中で、付近は砂礫層であるが、本住居跡の周囲は砂礫層の堆積は認められなかった。したがって、壁はやや粘質の黄褐色土であり、埋没土は小礫や黄褐色土を含む黒色土であった。柱穴その他の施設は検出されなかった。

床面は自然堆積層の上に4～5cmの黒色土と粘質黄褐色土の混土を敷いてつくられている。

カマド カマドは北壁を切って築かれているが、袖部が床側にも張り出しており、燃烧部が壁と床側と半々になる型式となっている。袖部には川原石の転石を2石立てて使用し、周囲に粘土をはっている型式をとっている。焚口幅は34cm、燃烧部長28cmを計る。

遺物 出土総数は109点と少ない。須恵器は坏片が1個のみである。



第75図 13号住居跡出土遺物実測図

13号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 (cm) ③器表④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 鉢	カマド前 +9	①21.2 ②— ③— ④口~胴	①黄褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	内面横撫で。外面旋削り。	
2	土 器 坏	カマド前 +2	①11.8 ②— ③4.3 ④ほぼ完形	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は旋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗が著しく、旋削り痕不明。	
3	土 器 坏	カマド前 +2	①12.2 ②— ③4.4 ④ほぼ完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は旋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
4	土 器 坏	カマド前 床	①11.7 ②6.0 ③3.2 ④欠	①褐色 ②良・酸化焰 (軟質) ③緻密	体部・底部は旋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗著しく、旋削り痕不明。	

14号住居跡 (PL25・72)

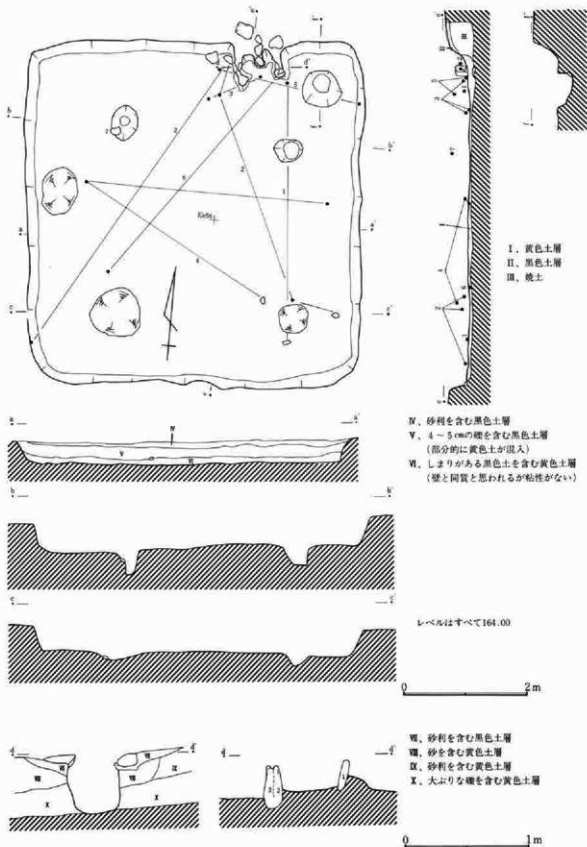
位置 本住居跡はII区中央南側のEb-55・56、Ec-55・56グリットにかけて位置する。10m東に25号住居跡等が位置しているが、隣接している遺構はない。

平面形・規模 平面形は東西長5.22m、南北長5.40mでほぼ正方形を呈する。面積は33.83㎡と遺跡内では広い方に属する。残存壁高は40～50cmである。主軸方位はN-9°-Wとやや真北より西に向いてい

る。

概要 この付近は確認面で砂利層は見られず、黒色土に少量の礫が混じる土層となっている。したがって、壁はこの土層が露出しているが下部では粘質の黄色土が続く。埋没土は砂利や4～5cmの礫混じりの黒色土である。柱穴は4本と考えられるが、南側2本については、柱穴とするには掘り方が浅く、

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第76図 14号住居跡実測図

認定が難しかった。

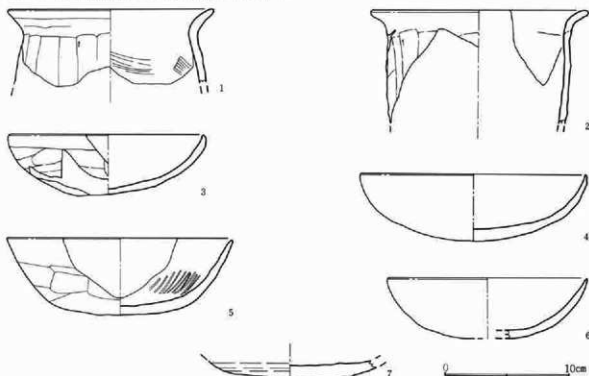
貯蔵穴と思われるピットが、北東隅に認められた。径60cm、深さ15cm程である。

床面は、砂利層の自然堆積の上に、黄色土層を5～6cm敷いてつくられていた。

カマド 北壁の東寄りに築かれている。壁に粘土を寄せかけて築き、燃焼部は床側に張り出す型式となっている。右側袖部に1石、左側袖部に2石用い、

周囲を粘土で固めて用いたと考えられる。住居外側にある石に焼けた部分が残っていることから、煙道下部の残存と思われる。したがって、煙道上部まで削平された住居跡といえる。現存で焚口幅30cm、燃焼部長38cmを計る。

遺物 出土総数は269点である。須恵器は坏片1個(7)のみである。



第77図 14号住居跡出土遺物実測図

14号住居跡出土遺物観察表(1)

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器 壺	カマド前 +4	① (22.0) ③ -	② - ④ 口縁部	① ぶい赤褐色 ② 良・ 酸化焙 ③ 1~2mm砂粒混	外面胴部は篋削り、口縁部は横割で、内面胴部は 篋削り。紐作り。	
2	土器 壺	南西隅 +6	① (23.0) ③ -	② - ④ 口縁部片	① ぶい褐色 ② 良・酸 化焙 ③ 緻密	外面胴部は篋削り、口縁部は横割で、内面胴部は 篋削り。紐作り。	
3	土器 坏	カマド前 +2	① (15.6) ③ (4.7)	② - ④ 片	① 褐色 ② 良・酸化焙 ③ 1~2mmの砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横割で、	
4	土器 坏	カマド内 +1	① (18.0) ③ (5.2)	② - ④ 口~底	① 褐色 ② 良・酸化焙 ③ 1mm以下細砂粒少量混	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横割で、 摩耗著しく、篋削り痕不明。	
5	土器 坏	カマド内 +1	① (18.0) ③ (6.0)	② - ④ 口~底	① ぶい褐色 ② 良・酸 化焙 ③ 緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横割で、 二次焼成 焼文。	二次焼成 痕あり。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

14号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器類 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②高径 (cm) ③器高④残存	①色調②構成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
6	土 器 杯	西側	① (16.0) ② — ③ (4.8) ④ 欠	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③1~2mm砂粒混	体部・底部は蹴削り、口縁部・器内面は横斬で、 摩耗著しく、底面が見えず。	
7	須 恵 器 杯	中央部 +36	① — ② — ③ — ④中央部欠	①灰褐色 ②良・還元焰 ③1~2mmの砂粒混入	縦縞成形。	

15号住居跡 (PL25・72)

位置 本住居跡はII区東側Dn-66・67、Do-66・67グリットに位置する。4m南東に12号掘立建物跡がある。

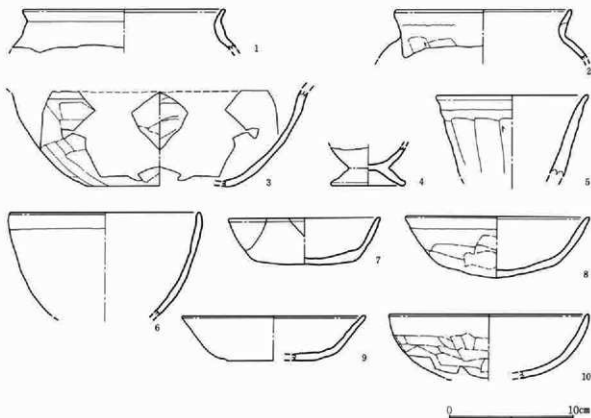
平面形・規模 平面形は東西長4.58m、南北長2.96mの東西に長い長方形を呈する。面積は13.38㎡。残存壁高は30cm程である。主軸方位はN-42°-Wを示す。

概要 この付近の自然堆積土は砂利・礫層で、住居埋没土は礫を含む黒色土層である。住居内には30~40cmといった大きな礫が埋没しており、人為的

な投げ込みと考えられる。東壁に石垣が積まれていた。川原石の自然石を横積みにし、2~3段積んでいる。最も南にある石は高さ50cm、幅70cmという大石1石でその役割をなしている。壁下に幅10cm、深さ6cmの周溝が巡っているが、南側では明確でなかった。

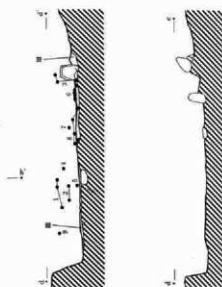
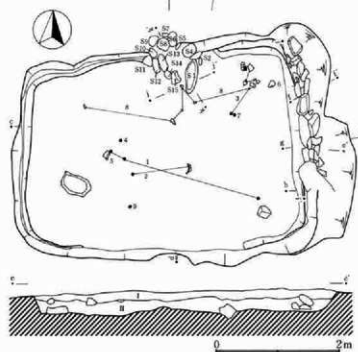
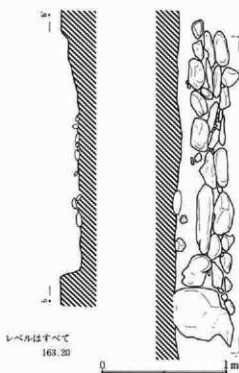
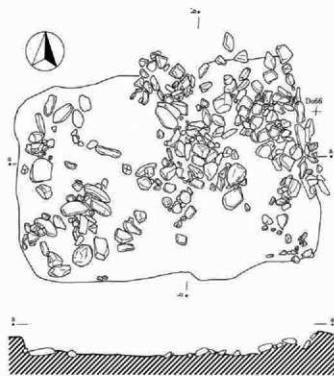
床面は自然堆積の砂利層の上に黒色土を4~5cm敷いてつくっている。

カマド 北壁中央に北壁を切って、つくられている。壁の周囲を全部川原石を立てて作り、袖部分

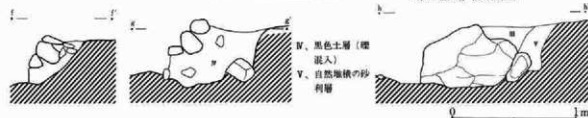


第78図 15号住居跡出土遺物実測図

1 住居跡



- I. 径5~6cmの礫を含む黒色土層
- II. 上層に比して礫の混入は少ないが所々に石が混入
- III. 黒色土層(砂利混入)



第79図 15号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第80図 15号住居跡カマド実測図

が床側に張り出す型式となっている。カマド前に転落している長さ50cm、幅20cmの石は鳥居状に天井に架っていた石材と思われる。自然堆積面の砂利層まで掘って石を据え、黒色土で押えている。石の上部を欠いてそろえて使用している石もある。なお、カマドが北壁とほぼ直角方向に向いていれば、N-26

—W程であるが、実際には、N-42—Wと18°も西寄りにずれている。焚口幅は現存で30cm、燃焼部長は50cmを計る。

遺物 出土総数は303点である。須恵器片7点と少ない。

15号住居跡出土遺物観察表

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器 壺	南西 +34	① (11.4) ② — ③ — ④口縁部欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	
2	土器 壺	中央 +45	① (18.5) ② — ③ — ④口縁部欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。	
3	土器 壺	南東 +8	① — ② — ③ — ④底部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、内面割部は寛撫で。紐作り。	
4	土器 器台付壺	中央 +30	① — ② (7.4) ③ — ④底部	①によい棕色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、内面割部は寛撫で。紐作り。	
5	土器 鉢	中央 +23	① (10.0) ② — ③ — ④欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③1~2mmの砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。厚手。	
6	土器 鉢	南東隅 +12	① (20.2) ② — ③ — ④口~割	①棕色 ②良・酸化焰 ③1~3mm砂粒少量混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。摩耗し、寛削り痕不明。	
7	土器 器坏	カマド前 +21	① — ②8.0 ③3.6 ④欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。摩耗が著しく、寛削り痕不明。	
8	土器 器坏	カマド前 +6	① (14.4) ② — ③4.8 ④欠	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
9	土器 器坏	西側 +37	① (14.6) ② (7.2) ③3.5 ④欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。内外面とも摩耗著しく、寛削り痕不明。	
10	土器 器坏	—	① (15.8) ② — ③ — ④欠	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の細砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	

16号住居跡 (PL26・72)

位置 本住居跡はⅢ区西端Dg-66、Dh-66グリットにかけて位置する。20m東に1号墳が所在し

ているが、周囲には全く遺構は存在していない。

平面形・規模 平面形は東西長3.55m、南北長3.60

mでほぼ正方形を呈する。面積は12.28㎡。残存壁高は20~30cmと浅い。主軸方位はN-74°-Eで真東よりも北に寄っている。

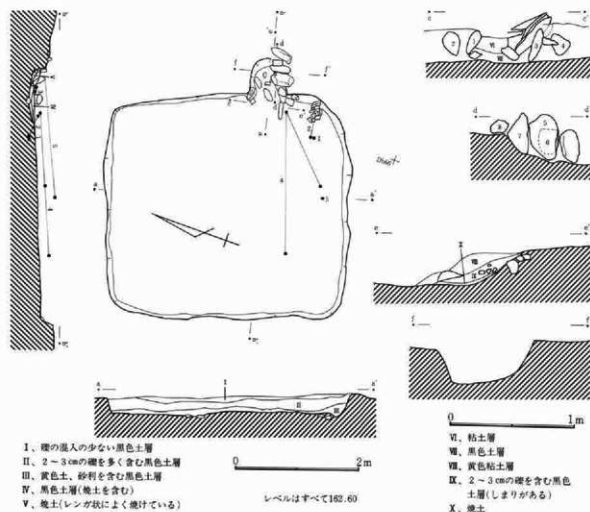
概要 この付近一帯は黒色土下に砂礫層が認められ、遺構確認面もこの砂礫層まで下げないと確認できなかった。埋没土は黒色土に砂礫を含んだ層であった。柱穴、その他の施設は確認されなかった。

床面は掘り方と一致し、砂利層の上面を床としていた。

カマド 東壁の南寄りに壁を掘り込んで築いている。袖部が壁にそろう燃焼部が床側に出ない型式と

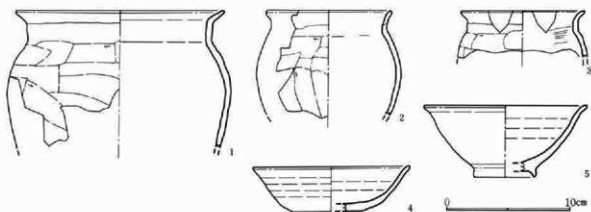
なっている。袖部両側には丸い平石を壁に押しつけて補強し、その内側から袖石を作っている。細長い川原石を立てて壁石とし、壁周囲をつくっている。小さな石、粘土等で補強しながら据えている。支柱石と考えられる石が、燃焼部中央奥寄りに出土した。カマド上部は削平されているが、カマド外の石に焼けたあとが見られることから、煙道下部の残存と思われる。焚口幅34cm、燃焼部長40cmを計る。

遺物 出土総数は244点である。須臾器が50点と比率が多くなっている。



第81図 16号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第82図 16号住居跡出土遺物実測図

16号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	重目 (cm)	①口径②高さ ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土 師 甕 壺	南西 +2	① (22.0) ② — ③ — ④口~胴	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。紐作り。		
2	土 師 甕 壺	南西 +2	① (7.0) ② — ③ — ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	「コ」の字状口縁の要に同じ技法。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。		
3	土 師 甕 壺	カマド内	① (13.0) ② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。紐作り。		
4	須 恵 器 環	北東 +7	① (12.4) ② (6. 2) ③0.5 ④片	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm以下細砂少量混	縄縷成形。		
5	須 恵 器 高台付埴	カマド内	① (12.8) ② (4. 8) ③5.6 ④片	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	縄縷成形。付高台。回転未切、未調整部が摩耗。		

17号住居跡 (PL26・72)

位置 本住居跡はⅢ区西部の南側Db-58、Dc-58、Db-59、Dc-59にかけて位置する。10m東に2号墳が存在するが、他の遺構とは孤立している。

平面形・規模 平面形は東西長3.66m、南北長3.28mのほぼ正方形を呈する。面積は11.72㎡。残存壁高は20cm弱と低い。主軸方位はN-90°-Eで、真東をさしている。

概要 この付近は砂利層が露出しており、したがって、壁はくずれやすく垂直でない部分が多い。埋没土は礫混入の黒色土が主である。柱穴は確認されず、その他の施設は認められなかったが、中央部より川原石の平石(径40cm、厚み10cm)が、2石置

かれていた。用途は不明である。

床面と考えられる水平な面はほとんどなく、遺物の多く出土した面を床面とした。この床面は、ほとんど砂利層である。したがって、掘り方面とも一致している。

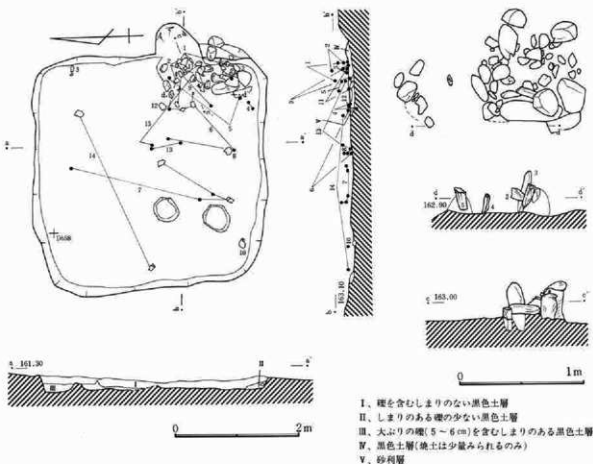
カマド 東壁の南寄りに築かれている。右袖部は南東隅の石組を基礎にしてつくられており、左右対称でなく左側は床面となっている。したがって、燃焼部は床側に張り出す型式となっている。川原石を使用し、壁面を構成しているが、細長い石は先端を欠き、高さをそろえている。支柱石の先端も欠いて、使用している。また、石の周囲は黄色粘土で補強し

1 住居跡

ている。上部が削平されて、原形は大きく損なわれているが、現存の焚口幅45cm、燃焼部長60cmを計る。

遺物 出土総数1278点である。須恵器は219点と比

較的多い。「コ」の字状口縁の甕形土器、回転糸切未調整の底部をもつ須恵器杯の出土がある。



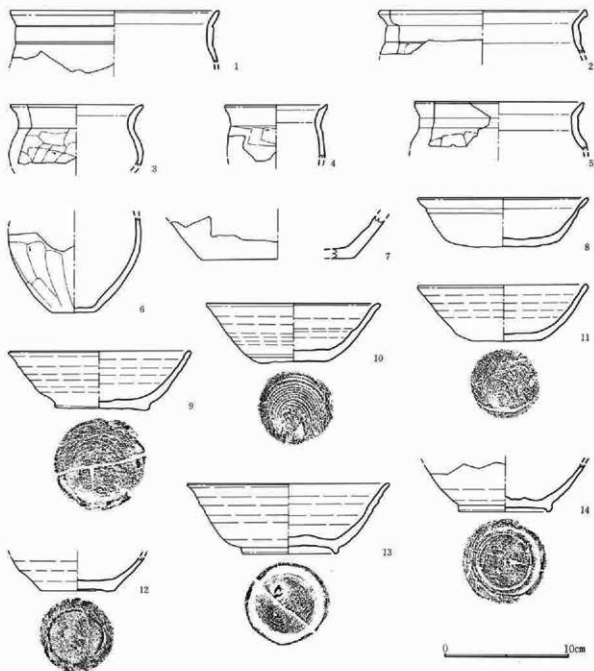
- I、硬を含むしまりのない黒色土層
- II、しまりのある硬の少ない黒色土層
- III、大ぶりの礫(5~6cm)を含むしまりのある黒色土層
- IV、黒色土層(焼土は少量みられるのみ)
- V、砂利層

第83図・17号住居跡実測図

17号住居跡出土遺物観察表(1)

図No	土器種類	出土位置(cm)	累目①口径②底径③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器甕	カマド前+4	①22.1 ②— ③— ④口縁部片	①によい赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は段削り、口縁部は横線で、内面胴部は寛線で。紐作り。	
2	土器甕	カマド前+6	①22.0 ②— ③— ④口縁部	①によい赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は段削り、口縁部は横線で、内面胴部は寛線で。紐作り。	
3	土器甕	北西+15	①14.0 ②— ③— ④口縁部片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	外部は段削り、口縁部・器内面は横線で。	
4	土器甕	—	①11.0 ②— ③— ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	外面胴部は段削り、口縁部は横線で、内面胴部は寛線で。紐作り。	
5	土器甕	カマド前+8	①18.0 ②— ③— ④口縁部片	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は段削り、口縁部は横線で、内面胴部は寛線で。紐作り。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第84図 17号住居跡出土遺物実測図

17号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②高さ ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
6	土 器 壺	カマド前 +5	①— ③—	②4.4 ④割~底	①橙色 ②良・酸化焼 ③1~2mmの砂粒少量混入	外面割部は寛削り、内面割部は寛無で。紐作り。	
7	須 恵 部 大 壺	南西 +7	①— ③—	②(16.2) ④割~底	①灰褐色 ②良・還元焼 ③緻密	外面割部は寛削り、内面割部は寛無で。紐作り。	

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①赤褐色②良・酸化焙 ③1m以下の砂粒混入	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
8	土 師 器 環	南側 +13	①(13.6) ②— ③3.8 ④口~底片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1m以下の砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横彫で。	
9	須 恵 器 高台付埴 環	カマド前 床	①14.5 ②7.0 ③4.6 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	横轆成形。回転糸切後付高台。	
10	須 恵 器 環	中央 +4	①13.4 ②5.7 ③4.5 ④片	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	横轆成形。底部右回転糸切未調整。	
11	須 恵 器 環	住居外	①13.4 ②6.0 ③4.4 ④片	①灰褐色 ②良・還元焙 (軟質) ③1m以下砂混	横轆成形。右回転糸切未調整。	
12	須 恵 器 環	カマド前 +10	①— ②5.8 ③— ④体一底	①灰色 ②良・還元焙 ③1m程の砂粒混入	横轆成形。付高台。内外面とも摩耗著しく、糸切 痕不明。	
13	須 恵 器 高台付埴 環	中央 +3	①(16.0) ②7.3 ③5.5 ④片	①灰褐色 ②良・還元焙 ③緻密	横轆成形。回転糸切未調整。付高台。	
14	須 恵 器 高台付埴 環	西側 +12	①— ②7.4 ③— ④体一底	①灰色 ②良・還元焙 ③1m程の砂粒混	横轆成形。回転糸切後付高台。	

18号住居跡 (PL27・73)

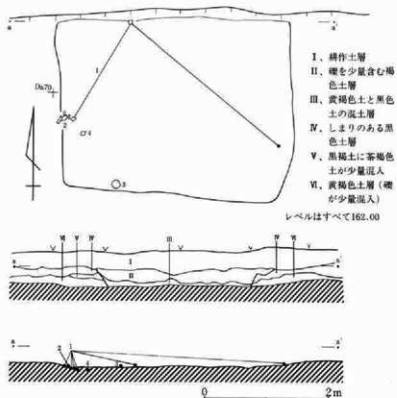
位置 本住居跡はⅢ区中央北側Cs-69、Cs-70グ 土している。

リットにかけて位置する。4m南に1号墳周堀があるが、他に遺構はない。

平面形・規模 平面形は現状で東西長3.80m、南北長3.46mであるが、破壊が著しく、形は明確でない。したがって、面積も計測不能であるが、10㎡以上はあると思われる。壁高もほとんど確認できなかったが、土層断面から見ると約20cmある。

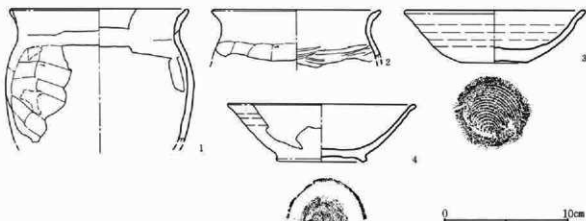
概要 当初遺物が確認され、そのレベルで床面をさがしたが確認できず、カマド・柱穴等も検出できなかった。ただ土層セクションには落ち込みがみられたので住居跡とした。跡線敷地内との境界なので、さらに確認できなかった。

遺物 出土総数は146点である。その中に須恵器は10点と少ない。高台欠損の須恵器環(図3)が出



第85図 18号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第86図 18号住居跡出土遺物実測図

18号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口部②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土師 罎 壺	西側 +4	① (19.0)	② — ③ — ④口縁部	①明赤褐色 ②良・酸化 焙 ③1~2mmの砂粒混入	「コ」の字状口縁。外面胴部は削り、口縁部は 横無で、内面胴部は縦無で、転作り。	
2	土師 罎 壺	西側 +2	① (18.0)	② — ③ — ④口縁部	①明赤褐色 ②良・酸化 焙 ③1~2mm砂粒少量混	「コ」の字状口縁。外面胴部は削り、口縁部は 横無で、内面胴部は縦無で、転作り。	
3	須恵 器 坏	南側 +2	①14.4 ②6.5 ③4.1 ④ほぼ球形		①灰褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	横縫成形。右回転糸切未調整。付高台欠損	
4	須恵 器 高台付筒	西側 +4	① (15.0) ② (7. 2) ③4.5 ④1/2		①灰褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	横縫成形。右回転糸切未調整。付高台。	

19号住居跡 (PL27・73)

位置 本住居跡はⅢ区中央部Cn-66・67、Cp-66・67グリットに位置する。1号墳の立地する高さから、1m下がり、一段低い部分にある。南5mに17号掘立柱建物跡、20号住居跡が位置する。

平面形・規模 平面形は東西長3.76m、南北長3.46mのほぼ正方形を呈する。面積は11.86㎡。壁高は10cmと低い。カマドの破壊が著しいが、主軸方位はN-85°-Eで、ほぼ真東に近い。

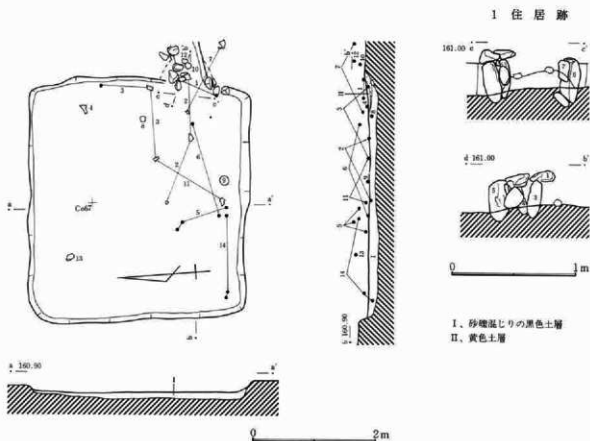
概要 この付近はⅢ区中央部で、一段低くなっており黒色土が溝状に堆積していた。1号墳から続く砂礫層が落ち込み、その上に黒色土、そして、東へ再び砂礫層が現われてくる場所である。当初、溝として掘りすすめたが、遺物が集中している部分があるので、細かく調査すると、方形の住居跡が確認で

きた。同様に、20号・21号・22号・27号住居跡が確認された。確認面の自然堆積層は砂礫層で、埋設土は砂礫混じりの黒色土であった。柱穴、その他の施設は検出されなかった。

床面は自然堆積の砂利層の上に砂礫混じりの黒色土を10cm程敷いてつくっている。

カマド 東壁南寄りに、東壁を掘り込んで築いている。破壊が著しいが、袖石・壁石が残存している。ただし、奥壁部分が抜けている。袖石が壁にそろう型式をとる。川原石の自然石を用い、砂利層まで掘り黒色土で据えている。左側壁石は立てた石の上に平石をかきのように重ねてのせている。焚口幅は現状で41cmを計る。

遺物 出土総数は136点と少ない。須恵器は5点と



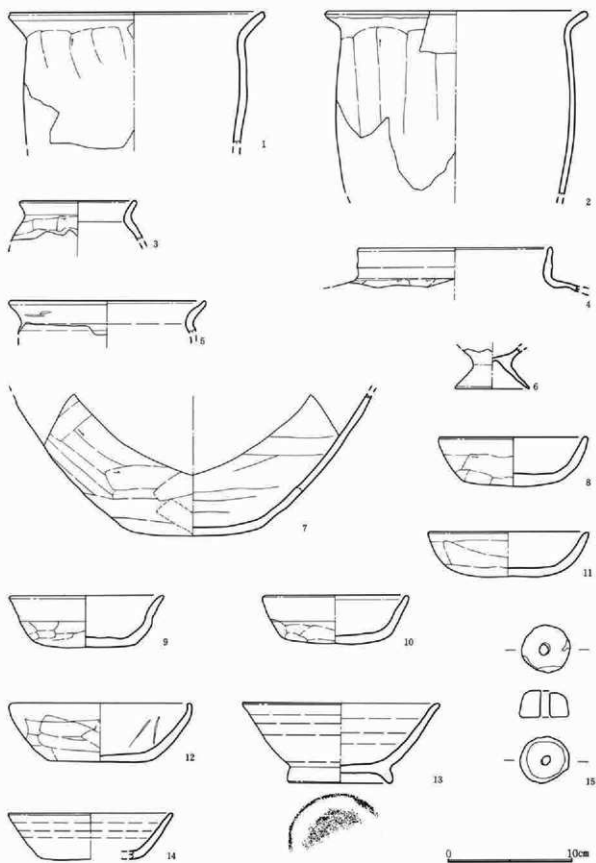
第87図 19号住居跡実測図

少ない。「コ」の字状口縁の壁と須恵器高台付塊、紡錘車が出土している。

19号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③④残存	①色調②構成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壺	カマド内	①27.0 ② — ③ — ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mmの砂粒混入	外面胴部は寛削り、口縁部は横削で、内面胴部は寛削で、紐作り。		
2	土 器 壺	中央 +1	①28.0 ② — ③ — ④口縁部片	①橙色(一部黒色) ②良・酸化焰 ③1~2mm砂	外面胴部は寛削り、口縁部は横削で、内面胴部は寛削で、紐作り。		
3	土 器 小型壺	中央 +5	①12.0 ② — ③ — ④口縁部	①によい赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は寛削り、口縁部は横削で、内面胴部は寛削で、紐作り。		
4	土 器 壺	北東 +3	①20.4 ② — ③ — ④口縁部片	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は寛削り、口縁部は横削で、内面胴部は寛削で、紐作り。		
5	土 器 壺	中央 床	①23.8 ② — ③ — ④口縁部	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は寛削り、口縁部は横削で、内面胴部は寛削で、紐作り。技法は「コ」の字状の壁に近い。		
6	土 器 台付壺	南側 +2	① — ②(8.0) ③ — ④脚部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	横削で。		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第88図 19号住居跡出土遺物実測図

19号住居跡出土遺物観察表2

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③粘土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
7	土 師 器 甕	カマド前 +12	①— ②(10.5) ③— ④胴~底	①褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mmの砂粒混入	①褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mmの砂粒混入	外面胴部は篋削り、内面胴部は篋削り。起作り。	
8	土 師 器 坏	中央 +1	①10.8 ②7.7 ③3.9 ④完形	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③1~2mm砂粒混	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は篋削り。 厚手。	
9	土 師 器 坏	南側 +2	①12.2 ②7.0 ③4.0 ④完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は篋削り。 厚手。	
10	土 師 器 坏	カマド内	①11.5 ②7.0 ③3.8 ④完形	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は篋削り。 厚手。	
11	土 師 器 坏	中央 +4	①(12.6) ②(6.2) ③3.5 ④口~底	①褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒少量混入	①褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒少量混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は篋削り。 内・外面ともに準焼している。	
12	土 師 器 坏	カマド内	①(14.0) ②(8.2) ③4.6 ④口~底片	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は篋削り。 厚手。	
13	須 恵 器 高台付埴 土	南側 +14	①15.5 ②8.0 ③6.2 ④片	①褐色(一部黒色) ② 良・酸化焰 ③緻密	①褐色(一部黒色) ② 良・酸化焰 ③緻密	轆轤成形。回転糸切痕、厚削のため不明。付高台。 (内黒)	内面に 「平」刻字
14	須 恵 器 坏	南西隅 +8	①(13.0) ②(8.0) ③(3.6) ④片	①灰褐色 ②良・還元焰 ③1mm以下の細砂粒混入	①灰褐色 ②良・還元焰 ③1mm以下の細砂粒混入	轆轤成形。回転糸切。器内外あてている。	
15	紡 錘 車	南西隅 +8	上径3.8 底径2.9 厚2.65 ③2.1 ④ほぼ完形			凝灰岩製	

20号住居跡 (PL28・73・74)

位置 本住居跡はⅢ区中央部Cm-65グリットに位置する。西1mに17号掘立柱建物跡、南5mに21号・22号住居跡がある。

平面形・規模 黒色土中で、カマドと遺物の分布状況で把握した住居なので、形状の確認が明確に出き得なかった。現状で東西長2.90m、南北長3.10mのほぼ正方形に近い形を呈する。面積は8.94㎡と狭い。壁高はほとんどない。主軸方位はN-82°-Eと真東に近い。

概要 この付近は19号住居跡で述べたように、砂礫層中の溝状の部分であったために、範囲の確認ができなかったが、埋没土は礫混入の黒色土であった。柱穴、その他の施設は検出されなかった。南部、西部に立ち上がり確認でき、住居範囲を推定できた。北部に焼土、住居内部に木炭が出土しており、焼失

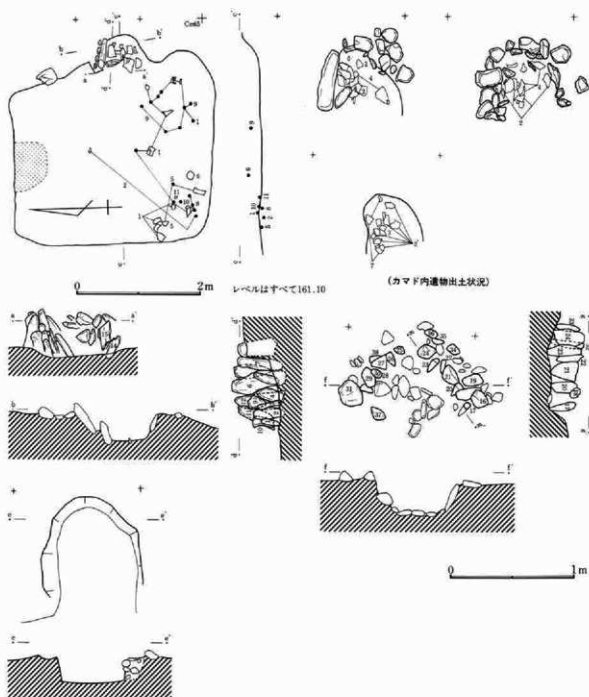
家屋の可能性もある。

床面は黒色土と砂礫の混ざった土であったが、石の露出した部分もあり、明確な確認はできなかった。

カマド 東壁を掘り込んでつくられていて、袖部分が東壁にそろう型式となっている。細長い川原石を立てて、全壁面に使用している。左壁は特に嚴重につくられていて、この川原石を3列に立てて、補強し合っている。カマド内側にある石は中にある石に立てかけられたような形で出土した。石壁は1列である。この立てた石の上に平石をのせて形を整えている。また、立てた石は上部を欠いて、高さをそろえている石もある。

遺物 出土総数は197点である。須恵器は13点と少ない。磁石・石鍾・土鍾が出土している。

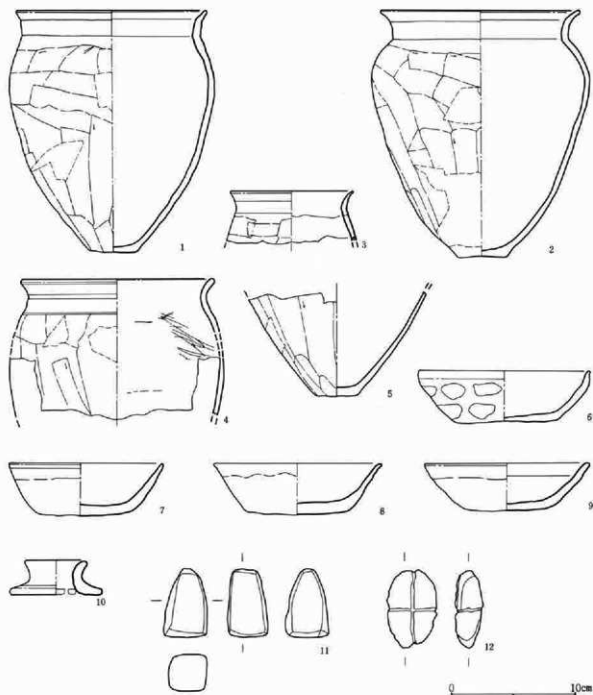
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第89図 20号住居跡実測図

20号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①赤褐色 ②良・酸化培 ③1~2mm砂粒少量混入	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 罌	南東 +5	①(20.0) ②(5.0) ③25.4 ④X	①赤褐色 ②良・酸化培 ③1~2mm砂粒少量混入	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。		
2	土 師 器 罌	カマド内	①(23.0) ②(25.2) ③25.9 ④X	①赤褐色 ②良・酸化培 ③1mm程の砂粒少量混入	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横撫で、内面割部は寛撫で。紐作り。		



第90図 20号住居跡出土遺物実測図

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 (cm) ③器高④残存	①色②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	土 器 小 型 壺	カマド内	① (13.0) ② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は横削で、内面割部は寛削で、紐作り。	
4	土 器 壺	カマド内	① (20.6) ② — ③ — ④口~胴	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰③1mm程砂粒混	「コ」の字状に近い口縁。外面割部は寛削り、口 縁部は横削で、内面割部は寛削で、紐作り。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

20号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
5	土 師 器 壺	南西側 +25	① — ② —	④2.2 ⑤ — ④胴~底片	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁の壁の底部。外面胴部は肥削り、 内面胴部は横撫で。紐作り。	
6	土 師 器 杯	南側 +13	①13.4 ④4.1	②7.9 ③完形	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰③1mm砂粒少混	体部は指撫で、底部は肥削り、口縁部・器内面は 横撫で。(指圧痕)	
7	土 師 器 杯	カマド内	①12.2 ④4.1	②6.0 ③ほぼ完形	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰③1mm以下砂少	体部は指撫で、底部は肥削り、口縁部・器内面は 横撫で。	
8	土 師 器 杯	南西 +4	①13.4 ④4.0	②8.2 ③片	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰③1mm以下砂少	体部は指撫で、底部は肥削り、口縁部・器内面は 横撫で。	
9	土 師 器 杯	南東 -10	①(12.8) ④3.7	②6.8 ③片	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	体部は指撫で、底部は肥削り、口縁部・器内面は 横撫で。	
10	須 恵 器 ?	南西 床	① — ②2.7	③7.2 ④片	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横撫で。	
11	砥 石	南側 床	長さ5.3 幅3.0 厚さ2.8			3面使用している。 砂岩	
12	石 鏝	住居外	長さ(6.1) 幅(3.8) 厚さ(2.1) ④完形			実玄武岩	

21号住居跡 (PL28・74・75)

位置 本住居跡はⅢ区中央部Cm-63・64グリットにかけて位置する。22号住居跡と、南西部で重複している。北側には17号掘立柱建物跡、20号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長2.62m、南北長2.92mの南北に長い長方形を呈する。面積は8.44㎡。壁高はほとんどない部分が多い。主軸方位はN-81°-Eをさす。

概要 礎の中から、カマドが検出されたことにより、住居跡の存在が確認された。埋没土と壁の識別が困難で住居跡範囲の確認ができなかった。埋没土は、土手状に残した土層より確認できた。主に、小礫を含む黒色土であった。本住居跡は床面も礎の露出等があつて、水平な面の確認ができなかったが、

21号住居跡出土遺物観察表(1)

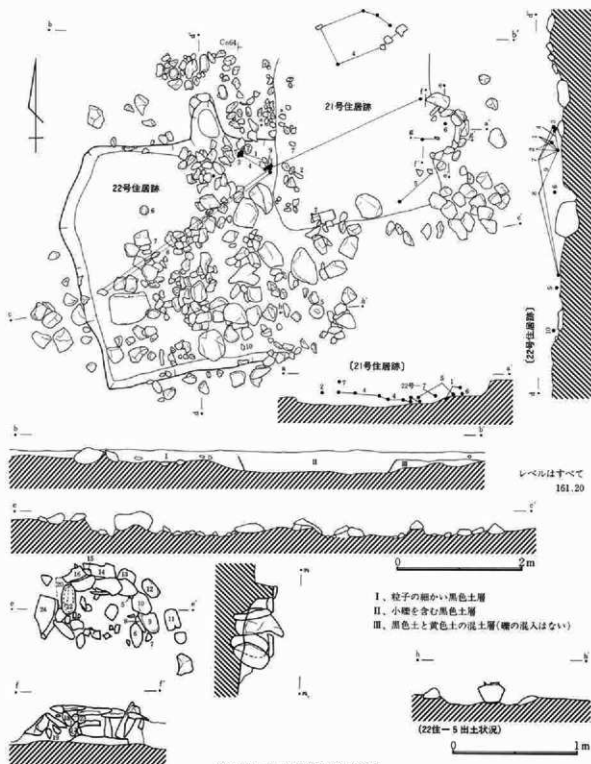
図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	カマド前 +3	①(13.0) ③ —	② — ④口縁部	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は肥削り、口縁部は 横撫で、内面胴部は横撫で。紐作り。	

住居外は大ぶりな礫の自然堆積があり、範囲を確認した。また、本住居跡は22号住居跡と重複しており、本住居跡が22号住居跡を切っていることが明確となった。

カマド 東壁を掘り込んで築かれている。袖部が壁にそろう型式となっている。左壁は2重に石を立ててつくられている。立てた石の上に小ぶりの平石をかき状にのせ一周させている。個々の石は組んでいるふうもなく、置かれているような状態であった。右側の壁は石組が弱く、裏側の補強も左側に比べ弱かった。焚口幅は現状で46cm、燃焼部長38cmを計る。

遺物 出土総数は358点である。須恵器は15点と少ない。須恵器の櫃の出土がある。

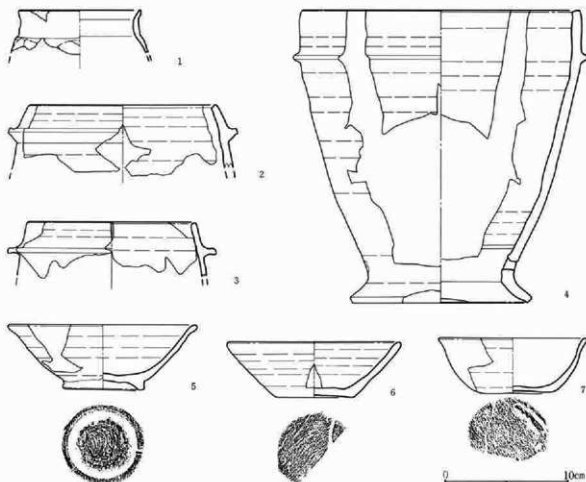
I 住居跡



第91図 21, 22号住居跡実測図

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①灰色 ②焼成③胎土	成形・装形の特徴	備考
2	羽蓋	西側 +24	① (20.0)	② - ③ - ④口縁部欠	①灰色 ②良・還元焼 ③1~2mm程度の砂粒混入	楕圓形。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第92図 21号住居跡出土遺物実測図

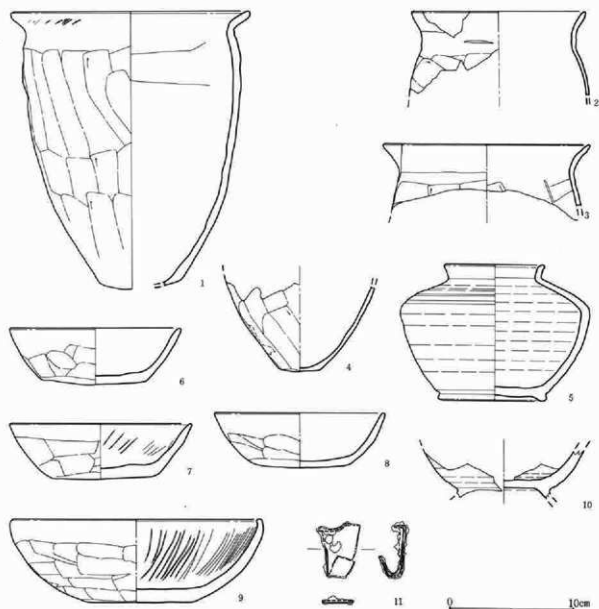
21号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器類 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②高径 ③器高④残存	①色調②構成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	羽 蓋	カマド内	① (18.0) ② — ③ — ④残存	①灰色 ②良・還元焰 ③1~2mm程の砂粒混入	轆轤整形。		
4	須 恵 器 甌	北壁 +18	①(29.6) ②(19.4) ③30.8 ④1/2	①灰褐色 ②良・還元焰 ③緻密	内外面とも轆轤整形。胴部に穴がある。		
5	須 恵 器 高台付埴	南東 +8	① (15.0) ②6.5 ③5.1 ④1/2	①黒褐色 ②良・酸化焰 (軟質) ③緻密	轆轤成形。右回転糸切後付高台。		
6	須 恵 器 坏	カマド内	① (13.8) ②(6.2) ③ (4.4) ④1/2	①灰色 ②良・還元焰(軟 質) ③1mm以下砂粒混	轆轤成形。回転糸切未調整。底部摩耗が著しい。		
7	須 恵 器 坏	南西 +38	① (11.8) ②6.0 ③4.4 ④1/2	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③1mm砂粒少混	轆轤成形。回転糸切未調整。内外面とも摩耗が著 しい。		

22号住居跡 (PL.29・74・75)

位置 本住居跡はⅢ区中央部Cm-63、Cn-63グ 復している。22号住居跡が切られており、新旧は明
リットにかけて位置する。北東部で21号住居跡と重 確であった。

1 住居跡



第93図 22号住居跡出土遺物実測図

平面形・規模 平面形は東西長3.28m、南北長3.88mでやや南北に長いが、ほぼ正方形を呈する。面積は11.14㎡。残存壁高は、現状で0～30cmである。主軸方位はN-15°-Wとわずかに西寄りをさす。

概要 前述の住居跡と同様、礫層の中に所在し、埋没土も大ぶりな礫を混入する黒色土なので、住居跡の範囲の確認が難しい住居跡であった。礫の中に完形の土器が数点あり、綿密に掘り下げていった結果、ほぼ範囲が確認できた。床面も礫の露頭があり、

水平な面が検出できなかったが、遺物の出土地点でほぼ床とした。

カマド 破壊が著しく、施設が残っていなかった。焼土の範囲で、カマド跡を認定した。北壁ほぼ中央部に壁を掘り込んで築かれたと考えられる。燃焼部とした部分に長さ40cm、厚さが15cmある川原石が水平におかれていた。計測は不能。

遺物 出土総数は249点である。須恵器は3点のみであるが、うち1点はほぼ完形の壺(5)である。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

22号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 甕	カマド前 +3	①25.6 ②6.8 ③— ④ほぼ完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は直筒形、口縁部は横撫で、内面胴部は 横撫で。紐作り。	
2	土 師 器 甕	北東 +6	①18.4 ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面胴部は直筒形、口 縁部は横撫で、内面胴部は横撫で。紐作り。	薄手。
3	土 師 器 甕	北東 +8	①(22.0) ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面胴部は直筒形、口 縁部は横撫で、内面胴部は横撫で。紐作り。	薄手。
4	土 師 器 甕	北東 +8	①— ②4.3 ③— ④胴一辺	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁の底部。外面胴部は直筒形、内 面胴部は横撫で。紐作り。	
5	須 恵 器 短 頸 甕	南東 +2	①10.6 ②11.4 ③14.4 ④ほぼ完形	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横楕圓形。	骨蓋器?
6	土 師 器 杯	中央 +12	①13.6 ②8.3 ③4.5 ④完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混入	体部・底部は直筒形、口縁部・器内面は横撫で。	内面に 「山」刻字
7	土 師 器 杯	北東 +6	①14.3 ②6.1 ③4.4 ④ほぼ完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は直筒形、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
8	土 師 器 杯	西側 +9	①13.6 ②5.9 ③4.3 ④片	①にやや赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	体部・底部は直筒形、口縁部・器内面は横撫で。	
9	土 師 器 埴	北東 +6	①(20.0) ②8.5 ③6.5 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は直筒形、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
10	須 恵 器 短 頸 甕	南側 +8	①— ②— ③— ④片	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	横楕圓形。	
11	鉄 器	東南隅 +15	長さ4.3 幅2.5 厚さ0.2 重さ13g		鎌の破片か	

23号住居跡 (PL29・75)

位置 本住居跡はⅡ区中央西寄りのEe-58・59、
Ef-58・59グリットにかけて位置する。

平面形・規模 平面形は東西長5m、南北長5.20m
で、台形状を呈する。面積は21.75㎡。壁高は50cmあ
り、本遺跡内では残りのよい方である。主軸方位は、
N-3°-Wとほぼ真北をさす。

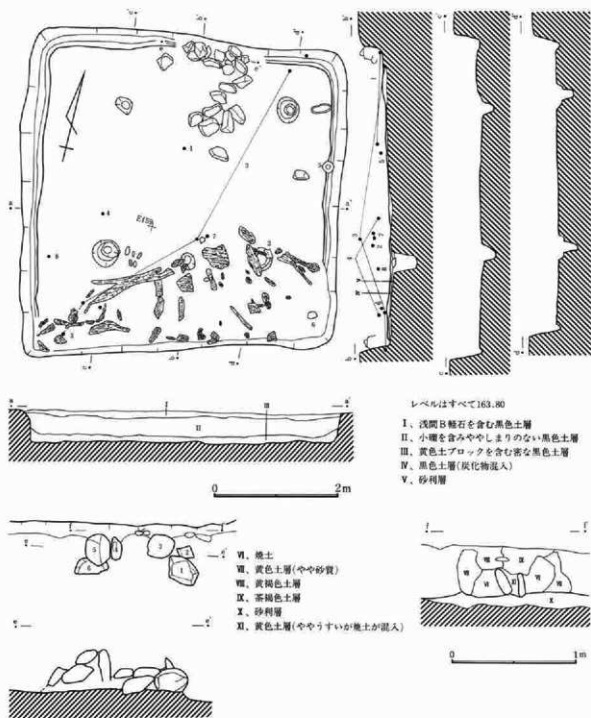
概要 この付近は砂利層でなく、粒子の細かい黄
色土が堆積している。埋没土は小礫を含む黒色土で
あるが、上層には浅間B軽石の混入がある。幅10cm、
深さ5cm程の周溝が壁下に一巡している。柱穴も4
本確認された。深さは20~30cmである。南側柱列の
間に径20cm、深さ50cmのピットが検出された。

床面は、自然堆積の砂利層の上に黒色土を客土し
てつくっている。

また、本住居跡は焼失家屋で、南側に火災で倒れ
たと考えられる炭化材が出土している。柱状のもの、
垂木、垂木と交差する細い木材、さらに屋根を葺い
たと考えられる葺の芯のような燃えかすが残ってい
た。北風で北側から燃えて、南側が焼け落ちた状態
と考えられる。なお、詳細は炭化材同定の項で検討
する。(IV, 6(6)参照)

カマド 北壁中央部に築かれていた。壁の前側で、
床側に出る型式をとる。袖部分は破壊されていて、
燃焼部奥のみの残存である。カマド前に出土した石

1 住居跡

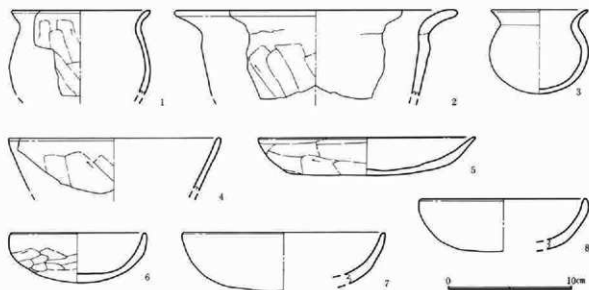


第94図 23号住居跡実測図

は、カマド石材とも考えられる。石と粘土を用いてつくられたカマドであろう。焚口、燃焼部は計測不能。

遺物 出土総数は335点である。須恵器は3点と少ない。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第95図 23号住居跡出土遺物実測図

23号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壺	北東 +10	①14.6	②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。縦作り。器面が荒れている。	
2	土 器 壺	中央 +28	①(30.0)	②— ③— ④%	①橙色(一部黒色) ② 良・酸化焰 ③1mm砂混	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。縦作り。	
3	土 器 小型壺	南西 +1	①10.4 ③8.8	②— ④%	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。縦作り。摩耗のため、寛削り痕不明。	
4	土 器 鉢	西側 +14	①22.4	②— ③— ④口縁部	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。縦作り。	
5	土 器 皿	東側 +2	①18.2 ②13.0 ③3.0	④完形	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③1~2mm砂粒混	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
6	土 器 環	南東隅 +8	①10.8 ②— ③3.9	④完形	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
7	土 器 環	中央 +26	①16.2	②— ③— ④口~底	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、寛削り痕不明。	
8	土 器 環	南西 +15	①13.2	②— ③— ④口~底	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗著しく、寛削り痕不明。	

24号住居跡 (PL30・75)

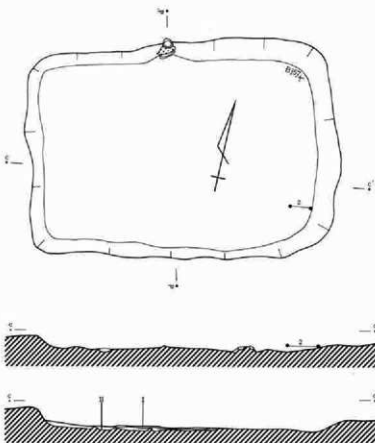
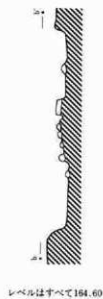
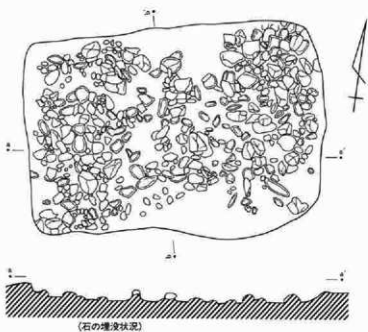
位置 本住居跡はII区西側Ei-56、Ej-56グリットに位置する。周囲には遺構は少ない。

平面形・規模 平面形は東西長4.48m、南北長3.18mの東西に長い長方形を呈する。面積は12.25㎡。残

存壁高は20cm程でやや低い。主軸方位は推定で、N-15°-Wとやや西に寄る。

概要 この付近は砂利層と黄色土層の堆積の境目部分で、東壁は砂利層、他の3壁は黄色土層である。

1 住居跡



- I、黒色土層
- II、砂利層
- III、粒子細かく礫をわずかに含む黒色土層
- IV、黒色土を含む黄色土層

第96図 24号住居跡実測図

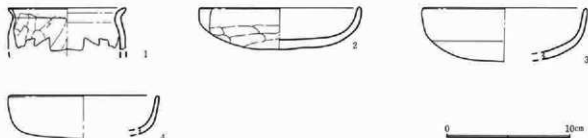
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

住居内には10~20cmの礫の埋没が見られた。この埋没した石の下を床面としたが、礫の露出した部分もあり平らな床面は検出されなかった。柱穴、その他の施設も検出されなかった。

カマド 破壊が著しく、カマドとはっきり認定できる構造は残存していなかったが、北壁中央部に、

少し火を受けた石とわずかな焼土が残っていたため北壁に寄せて、カマドを作り、燃焼部が床側に張り出す形と推定した。したがって、カマドの計測値はない。

遺物 出土総数は24点と少ない。須臾器は出土していない。



第97図 24号住居跡出土遺物実測図

24号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	—	① (12.6) ② — ③ — ④口径部片	①にふい赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1mm粒砂粒混	外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 荒撫で。紐作り。		
2	土 師 器 杯	南東 +14	①12.8 ② — ③3.3 ④片	①黒色 (一部橙色) ② 良・酸化焙 ③1mm砂混	体部・底部は荒削り、口縁部・器内面は横撫で、 内面にすず付着。		
3	土 師 器 杯	—	① (13.0) ② — ③ — ④口~底片	①橙色 ②良・酸化焙 (軟質) ③緻密	口縁部・体部・底部および器内面、いずれも横撫 で。内・外面とも摩耗著しく、荒削り痕不明。		
4	土 師 器 杯	—	① (12.0) ② — ③ — ④口~底片	①橙色 ②良・酸化焙 (軟質) ③緻密	口縁部・体部・器内面は横撫で。内・外面とも摩 耗している。		

25号住居跡 (PL.30・75)

位置 本住居跡はII区中央部南Ds-55・56、Dt-55・56グリットにかけて位置する。3m東に26号住居跡があり、北部7mには住居跡、掘立柱建物跡が集中している。

平面形・規模 平面形は東西長5.90m、南北長2.94mの東西に長い長方形を呈する。面積は13.91㎡。残存壁高は30cm程である。主軸方位はN-90°-Eとほとんど真東をさす。

概要 この付近も自然堆積の砂利層が、西壁部分で露出しており、他の壁は褐色土の堆積を掘り込み

でつくっている。埋没層中に、10~20cmの礫の混入が見られた。なお埋没土は黒色土を中心としている。柱穴、周溝といった施設は検出されなかった。

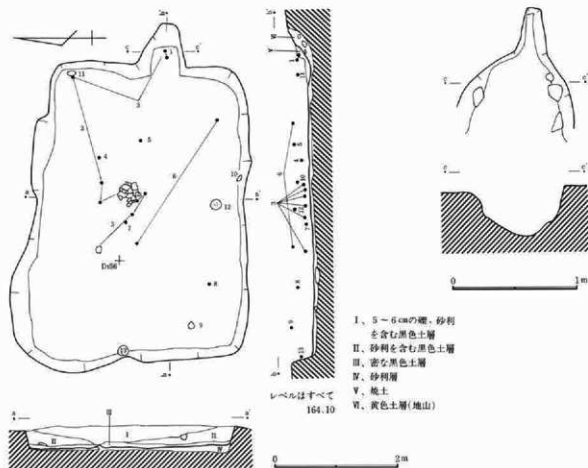
床面は地山の上にわずかに黒色土を客土して、つくられている様子が確認できた。

カマド 東壁中央南寄りに築かれていた。袖部を壁にそろえ壁を掘り込んでいた型式をとっている。石の残存はなく、粘土で築かれたカマドと考えられる。上部削平はされているが、煙道部の一部が残存していた。焚口幅48cm、燃焼部長44cm、煙道部長38

cmを計る。

遺物 出土総数588点である。須恵器は40点であ

る。土師器の坏は平底で、須恵器坏の底部は回転糸切未調整である。

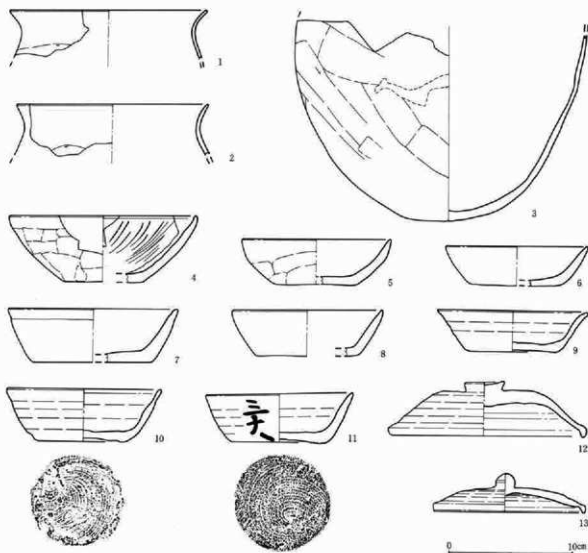


第98図 25号住居跡実測図

25号住居跡出土遺物観察表1)

図 No	土師器 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口縁②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	カマド内	①21.0 ②— ③— ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面胴部は覆削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。紐作り。		
2	土師器 壺	—	①20.6 ②— ③— ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面胴部は覆削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。紐作り。		
3	土師器 壺	中央 床	①— ②— ③— ④胴~底	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は覆削り、内面胴部は荒撫で。紐作り。		
4	土師器 坏	南西 +3	①(14.8) ②(6.3) ③5.2 ④口~底片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は覆削り、口縁部・器内面は横撫で。瑣文。		
5	土師器 坏	中央 +13	①11.8 ②6.8 ③3.6 ④口~底	①によい赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③緻密	体部・底部は覆削り、口縁部・器内面は横撫で。		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第99図 25号住居跡出土遺物実測図

25号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
6	土 師 器 平 鉢	南東 +16	①11.4 ②7.0	③3.1 ④口～底	①橙色 ②良・酸化焰 ③1～2mm程の砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 外面摩耗しており、寛削り痕不明。	
7	土 師 器 平 鉢	中央 +2	①(13.5) ②(9.4)	③(4.2) ④口～底×	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗しており、寛削り痕不明。	
8	土 師 器 平 鉢	南西 +11	①(12.0) ②(8.0)	③(3.6) ④口～底×	①橙色 ②良・酸化焰 (軟質) ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗しており、寛削り痕不明。	
9	須 志 器 平 鉢	南西 +22	①(12.0) ②(7.1)	③3.6 ④×	①橙色 ②良・酸化焰 ③1～2mm程の砂粒混入	回転糸切後発調整。	
10	須 志 器 平 鉢	南 +8	①12.2 ②6.8	③3.8 ④完形	①灰オリーブ色 ②良・ 還元焰 ③1mm以下砂混	縦織成形。右回転糸切未調整。	

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②構成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
11	須 恵 器 環	北東隅 +9	①11.8 ②7.8 ③4.9 ④完形	①灰色 ②良・酸化焙 ③緻密	輪縁成形。右回転糸切未調整。		黒書「三 (丈 _g)」
12	須 恵 器 蓋	南床	①15.5 横3.0 ③3.7 ④完形	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	輪縁整形。		
13	須 恵 器 蓋	西壁 +3	①11.8 横1.4 ③3.0 ④ほぼ完形	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	輪縁整形。		

26号住居跡 (PL30・75・76)

位置 本住居跡はII区中央部南側Dq-55・56、Ds-55・56グリットに位置する。西3mに25号住居跡が位置する。なお、本住居跡の南半分は敷地外のため、北半分のみの調査であった。

平面形・規模 平面形は未発掘のため明らかでないが、この時期の型式にあてはめると、一辺7m前後の正方形を呈すると考えられる。なお、発掘部分の面積は19.33㎡で、本遺跡内で最も大きい住居跡になると考えられる。残存壁高は70~80cmと深く、残りが良い。主軸方位はN-7°-Eをさす。

概要 この付近は砂利層の上のっている黄色土が厚く堆積している。耕作土下に浅間B軽石を含む黒色土の堆積が見られた。その他の埋設土もほぼ黒色土を中心としたものであった。西側部分を中心に10~20cmの礫の混入が見られた。柱穴(径60cm、深さ60cm)が2個検出された。周溝(幅10cm、深さ5cm)が壁下を一巡していた。貯蔵穴と考えられる位

置に径60cm、深さ24cmのピットを確認できたが、遺物もなく断定し得なかった。

床面は礫混入の黒色土の客土が5~6cm見られたことから、貼床をしていることが考えられる。

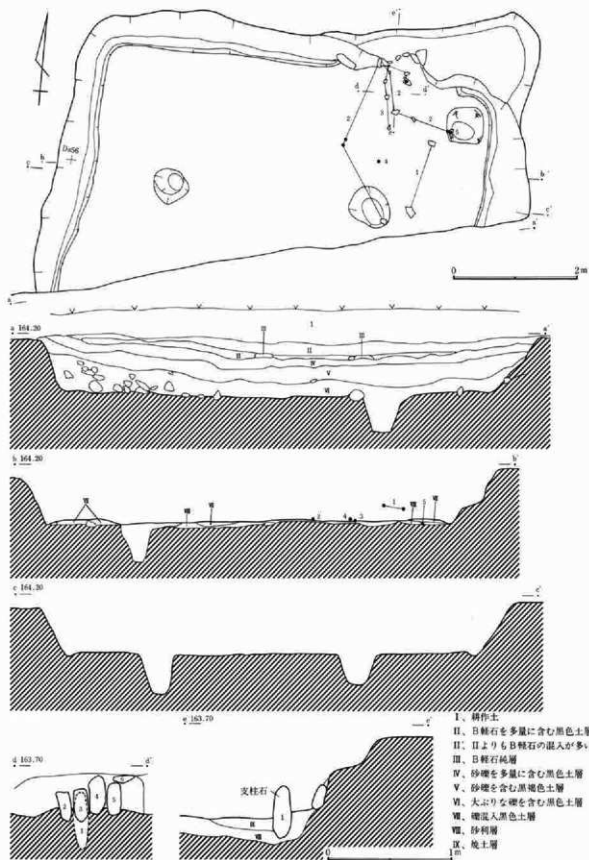
カマド 北壁東寄りにつくられていた。破壊が著しく、原形をとどめていないが、燃焼部が床側に張り出す型式が考えられる。カマド奥壁は4個の川原石が残存していたことから、壁面すべてに使用されていたことがうかがえる。支柱石(長さ40cm、幅15cm)が20cm埋まって、かなりしっかりと原形をとどめていた。煙道部は確認できなかったが、横方向よりも垂直方向に向ってつくられていたことが考えられる。カマド焚口部幅、燃焼部長は計画不能である。

遺物 出土総数は2130点と多い。須恵器は80点出土している。出土遺物の多い割に、実測可能な土器が極端に少ない。

26号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②構成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	南東 +25	①(28.8) ②— ③— ④口縁部欠	①灰色 ②良・酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は蔑削り、口縁部は横溝で、内面割部は 煎煎で、紐作り。		
2	土 師 器 壺	中央 +2	①(25.2) ②— ③— ④口~割	①灰色 ②良・酸化焙 ③緻密	外面割部は蔑削り、口縁部は横溝で、内面割部は 煎煎で、紐作り。		
3	土 師 器 壺	北 +22	①(21.6) ②— ③— ④口縁部一周	①灰色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面割部は蔑削り、口 縁部は横溝で、内面割部は煎煎で、薄手。		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第100図 26号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

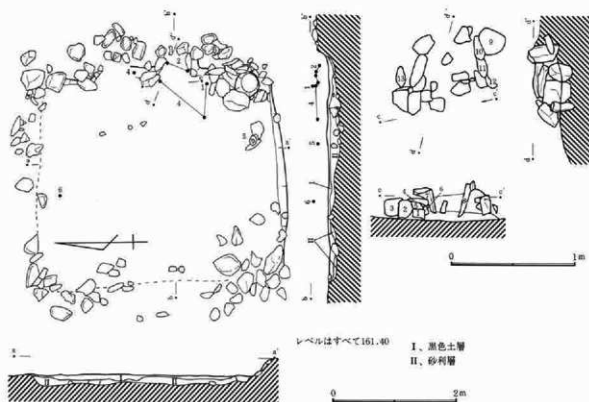
より一段下の黒色土が窪地を埋めているような地層を呈しており、埋没土と範囲の識別が困難であった。自然堆積の礫と住居跡を埋めている礫の識別で、カマドを中心として、範囲を認定した。柱穴は認められなかったが、南東隅に石積があり、その下から径40cm、深さ17cmの貯蔵穴が検出された。

床面は自然堆積の砂利層の上に黒色土を客土してつくっている。

カマド 東壁の南寄りに、東壁を掘り込んで築い

ている。袖部が住居壁の線にそろう型式で燃焼部は床側に張り出さない。壁面全体に川原石の自然石を使用している。一部高さをそろえるために上部を欠いているものもある。時に奥壁両側で、上端を欠いているのはカマド構築上の必要性が考えられ興味深い。焚口幅は42cm、燃焼部長は48cmを計る。

遺物 出土総数は419点である。須恵器は34点である。

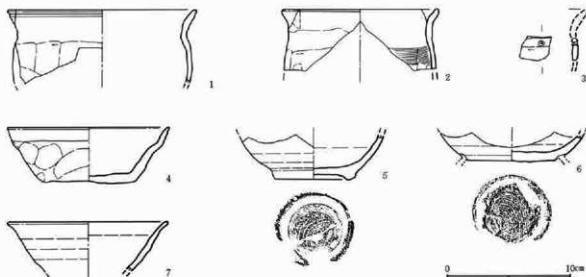


第102図 27号住居跡実測図

27号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壁	カマド付 近+5	① (19.8) ③ —	② — ④ 口縁部片	①橙色 ②良・酸化焼 ③1m程の砂粒混入	外面側部は直削り、口縁部は横撫で、内面側部は荒撫で。組作り。	
2	土 器 壁	カマド内 +2	① (16.4) ③ —	② — ④ 口縁部片	①橙色 ②良・酸化焼 ③緻密	ほぼ「コ」の字状口縁。外面側部は直削り、口縁部は横撫で、内面側部は刷毛目。薄手。	
3	土 器 壁	—	① — ③ —	② — ④ 頸部	①橙色 ②良・酸化焼 ③緻密	上部横撫で、下部直削り。内面荒撫で。	

1 住居跡



第103図 27号住居跡出土遺物実測図

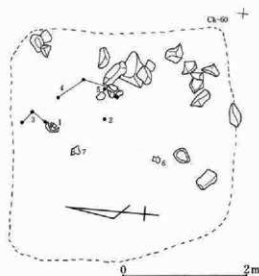
図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
4	土 師 器 平 鉢	カマド前 +8	①12.8 ②11.2 ③4.2 ④×	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	体部指頭圧痕、口縁部・内部横溝で、底部埋削り。	内部炭化 物付着	
5	須 恵 器 高台付埴	南側 +8	① — ②6.4 ③ — ④×	①灰白色 ②良・還元焰 (軟質) ③緻密	轆轤成形。回転糸切後付高台。摩耗している。		
6	須 恵 器 高台付埴	北側 +20	① — ②7.0 ③ — ④底部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	轆轤成形。回転糸切後付高台。		
7	須 恵 器 平 鉢	—	① (12.8) ② — ③ — ④×	①灰白色 ②良・還元焰 (軟質) ③1mm程砂粒混	轆轤成形。		

28号住居跡 (PL31・76)

位置 本住居跡はⅢ区中央部南寄りCk-60グリットに位置する。西6mに27号住居跡がある。

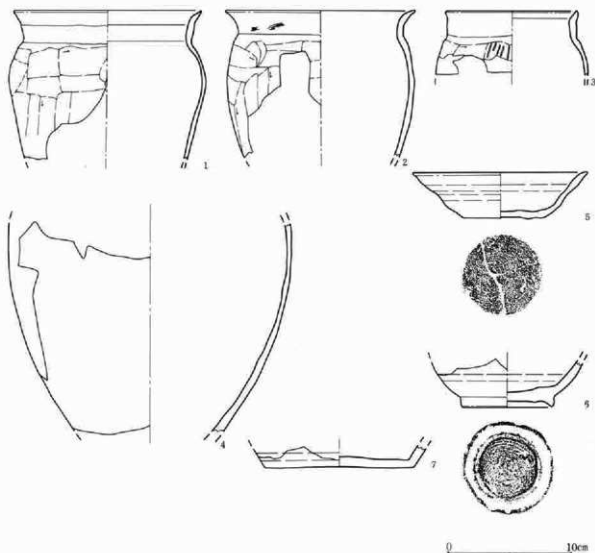
平面形・規模 本住居跡は遺物の分布状況によって住居跡と判断し、遺物を取り上げたが、壁・床面・カマド等検出されなかった。遺物の分布しているところの東側にピット(長径3.30m、短径2.10m、深さ30~40cm)が確認されたが、住居跡との関連は不明であった。

遺物 出土総数は177点である。須恵器は20点である。



第104図 28号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第105図 28号住居跡出土遺物実測図

28号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②口径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壺	—	① (20.0) ② — ③ — ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面部は蓋削り、口縁部は横溝で、内面部は寛撫で。紐作り。		
2	土 器 壺	—	① (20.2) ② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面部は蓋削り、口縁部は横溝で、内面部は寛撫で。紐作り。		
3	土 器 壺	—	① (14.0) ② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い形を示す。外面部は蓋削り、口縁部は横溝で、内面部は寛撫で。		
4	須 恵 器 大 壺	—	① — ② — ③ — ④胴部	①暗青灰色 ②良・還元 焙 ③緻密	縦横回転整形。内外指頭圧痕あり。		
5	須 恵 器 坏	—	①13.9 ②6.1 ③3.6 ④	①灰オリープ色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm砂粒混	縦横成形。底部回転糸切未調整。内・外面ともあれている。		

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
6	須恵器 高台付埴	—	①7.0 ③—	②— ④胴へ並	①黄灰色 ②良・還元焰 ③1~2mm程の砂粒混入	轆轤成形。回転余切後付高台。	
7	須恵器 埴	—	①— ③—	②(18.0) ④底部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	轆轤成形。底部調整。	No4の底 部か?

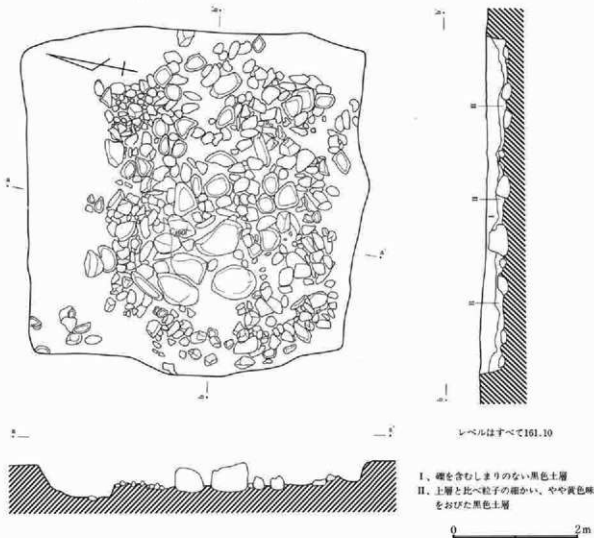
29号住居跡 (PL32)

位置 本住居跡は田区中央東寄りCh-59・60、Ci-59・60グリットに位置している。東2mに30号住居跡がある。北側に墓地があって、その他遺構は確認でき得なかった。

平面形・規模 平面形は東西長4.88m、南北長5.50

mのやや南北に長い長方形を呈する。面積は16.37㎡。残存壁高は30cmを計る。

概要 本住居跡は、大ぶりの礫の投げ込まれた住居跡として調査を進めたが、遺物は土師器破片17点(いずれも実測不能の小片)が出土したのみで、カ



第106図 29号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

マド等施設も検出されなかった。住居跡と思われる掘り込みと考えられるが、住居跡とする根拠も認められなかった。整理上、住居跡として取り上げた。

遺物 出土総数は74点である。須恵器は8点である。実測可能な土器はない。

30号住居跡 (PL32)

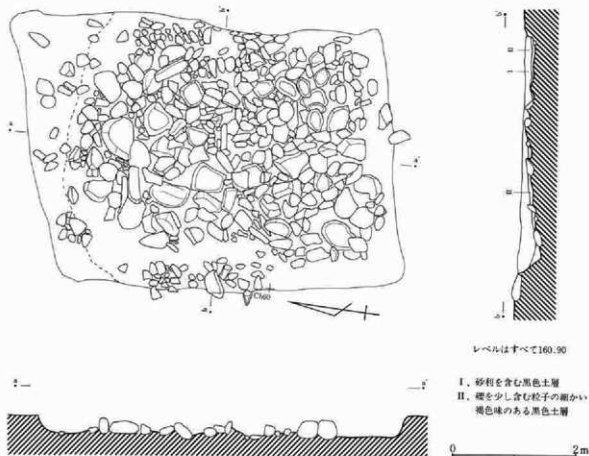
位置 本住居跡はⅢ区中央東寄りCg-59・60グリットに位置する。西2mに29号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長4.26m、南北長5.54mで、やや南北に長い長方形を呈する。面積は19.06㎡。残存壁高は10～20cmである。

概要 本住居跡も29号住居跡と全く同様で、方形の掘り込みに大ぶりの礫が投げ込まれた状態で出土

している。壁部分は砂利層であるから、掘り込みとは明確に区別できた。しかし、出土遺物は何もなく、掘り込みにも、柱穴等施設は確認されなかった。本住居跡も、29号住居跡と同様住居跡とする根拠に乏しいが、整理上、住居跡として取り上げた。

遺物 出土遺物なし。



第107図 30号住居跡実測図

31号住居跡 (PL32・76・77)

位置 本住居跡はⅢ区西側Cg-61・62、Ci-61・62グリットにかけて位置する。

平面形・規模 平面形は東西長5.40m、南北長4.46mの東西に長い長方形を呈す。面積は18.80㎡。残存

1 住居跡

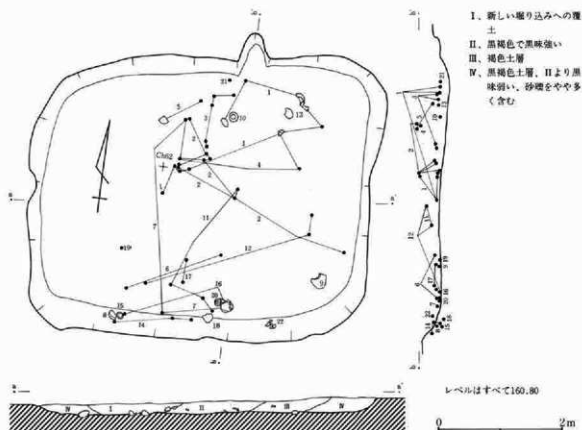
壁高は10~20cmと浅い。主軸方位はN-4°-Wとほぼ真北に近い。

概要 本住居跡は砂利層中の確認で、埋没土は黒褐色土が主であった。壁高は浅かったが、比較的遺物の残存状況は良かった。カマドを除く施設の確認はされなかった。床面は砂利層で、固く締った面はなく、掘り方と一致する。

カマド 北壁中央東寄りの壁を掘り込んで築いている。破壊が著しく、カマドの確認は焼土の残存状

況から判断した。袖石・壁石といった石の残存はなく、単に壁を多少掘り込んだ形のみである。やや燃焼部を床側に張り出す形式と考えられる。現存で幅48cm、燃焼部長44cmを計るが、実際はこの値よりも大きくなろう。

遺物 出土総数は774点である。須恵器は15点と少ない。「山寺」の墨書のある土師器環が出土している。また、完形の須恵器の蓋が3個出土している。

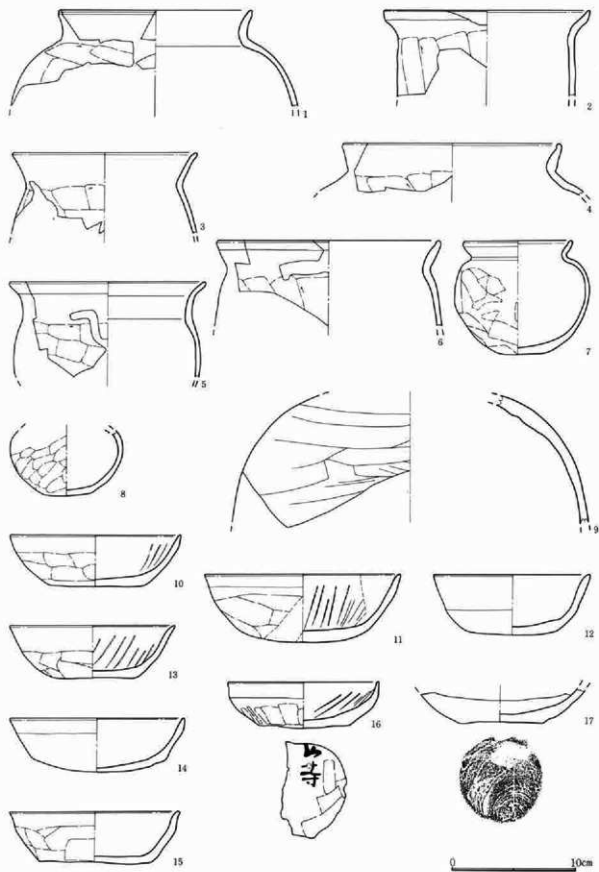


第108図 31号住居跡実測図

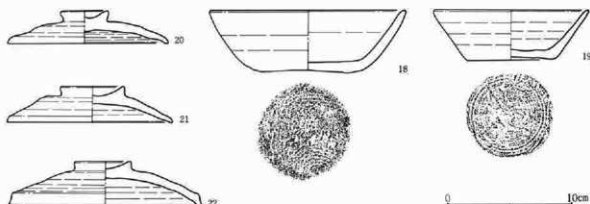
31号住居跡出土遺物観察表(1)

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	北側 +11	① (20.4) ② — ③ — ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焼 ③軟密	外面側部は刮削り、口縁部は撫撫で、内面側部は 荒撫で。紐作り。		
2	土師器 壺	中央 +7	① (22.0) ② — ③ — ④口縁部片	①橙色 ②良・酸化焼 ③1mm程の砂粒混入	外面側部は刮削り、口縁部は撫撫で、内面側部は 荒撫で。紐作り。		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第109図 31号住居跡出土遺物実測図(1)



第110図 31号住居跡出土遺物実測図(2)

31号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口縁②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	土 師 器 甕	カマド前 +6	① (19.4)	② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は筒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 寛撫で。紐作り。薄手。	
4	土 師 器 甕	カマド前 +5	① (22.8)	② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒少量混入	外面胴部は筒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 寛撫で。紐作り。	
5	土 師 器 甕	カマド前 +24	① (20.6)	② — ③ — ④口〜胴	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い。外面胴部は筒削り、口 縁部は横撫で、内面胴部は寛撫で。	
6	土 師 器 甕	南側 +2	① (23.4)	② — ③ — ④口〜胴	①黄〜黒色 ②良・酸化 焰 ③1〜3mm砂粒多量混入	外面胴部は筒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 寛撫で。紐作り。	
7	土 師 器 小型甕	中央 +4	①11.4 ②5.5 ③12.0 ④1/2		①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1〜2mm砂粒少量混入	外面胴部は筒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 寛撫で。紐作り。	
8	土 師 器 小型甕	壁ぎわ +11	① — ②5.0 ③ — ④胴〜底		①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は筒削り、内面胴部は横撫で。	
9	須 恵 器 甕	南東 +3	① — ② — ③ — ④胴部片		①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	内面帯頸直、外面寛整形。	
10	土 師 器 坏	カマド前 +8	①13.6 ②7.6 ③4.1 ④完形		①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 表面があれど、筒削り痕不明瞭。厚手。	
11	土 師 器 坏	南側 +4	①15.6 ②9.2 ③5.3 ④欠		①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
12	土 師 器 坏	南側 +13	① (12.4) ②7.5 ③4.7 ④欠		①におい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 厚手。	
13	土 師 器 坏	カマド前 +13	①13.2 ②6.5 ③4.1 ④完形		①明赤褐色 ②良・酸化 焰 ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。表面あれており、筒削り痕不明瞭。	
14	土 師 器 坏	壁ぎわ +5	①13.8 ②10.3 ③4.2 ④ほぼ完形		①褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面ともあれている。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

31号住居跡出土遺物観察表(3)

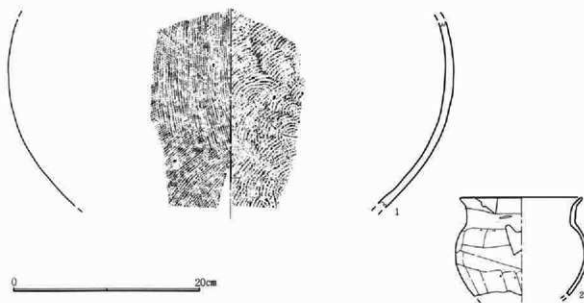
図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm) ①口径②高径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
15	土 師 器 環	壁ざわ +4	①13.6 ②8.9 ③3.9 ④ほぼ完形	①棕色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は器削り、口縁部・器内面は横線で、 表面あれている。厚手。	
16	土 師 器 環	壁ざわ +4	①12.0 ②7.2 ③3.6 ④ほぼ完形	①によい棕色 ②良・酸 化焰 ③緻密	体部・底部は器削り、口縁部・器内面は横線で、 暗文。	墨書 「山寺」
17	須 恵 器 環	南側 +11	①— ②6.7 ③— ④底部完形	①によい赤褐色 ②良・ 酸化焰③1mm程の砂粒混入	横線使用と思われるが、体部に使用度なくいびつ である。左回転糸切未調整。	
18	須 恵 器 環	壁ざわ +1	①(15.6) ②7.5 ③4.7 ④片	①棕色 ②良・酸化焰 ③緻密	横線成形。右回転糸切未調整。器内外ともあれ ている。	
19	須 恵 器 環	南側 +6	①(12.2) ②6.8 ③3.9 ④片	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	底部回転調整。横線整形。	
20	須 恵 器 蓋	南側 +13	①12.8 横3.3 ②2.6 ④完形	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	横線整形。	
21	須 恵 器 蓋	カマド前 +8	①13.2 横5.0 ③2.8 ④完形	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横線整形。	
22	須 恵 器 蓋	壁ざわ +9	①15.4 横4.5 ③3.6 ④ほぼ完形	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横線整形。	

32号住居跡 (PL33・77)

位置 本住居跡はⅢ区中央部東寄り、墓地の北
側位置する。15m内には遺構は認められないが、基
地による攪乱がひどいので、それも原因と考えられ

る。

概要 本住居跡の大部分は基地による攪乱で荒れ
ていて、平面形・規模は明らかでない。カマド部は



第1111図 32号住居跡出土遺物実測図

わずかに残存しており、主軸方位を計るとN-78°-Eである。残存壁高もほとんどなかったが、遺物の分布状況から、住居跡と判断した。

カマド 東壁中央部に存在したと考えられる。焼土のみの確認であり、他の施設は何も検出されていない。燃焼部は壁の中にはいる型式と推定できる。現状で、焚口幅は58cm、燃焼部長は34cmを計るが、これよりも大きめになるう。

遺物 出土総数は51点と少ない。須恵器は4点である。



第112図 32号住居跡実測図

32号住居跡出土遺物観察表

図	土器種類 器種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②構成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器 大甕	—	① — ② — ③ — ④ 胴部	①灰色 ②良・還元焼 ③緻密	外面叩き目、内面背割成。	
2	土師器 小型甕	カマド 周辺	① (13.0) ② — ③ — ④ 1/4	①赤褐色 ②良・酸化焼 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は直削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。紐作り。	

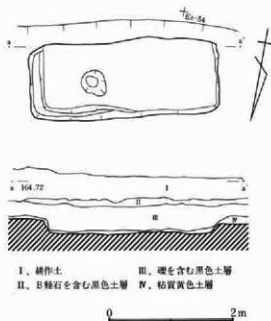
33号住居跡

位置 本住居跡はII区中央南側Ed-54, Ee-54グリットにかけて位置する。

平面形・規模 住居の大部分は敷地外のため発掘できなかった。平面形は現状で長方形を呈すると思われる。東西長は3.02mである。

概要 この付近は黄色土の堆積が見られ、壁を黄色土とする落ち込みが確認された。埋設土は黒色土である。しかし、遺物の出土は皆無であり、住居跡とする根拠も乏しいが、整理上、住居跡として扱った。

遺物 出土遺物なし。



第113図 33号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

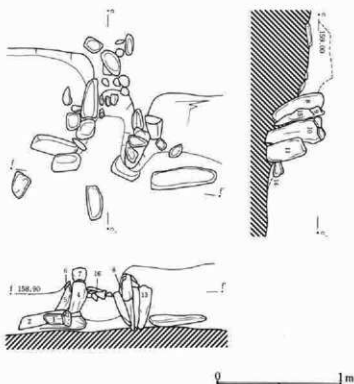
34号住居跡 (PL33・77)

位置 本住居跡はIV区西側のBm-66グリットからBn-66グリットにかけて位置する。37号住居跡の下層にあり南には41号住居跡が隣接する。

平面形・規模 規模は東西長4.84m、南北長3.96m、面積14.27㎡の、東西にやや長い長方形である。主軸方位はN-16°-Eをさす。表土掘削面からの壁高は約60cmである。

概要 この付近は、南北10数m、東西5～6mの範囲で黒色土の堆積が見られたところで、当初溝状遺構を想定したが、最終的に計3軒の住居跡(34・37・41号)が相次いで検出されるに至った。なお、37号住居跡は34号住居跡発掘後に確認したもので、遺物等からは34号住居跡より新しいと考えられるが、その床面の半分以上は34号住居覆土と共に掘り下げた。

また南に接する41号住居跡は、上層堆積状況から34号住居跡よりも新しいと考えられる。埋没土の上層は砂礫を含む暗褐色から茶褐色土層で、下層には小礫を含む黒褐色土が目立つ傾向にある。なお壁面は地山の砂利層が崩れ落ちている箇所が見られる。また、床面を中心にこぼし大から、径30～40cm程の礫が数多く堆積しており、住居廃棄の際に投げ込まれたものであろうか。柱穴は東側2ヶ所に確認できた



第114図 34号カマド実測図

ほかは明確には特定できなかった。

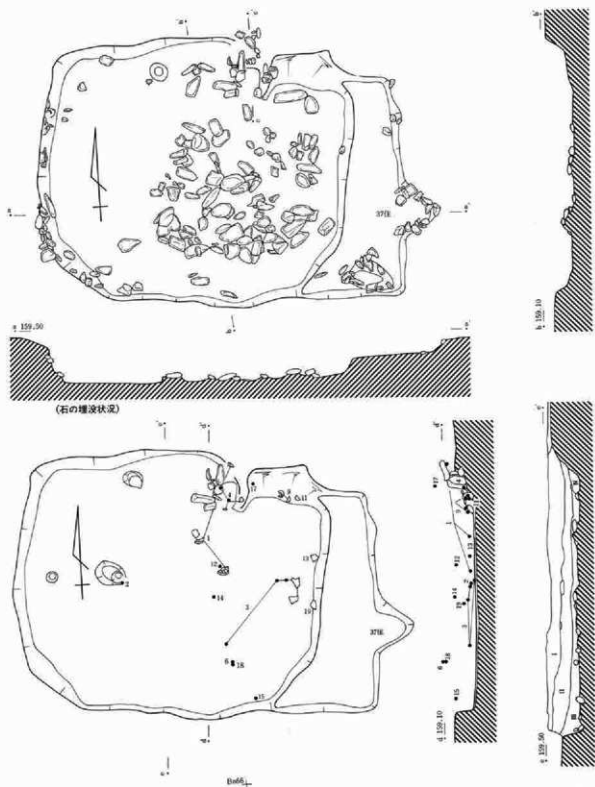
カマド カマドは北壁の東寄りに築かれている。両袖は住居内に張り出しており、幅10～20cm、長さ30～40cmの細長い石材を並べ粘土で固定させている。なお、煙道部は耕作等による削平のため確認できなかった。焚口幅は約60cm程である。

遺物 遺物の出土総数は1350点と多い。うち須恵器は60点余りである。

34号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②胎成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	中央 +5	①24.4 ③—	②— ④口一割	①におい橙色 ②良・酸化焙 ③1～2mm砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横溝で、内面割部は 段無で。紐作り。	
2	土 師 器 壺	西側 床	①(24.0) ③—	②— ④口縁部	①黒褐色 ②良・酸化焙 ③1～3mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横溝で、内面割部は 段無で。紐作り。	
3	土 師 器 壺	東側 床	①— ③—	②— ④頸一割	①橙色 ②良・酸化焙 ③1～3mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、内面割部は段無で。紐作り。	

1 住居跡

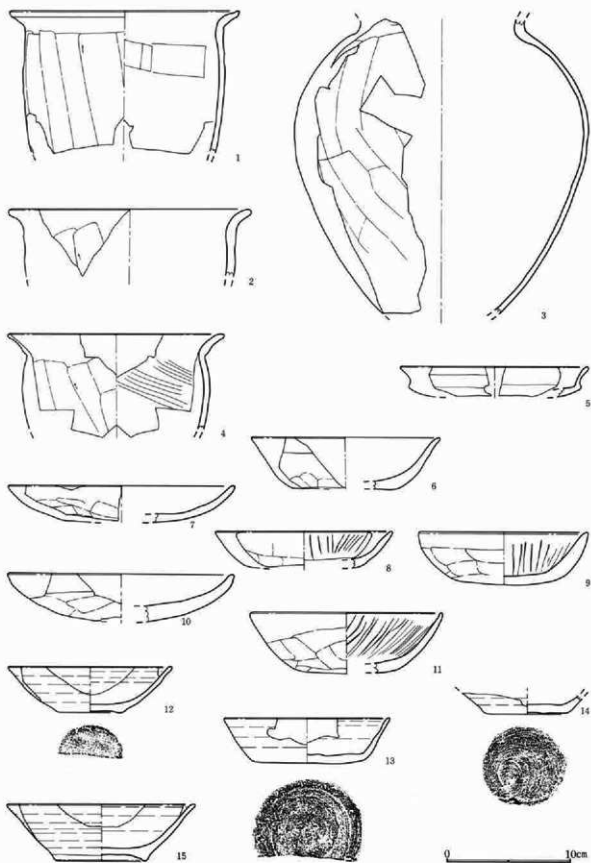


(石の埋没状況)

- I、小礫、褐色土ブロックを含む暗褐色土層
- II、大きな礫を含むが、割合に礫の混入の少ない黒色土層
- III、上層に比して礫の混入が少ない密な黒色土層
- IV、壁のくずれ(黄色砂利を含む黄色土層)

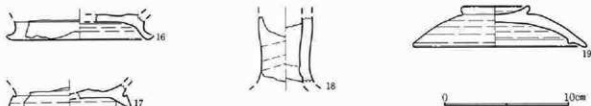
第115図 34号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第116図 34号住居跡出土遺物実測図(1)

1 住居跡



第117図 34号住居跡出土遺物実測図(2)

34号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 (cm) ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
4	土 器 壺	カマド付 近+8	① (23.0) ② — ③ — ④口~割	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒少量混入	外面胴部は既削り、口縁部は横線で、内面胴部は 横線で、紐作り。	
5	土 器 坏	—	① (15.0) ② — ③ — ④口~底	①にぶい棕色 ②良・酸 化焰 ③緻密	体部中央に、はっきりした横をもつ。	
6	土 器 壺	中央 +52	① (15.0) ② (8.0) ③ — ④口~底	①にぶい棕色 ②良・酸 化焰 ③緻密	体部・底部は既削り、口縁部・器内面は横線で。	
7	土 器 皿	南側 +47	① (18.0) ② — ③ — ④×	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	体部・底部は既削り、口縁部・器内面は横線で。	住居外
8	土 器 坏	南側 +47	① (14.0) ② — ③ — ④口~底	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③1~2mmの砂混	体部・底部は既削り、口縁部・器内面は横線で。 暗文。	
9	土 器 坏	カマド付 近+10	①13.4 ②8.5 ③4.2 ④ほぼ完形	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は既削り、口縁部・器内面は横線で。 暗文。	
10	土 器 皿	南側 +16	① (18.0) ② — ③ — ④口~底	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は既削り、口縁部・器内面は横線で。 厚手。	住居外
11	土 器 坏	北東隅 +1	① (15.4) ② — ③ — ④×	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は既削り、口縁部・器内面は横線で。 暗文。	
12	須 恵 器 坏	中央 +27	① (13.0) ② (5.0) ③3.6 ④×	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	輪軸成形。右回転糸切未調整。内・外面とも摩耗 している。	37住覆土
13	須 恵 器 坏	東側 +2	① (13.3) ②6.8 ③3.6 ④口~底×	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	輪軸成形。底部回転調整。	
14	須 恵 器 坏	中央 +31	① — ②6.4 ③ — ④底部	①灰オリーブ色 ②良・ 還元焰③1mm程の砂粒混	輪軸成形。右回転糸切未調整。内・外面ともあ れている。	37住覆土
15	須 恵 器 高台付壺	中央 高台付壺 +32	① (15.0) ② (7.2) ③4.5 ④×	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm以下の砂粒混入	輪軸成形。付高台。器面が荒れている。	37住覆土
16	須 恵 器 長頸瓶	—	① — ② — ③ — ④台部	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm以下の砂粒混入	輪軸整形。	
17	須 恵 器 長頸瓶	北側 +54	① — ② (13.0) ③ — ④台部	①灰色 ②良・還元焰 ③1~2mm程の砂粒混入	輪軸整形。	
18	須 恵 器 長頸瓶	中央 +51	① — ② — ③ — ④胎部	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm以下微細砂粒混入	輪軸整形。	34号住外 自然胎

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

34号住居跡出土遺物観察表(3)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
19	須 恵 器 蓋	東壁ぎわ +9	①15.7 ②5.4 ③3.2 ④×	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	楕圓形。カエリをもつ。		

35号住居跡 (PL34・77)

位置 本住居跡はBc-60からBd-60グリットにかけて位置する。

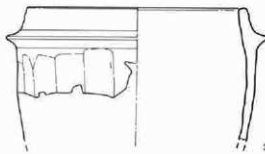
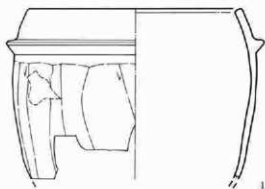
平面形・規模 東西長2.76m、南北長3.10mのほぼ正方形を呈し、面積は7.8㎡程で、壁高約30cmの小規模な住居跡である。主軸方位はS-75°-Eをさす。

概要 雄川に最も近い段丘上東辺に位置し、IV区1号溝に注ぐ幅3～4m程で南北に細長く延びたIV区2号溝の範囲内から検出された。大小の礫が連なる砂礫混じりの黒褐色土が埋没している2号溝を掘り込んでおり、壁面や床面には大ぶりの礫が露出し、かつ覆土中にもこぶし大から人頭大の礫が目立った。床面からは柱穴は確認されなかった。

カマド カマドは東壁中央に位置し袖部はやや住居内に張り出す。間口は約40cm長さ25cm程の門柱石が両側に据えられ、両袖は一部に腰を積み重ねるほかは黒褐色土と礫によって築かれている。奥壁は縦約20cm、横約30cm、奥行50cm余りの大ぶりの石がはめ込まれている。また、煙道部については、蓋石と見られる長さ20数cm、幅約10cm程度の細長い石材を横に並べた形の列石が東方に約40cm延びて残存する。煙道そのものは潰されていた。

遺物 遺物は主にカマド周辺より集中して検出されており、「コ」字口縁の甕の破片や羽釜が出土した。なお、壁に近い床面からは木炭片が若干検出された。

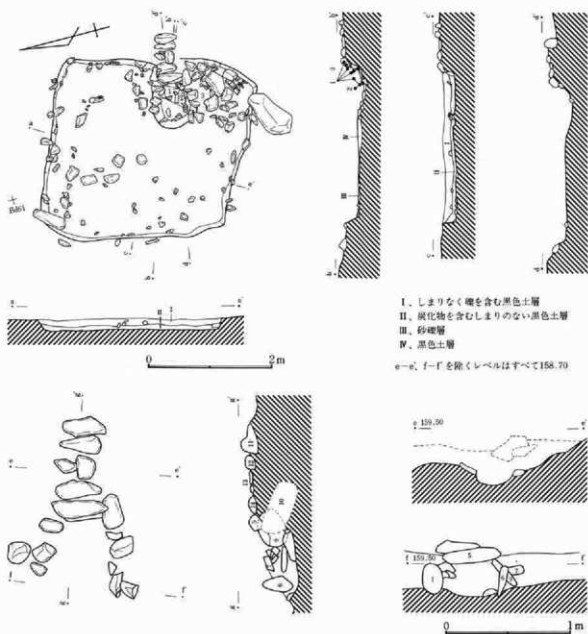
遺物 出土総数18点と少ない。灰釉陶器境が1点出土している。



0 20cm

第118図 35号住居跡出土遺物実測図

1 住居跡



- I. しまりなく焼を含む黒色土層
- II. 炭化物を含むしまりのない黒色土層
- III. 砂層
- IV. 黒色土層

e-f, f-gを除くレベルはすべて158.70

第119図 35号住居跡実測図

35号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土器種 類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①赤褐色②良・熟化焙③ 1~3mm程の砂粒多く混入	成形・整形の特徴	備考
1	羽 蓋	カマド内	① (22.5) ④ — ③ — ④口~胴片	①赤褐色②良・熟化焙③ 1~3mm程の砂粒多く混入	外面胴部は荒削り、口縁部は機織で、内面胴部は 機織で、紐作り。		
2	羽 蓋	カマド前 +1	① (23.2) ④ — ③ — ④口~胴片	①赤褐色②良・熟化焙③ 1~3mm程の砂粒多く混入	外面胴部は荒削り、口縁部は機織で、内面胴部は 機織で、紐作り。		
3	灰釉陶器 高台付壺	カマド前 +18	①15.4 ②7.6 ③6.1 ④ほぼ完形	①灰色 ②良・還元焙 (軟質) ③緻密	輪轆成形。撫で調整後付高台。内・外面とも施釉。	虎渓山1 号様式	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

36号住居跡 (PL34・77・78)

位置 本遺跡はBn-63グリッドからBn-65グリッドにかけて位置する。北には39号住居跡が隣接し、東方約4mでIV区1号溝に達する。

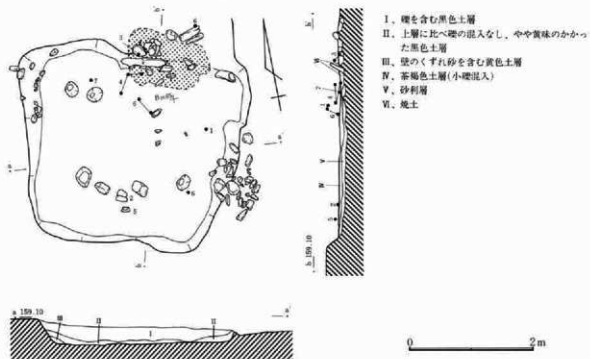
平面形・規模 東西長3.68m、南北長2.98m、面積8.01㎡の規模で、壁高は20~40cm。主軸方位はN-10°-Eをさす。

概要 砂礫混じりの黒色土層を掘り込んでつくられているが、壁際は砂利層の崩れ込みが目立ち、南東壁の立ち上がりはあまり明確ではない。カマドの

東南方向の床面には部分的に厚さ5cm未満の粘性土が残り、張床が施されていたと思われる。

カマド カマドは北壁のほぼ中央に位置するが、残存状況は悪く、天井石(長さ約70cm)、袖石と見られる石材が焼土の範囲に散乱する形で検出された。主に住居の外に張り出して築かれたと推定される。

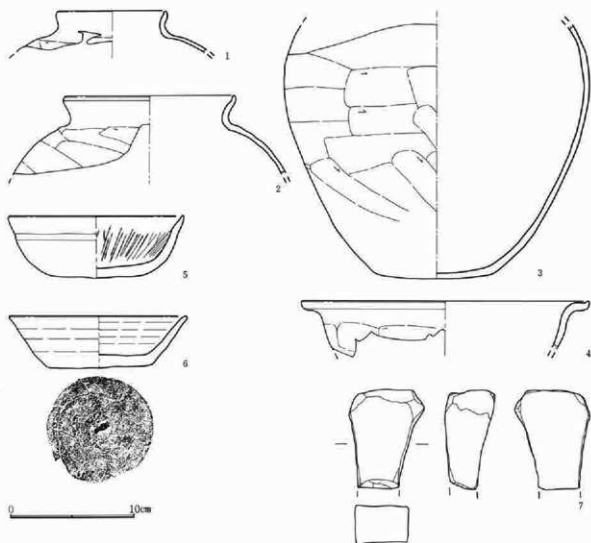
遺物 出土総数は885点である。うち須恵器片は15点と少ない。



第120図 36号住居跡実測図

36号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土師器 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	北東 +1	①(11.8)	②— ③— ④口縁部片	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面胴部は篋形、口縁部は横無で、内面胴部は篋無で。紐作り。	
2	土師器 壺	中央 +4	①(18.4)	②— ③— ④口~頸片	①棕色 ②良・酸化焰 ③1~3mm程の砂粒混入	外面胴部は篋形、口縁部は横無で、内面胴部は篋無で。紐作り。	
3	土師器 壺	カマド内	①—	②12.0 ③— ④胴部片	①橙~黒色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は篋形、口縁部は横無で、内面胴部は篋無で。紐作り。	
4	土師器 鉢	南側 +2	①(30.6)	②— ③— ④口縁部片	①棕色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	外面胴部は篋形、口縁部は横無で、内面胴部は篋無で。紐作り。	



第121図 36号住居跡出土遺物実測図

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②高さ ③器高④残存	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
5	土 器 環	中央 +6	①(14.0) ②(7.5) ③(4.9) ④1/2	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は皿削り、口縁部・器内面は横溝で、 縮文。単純しており、装飾り痕不明。	
6	酒 器 環	中央 +10	①14.2 ②8.4 ③4.1 ④1/2	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	縦軸成形。底部回転削り。	
7	砥 石	南西 +2	最大巾5.9 最小巾 3.3 厚さ2.8		4面とも使用、割れている。	砥石

37号住居跡 (PL35・78)

位置 本住居跡はBm-66グリットに位置する。下層に34号住居跡があり、南は41号住居跡に隣接する。

平面形・規模 南北長3.48mで、東西長についても、34号住居跡の発掘により西辺部が不明であるが、

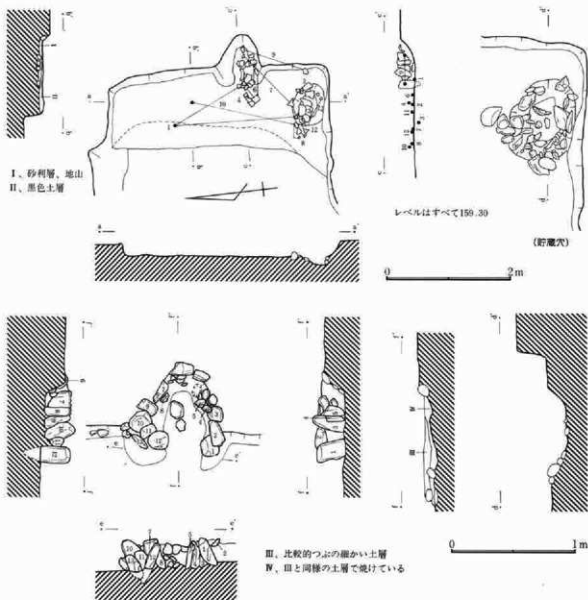
3m以上はあったと推定できる。壁高は25cm。主軸方位はN-86°-Eをさす。

概要 床面は砂利層に達し、黒色土が若干散かかっていた状態である。34号住居跡域に重なる部分につ

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

いては床面としての特徴は見出せず、34号住居跡の覆土との区別が付き難い状況であった。

カマド カマドは東壁の中央から南寄りに、焚口幅約50cm、燃焼部長約70cmで住居外に三角形に張り



第122図 37号住居跡実測図

37号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 夾	カマド前 +3	①19.6 ③— ④×	②— ④×	①によい赤褐色 ②良・ 酸化弱 ③緻密	「コ」の字状口縁に近い口縁。外面割部は寛削り、 口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。	
2	土 師 器 小型 夾	貯穴上 +6	①(14.8) ③16.5 ④×	②4.8 ④×	①によい褐色 ②良・酸 化弱 ③1~2mm砂少量混	「コ」の字状口縁に近い口縁。外面割部は寛削り、 口縁部は横撫で、内面割部は寛撫で。	

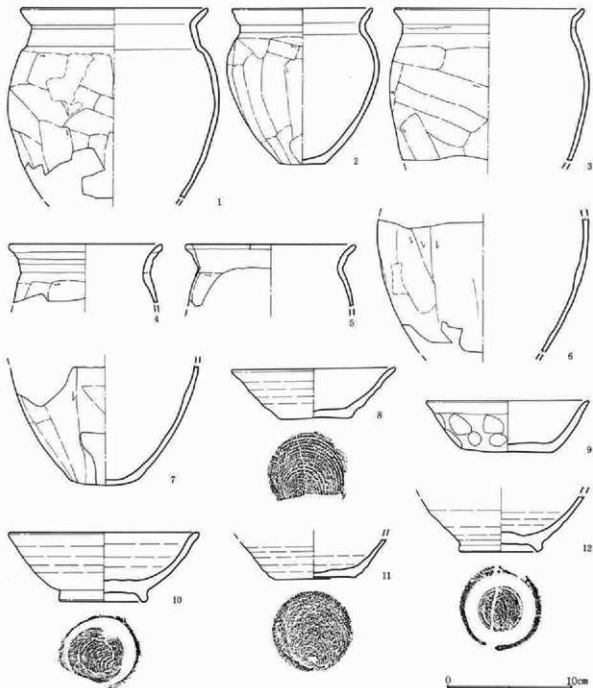
1 住居跡

出している。門柱石をはじめとして、カマド側壁は全て長さ20～40cm、幅10～20cm程の細長い扁平な石材を高さそろえて立て並べて築かれており、奥壁は砂岩（長さ33cm）が横たえられている。煙道部等上部施設は、耕作等により削平され残存していない。

遺物 遺物はカマド周辺と貯蔵穴内及び周辺から

集中して検出された。特に2本の門柱石の根元にはそれぞれ相当の大きさに断ち割った壺の口縁部（「コ」の字状口縁）が門柱石の根元を巻くように施されている様子が見られる。

出土総数は338点である。うち須恵器片は40点と多い。



第123図 37号住居跡出土遺物実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

37号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	土 師 器 壺	貯穴上 +10	① (20.0) ② — ③ — ④口—割	①黒褐色～橙 ②良・酸化焰 ③1～2mm程の砂少量混入	「コ」の字状口縁に近い口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。		
4	土 師 器 壺	カマド前 +8	① (16.0) ② — ③ — ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③1～2mm砂少量混入	「コ」の字状口縁に近い口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。		
5	土 師 器 壺	—	① (17.8) ② — ③ — ④口縁部	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。組作り。		
6	土 師 器 壺	カマド前 +8	① — ② — ③ — ④胴部	①橙色 ②良・酸化焰 ③1～2mm程の砂粒混入	「コ」の字状口縁の胴部と思われる。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。		
7	土 師 器 壺	貯穴付近 +6	① — ②7.5 ③ — ④胴—底片	①にぶい橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁の高部と思われる。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。		
8	須 恵 器 環	カマド内	① (13.0) ②5.8 ③3.8 ④片	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③1mm以下砂混	縁縁成形。右回転糸切未調整。		
9	土 師 器 環	東北隅 +11	①12.8 ②7.3 ③4.0 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。指環痕あり。		
10	須 恵 器 高台付塊	貯穴付近 +5	①15.0 ②7.0 ③5.4 ④片	①黒～灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③緻密	縁縁成形。回転糸切後付高台。		
11	須 恵 器 環	貯穴付近 +4	① — ②6.4 ③ — ④片	①灰～リブ色 ②良・還元焰(軟質) ③1mm砂混	縁縁成形。右回転糸切未調整。		
12	須 恵 器 高台付塊	貯穴上 +32	① — ②6.5 ③ — ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	縁縁成形。回転糸切後付高台。		

38号住居跡 (PL35・78)

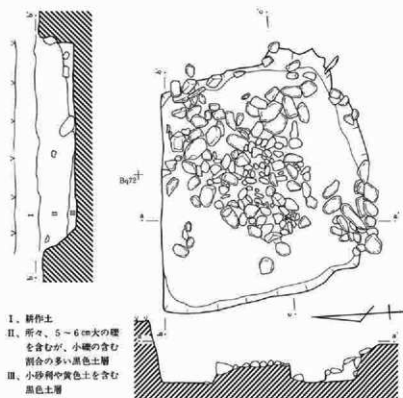
位置 本住居跡はBp-71からBq-71グリットにかけて位置する。

平面形・規模 本住居跡北壁は調査区域外に達するため検出できなかったが、東西長3.46m、南北長3.48mのほぼ正方形を呈するものと推定される。面積は9.6㎡。壁高約50cm。

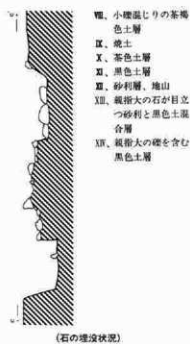
概要 砂利層の地山を掘り込んで構築されている。覆土は小礫が多く含まれる黒色土である。なお住居跡内には、確認面から床面にかけて、こぶし大から人頭大、あるいは径40cmにも達する大量の石礫が雑多に埋没、堆積していた。住居廃棄に伴い、割合短時間のうちに埋没したものであろう。また、本住居東壁のカマド跡の北と、南壁の西半分には一部石垣施設が残存する。東壁の石垣は長径30cm余り、短径10cmのやや細長く大ぶりな石と、こぶし大程度

の石礫を用いておよそ5段程度に組み上げたものである。南壁の石垣は長径40cm、短径20～30cmの大型の石と、径20cm程度の石を中心に3段程度組み上げ、隙間にはこぶし大程度の礫を嵌め込むような状況を示す。東壁石垣の傾斜がやや緩く床から45～50度を示すのに対し、南壁石垣はほぼ垂直に立ち上がる。両者ともやや傾斜をつけて砂利層の地山を掘り下げた後、黒色土で石の背後を固めながら、地山の傾斜を矯正するように石を組み上げていったことがうかがえる。東壁東半分や西面には石垣状施設は残っていないが、もし施されていたとすれば、床面、覆土中に見られる夥しい石礫の中には、石垣が崩れ落ちたものも当然含まれていたと考えられる。住居東隅には直径約30cm、深さ約15cmの貯蔵穴が検出されている。

1 住居跡



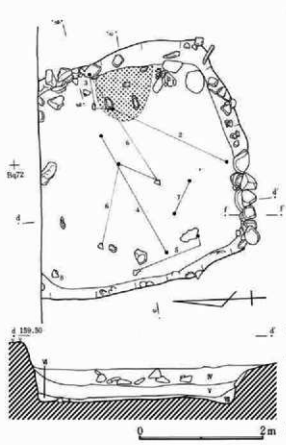
- I. 耕作土
- II. 所々、5~6cm大の礫を含むが、小礫の含む割合の多い黒色土層
- III. 小砂利や黄色土を含む黒色土層



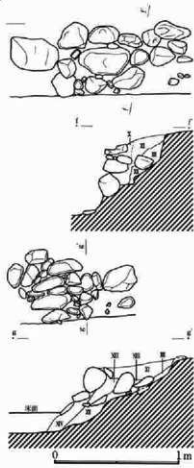
(石の埋没状況)

- IV. 小礫混じりの茶褐色土層
- V. 焼土
- VI. 茶色土層
- VII. 黒色土層
- VIII. 砂利層、地山
- IX. 縦割大の石が目立つ砂利と黒色土混層
- X. 縦割大の礫を含む黒色土層

d-gを除くレベルはすべて159.10

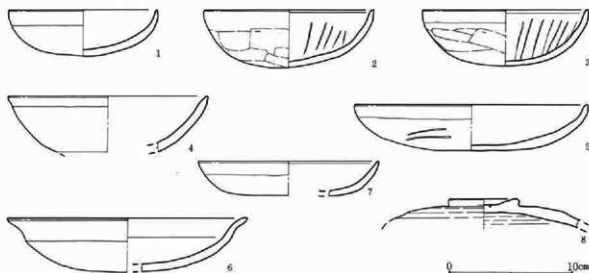


- IV. 小礫を含む黒色土層
- V. やや大振りな礫を含む黒色土層
- VI. 礫の混入が少なくしまりのある黒色土層
- VII. 密で礫を含まない黒色土層



第124図 38号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第125図 38号住居跡出土遺物実測図

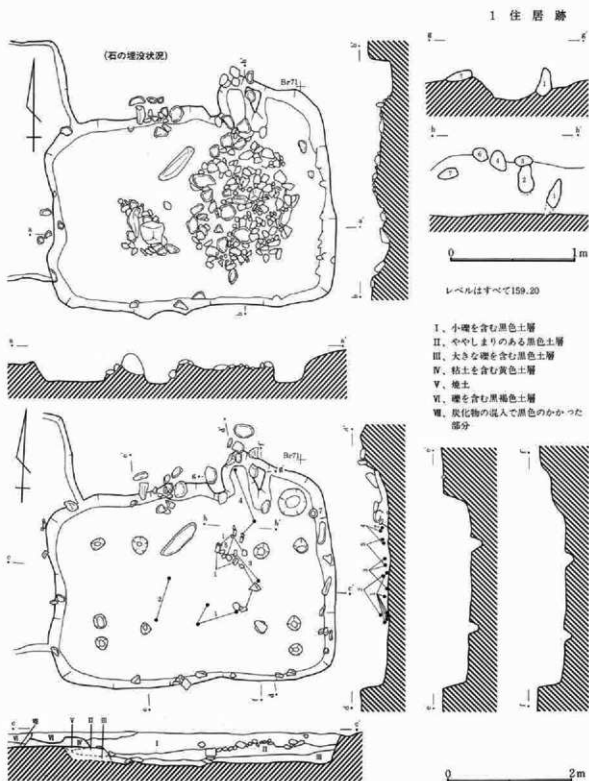
カマド 東壁中央に築かれていた。残存状況は極めて悪く、床面に堆積する焼土の位置から確定した。精査の結果、焚口の門柱石が抜き取られた痕跡と思われる穴が、約40cmの間隔を置いて2個検出された。東壁石垣との位置関係からすると、カマド袖部は住居内に張り出していたことがうかがえる。なお、カ

マドに至近の床面からは、形状、大きさ等からカマドに使用した可能性が高い石材が数点散在していた。

遺物 出土総数は338点で、うち須恵器は4点のみと少ない。

38号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器 器種 環	東側 +24	①11.8 ③0.6	②— ④完形	①灰色 ②良・酸化焙 (軟質) ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、底削り痕不明。	
2	土器 器種 環	中央+14	①13.6 ③4.5	②— ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の砂粒混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	内面に炭化物付着。
3	土器 器種 環	北東側 +1	①(13.2) ③4.4	②6.0 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
4	土器 器種 環	中央 +4	①(16.0) ③—	②— ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗著しく、底削り痕不明。	
5	土器 器種 皿	西側 +21	①(18.6) ③0.6	②13.0 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1~3mm砂粒多く混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、底削り痕不明瞭。	
6	土器 器種 皿	西側 +13	①(19.2) ③4.3	②— ④片	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。	
7	土器 器種 環	中央 +6	①(14.4) ③2.7	②10.0 ④片	①灰色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は筒削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、底削り痕不明。	
8	須恵器 蓋	北西隅 +46	①— ③—	換5.4 ④片	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	横縁整形。	



第126図 39号住居跡実測図

39号住居跡 (PL36・78)

位置 ほぼBr-70グリットに位置する。西壁部分にて、40号住居跡と切り合う。

平面形・規模 東西長4.34m、南北長3.20mの東西

に長い長方形を呈す。面積は11.35㎡。壁高は40～50cmである。主軸方位はN-85°-Wを示す。

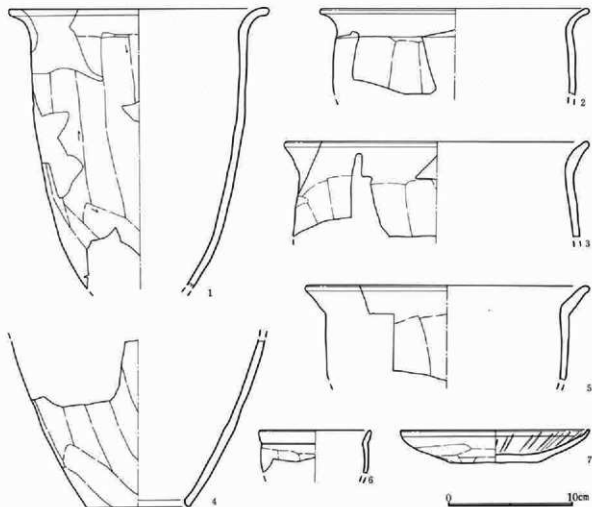
概要 砂利層の地山を掘り込み、覆土は小礫の目

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

立つ黒色土が埋没。特に、カマド正面南側の住居東半部を中心にこぶし大から人頭大、そして径30cm内外の石礫が、床面から覆土にかけて壁高に相当する厚さで堆積している様子は、38号住居跡と類似している。なお、本住居跡には石垣のような顕著な石組は見られないが、カマド西側に続く壁面には、径10~20cm内外の石礫10個程度が不規則ながら集中している箇所があり、壁面補強のために黒色土と共に石をしつらえたものと思われる。その他の壁面は大小礫を含んだ地山砂利層が露出しており、石垣状構築物は見られないが、住居内に埋没していた石礫があるいは石垣の崩落したものも含んでいる可能性も否定できない。柱穴と見られる径20~30cm、深さ20cm程度の掘り込みは合計10ヶ所検出されたが、柱穴の覆土は砂礫と黒色土の混合土で、地山が崩落した

ものとの区別が極めて困難である場合が少なくなく、判断に窮するが、ここでは最も内側に位置する4ヶ所については少なくとも柱穴に相当するものとする。カマド東脇、住居東北隅には直径40cm程の貯蔵穴状掘り込みを確認。なお西接する40号住居跡は本住居跡埋没後構築されたものである。

カマド 北壁東寄りに構築されており、残存状況は良好ではなく、門柱石が東側に1個残存、奥壁間際にカマド使用石材が数点残る。東側袖部は粘性土が帯状に50~60cmほど、南北に門柱石まで延びている。西側袖部は粘性土が若干残るのみである。カマド西袖前方、住居中央寄りの床面には天井石と推定される長径70cm、幅20cmの扁平で細長い石材が検出されている。なお北壁はカマドを挟んだ東側と西側では、南北に40cm程のプランの食い違いが見られる。



第127図 39号住居跡出土遺物実測図

遺物 出土総数は463点である。うち須恵器片は17点のみで他は土師器片である。住居跡北東隅の東壁際より、土師器環(完形品)、破片であるが底部の抜けた瓶が出土している。

39号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	カマド前 床	① (27.6) ② — ③ — ④口~胴	①にぶい赤褐色 ②良・酸化 焼 ③1~3mm砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横敷で、内面胴部は 篋削で、紐作り。	
2	土 師 器 壺	中央 +8	① (28.4) ② — ③ — ④口縁部	①明赤褐色 ②良・酸化 焼 ③1~3mm砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横敷で、内面胴部は 篋削で、紐作り。	
3	土 師 器 壺(横)	中央 +3	① (32.0) ② — ③ — ④口縁部欠	①赤褐色 ②良・酸化 焼 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横敷で、内面胴部は 篋削で、紐作り。	
4	土 師 器 瓶	中央 +6	① — ②11.0 ③ — ④底部欠	①赤褐色~黒色 ②良・ 酸化焼 ③1mm程砂粒混入	外面胴部は篋削り、内面胴部は篋削で、紐作り。	
5	土 師 器 壺	中央 +6	① (29.8) ② — ③ — ④口縁部欠	①褐色 ②良・酸化 焼 ③1mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横敷で、内面胴部は 篋削で、紐作り。	
6	土 師 器 小型壺	—	① (11.8) ② — ③ — ④口縁部欠	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焼③緻密	外面胴部は篋削り、口縁部は横敷で、内面胴部は 篋削で、紐作り。	
7	土 師 器 皿	東壁ぎわ +8	①14.8 ②7.0 ③2.5 ④完形	①赤褐色 ②良・酸化 焼 ③1mm程の砂粒少量混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横敷で、 暗文。	

40号住居跡 (PL36・79)

位置 本住居跡はBr-70グリットからBs-70グリットにかけて位置する。東壁下で39号住居跡と切り合う。

平面形・規模 規模は東西長4.04m、南北長3.58mの長方形を呈す。面積は13.94㎡。壁高は10~20cm程度。主軸方位は測定不能である。

概要 東接する39号住居跡とは床面で約20cmの高差があり、本住居跡東南部カマド直下にて切り合う。地山の砂礫層の直上に浅間A凝石を含む厚さ50~60cmの黒色耕作土層が及んでいるため、壁面上半部は削平を受けており、確認面から床面までの地山を掘り込んだ部分のみ検出した。住居東辺中央や

や南寄りのカマド周辺及び、住居東半部中央にて焼土の堆積を確認した。住居東南隅部にて、直径約40cm、厚さ約8cmの長円形の平石が置かれていた。柱穴、貯蔵穴は明確には確認できなかった。

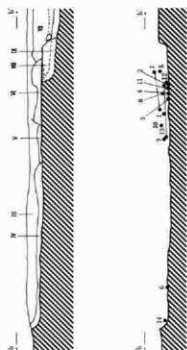
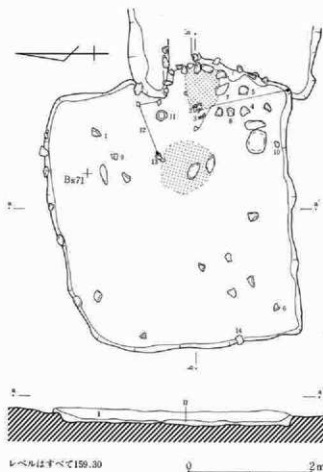
カマド 住居東辺中央よりやや南寄りの、焼土ならびに数個の扁平な石礫が集まった箇所をカマド跡と確認した。残存状況は極めて悪く、殆ど原形を留めていない。遺物はこの周辺に集中して出土した。

遺物 遺物の出土総数は273点で、うち須恵器は9点である。カマド周辺から小形の壺や(図5)、ほぼ完形の土師器環(図8,11,14)などが出土している。

40号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	北東 +9	① (28.6) ② — ③ — ④口~胴	①褐色 ②良・酸化 焼 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横敷で、内面胴部は 篋削で、紐作り。	
2	土 師 器 壺	カマド前 +2	① (21.2) ② — ③ — ④口縁部	①褐色 ②良・酸化 焼 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は 横敷で、内面胴部は篋削で、紐作り。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

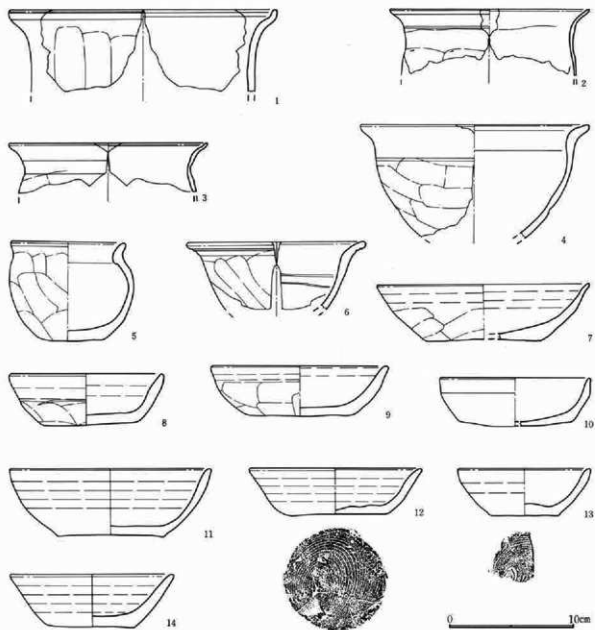


- I. 小礫を含みしりのある黒色土層
- II. やや大礫りの礫が混じり赤みをおびる黒色土層
- III. 礫を含む黒褐色土層
- IV. 礫の混入の少ない黒色土層
- V. 炭化物の混入で黒色のかかった部分
- VI. 粘土を含む黄色土層
- VII. 小礫を含む黒色土層
- VIII. ややしりのある黒色土層
- IX. 大きな礫を含む黒色土層

第128図 40号住居跡断面図

40号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③肩高④残存	①色調②構成③胎土	成形・整形の特徴	備考
3	土器 壺	カマド前 床	①(21.2) ②— ③— ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は篋削り、口縁部は横溝で、内面胴部は篋削で。紐作り。		
4	土器 鉢	南西 +4	①(24.3) ②— ③— ④口へ割	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横溝で、内面胴部は篋削で。紐作り。		
5	土器 小壺	東壁ぎわ +5	①12.3 ②7.0 ③10.4 ④完形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~3mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横溝で、内面胴部は篋削で。紐作り。		
6	土器 鉢	南西隅 +1	①(19.2) ②— ③— ④口へ割	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横溝で、内面胴部は篋削で。紐作り。		
7	須恵器 坏	カマド前 +16	①(16.8) ②(9.0) ③4.3 ④欠	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	輪轆成形。体部下半・高部は篋削り。		
8	須恵器 坏	南東 +10	①12.3 ②7.5 ③4.0 ④ほぼ完形	①にょい赤褐色 ②良・ 酸化焰 ③緻密	輪轆成形。体部下半・高部は篋削り。厚手。		
9	須恵器 坏	カマド前 +6	①(14.2) ②(8.6) ③4.0 ④欠	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	輪轆成形。体部下半・高部は篋削り。厚手。		



第129図 40号住居跡出土遺物実測図

40号住居跡出土遺物観察表(3)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
10	土 器 碗 片	南側 +2	①(11.9) ②(9.0) ③9.8 ④口~底	①褐色 ②良・酸化相 ③緻密	体部・底部は削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面ともにあれており、寛削り痕不明。	
11	須 恵 器 碗 片	カマド前 +4	①16.0 ②8.4 ③5.2 ④%	①褐色 ②良・酸化相 ③緻密	横撫成形。底部寛撫で調整。	
12	須 恵 器 碗 片	カマド前 +10	①(13.7) ②8.0 ③3.6 ④%	①灰白色 ②良・還元相 ③緻密	横撫成形。回転糸切未調整。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

40号住居跡出土遺物観察表(4)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口徑②高径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
13	須恵器 坏	中央 +5	①(10.5) ②(5.4) ③3.7 ④口~底	①暗青灰色 ②良・還元 ③胎 ④緻密	鉢盤成形。回転糸切未調整。		
14	須恵器 坏	西壁ぎわ +5	①13.0 ②6.7 ③4.1 ④ほぼ完形	①によい赤褐色 ②良・ 酸化焼 ③緻密	鉢盤成形。回転糸切と思われる。内・外面とも摩 耗が著しく、糸切痕不明。厚手。		

41号住居跡 (PL37・79)

位置 本住居跡はBm-65・66、Bn-65・66グリットにかけて位置する。北に34号・37号住居跡に隣接し、東方1.5mに44号・36号住居跡が並ぶ。

平面形・規模 東西長4.08m、南北長3.12mの長方形で、面積は10.25㎡。壁高は60～70cmである。主軸方位はN-14°-Wを示す。

概要 34号住居跡に南接して構築されている。土層の切合い関係からは41号住居跡の方が、34号住居跡よりも新しい。そして、カマド煙道部は37号住居跡によって切断されていると考える。埋没土は、砂利・礫混じりの黒色土であるが、10cm内外の礫が多く混入し、また床面には特に住居南半部を中心に最大30cmほどの高さで、こぶし大から径20cm程度の大小礫の堆積が見られた。なお、柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。本住居跡に於て、特筆すべきものとしては、南北両壁の東半部を中心に残存していた石垣施設が挙げられる。まずカマドを挟んだ両脇に残る北壁の石垣は、特にカマドの東側では、床面に於て長さ30～40cmの扁平な石1段もしくは2段横に積み、その上にこぶし大から径10cm余りの石礫を組んだもので、やや乱れながらも遺構確認面まで7～8段に組み上げた状態で残存していた。カマドの石組も石垣の中に見事に組み込まれた状態で構築している。南壁の石垣は、北壁石垣に向い合うようにほぼ同じ距離で残存し、北壁石垣よりも大振りの礫が多く、径20～30cmほどの礫頭を壁面にあらわし、あるいは40cm×18cm、60cm×10cm程の長大な石も使用され、北壁石垣よりも整然としておよそ6段程度に積み上げられている。南北両石垣とも、黒色土と共に

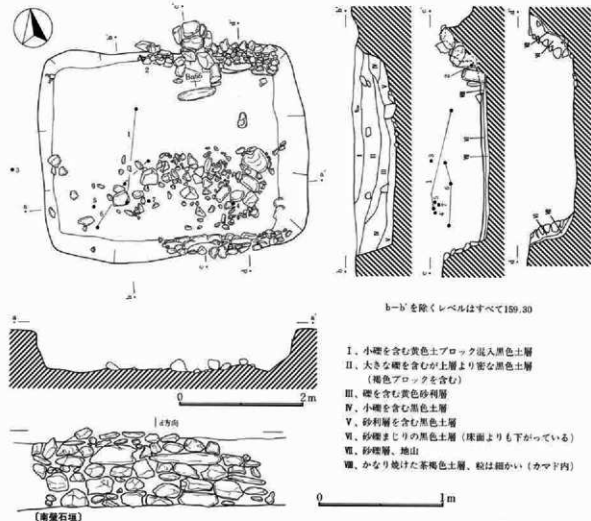
組み上げられており、石垣礫頭は住居壁の地山掘り方面から、北壁で約40cm、南壁で約30～40cmの厚さに達している。即ち、石垣を取り除いた住居掘り方プランは、石垣の施されたプランよりひとまわり大きくなることになる。壁面は裏込めされることなく一重に築かれている。これ等の石垣は、崩落しやすい砂礫層の壁面を固め保持するために施こされたものであろう。なお、住居の壁面すべてに施こされていたかどうかは明らかではない。西壁には人為的な石組みは確認されなかった。然るに、床面に堆積していた大小の礫は、住居東半部に於て集中する様子が見え、東壁直下には大振りの石が多く集まっており、これらの一部に東壁から崩落したものが含まれると見なすならば、砂利層の地山の露出した東壁にも石垣が施こされていた可能性がある。

カマド 北壁中央やや東寄りに位置し、両袖は住居内に張り出すかたちで築かれている。天井石が南面の床に崩落しているほかは両袖等石組は比較的良く残っている。床に張り出した袖部については、左右両袖とも2個づつ石材が用いられており、右側は縦約50cm、横約30cm、厚さ約16cm余りの平石を立て、その前に縦約32cm、横約13cm、厚さ約4cmの扁平な石を添えるように立てており、左側も、縦約40cm、横20cm弱、厚さ約10cmの石を立て、前には縦28cm、横8cm、厚さ7cmの細長い石を添え、それぞれ天井石を載せるため2個の石材を約13cmの段差をつけて立てており、更に東側では特に平石部分にもくびれ状の加工が及んでおり、各々左右両袖突出し部分を構成している。また、カマド焚口部分から煙道部に

かけて、張り出し部分を含めて右袖は計6個、左袖は計5個の石材が残存し南北に奥行約1mの長さで立ち並び、側壁を構成していたことが確認された。煙道部については、蓋状に載せ並べた石が落ち込み、煙道はつぶされた状態で検出された。煙道部は北壁面から約60cm北方に延びたところで、おそらくは37号住居構築にあたって削除されたものと考えられ

る。このような大振りの平石や長石を縦、横整固に組み上げたカマド石組は、北壁の径10cm内外の礎を多数積み上げた中であって、両者は見事な調和を見せ独特の空間をつくりあげていると言える。

遺物 遺物の出土総数は798点と多い。須石器はその中で30数点と少ない。実測可能な土器は坏7点と少なかった。

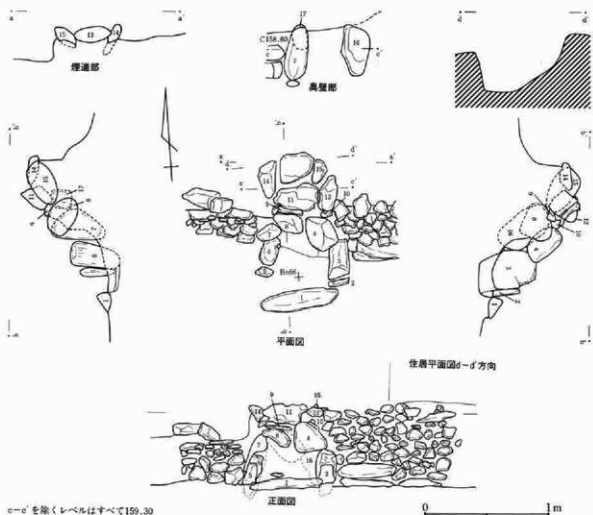


第130図 41号住居跡実測図

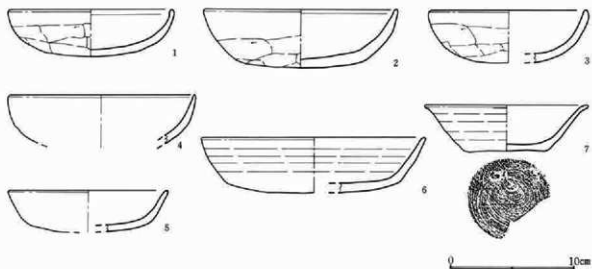
41号住居跡出土遺物観察表(1)

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器器坏	中央+70	① (13.0) ② - ③3.7 ④×	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は筒形り、口縁部・器内面は横撫で。		
2	土器器坏	北側+6	① (15.4) ②10.0 ③4.6 ④×	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は筒形り、口縁部・器内面は横撫で。内・外面ともあれている。		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第131図 41号住居跡カマド実測図



第132図 41号住居跡出土遺物実測図

41号住居跡出土遺物観察表2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④状態	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	土 師 器 環	中央 +65	① (12.4) ② - ③ - ④口-底	①褐色 ②良・酸化焼 (軟質) ③緻密	体部・底部は瓦割り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、瓦割り痕不明。	
4	土 師 器 環	中央 +73	① (14.8) ② - ③ - ④口	①にぶい褐色 ②良・酸 化焼 ③緻密	体部は瓦割り、口縁部・器内面は横撫で。内・外 面とも摩耗著しく、瓦割り痕不明。	
5	土 師 器 環	中央 +61	① (12.6) ② - ③ - ④口-底	①褐色 ②良・酸化焼 ③緻密	体部・底部は瓦割り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、瓦割り痕不明。	
6	須 恵 器 環	中央 +47	① (18.0) ② - ③ (4.4) ④口	①灰色 ②良・還元焼 ③緻密	横軸成形。底部窪形調整。	
7	須 恵 器 環	中央 +68	① (13.0) ②6.0 ③3.6 ④口	①灰色 ②良・還元焼 (軟質) ③1~2mm砂粒混	横軸成形。右回転糸切未調整。	

42号住居跡 (PL38・79)

位置 本住居跡は、IV区中央北寄りBo-70・71グリットに位置する。38号住居跡より東へ約6mの地点にあり、下層には43号住居跡が重複する。

平面形・規模 東西長約4.00m、南北長約3.20mの長方形で、面積約12.80㎡、壁高は約40cmである。主軸方位はN-83°Eを示す。

概要 IV区北辺部壁際に、南北約6m、東西約8mにわたって黒色土の堆積が見られた。このうち、遺物が集中する西半部について、1軒あるいは2軒相当の住居跡と認め、掘り下げる。そのうち南東隅部近くにて、焼土化した粘性土の固まりが検出され、かつ土器片や扁平な石が多数出土したことから、この部分をカマドと認定し、それを基準に南半部を42号住居跡とし、次いで北半部を43号住居跡と考えた。そして両者を南北に貫くセクションベルトにて、42号住居跡による床面及び北壁立ち上がりを示す土層境界を確認した。更に床面下約10cmにて砂礫層に達するまでが43号住居跡埋没部分と見なされ、本住居跡は43号住居跡埋没後に営まれたことを確認する。南・西壁面は砂礫層である。床面は、砂利・礫が若干混入する硬く締った黒色土面である。カマド正面部には焼土が幅約60cm、長さ約80cmにわたり堆積する。貯蔵穴、柱穴については、本住居のもの

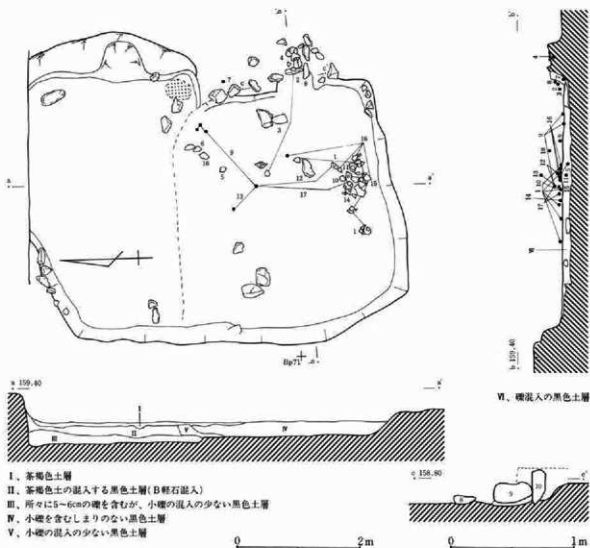
確認できるものは検出されなかった。

なお、その後本住居跡床面下約10cmの砂利層付近まで引き続き遺物が出土した。その結果43号住居跡は42号住居域内の北過半部まで占め、約10cmの床面高低差をもって重複することを確認した。

カマド 東壁に構築されていた。残存状況は悪く、こぶし大をはじめとして長径30cmまでの石を雑多に含む焼土化した粘性土の塊が径約1m弱の範囲で、東壁の外に張り出すように残存している。但し、北半部は下層43号住居跡のカマド跡に伴う焼土塊の残欠と思われる。一部、長径30cm、短径15cmほどの石が倒れ込むように横たわり、また、石(長径28cm、短径10cm)が直立して検出されたが、これらはカマド左袖部に相当する側壁材と推定される。なお、粘性土・石と共に壘・環等が潰れた状態で多数の土器片と共に出土している。

遺物 遺物の出土総数は1494点と多い。須恵器片はそのうち91点と他に比べ比較的多くなっている。「石」と同じ書体で墨書された須恵器環が2点出土した。また、はっきり読みとれないが、やはり底部に「石」と書かれた須恵器高台付塊も出土している。

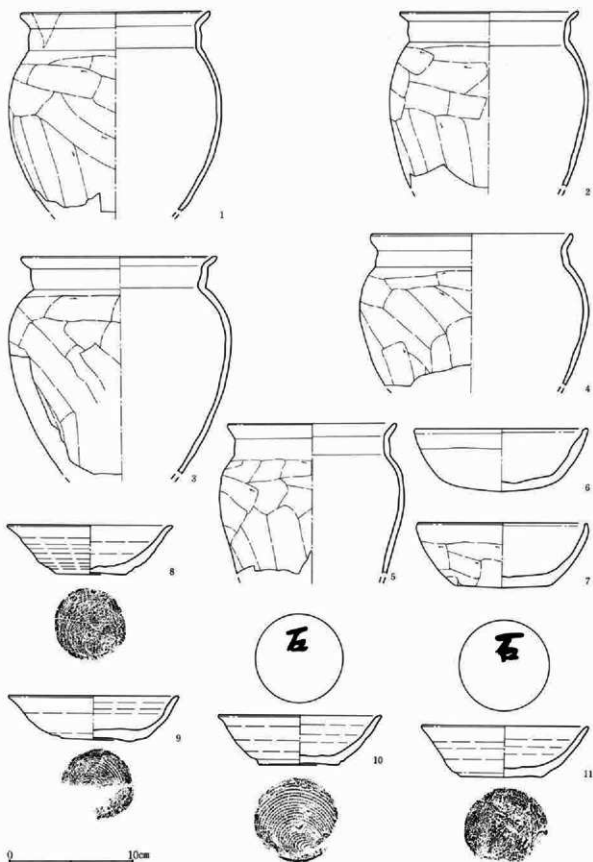
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第133図 42号住居跡実測図

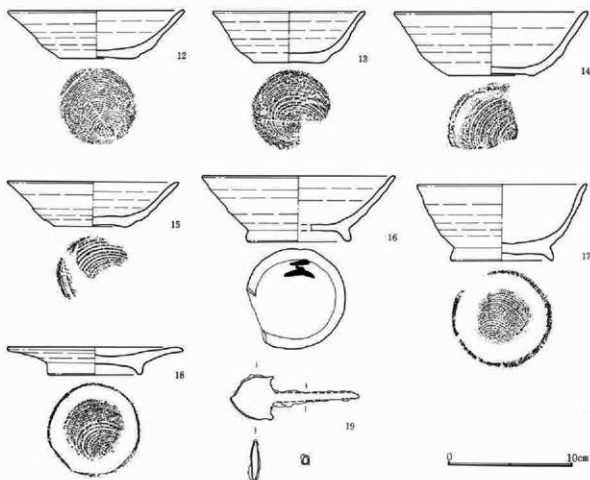
42号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	果目 (cm)	①口徑②底径 ③面高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	南側 +1	①20.0 ③—	②— ④口~割片	①にふい橙色 ②良・酸 化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は寛削り、口縁部は 横無で、内面胴部は直無で、紐作り。	
2	土 師 器 壺	カマド内	①(18.8) ③—	②— ④口~割	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は寛削り、口縁部は 横無で、内面胴部は直無で、紐作り。	
3	土 師 器 壺	カマド内	①20.5 ③—	②— ④口~割片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は寛削り、口縁部は 横無で、内面胴部は直無で、紐作り。	
4	土 師 器 壺	—	①(21.2) ③—	②— ④口~割片	①にふい橙色 ②良・酸 化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面胴部は寛削り、口縁部は 横無で、内面胴部は直無で、紐作り。	
5	土 師 器 壺	カマド内	①(17.6) ③—	②— ④口~割片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	「コ」の字状口縁。外面胴部は寛削り、口縁部は 横無で、内面胴部は直無で、紐作り。	



第134图 42号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第135図 42号住居跡出土遺物実測図(2)

42号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 (cm) ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
6	土 師 器 杯	中央 +6	① (13.6) ②6.5 ④4.9 ④片	①褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は覆削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、覆削り痕不明。	
7	土 師 器 杯	中央 +12	① (13.4) ②7.8 ③5.1 ④片	①橙～黒色 ②良・酸化 焰 ③緻密	体部・底部は覆削り、口縁部・器内面は横撫で。	
8	須 恵 器 杯	カマド内	①13.2 ②5.6 ③3.8 ④片	①橙～赤褐色 ②良・酸 化焰 ③緻密	轆轤成形。右回転糸切未調整。	
9	須 恵 器 杯	中央 +10	①13.4 ②5.7 ③3.4 ④片	①にょい褐色 ②良・酸 化焰 ③1～2mm砂粒混入	轆轤成形。回転糸切未調整。	
10	須 恵 器 杯	南側 +1	①13.0 ②6.3 ③3.9 ④片	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③1～2mm砂粒混	轆轤成形。右回転糸切未調整。	内面底墨 書「石」
11	須 恵 器 杯	南側 床	①13.2 ②6.5 ③4.0 ④片	①灰色 ②良・還元焰 (軟質)③1mm程の砂粒混	轆轤成形。摩耗はげしく、不明瞭であるが、回転 糸切未調整と思われる。	内面底墨 書「石」
12	須 恵 器 杯	南側 +8	①14.0 ②6.3 ③3.8 ④片	①灰～黒色 ②良・還元 焰(軟質) ③1～2mm砂混	右回転糸切未調整。	

図 No.	土層種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
13	須恵器 坏	中央 +13	①(12.0) ③4.0	②5.8 ④片	①黒色 ②良・還元焰 (軟質)③1mm程の砂粒混	轆轤成形。右回転糸切未調整。	
14	須恵器 坏	南側 +1	①15.2 ③5.0	②6.7 ④片	①灰色 ②良・還元焰 (軟質)③1mm以下の砂混	轆轤成形。糸切後付高台。	
15	須恵器 坏	南側 +1	①(13.6) ③3.5	②5.7 ④片	①黒色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	轆轤成形。回転糸切未調整。	
16	須恵器 高台付埴	南側 +1	①(15.4) ③5.2	②6.1 ④片	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③緻密	轆轤成形。回転糸切後付高台。	底部墨書 「[石.]」
17	須恵器 高台付埴	南側 +1	①(13.4) ③6.0	②6.0 ④片	①灰色 ②良・還元焰 (軟質)③1mm程の砂粒混	轆轤成形。回転糸切後付高台。	内黒
18	須恵器 高台付皿	中央 +22	①14.0 ③2.2	②7.2 ④片	①灰色 ②良・還元焰 ③1mm程の砂粒混入	轆轤成形。右回転糸切後付高台。	
19	鉄 器	中央 -3	長さ10.2 厚さ0.6	幅3.1		鉄鏃	

43号住居跡 (PL38・80)

位置 本住居跡は、IV区中央北寄りBo-71グリットに位置する。本住居跡の南半部が42号住居跡中央以北の下層にて重複している。北壁の一部は調査区IV区北辺に達する。

平面形・規模 東西長約3.50m、南北長約4.50mの南北に長い長方形で、面積は約15.75㎡。壁高は確認面から約50cmである。主軸方位はN-88°-Eを示す。

概要 IV区北辺に接する黒色土地域を全体に掘り下げる途上、住居跡2軒分の重複が判明し、まず42号住居跡を確認し、同時に本住居跡も約10cmの段差を保ち北接して確認する。42号住居跡城の四分の三程度に相当する北過半分まで、本住居跡城が達することを確認した。西壁から北壁にかけては砂礫層の壁面を確認。北壁東半部は調査区IV区北辺に達する。

床面は砂礫混じりの黒色土に覆われ、大小礫が数多く露出し、砂礫層の地山に達する。砂礫層の床面には、直径約20cm程度、深さ約10cmの黒色土を多く含む砂利を埋没土としたビットが11ヶ所検出された。中には、石礫に囲まれるように黒色土が堆積した箇所もあるが、人為的に石が組まれたものかどう

かは不詳であり、多くは柱穴とは断定し難いビットである。貯蔵穴も、確定的なものは検出されなかった。

なお、本住居跡北壁が達するIV区北壁面土層セクションにて、地表面下約50～65cm程のところ、最も厚い部分で約15cmの浅間B軽石層を確認している。43号住居跡掘り込みに相当する部分であり、レンズ状に堆積する傾向を示しており、本住居跡埋没後の窪み部分に堆積したものと考えられる。

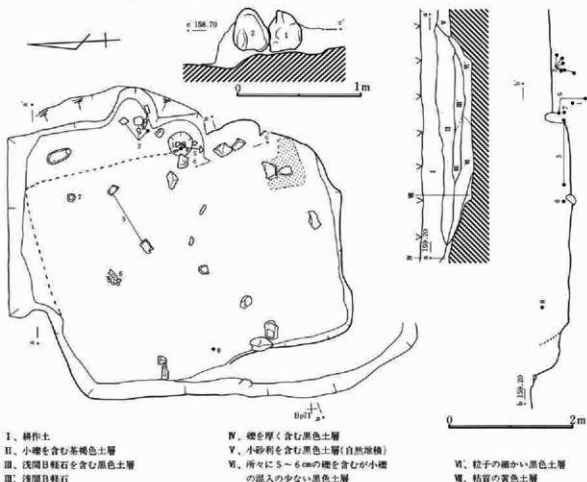
カマド 42号住居跡カマド跡に北接する部分を推定。縦30cm、横30cmの2個の石が本住居跡東壁ラインに沿って南北に立ち並んでおり、これを本住居跡カマド関係の石材と推定している。42号住居跡カマド右袖から東壁に連なっているとも考えられ、この2つの列石とも42号住居跡にともなう可能性もある。列石の東側の焼土塊からも遺物が出土しており、43号住居関係施設(カマド?)を切って、列石を立て並べた可能性も考えられる。この立石の周辺には焼土塊や土器が多数出土している。42号住居跡との新旧関係から、42号住居跡及び同カマド構築に伴い大きく破壊を受けていると思われ、カマド自体の残

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

存状況は極めて悪い。

須恵器は34点である。

遺物 遺物の出土総数は1110点と多い。そのうち



I. 耕作土

II. 小礫を含む茶褐色土層

III. 浅間日軽石を含む黒色土層

IV. 浅間日軽石

IV. 礫を厚く含む黒色土層

V. 小砂利を含む黒色土層(自然堆積)

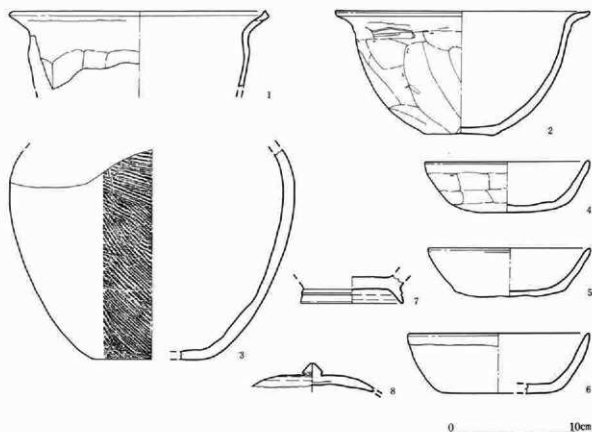
VI. 所々に5~6cmの礫を含むが小礫の混入の少ない黒色土層

VII. 粒子の細かい黒色土層
Ⅷ. 粘質の黄色土層

第136図 43号住居跡実測図

43号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	中央 +9	①(26.8) ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横櫛で、内面割部は寛削で、紐作り。内・外面ともあれている。		
2	土 師 器 鉢	カマド内	①27.0 ②7.4 ③12.9 ④片	①橙~黒色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は寛削り、口縁部は横櫛で、内面割部は寛削で、紐作り。	外面二次焼成。	
3	須 恵 器 壺	カマド前 +11	①— ②(12.6) ③— ④割~底	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	内面指頭瓦板、外面平行叩き目。		
4	土 師 器 坏	住居外	①13.0 ②9.0 ③4.0 ④完形	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横櫛で、厚手。		
5	土 師 器 坏	中央 +25	①13.0 ②— ③— ④口~底	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横櫛で、内・外面ともに摩耗が著しい。		
6	土 師 器 坏	中央 +9	①(14.4) ②— ③(4.8) ④口~底	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横櫛で、内・外面とも摩耗が著しい。		



第137図 43号住居跡出土遺物実測図

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
7	須 恵 器 壺	中央 +30	①— ②11.0 ③— ④底部	①灰色 ②黄・還元焰 ③緻密	甌鉢成形。		
8	須 恵 器 蓋	中央 +41	①— ②— ③— ④胴部	①灰色 ②黄・還元焰 ③緻密	甌鉢成形。		

44号住居跡 (PL39・80)

位置 本住居跡はBl-65、Bm-65グリットにかけて位置する。南に36号住居跡が隣接し、西1.5mには41号住居跡が位置する他、東方5mにはIV区1号溝が南北に流れており、西から東へ溝に向って若干の傾斜が見られる。

平面形・規模 東西長4.60m、南北長3.40mの長方形で、面積は15.48㎡である。壁高は西壁が約60cm、東壁は約30cm程である。主軸方位はN-26°-Eを示す。

概要 砂混じりの黒色土層を掘り込んでおり、

西壁下半は砂利層に塗する。床面から覆土にかけて、住居跡の西北隅、カマド前面から左前部、住居跡東南隅には手のひら大から長径40cmに及ぶやや大振りの石礫の堆積が見られた。柱穴は4ヶ所確認され、いずれも径20~30cm、深さ10cm余りである。住居南壁以南は、36号住居跡のカマドの北側に接している。床面は、カマド周辺にて焼土混じりの黒色土の堆積が見られたほかは、砂利層直上で茶褐色土の堆積が若干見られる状況であった。

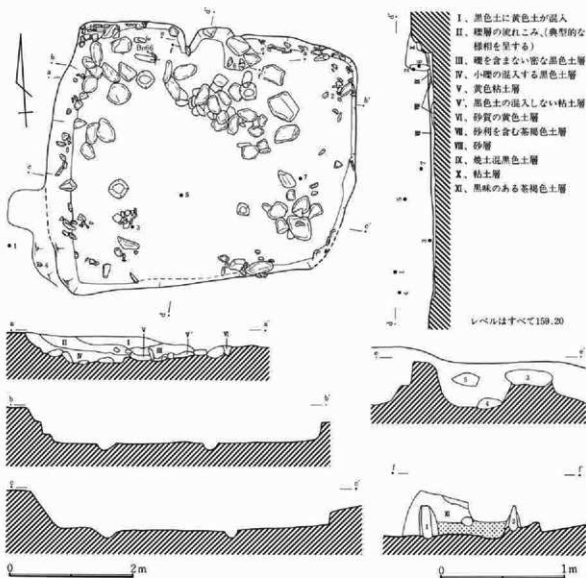
カマド 北壁中央部に築かれている。残存状況は

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

良好とは言えない。左右両袖は住居内に張り出して
おり、高さ30cm余り、厚さ約6cmの門柱石が左右に
残り、袖部は粘土で固められて北壁へ接続している。
残存状況は良いとは言えず、カマド南の石礎の中
には、カマド使用石材と思われる焼けた痕跡のある石

がいくつか確認されており、また、煙道部は削平を
受けており検出されなかった。

遺物 出土遺物総数は131点と少ない。須恵器はその
うち3点である。

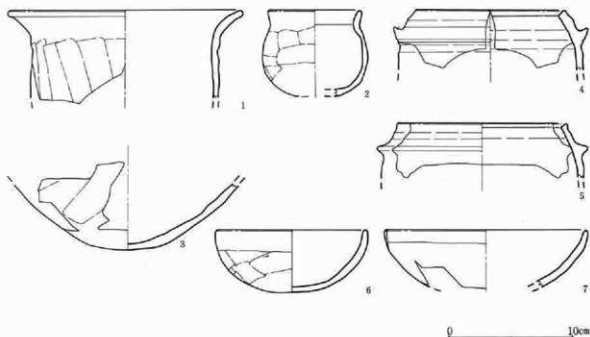


第138図 44号住居跡実測図

44号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口徑②底徑 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土 師 甕	住居外	① (25.0) ② — ③ — ④口縁部	①黒褐色 ②良・酸化弱 ③1~3mm位の砂粒混入	外面胴部は寛用り、口縁部は横撫で、内面胴部は 荒撫で。紐作り。		

1 住居跡



第139図 44号住居跡出土遺物実測図

図 No	土器種 類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
2	土器類 小型壺	北東 +3	① (10.0)	② — ③ — ④片	①橙色 ②良・酸化焙 ③緻密	外面胴部は寛削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 置撫で。紐作り。外面の磨耗がはげしい。	
3	土器類 壺	西側 +6	① — ②7.5	③ — ④胴~底	①橙~黒色 ②良・酸化 焙 ③1~2mmの砂粒混入	外面胴部は寛削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 置撫で。紐作り。	
4	羽 釜	住居外	① (15.8)	② — ③ — ④口縁部	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	縦縞整形。	
5	羽 釜	中央 +21	① (18.0)	② — ③ — ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焙 ③1mm程度の砂粒混入	縦縞整形。	
6	土器類 坏	北側 +15	①12.0 ② — ③5.0 ④突形		①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焙③1mm程度の砂粒混	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	いびつ。
7	土器類 坏	中央 +29	① (16.0)	② — ③ — ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面ともあれている。	

45号住居跡 (PL39・80)

位置 本住居跡はBs-68グリットに所在する。調査区IV区の西端に位置し、住居プランの西側3分の1程度が調査対象区域外(市道部分)に達している。北6mには39号・40号住居跡が位置する。

平面形・規模 東西長2.90m、南北長3.40mで、面積は7.72㎡であるが、実際の東西辺はおそらく南北辺と同程度の長さで、ほぼ正方形に近い形であると

推定される。確認面からの壁高は約20~30cmである。主軸方位はN-11°-Eを示す。

概要 砂礫混じりの黒色土から砂利層にかけて掘り込まれている。この付近は、砂礫層・黒色土層とともに黄褐色土の分布が見られる箇所、住居覆土中にも黄褐色土が割合多く見られた。壁高は低く、既に半分以上が耕作等によって削平を受けていたと

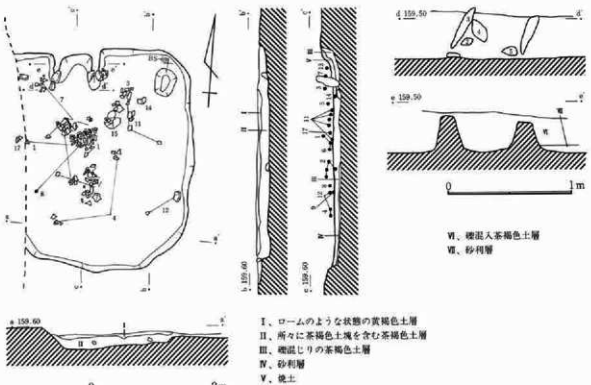
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

思われる。床面は若干茶褐色土混じりの土の堆積が見られ、床下は砂利層に達している。カマド東方、住居東北隅には、東西40cm、南北45cm余り、深さ約15cmの貯蔵穴と思われる掘り込みがある。また、東南隅近くには円形ピット(40cm×10cm)が検出されたが、性格は不明。柱穴は確認されなかった。

カマド 北壁方向に構築されている。住居推定プランからは、北壁中央に位置すると考えられる。両袖とも住居内に約40cm張り出してつくられており、

両袖石は長さ約30cm余り、幅約15cmの扁平な川原石で、東にやや傾いて残存していた。焚口幅は約54cmである。カマド内の床面近くでは焼土の堆積が5、6cm程度見られた。煙道部は削平を受けており検出されなかった。

遺物 出土総数は387点で、うち9点が須恵器片である。カマド前面から住居中央部に向かって、大量の土器片が散乱していた。

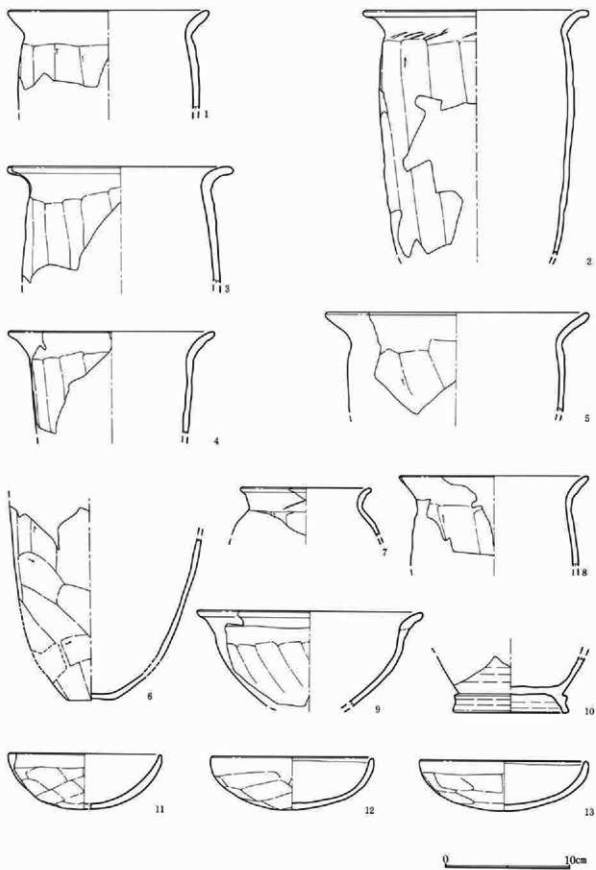


第140図 45号住居跡実測図

45号住居跡出土遺物観察表(1)

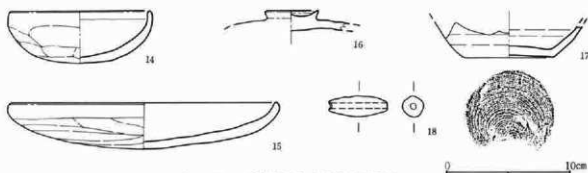
図No	土器種類	出土位置(cm)	量目(cm) ①口径②底径③器高④残存	①色調②構成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	カマド内	①21.4 ②— ③— ④口縁部ほぼ完形	①赤褐色 ②良・酸化垢 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は篋削り、口縁部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。	
2	土師器 壺	中央+3	①(24.0) ②— ③— ④口~割	①赤褐色 ②良・酸化垢 ③1~2mm程の砂粒混入	外面割部は篋削り、口縁部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。	
3	土師器 壺	北側+16	①(24.0) ②— ③— ④口縁部	①橙~黒色 ②良・酸化垢 ③1~2mm砂粒混入	外面割部は篋削り、口縁部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。	

1 住居跡



第141圖 45号住居跡出土遺物実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第142図 45号住居跡出土遺物実測図(2)

45号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No.	土器種 器種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③— ④口縁部	①色調②構成③胎土	成形・整形の特徴	備考
4	土師器 壺	西側 +7	①(22.0) ②— ③— ④口縁部	①黒色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 縦撫で。紐作り。	
5	土師器 壺	カマド付 近+11	①(28.0) ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程度の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 縦撫で。紐作り。	
6	土師器 壺	中央 +3	①— ②5.0 ③— ④胴~底	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程度の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 縦撫で。紐作り。	No.1の下半分か?
7	土師器 小型壺	カマド付 近+3	①14.0 ②— ③— ④口縁部	①橙~黒色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程度の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 縦撫で。紐作り。	
8	土師器 壺	西側 +7	①(20.0) ②— ③— ④口縁部	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 縦撫で。紐作り。	
9	土師器 鉢	中央 +40	①(24.0) ②— ③— ④口~胴	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm程度の砂粒混入	外面割部は寛削り、口縁部は横撫で、内面割部は 縦撫で。紐作り。	内面に炭 化物付着
10	須恵器 壺	住居外	①— ②12.2 ③— ④底部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横縫成形。	
11	土師器 環	東側 +3	①12.2 ②— ③4.4 ④%	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm以下の砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
12	土師器 環	東側 +1	①13.0 ②— ③4.2 ④%	①明赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~3mm砂粒少量混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
13	土師器 環	カマド付 近+6	①13.2 ②— ③4.5 ④%	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程度の砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
14	土師器 環	貯穴付近 +6	①11.2 ②— ③4.1 ④%	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。	
15	土師器 皿	中央 +6	①21.3 ②— ③3.6 ④ほぼ方形	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒少量混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で、 内面あれている。	
16	須恵器 壺	中央 +11	胴径4.2 ②— ③— ④底部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	横縫成形。	
17	須恵器 環	西側 +5	①— ②7.0 ③— ④体~底	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	横縫成形。回転糸切未調整。	
18	土 鉢	—	長4.7 径1.7 穴径0.4	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密		

46号住居跡 (PL40・81)

位置 本住居跡は、IV区西側のBp-65・66、Bq-65・66グリットにかけて位置する。

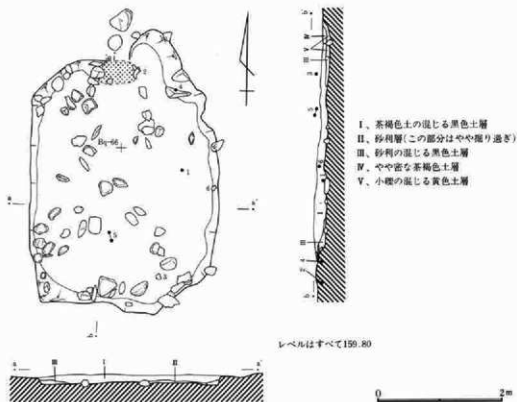
平面形・規模 東西長2.84m、南北長3.84mの南北に長い長方形を呈しており、東南隅は丸味を帯びている。面積は8.92㎡である。壁高については、床面からは確認されず、掘り方面からは約10～20cmを計るのみである。主軸方位はN-9°-Eを示す。

概要 概して明確な住居プランは検出できなかったが、砂礫層の地山に囲まれた黒色土の範囲を住居跡域と推定し、砂利・小礫を多く含む。茶褐色土の混じる黒色土を掘り下げたところ、およそ10cm程のところまで大小の石礫が一面に露出しはじめ、地山に達した。おそらく、確認面まで表土を掘削した時点で既に、床面あるいはそれに近いレベルに達してい

たものと考えられ、よって壁の立ち上がりは殆ど残らなかった状況である。北壁沿いに焼土の分布が見られたが、カマド床面に相当する部分が残ったものであろう。

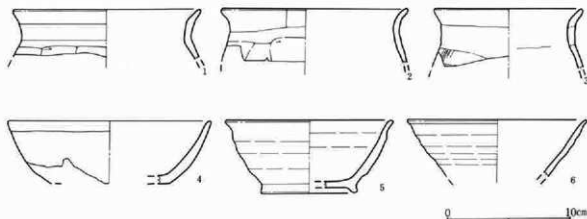
カマド 北壁中央部分には焼土の堆積と見なされる箇所があり、遺物も少ないながら見られ、おそらくカマド跡であろうと考えられる。残存状況は極めて悪く、カマドの条件を満たす状態とは言い難い。但し、径25cm程度の石が、左袖部に相当する場所及びカマド奥壁に相当する場所にそれぞれ1個ずつ据え置かれたように残るが、自然石との見分けがつきにくく、カマドのものかどうかは不詳である。

遺物 出土総数は83点と少ない。須恵器片は30点と比較的多い。



第143図 46号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第144図 46号住居跡出土遺物実測図

46号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 壺	中央 +11	①19.8 ②— ③— ④口縁部×	①明赤褐色 ②良・酸化 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横無で、内面割部は寛削り。紐作り。	
2	土 器 壺	カマド内	①19.6 ②— ③— ④口縁部×	①明赤褐色 ②良・酸化 ③1mm以下砂粒混入	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横無で、内面割部は寛削り。紐作り。	
3	土 器 壺	南東 +24	①15.6 ②— ③— ④口縁部	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	「コ」の字状口縁。外面割部は寛削り、口縁部は 横無で、内面割部は寛削り。紐作り。	
4	土 器 環	カマド付 近+14	①(16.0) ②9.3 ③4.9 ④×	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横無で。 内・外面ともあてられている。	
5	須 恵 器 高台付埴	中央 +21	①(13.2) ②7.7 ③5.7 ④口縁部×	①灰白色 ②良・還元 ③緻密	甕輪成形。回転未切後付高台。内・外面ともあ てられている。	
6	須 恵 器 環	中央 +19	①14.2 ②— ③— ④口縁部×	①灰色 ②良・還元 ③1mm程の砂粒混入	甕輪成形。内・外面ともあてられている。	

47号住居跡 (PL40・81)

位置 本遺構はIV区南東部Bp-62グリットに位置する。南6mに48号・50号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長3.44m、南北長3.42mのほぼ正方形を呈する。面積は10.14m²。残存壁高は、40~45cmと比較的深い。主軸方位はN-3°-Eとほぼ北を向いている。

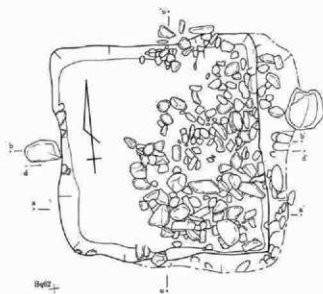
概要 遺構確認面は礫層中で、埋没土は主に、茶褐色土に礫の混入する土であった。住居内東半分は床の上から、10~30cm程の石が投げ込みによる埋没状況が見られた。東壁には、壁の崩れを防ぐための

石垣が積まれていた。川原石を横に積み、砂利層との間に茶褐色土を埋めて固めていた。また、掘り方の限界に大石(径60cm)があった。恐らく自然石で動いている状態ではないので、その位置までを掘り方としたのであろう。柱穴、その他の施設は検出されなかった。

床面は、自然堆積の砂利層の上に5~6cmの黒色土を敷いて、つくっている。

カマド カマドは北壁の中央部から東寄りに築かれている。主に川原石を用い、それを据えるために

1 住居跡



B₁(2)



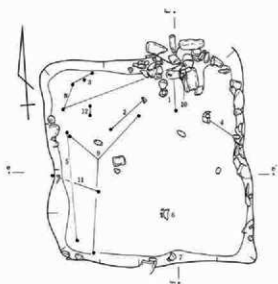
レベルはすべて160.10

(石の埋没状況)

0 1m

0 2m

→
方向



B₁(2)



- I、黒色土層
- II、砂利層
- III、小砂利混入の高褐色土層
- IV、茶褐色土層(礫の混入が少ない)
- V、礫の混入の多い黄褐色土層
- VI、上層に比べやや粘土質の黄褐色土層

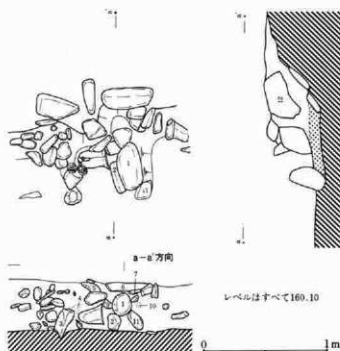
0 2m

第145図 47号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

粘土を使用した型と考えられる。自然堆積の石を利用して奥壁をつくり、それを基にして、床側へ張り出させている。袖部はほとんど川原石を用いており、左袖部も門柱石の抜かれた跡が検出されている。鉢形で完形の土師器甕(図1)が燃焼部内から、倒れた状態で出土した。焚口幅、燃焼部長とも44cmを計る。

遺物 出土総数は1009点と多い。須恵器片はそのうち5点である。

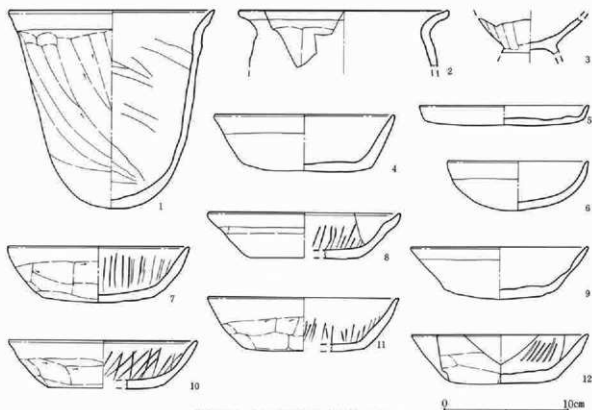


第146図 47号住居跡カマド実測図

47号住居跡出土遺物観察表

図 No.	土器 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	カマド内	①21.8 ②6.5 ③20.9 ④完形	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	①根~黒色 ②良・酸化 ③緻密	外面部は篋削り、口縁部・内面部は横撫で。 紐作り。	
2	土師器 壺	南西 +4	①(22.2) ②— ③— ④口縁部	①褐色 ②良・酸化 ③1~2mm砂粒少量混入	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	外面部は篋削り、口縁部は横撫で、内面部は 縦撫で。紐作り。	
3	土師器 付 壺	北西 +25	①— ②(6.0) ③— ④底部	①黒色 ②良・酸化 ③緻密	①黒色 ②良・酸化 ③緻密	外面部は篋削り、口縁部は横撫で、内面部は 縦撫で。紐作り。	
4	土師器 坏	中央 +3	①14.4 ②10.0 ③4.4 ④ほぼ完形	①明赤褐色 ②良・酸化 ③(軟質)④1~2mm砂粒混	①明赤褐色 ②良・酸化 ③(軟質)④1~2mm砂粒混	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、篋削り痕不明。	
5	土師器 盤	北西 +15	①13.3 ②12.5 ③1.5 ④×	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	横撫で。内・外面ともあてられている。	
6	土師器 坏	中央 +16	①(11.2) ②— ③3.9 ④×	①褐色 ②良・酸化 ③1mm程度の砂粒混入	①褐色 ②良・酸化 ③1mm程度の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面とも摩耗著しく、篋削り痕不明。	
7	土師器 坏	壁 +14	①14.4 ②8.5 ③4.4 ④×	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
8	土師器 坏	北側 +17	①(15.4) ②(9.0) ③3.5 ④×	①にぶい褐色 ②良・酸 化焼 ③緻密	①にぶい褐色 ②良・酸 化焼 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
9	土師器 坏	中央 +9	①(12.0) ②8.0 ③4.1 ④×	①褐色 ②良・酸化 ③1mm程度の砂粒混入	①褐色 ②良・酸化 ③1mm程度の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 内・外面ともあてられている。	
10	土師器 坏	カマド内	①(15.0) ②9.3 ③3.7 ④×	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	①褐色 ②良・酸化 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	

1 住居跡



第147図 47号住居跡出土遺物実測図

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
11	土 器 平 鉢	中央 +38	①15.2 ②9.5 ③4.2 ④×	①褐色 ②良・酸化培 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横無で。		
12	土 器 平 鉢	中央 +10	①(14.0) ②8.2 ③3.8 ④×	①褐色 ②良・酸化培 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横無で。 暗文。		

48号住居跡 (PL41・81)

位置 本遺跡はIV区南西部Bo・Bp-60
グリットに位置する。西4mに50号住居跡
がある。

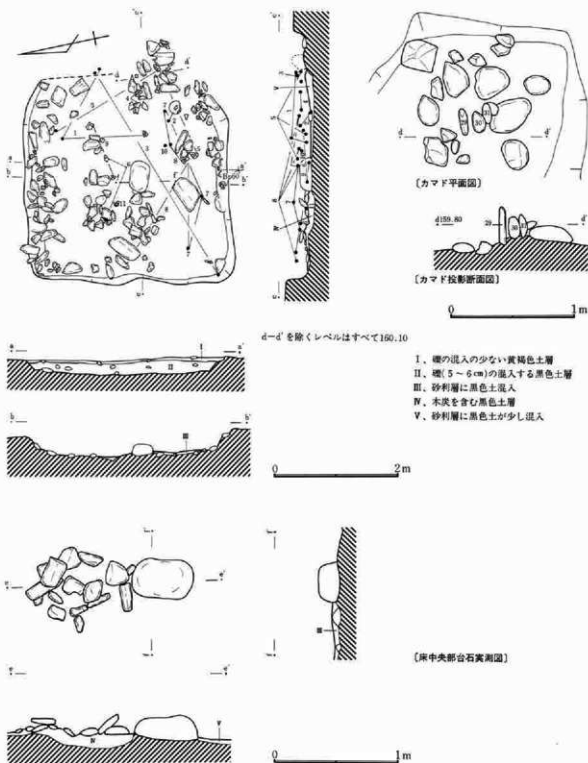
平面形・規模 平面形は東西長3.12m、南
北長3.40mのほぼ正方形を呈する。面積は
8.96㎡。残存壁高は20cm程である。主軸方
位はS-64°-Eと真東より南へ向いている。

概要 遺構確認面は黄色土の混じる砂利層上面で
壁もこの面が露出している。埋没土は主に黒色土で
その中に礫が混入する。内部に大きな礫の露頭ない
しは投げ込みが多く、一部平坦な面もあるが、床面

として、踏み固められたような面は確認できなかつた。

住居内中央部に上面が平らな石(50×30cm、厚み
30cm)があった。周囲は磨いたようになめらかで、
その上面には叩いてできたような跡が見られた。(工
作台か?) その西側の石組は火を受けたように赤く
焼けており、その石との関連を思わせる。また、中
央部から、鉄滓数点、(図10・11)の羽口片2点(そ
の他小破片49点)が出土していることから、小鍛冶
の跡と考えられる。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

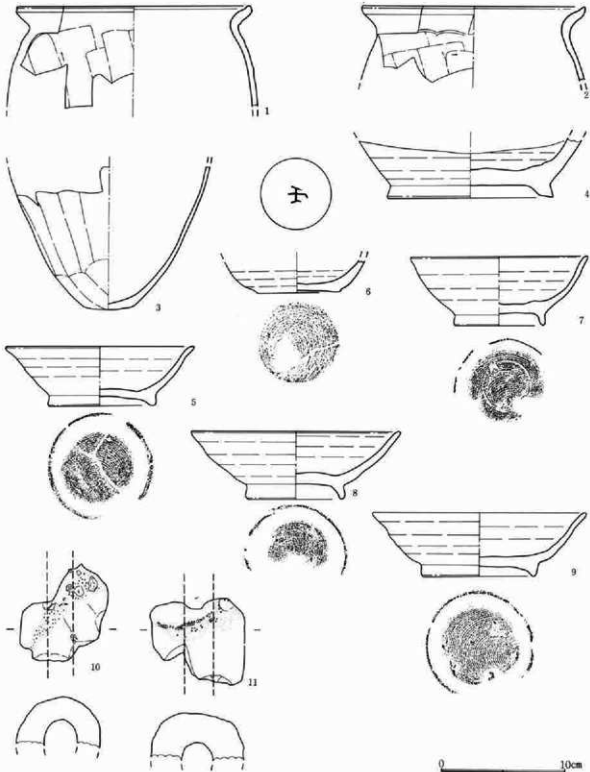


第148図 48号住居跡実測図

また、カマドと考えられる場所の前に土師器壺下半部(図3)が埋められており、貯蔵穴の役割を呈していたことがうかがえる。

カマド 東壁の南寄りに、石組があったが、破壊が著しく、カマドとしての原形はとどめていない。立っている石(奥壁部か)もあるので、カマドとし

1 住居跡



第149図 48号住居跡出土遺物実測図

て考えて良いであろう。各部の計測は不能。

遺物 出土総数は361点である。須恵器高台付埴の出土が多い。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

48号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器類 器種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	北東 +3	①(24.6) ②— ③— ④口~胴	①橙色 ②良・酸化焰 ③1~2mm砂粒多く混入	外面胴部は旋削り、口縁部は横挽で、内面胴部は 旋削で。紐作り。	
2	土師器 甕	東側 +16	①(23.4) ②— ③— ④口~胴	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面胴部は旋削り、口縁部は横挽で、内面胴部は 旋削で。紐作り。	
3	土師器 甕	カマド前 +15	①— ②5.3 ③— ④胴~底	①黒褐色 ②良・酸化焰 ③緻密	「コ」の字状口縁の裏の底部と思われる。外面胴 部は旋削り、口縁部横挽で、内面胴部旋削で。	
4	須恵器 台付甕	カマド前 床	①— ②13.0 ③— ④底部	①浅黄色 ②良・還元焰 ③1~2mm程の砂粒混入	縦輪整形。	
5	須恵器 高台付埴	南側 +3	①15.0 ②8.5 ③4.7 ④% %	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③緻密	縦輪成形。回転糸切後付高台。	焼きひず みあり。
6	須恵器 坏	中央 +4	①— ②6.6 ③— ④底部	①黒色 ②良・還元焰 ③緻密	右回転糸切未調整。	割子。
7	須恵器 高台付埴	カマド前 +2	①14.0 ②7.0 ③5.5 ④% %	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③緻密	縦輪成形。回転糸切後付高台。	
8	須恵器 高台付埴	中央 +7	①16.7 ②7.6 ③5.3 ④% %	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦輪成形。回転糸切後付高台。	
9	須恵器 高台付埴	中央 +3	①16.8 ②9.0 ③5.0 ④% %	①灰色 ②良・還元焰 (軟質) ③% %	縦輪成形。右回転糸切後付高台。	
10	羽 口	中央 床	内径2.5 外径6.5 ④先端部% %	①内面橙色、外面灰色 ②— ③砂粒混入	先端部変質	
11	羽 口	中央 +3	内径2.4 外径7.2 ④先端部% %	①内面橙色、外面灰色 ②— ③砂粒混入	先端部変質	

49号住居跡 (PL41・81・82)

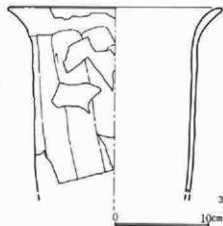
位置 本遺跡はIV区中央北側Bk-69グリットに位置する。東に1号溝がある。

平面形・規模 平面形は東西長3.04m、南北長2.80mのやや東西に長い長方形を呈する。面積は7.78㎡。残存壁高は15cmと低い。

概要 この付近は礫の自然堆積があって、その中にやや黒色土を含んだ部分があった。カマドと思われる位置から、土師器の甕の出土が見られたので、住居跡として、調査を進めたが、黒色土を除去しても、大ぶりの礫のみで、床面と考えられる面はなかった。住居跡とすれば、床面はこの礫の上で確認面の高さと同様と考えられる。土器の出土状況も偏っており、住居跡でない可能性もある。

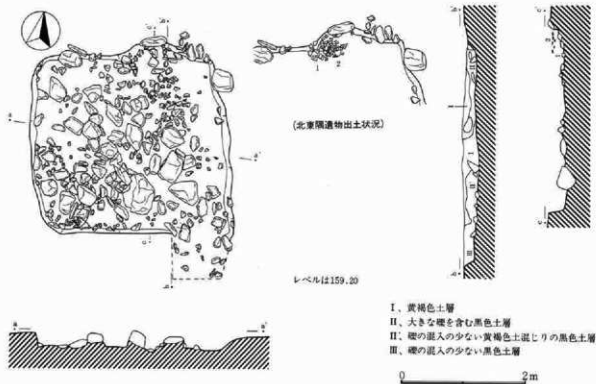
遺物

出土総数は、141点と少ない。須恵器はそのうち2点のみである。カマドと考えられる場所から、ほぼ完形に近い土師器甕が出土している。



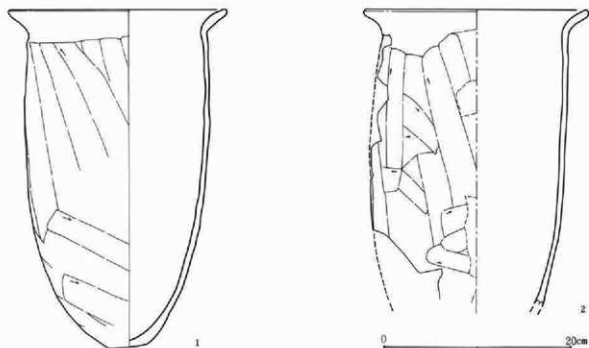
第150図 49号住居跡遺物実測図(1)

1 住 居 跡



レベルは159.20

第151図 49号住居跡実測図



第152図 49号住居跡出土遺物実測図(2)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

49号住居跡出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	カマド内	①23.3 ②4.0 ③35.7 ④ほぼ完整	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
2	土 師 器 壺	中央 +26	①24.0 ②— ③— ④片	①赤褐色～黒色 ②良・ 酸化焰 ③1～2mm砂粒混	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
3	土 師 器 壺	住居外	①23.0 ②— ③— ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③2～3mmの砂粒混入	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	

50号住居跡 (PL42・82)

位置 本遺構はIV区南西隅Bq—60グリットに位置する。北方6mに47号住居跡、東方4mに48号住居跡がある。

平面形・規模 平面形は東西長4.96m、南北長3.36mの東西に長い長方形を呈する。面積は13.51㎡。壁高は50cmと比較的深い。主軸方位はN—8°—Eを示す。

概要 この付近の自然堆積土は礫層もあるが、砂層になっている部分もある。埋没土は隙混じりの黒色土が主で他の住居跡の様相と相違はない。柱穴その他の施設は検出されなかった。

床面は自然堆積の砂層の上に茶褐色土を敷いてつくっている。床下の自然堆積は部分的に分かれ、東

から、礫層・砂層・黄色土・砂利層となっている。

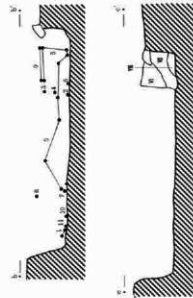
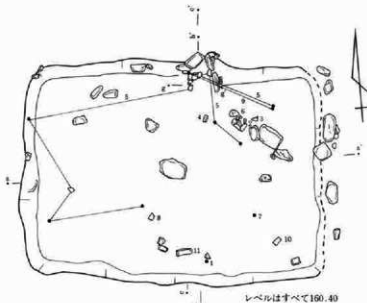
カマド 北壁の中央東寄りに築かれている。壁を掘り込んで燃焼部をつくっているが、床側にも張り出す。右壁は平石2、左壁は1石で、やや内傾して、据えられている。川原石をこの平石の支えに使用したり、高さをそろえるのに使用している。この使用法は10号住居跡と類似する。煙道部は削平されていて検出できなかった。焚口幅は46cm、燃焼部長は48cmを計る。

遺物 出土総数は797点である。須恵器片は2点と非常に少ない。カマド内、カマド前床面から土師器甕(図5) 坏(図6)が出土している。南側から砥石(11)が出土している。

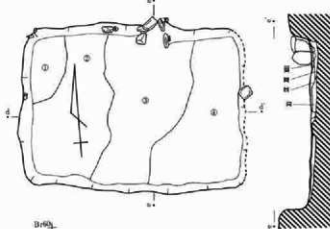
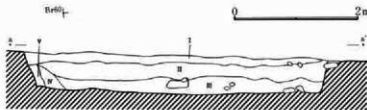
50号住居跡出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	南側 床	①19.8 ②— ③— ④口縁部%	①黒色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
2	土 師 器 小型壺	カマド前 +1	①13.8 ②6.0 ③12.7 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
3	土 師 器 壺	北側 +42	①13.8 ②— ③— ④口縁部	①褐色 ②良・酸化焰 ③1～2mm程の砂粒混入	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
4	土 師 器 小型壺	カマド前 +21	①12.8 ②— ③— ④口縁部	①黒色 ②良・酸化焰 ③緻密	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	
5	土 師 器 甕	カマド内	①29.0 ②(12.0) ③35.5 ④片	①褐色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	外面割部は窪削り、口縁部は横撫で、内面割部は 寛撫で。紐作り。	

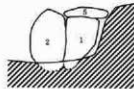
1 住居跡



- I、概指大から手のひら大の礫を含む黒色よりやや茶色がかった土層
- II、米粒大の礫多く概指大から手のひら大の礫が目立つ黒色土層所々に茶色がかった土混じる
- III、概指大以下の礫を含む、やや粘り気のある黒色土、米粒大の礫も多く混じる
- IV、地山の崩れ込んだと思われる黄色土から茶褐色の土層
- V、地山と思われる黄色土の砂礫層

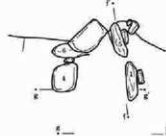


- ①、砂利層
- ②、黄色土層
- ③、粒子の細かい砂層
- ④、10~20cmの礫を含む層



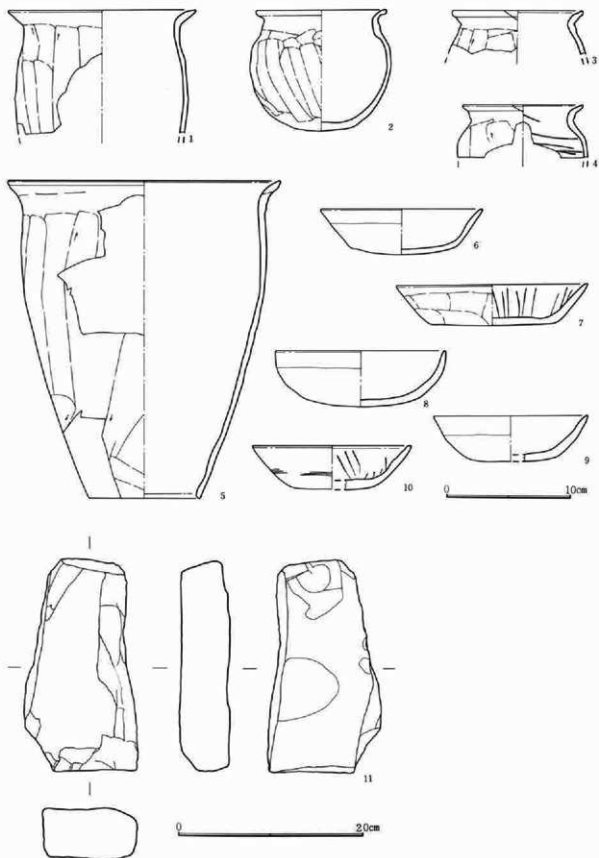
床下状況図

- VI、概指大~手のひら大の礫を含む黒色あるいは茶色の土層
- VII、概指大の礫を含む黒色あるいは茶色の土層 (VII層はほぼ同様の土質ともに米粒大の礫も目立つ)
- VIII、粒の細かいさらさらとした砂利層
- IX、茶褐色土層よくしまっている
- X、粒子の細かい黄色土層
- XI、砂層
- XII、茶褐色土混じりの砂層
- XIII、焼土混入茶褐色土層



第153図 50号住居跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第154図 50号住居跡出土遺物実測図

50号住居跡出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 (cm) ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
6	土 師 器 坏	北側 +3	①12.8 ②8.5 ③0.6 ④1/2	①橙色 ②良・酸化焙 ③緻密	内・外面とも摩耗しているが、体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫でと思われる。	
7	土 師 器 坏	中央 +3	①15.2 ②10.3 ③0.2 ④1/2	①橙～黒色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で、物文。外面摩耗が著しい。	
8	土 師 器 坏	中央 +13	①13.4 ②9.0 ③4.4 ④1/2	①にぶい橙色 ②良・酸 化焙 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。内・外面とも摩耗が著しい。	
9	土 師 器 坏	北東 +42	①12.2 ②7.0 ③0.6 ④1/2	①橙色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。内・外面とも摩耗が著しい。	
10	土 師 器 坏	東側 +5	①12.6 ②6.3 ③0.4 ④1/2	①橙色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。内・外面とも摩耗が著しい。	
11	砥 石	南側 床	長さ22.0 幅9.8 厚さ4.6 重1.9kg		上面のみ使用。砂岩	

2. 掘立柱建物跡

本遺跡内で調査された掘立柱建物跡は計23棟である。

遺構は調査全域にわたって分布しているが、細かく見ると、I区に1棟、II区に17棟、III区に1棟、IV区に4棟とII区に集中している。II区は住居跡の分布も多いので、この傾向は住居跡と一致する。

時期については不明のものが多いが、やはり住居跡と同時期と考えられよう。切り合い関係を持つ遺

構もあり、遺物が柱穴内より出土しているものもあるので、時期が推定できるものが数軒存在する。

遺構の記述については、遺構の位置、規模と形状、棟方向、柱穴の形状、覆土を基本事項として記述した。

なお、柱間各部の計測値は柱穴の中心から中心までの距離である。

1号掘立柱建物跡 (PL43)

位置 本遺跡はI区中央部西寄り、Fb-50・51、Fc-50・51に位置する。I区には、1号住居跡と本遺跡以外に、この時期の遺構はない。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間で東西に長い棟をもつ掘立柱建物跡で、平面形はほぼ長方形のプランを呈する。棟方向はN-84°-Eをさす。

概要 この付近の自然堆積土は黄褐色土で、埋没土は主に黒褐色土である。柱穴の形状は円形を呈し、径は50~70cmある。深さは現状で10~40cmとバラつきがみられる。なお、中央部と東側の溝は耕作の溝である。

周辺からの出土遺物はない。

2号掘立柱建物跡 (PL43・50・82)

位置 本遺跡はII区中央部、Fb-58・59、Ec-58・59グリットに位置する。西に23号住居跡、南に14号住居跡、東には11号・13号住居跡、4号掘立柱建物跡と多くの遺構に囲まれているが、北側にはない。

平面形・規模 本遺構は2間×2間の掘立柱建物跡で、ほぼ正方形を呈する。北側柱列の方位はN-89°-Eと真東に近い。

概要 この付近の自然堆積土は黄色土で、埋没土は黒色土や少量の礫を含む黒色土である。それぞれ

の柱穴はほぼ円形をなし、柱痕と考えられる掘り込みが検出できた。柱痕はほぼ一列に並ぶが、東側柱列の中央のみやや東側に寄る。この二つの柱穴はこの建物の出入口に施設を作った柱穴と考えられ、深さも他に比べやや浅い。ピットの径は55~70cm程で、深さはほぼ50cmである。

柱穴内から、墨書の土師器環(文字不明)が出土している。

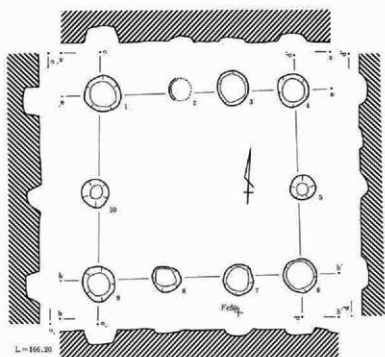
3号掘立柱建物跡 (PL43)

位置 本遺跡はII区中央東寄り、Dr-57・58、Ds-57・58グリットに位置する。東に隣接して5号掘立柱建物跡、9号住居跡がある。また、この付近は、最も遺構の密なところである。

平面形・規模 本遺構は2間×2間の掘立柱建物跡であるが、西辺に対し東辺がやや短く、正方形な

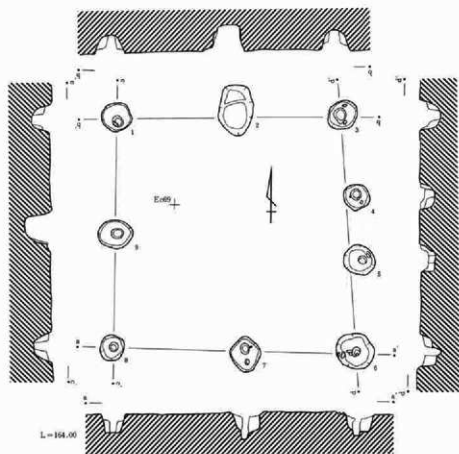
いは台形に近い形を呈する。北側柱列の方位はN-83°-Eである。

概要 この付近の遺構確認面は礫混入の黒色土で、埋没土も黒色土である。それぞれの柱穴内に柱痕を考えられるピットが検出できた。柱底部分は周囲の埋没土よりも礫の混入が少なかった。柱穴の形



第155図 1号掘立柱建物跡実測図

0 2m

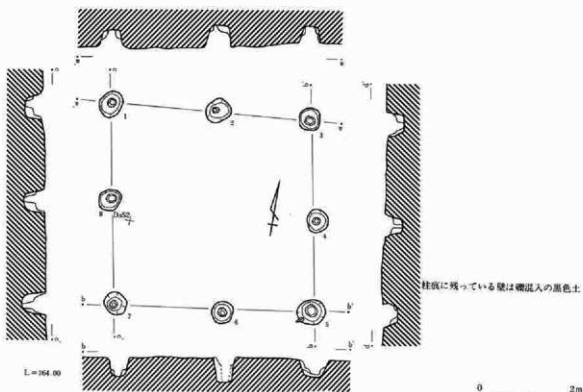


第156図 2号掘立柱建物跡実測図

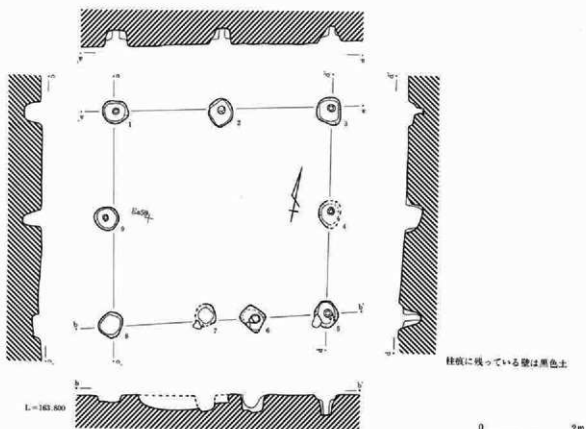
柱筋に残っている壁は黒色土

0 2m

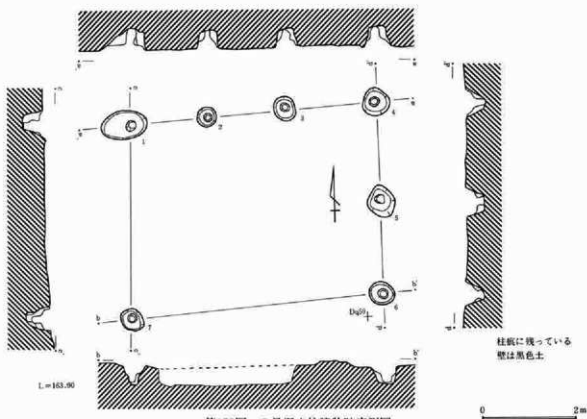
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



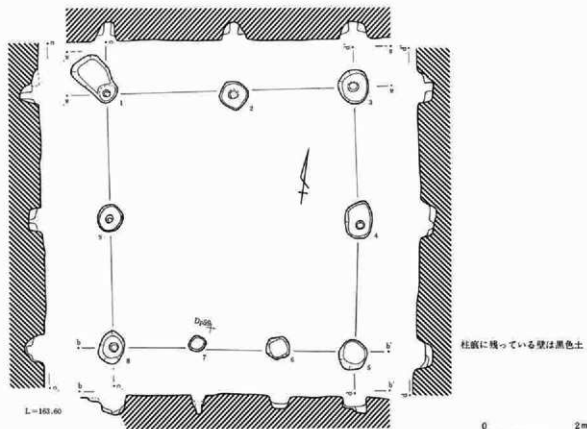
第157図 3号掘立柱建物跡実測図



第158図 4号掘立柱建物跡実測図



第159図 5号掘立柱建物跡実測図



第160図 6号掘立柱建物跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

ほぼ円形をなし、径は40～60cm程である。深さはそれぞれ40cmとそろっている。

4号掘立柱建物跡 (PL44・50・82)

位置 本遺構はII区中央部、Dt-58・59、Ea-58・59グリットにかけて位置する。10号・11号・13号住居跡を壊しており、これらの住居跡より新しいことが確認できた。付近は他の遺構も密集する。

平面形・規模 本遺構は2間×2間の掘立柱建物跡で、ほぼ正方形を呈する。北側柱列の方位はN-78°-Eである。

概要 この付近の自然堆積土はやや粘質の黄色土で、柱穴の埋没土は黒色土が中心である。P₄は10号住居跡の壁を破壊し、掘り込んでいる。P₄、P₇は11

5号掘立柱建物跡 (PL44)

位置 本遺構はII区中央東寄り、Dq-58グリットに位置する。9号住居跡と重複している。この付近は掘立柱建物跡が密集している。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間で東西に長い棟をもつ掘立柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。棟方向はN-84°-Eをさす。

概要 この付近の自然堆積は礫混入の黒色土で、

6号掘立柱建物跡 (PL44)

位置 本遺構はII区東寄り、Do-59、Dp-59グリットに位置する。7号・8号・10号掘立柱建物跡と重複している。

平面形・規模 本遺構は2間×2間の掘立柱建物跡である。平面形は正方形を呈する。北側柱列の方位はN-80°-Eをさす。

概要 この付近の自然堆積は砂利層と黄色土が混在している。柱穴埋没土は黒色土が中心である。北側の柱穴3個に対して、南側には4個の柱列が検出

7号掘立柱建物跡 (PL45)

位置 本遺構はII区東寄り、Dn-58・59、Dp-58・59グリットに位置する。8号掘立柱建物跡と約1m

遺物の出土はない。

号住居跡のカマド付近を破壊しており、P₈は、13号住居跡埋没土中に検出された。それぞれの柱穴には柱痕が認められた。南側柱列中央には北側柱列よりも柱穴が多く、この2個の柱穴が、入口部分の施設を考えさせる。南側に向けて、入口の開閉がなされたのであろう。

ピットの形状はほぼ円形で、径はほぼ50cm、深さは40～50cmである。

P₅の中から多くの土器が検出された。その中に、ほぼ完形の小型甕、暗文のみられる坏がある。

部分的には砂利層になるところもある。埋没土は黒色土である。9号住居跡と重複していて、9号住居跡埋土中に柱穴が検出できなかったため、9号住居跡よりも古い時期のものとした。柱痕がそれぞれの柱穴内より検出された。柱痕はほぼ直線上に並ぶ。

ピットの形はほぼ円形を呈し、径は40～60cmで、深さは約40cmとそろっている。

された。南側の中央2個の柱穴は入口の施設を考えさせる。柱内に、柱痕が検出され、ほぼ一直線に並ぶ。

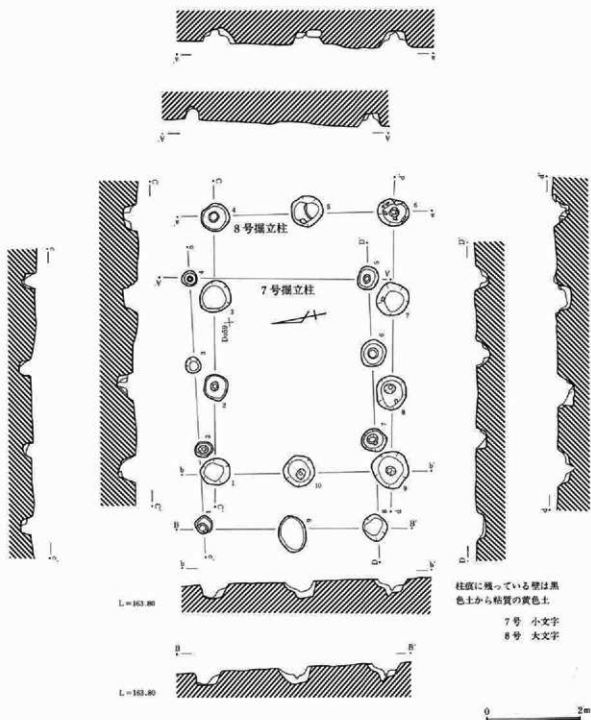
7号・8号・10号掘立柱建物跡と重複するが、それぞれの柱穴は重なっていないので、新旧は不明である。

柱穴の形状は径30～60cmの円形を呈する。深さは約40cmであるが、P₅・P₆は約20cmと浅い。

出土遺物はない。

ずれて重複している。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間の東



第161図 7・8号掘立柱建物跡実測図

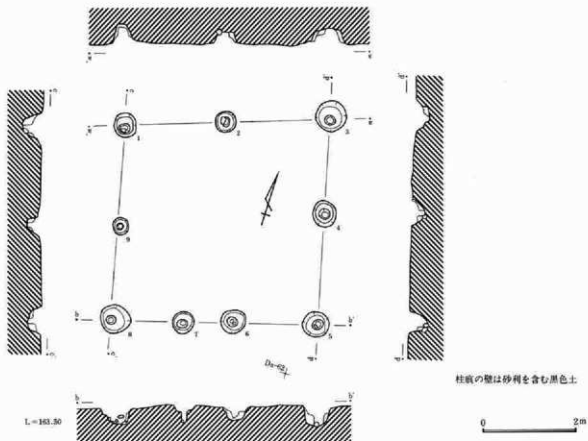
西方向に棟を持つ掘立柱建物跡である。平面形は長方形を呈し、棟方向は $S-82^{\circ}-E$ と真東から南西方向に向いている。

概要 本遺構付近では遺構確認面が黒色土と砂利層に分かれる。砂利層部分は柱穴壁もそのまま砂利層なので崩落しやすい。柱穴の形状はほぼ円形を呈

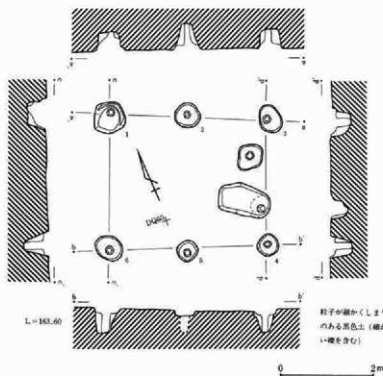
している。砂利層を壁とする柱穴は掘り方が傾斜しており、やや大き目である。礫を含む黒色土で柱穴周囲をしめている。柱穴の明確でない柱穴もあったが、柱穴は直線上にそうろう。

P_3 と P_7 と対応している柱の深さが20cmと浅いが、他は約40cmを計る。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第162図 9号掘立柱建物跡実測図



第163図 10号掘立柱建物跡実測図

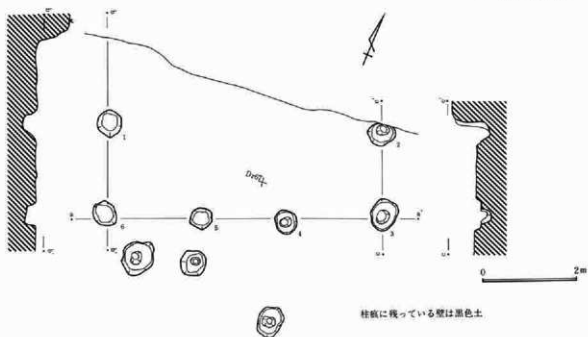
遺物はPより土器器片が出土している。この破片より、奈良時代の遺構と考えられる。

8号掘立柱建物跡 (PL45)

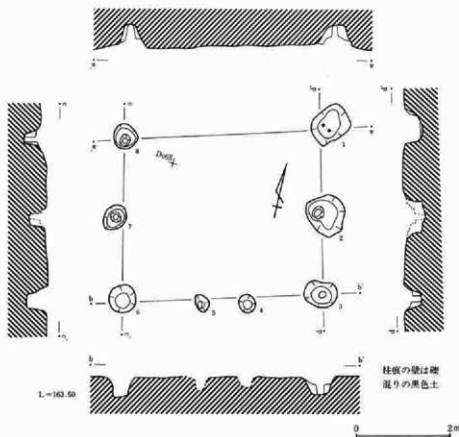
位置 本遺構は前述7号掘立柱建物跡と同じグリッドに位置する。7号掘立柱建物跡より西に1mずれて重複している。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間の東西方向に棟を持つ掘立柱建物跡である。平面形は長方形を呈し、棟方向はS-86°-Eと真東からやや南西方向に向いている。

概要 本遺構は7号掘立柱建物跡と同様の場所に立地しているが、柱穴の重なりがないので、新旧は明らかでない。ただし、平面形、棟方向、

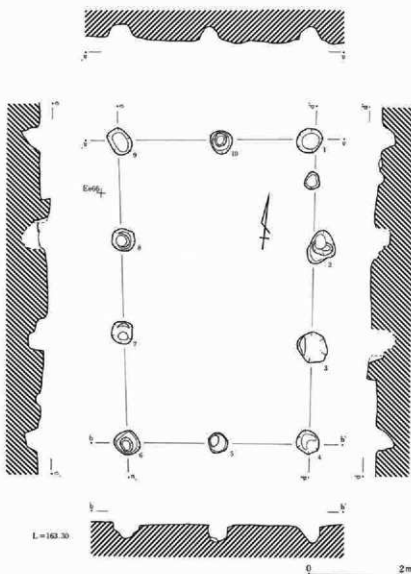


第164図 11号掘立柱建物跡実測図



第165図 12号掘立柱建物跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第166図 13号掘立柱建物跡実測図

柱穴の数がほぼ同様のため、それほど変わらない時期と考えられる。

柱穴の形状は、径25～50cmの円形で7号掘立柱建物跡よりも小さい。深さは20～30cmとやや浅めである。なお、P₄とP₅の間にわずかな窪みがあったが、柱穴にはならなかった。

9号掘立柱建物跡 (PL45)

位置 本遺構はII区中央、Ds-62グリットに位置する。周辺6～10cm離れて、住居跡に囲まれている。

平面形・規模 本遺構は2間×2間の掘立柱建物跡である。平面形はほぼ正方形を呈する。北側柱列

の方位は、N-72°-Eで南東を向く。

概要 本遺構付近は砂利層と黒色土層の混在するところであるが、上部に黒色土の堆積があるのみで砂利層が大部分をしめる。北側の柱穴3個に対して、南側には4個の柱穴が検出された。南側中央2個の柱穴は入口の施設を考えさせる。柱痕がいずれの柱穴からも検出されている。

柱穴の形状は径30～70cmとばらつきが見られるが、いずれも円形を呈する。深さは、30～40cmと、ほぼそろっている。

出土遺物はない。

10号掘立柱建物跡 (PL45)

位置 本遺構はII区中央東寄り、Dp・Dq-60グリットに位置する。6号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の重複はない。南側に5軒の掘立柱建物跡が並ぶ。

平面形・規模 本遺構は桁行2間、梁行1間の東西に棟方向を持つ小さな掘立柱建物跡である。平面形は長方形を呈する。棟方向はS-67°-Eと南西を向く。

概要 本遺構の確認面は黒色土中で、柱穴埋没土は砂利を含む黒色土である。柱穴内にはそれぞれ柱痕が確認されている。柱痕はほぼ一直線にそろっている。II区内で、最も南西を向く建物といえる。

柱穴の形状は径40～50cmの円形を呈する。深さは約50cmとほぼ同一の深さを持っている。

出土遺物はない。

11号掘立柱建物跡 (PL46)

位置 本遺構はII区中央北側Dq-66・67、Dr-66・67グリットにかけて位置する。本遺構は北側が敷地外のため発掘できなかった。南西5mに3号住居跡、南東7mに15号住居跡がある。

平面形・規模 本遺構は発掘されていないので明らかでないところがあるが、本遺跡内発見の掘立柱建物跡から判断すると、3間×2間、あるいは2間×2間で、入口部を南側に持つ掘立柱建物跡と考えら

12号掘立柱建物跡 (PL46・82)

位置 本遺構はII区東側、Dn-64グリットを中心に位置している。西側に15号・4号・5号・12号住居跡がある。

平面形・規模 本遺構は東西1間、南北2間の小規模な掘立柱建物跡である。平面形は東西に長い長方形を呈する。棟方向はN-72°-Eをさし、南東を向く。

概要 遺構確認面は砂利層で、埋没土は小礫を含む黒色土であった。北側1間に対して、南側は3間

13号掘立柱建物跡 (PL46)

位置 本遺構はII区中央北側、Ed-65・66グリットに位置する。北側柱列はほとんど用地境界に接している。南1mには18号掘立柱建物跡がある。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間で棟方向を南北に持つ掘立柱建物跡である。棟方向はN-5°-Wで、恐らく東向きの建物であろう。

概要 この付近の遺構確認面は黒色土である。柱

14号掘立柱建物跡 (PL47)

位置 本遺構はII区中央西寄り、Ee-64、Ef-64グリットにかけて位置する。1m東に18号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。平面形は東西に長い長方形を呈する。棟方向はN-84°-Eと、やや南東を向く。

概要 前述の13号掘立柱建物跡と同様に砂礫層の

れる。したがって平面形は長方形ないしは正方形となる。棟方向はN-75°-Eで南東方向を向く。

概要 遺構確認面は細かい砂利層中で、埋没土は黒色土であった。3個の柱穴について、柱穴内から柱痕が確認された。

柱穴の形状は径約50cmの円形を呈する。深さは30~40cmである。

出土遺物はない。

あり、中央の2個の柱穴は、やや小さく、入口施設のためのものと考えられる。柱穴の形状は南側中央が30cmで、他は60~80cmの径をもつ円形をなす。深さは35~40cmであるが、南側中央の2個はやや浅い。

遺物はP₁から、29点の土師器の破片が出土した。その中に手裡ね土器の蓋が出土している。また、P₃とP₄の間で、遺構確認面のレベルで羽口片が出土している。

穴の壁面は礫・砂利層で黒色土の堆積はうすい。この遺構では柱痕のはっきりしないものが多かった。本遺構は6m×4mとこの遺跡内の掘立柱建物跡としては比較的大きい。柱穴の形状は、径40~60cmの円形を呈する。深さは30~40cmとそろっている。

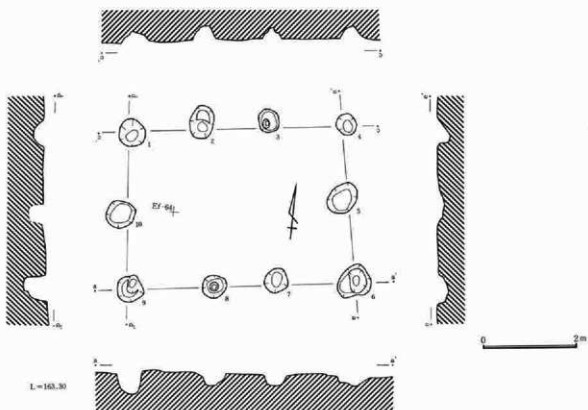
出土遺物はない。

上にうすい黒色土の堆積が見られる。柱穴壁は礫の露出が見られた。柱痕が明確でない柱穴が多い。

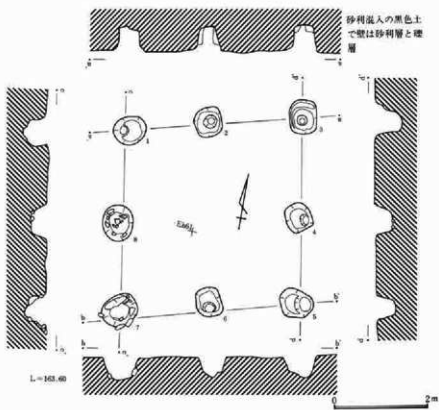
柱穴の形状は、径50~60cmの円形を呈する。深さは深いもので50cmを計るが、P₃は10cmと浅くぼらつきが見られた。

遺物はP₃内より土師器破片が出土した。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

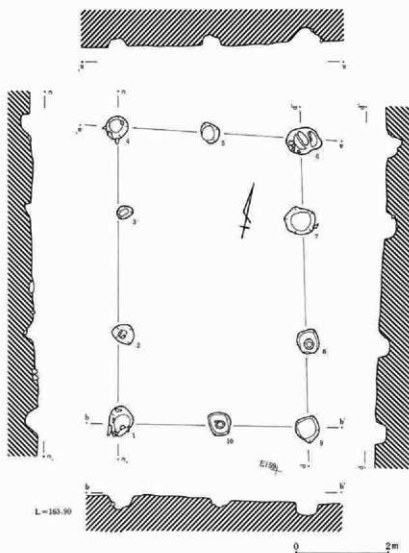


第167図 14号掘立柱建物跡実測図



第168図 15号掘立柱建物跡実測図

2 掘立柱建物跡



第169図 16号掘立柱建物跡実測図

15号掘立柱建物跡 (PL47)

位置 本遺構はII区西側Eg-60・61、Eh-60・61にかけて位置する。この付近は遺構の分布が粗で西4mに16号掘立柱建物跡と南東8mに23号住居跡の二軒のみがある。

平面形・規模 本遺構は2間×2間の掘立柱建物跡である。平面形はややねじれているがほぼ正方形を呈する。北側柱列の方位はN-80°-Eで、やや南東を向く。

概要 遺構確認面は砂礫層で、埋没土は黒色である。柱穴の壁は礫が露出している。P₃のみ柱底を識別できる地層が確認できたが、他は確認できなかった。柱穴の形状は径60cmの円形を呈し、深さもほぼ

50cmとそろっている。
出土遺物はない。

16号掘立柱建物跡 (PL47)

位置 本遺構はII区西側Ei-59、Ei-60グリットに位置する。II区掘立柱建物跡で最も西側にある。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈する。棟方向はN-12°-Wと、真北より西へ片寄る。

概要 前述の15号と同様な立地で、確認面の状況はあまりよくない。東側のP₃で柱底の地層の識別ができた。他は、識別できなかった。柱穴の径も30~60cmと不ぞろいで、深さも15~30cmと浅く不ぞろいであった。

柱穴の形状もほぼ円形を呈するが、不正円形が多い。

出土遺物はない。

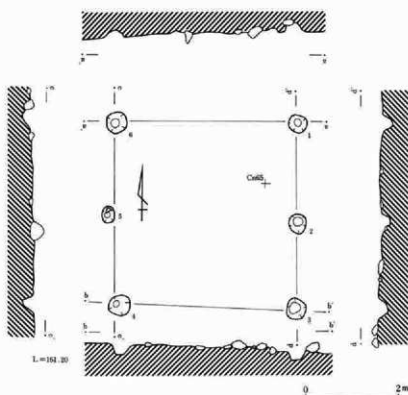
17号掘立柱建物跡 (PL48)

位置 本遺構はIII区中央部Cn-64・65グリットに位置する。北に19号、東に20号、南に21・22号住居跡があり、周囲を囲まれている。

平面形・規模 本遺構は南北2間、東西1間の掘立柱建物遺構である。南北の間数の違いがあるが、ほぼ正方形を呈する。北側柱列の方位はN-88°-Eとほぼ真東を向く。

概要 本遺構の位置する付近はIII区の中で、一段低く、黒色土が厚く堆積しているところで、黒色土の下は礫層が見られる。遺構の確認面はその礫層中で、礫層中に黒色土の埋没が見られ、柱穴とした。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第170図 17号掘立柱建物跡実測図

掘り込み面は黒色土と考えられ、礫層下での柱穴は浅かった。柱痕が検出された柱穴もなかった。

出土遺物はない。

18号掘立柱建物跡 (PL48)

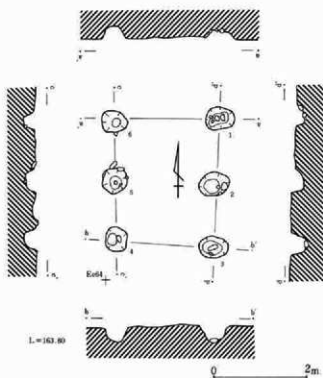
位置 本遺構はII区中央北寄り、Ed-64グリットに位置する。北1mに13号掘立柱建物跡、西1mに14号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形・規模 本遺構は南北2間、東西1間の小規模な掘立柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈する。棟方向はN-1°-Wとほぼ真北をさす。

概要 本遺構は当初、13号・14号掘立柱建物跡の柱列に属するのではないかとということで、検討したが、結局、小規模ではあるが、1棟とした。14号掘立柱建物跡と並行していることから、同時期のものと考えられる。確認面、埋没土の状況は13号・14号掘立柱建物跡と同様である。

柱穴の形状は、円形ないしは楕円形で径は約50cmを計る。深さは約30cmである。

出土遺物はない。

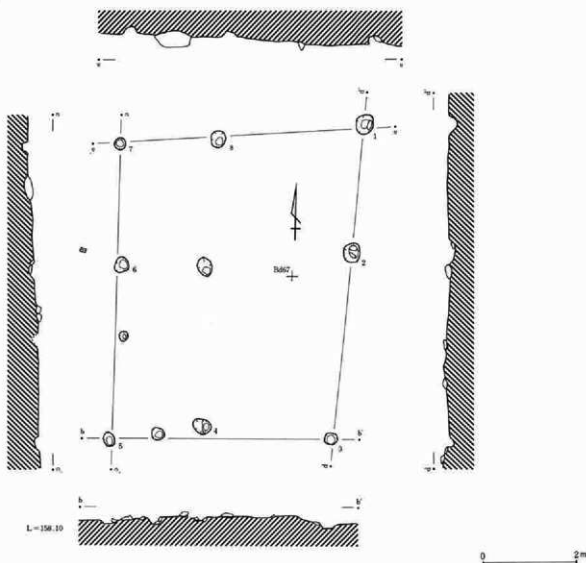


第171図 18号掘立柱建物跡実測図

19号掘立柱建物跡 (PL49)

位置 本遺構はIV区中央Bc-66・67、Bd-66・67グリットに位置する。IV区2号溝内で検出されている。南へ隣接して、20号掘立柱建物跡がある。

平面形・規模 本遺構は桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈する。棟方向は、ややゆがみもあるが、N-0°-Eで真北をさす。



第172図 19号掘立柱建物跡実測図

概要 この付近は溝の中で礫層の上に黒色土の堆積が見られる。本遺構は溝の調査中に検出したものである。確認面は礫層で、埋没土は黒色土であった。しかし、礫層中の検出のため、ほとんど柱穴の下部であり、それぞれの柱穴は10~15cmと浅い。中央にP₉があり、総柱の建物も考えられる。1間の長さがある場所によって異なるので、しっかりした建物は考えられない。

柱穴の形状は径20cm程の小円形である。

出土遺物はない。

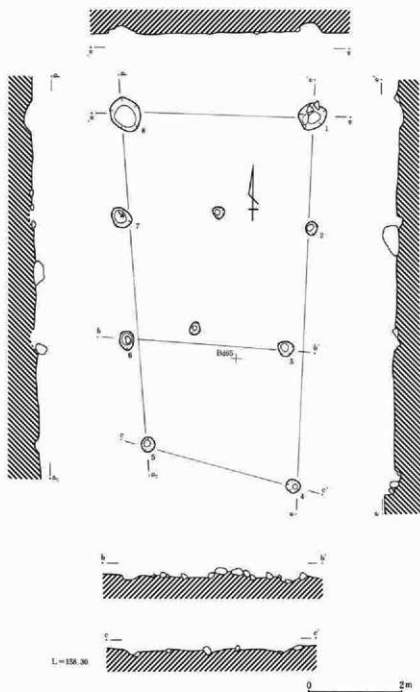
20号掘立柱建物跡 (PL49)

位置 本遺構はIV区中央、Bc-64・65、Bd-64・65グリッドに位置する。IV区2号溝内で検出されている。北へ隣接して、19号掘立柱建物跡がある。

平面形・規模 本遺構は桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡と同様な状況での確認である。柱穴の大きさ、直線上にあるかどうか等で、やや問題となったが、掘立柱建物跡と認定した。柱穴も、礫層中のため最深部のみの残存と考えられる。

柱穴の形状は径20~50cmのほぼ円形をなすが、ばらつきが多い。深さも10~15cmである。

出土遺物はない。



第173図 20号掘立柱建物跡実測図

21号掘立柱建物跡 (PL49)

位置 本遺構はIV区中央、Bd-63・64、Be-63・64グリットにかけて位置する。IV区2号溝と重複して検出されている。

平面形・規模 本遺構は桁行2間、梁行1間の小規模な掘立柱建物跡である。平面形は東西に長い長方形を呈する。棟方向はS-81°-Eでやや南西を向

いている。

概要 本遺構も19号・20号掘立柱建物跡と同様、大ぶりの障層中の確認である。平面形もねじれがあり、中央の柱も対応する位置にないことから、粗末な掘立柱建物跡であったことがうかがえる。

出土遺物はない。

22号掘立柱建物跡 (PL50)

位置 本遺構はIV区中央東寄り、Ba-60・61、Bb-60・61グリットに位置する。8m西に35号住居跡がある。

平面形・規模 本遺構は桁行2間、梁行1間の小規模な掘立柱建物跡である。平面形は東西に長い長方形と考えられるが、P₄が南東コーナーにないので、台形状になっている。棟方向はN-87°-Eをさす。

概要 本遺構もIV区東部独特の大ぶりの障層中での確認であるが、19号・20号掘立柱建物跡よりもやや障の小さな砂利層での確認である。前述したが、南東位置に柱穴が

検出できなかったが、一応掘立柱建物跡として取り上げた。柱穴は円形をなし、黒色土の埋没土は見られた。深さも、ばらつきはあるが、30cmを計るものもある。21号掘立柱建物跡と同様、粗末な建物であったと考えられる。

出土遺物はない。

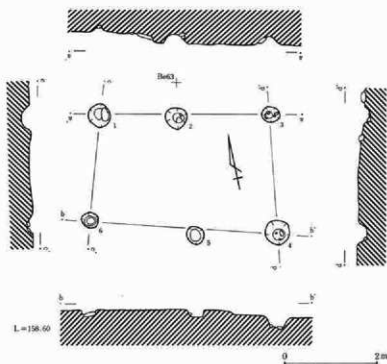
2 掘立柱建物跡

23号掘立柱建物跡

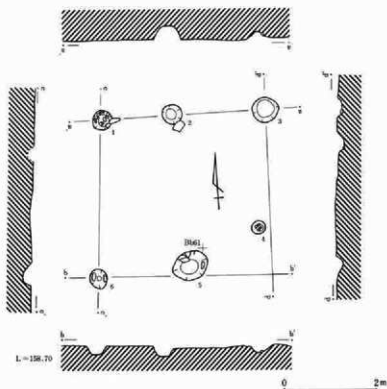
位置 本道構はII区中央部北側、Ec-66グリットに位置する。北側は敷地外のため未発掘である。

概要 Ec-66グリットを中心とした地点から、ピット群が検出された。建物状に並ぶ柱穴はなかったが、一直線上に並んだ4個の柱穴を、掘立柱建物跡の南側柱列と推定した。柱列の方位はN-87°-Eで、ほぼ真南を向く建物が考えられる。柱穴は径40~55cmの円形で、深さは15~30cmとばらつきはある。

出土遺物はない。

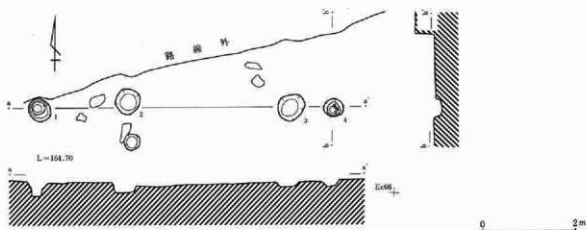


第174図 21号掘立柱建物跡実測図

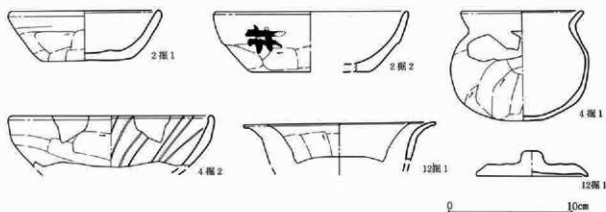


第175図 22号掘立柱建物跡実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第176図 23号掘立柱建物跡実測図



第177図 掘立柱建物跡出土遺物実測図

掘立柱建物跡出土遺物観察表

図 No	土器種 別 類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
2器 1	土 器 器 坪	柱穴No.7	①12.3 ②7.1 ③3.9 ④は定形	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。		
2器 2	土 器 器 坪	柱穴No.6	①(15.6) ②(9.5) ③(4.8) ④×	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の細砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	墨書 「井」	
4器 1	土 器 小 型 壺	柱穴No.5	①13.1 ②— ③— ④×	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒少量混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。紐作り。		
4器 2	土 器 器 坪	柱穴No.5	①(16.5) ②— ③— ④口縁部	①赤褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下砂粒少量混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。		
12器 1	土 器 器 鉢	柱穴No.1	①(20.5) ②— ③— ④口縁部	①棕色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 篋撫で。紐作り。		
12器 2	土 器 器 蓋	柱穴No.1	①(8.9) ②— ③(2.0) ④×	①棕色 ②良・酸化焙 ③緻密	隅みは、ひき出して整形している。 手捏ね土器。		

第7表 各掘立柱建物跡柱穴間の距離計測表

掘立柱建物跡№		柱 穴 間	距 離	柱 穴 間	距 離	柱 穴 間	距 離		
1	東3.90m	1 — 2	1.65m	5 — 6	1.80m	9 — 10	1.90m		
	西4.00m	2 — 3	1.15m	6 — 7	1.35m	10 — 1	2.10m		
	南4.30m	3 — 4	1.30m	7 — 8	1.55m				
	北4.10m	4 — 5	2.10m	8 — 9	1.40m				
2	東5.00m	1 — 2	2.50m	5 — 6	1.90m	9 — 1	2.35m		
	西4.75m	2 — 3	2.25m	6 — 7	2.35m				
	南5.15m	3 — 4	1.70m	7 — 8	2.80m				
	北4.75m	4 — 5	1.40m	8 — 9	2.40m				
3	東4.00m	1 — 2	2.30m	5 — 6	1.90m				
	西4.30m	2 — 3	1.90m	6 — 7	2.30m				
	南4.20m	3 — 4	2.10m	7 — 8	2.20m				
	北4.20m	4 — 5	1.90m	8 — 1	2.10m				
4	東4.35m	1 — 2	2.30m	5 — 6	1.60m	9 — 1	2.20m		
	西4.50m	2 — 3	2.30m	6 — 7	1.00m				
	南4.60m	3 — 4	2.20m	7 — 8	2.90m				
	北4.60m	4 — 5	2.15m	8 — 9	2.30m				
5	東4.10m	1 — 2	1.65m	5 — 6	2.00m				
	西4.10m	2 — 3	1.65m	6 — 7	5.40m				
	南5.40m	3 — 4	1.90m	7 — 1	4.10m				
	北5.20m	4 — 5	2.10m						
6	東5.55m	1 — 2	2.70m	5 — 6	1.60m	9 — 1	2.60m		
	西5.30m	2 — 3	2.55m	6 — 7	1.70m				
	南5.10m	3 — 4	2.90m	7 — 8	1.80m				
	北5.25m	4 — 5	2.65m	8 — 9	2.70m				
7	東3.90m	1 — 2	1.75m	5 — 6	1.75m	9 — 10	1.95m		
	西3.75m	2 — 3	1.85m	6 — 7	1.85m			10 — 1	1.80m
	南5.40m	3 — 4	1.75m	7 — 8	1.85m				
	北5.35m	4 — 5	2.15m	8 — 9	1.70m				
8	東3.80m	1 — 2	1.60m	5 — 6	1.60m	9 — 1	1.85m		
	西3.65m	2 — 3	1.75m	6 — 7	1.80m				
	南5.20m	3 — 4	1.85m	7 — 8	1.80m				
	北5.20m	4 — 5	3.80m	8 — 9	1.80m				
9	東4.30m	1 — 2	2.20m	5 — 6	1.80m	9 — 1	2.10m		
	西4.10m	2 — 3	2.20m	6 — 7	1.10m				
	南4.40m	3 — 4	2.00m	7 — 8	1.50m				
	北4.40m	4 — 5	2.30m	8 — 9	2.00m				
10	東2.63m	1 — 2	1.65m	5 — 6	1.65m				
	西2.90m	2 — 3	1.70m	6 — 1	2.90m				
	南3.35m	3 — 4	2.63m						
	北3.35m	4 — 5	1.70m						
11	東1.85m	1 — 2	5.85m	5 — 6	2.00m				
	西2.00m	2 — 3	1.85m	6 — 1	2.00m				
	南5.90m	3 — 4	2.10m						
	北5.85m	4 — 5	1.80m						
12	東3.50m	1 — 2	1.80m	5 — 6	1.65m				
	西3.40m	2 — 3	1.70m	6 — 7	1.80m				
	南4.25m	3 — 4	1.60m	7 — 8	1.60m				
	北4.20m	4 — 5	1.00m	8 — 1	4.20m				
13	東6.40m	1 — 2	2.20m	5 — 6	1.95m	9 — 10	2.10m		
	西6.35m	2 — 3	2.20m	6 — 7	2.30m			10 — 1	1.90m
	南3.85m	3 — 4	2.00m	7 — 8	2.00m				
	北4.00m	4 — 5	1.90m	8 — 9	2.05m				
14	東3.30m	1 — 2	1.55m	5 — 6	1.80m	9 — 10	1.60m		
	西3.25m	2 — 3	1.40m	6 — 7	1.75m			10 — 1	1.65m
	南4.80m	3 — 4	1.55m	7 — 8	1.35m				
	北4.55m	4 — 5	1.50m	8 — 9	1.70m				

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

掘立柱建物№		柱 穴 間	距 離	柱 穴 間	距 離	柱 穴 間	距 離
15	東3.85m	1 — 2	1.90m	5 — 6	2.00m		
	西3.80m	2 — 3	1.95m	6 — 7	1.90m		
	南3.90m	3 — 4	2.10m	7 — 8	1.90m		
	北3.85m	4 — 5	1.75m	8 — 1	1.90m		
16	東6.00m	1 — 2	1.70m	5 — 6	2.10m	9 — 10 10 — 1	1.95m 1.95m
	西6.30m	2 — 3	2.60m	6 — 7	1.90m		
	南4.00m	3 — 4	1.70m	7 — 8	2.60m		
	北3.90m	4 — 5	1.90m	8 — 9	1.80m		
17	東3.90m	1 — 2	2.10m	5 — 6	1.90m		
	西3.80m	2 — 3	1.80m	6 — 1	3.80m		
	南3.80m	3 — 4	3.80m				
	北3.80m	4 — 5	1.90m				
18	東2.70m	1 — 2	1.40m	5 — 6	1.20m		
	西2.50m	2 — 3	1.30m	6 — 1	4.25m		
	南2.10m	3 — 4	2.10m				
	北4.25m	4 — 5	1.30m				
19	東6.60m	1 — 2	2.65m	5 — 6	3.70m		
	西6.30m	2 — 3	3.95m	6 — 7	2.60m		
	南4.70m	3 — 4	2.70m	7 — 8	2.10m		
	北5.20m	4 — 5	2.00m	8 — 1	3.10m		
20	東7.70m	1 — 2	2.35m	5 — 6	2.30m		
	西7.00m	2 — 3	2.55m	6 — 7	2.60m		
	南3.30m	3 — 4	2.80m	7 — 8	2.10m		
	北4.05m	4 — 5	3.30m	8 — 1	4.05m		
21	東2.50m	1 — 2	1.60m	5 — 6	2.20m		
	西2.30m	2 — 3	2.00m	6 — 1	2.30m		
	南4.00m	3 — 4	2.50m				
	北3.60m	4 — 5	1.80m				
22	東2.50m	1 — 2	1.50m	5 — 6	1.90m		
	西3.30m	2 — 3	1.98m	6 — 1	3.30m		
	南3.60m	3 — 4	2.50m				
	北3.48m	4 — 5	1.70m				
23	東 —	1 — 2	1.00m				
	西 —	2 — 3	1.74m				
	南3.16m 北 —	3 — 4	0.46m				

3. 配石遺構

本遺構はⅢ区の南西部、15×15mという広い場所にかけて位置している。また、本遺構は上部の石敷と、下部の石敷を中心とした石敷遺構に分かれている。

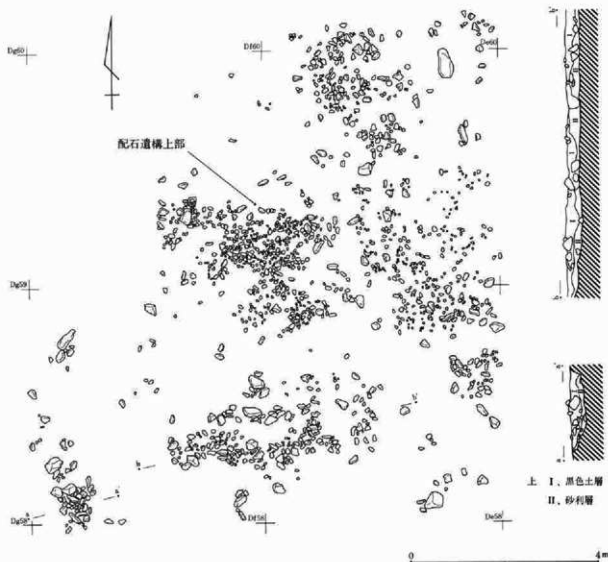
(1) 上部石敷遺構 (PL51)

Ⅲ区一带は砂利層あるいは礫層が露出している場所が多かったが、この付近では黄褐色土の堆積が見られた。この黄褐色土下から、所々に自然堆積としては考えにくい状態で礫が検出された。礫は敷かれたようなものと焼けてひびがはいったもの、また、割れてしまったもの等様々なようすを呈していた。

遺物は土器片が点々と散布しており、完形に近いものは検出していない。

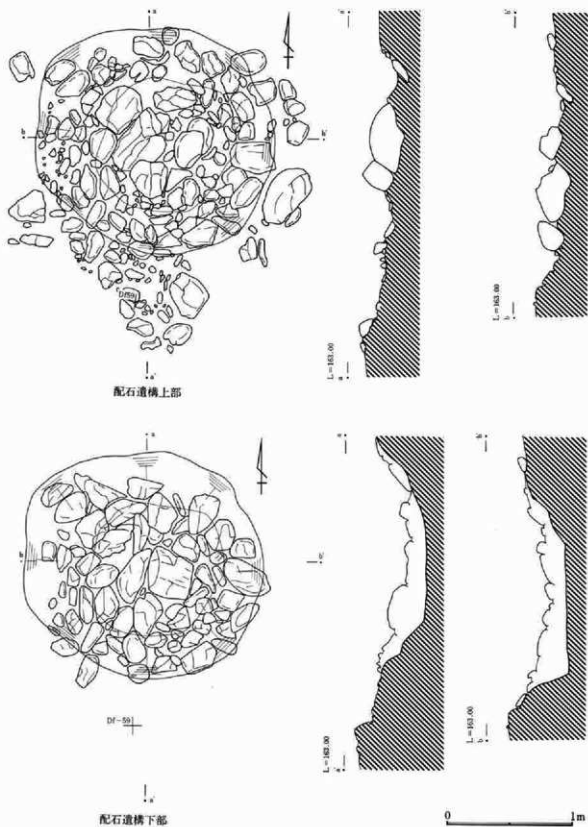
南部では、礫床墓を思わせる石の並びが検出されたが、その遺構を決定づけるものが出土せず、また、礫床墓とにいきれるほどきちんとした並びでもないので、断面図を作成し、調査を終了した。

北部では、礫の間に土器片の散布があり、石の集

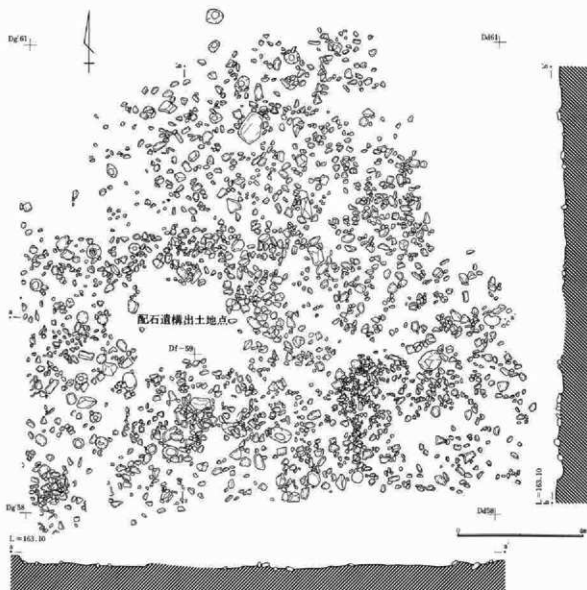


第178図 上部石敷遺構実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第179図 配石遺構実測図(1)



第180図 配石遺構実測図(2)

中している部分もあったが、特にこの遺構を決定する資料の出土は見られなかった。ただし、焼石・土器片から、奈良時代の祭祀跡と考えるのが妥当であろうとしてこの面での調査を終了した。

(2) 配石遺構 (PL51・52)

本遺構は(1)で述べた石敷遺構の下から検出された遺構である。黄褐色土下の礫をはずし掘り下げていったところ、さらに上部よりやや大ぶりの礫の広がりが見出され、ひとつの面としてとらえ調査を進めた。しかしこの面での礫はこの時点では自然堆積

で大ぶりの礫層の上面と考えられた。

この面のDf-59グリッドを中心として、ばたんの花状の径2.50mの配石遺構が検出された。

自然堆積の礫層面を50cm余り掘り、石を置く。特に立上り部分は、30～40°の傾斜で石をはっている。部分的には、70°の傾斜をつけて平石を立てかけるように置いている。中央部は比較的大ぶりの石をおいている。この石は、丸味のある石を用いており、盛り上がった感じを持たせる。さらに中央部には、40～50cmある大ぶりの石を盛りあげ、周囲の傾斜部を花卉とすれば、花芯のような部分を構成している。

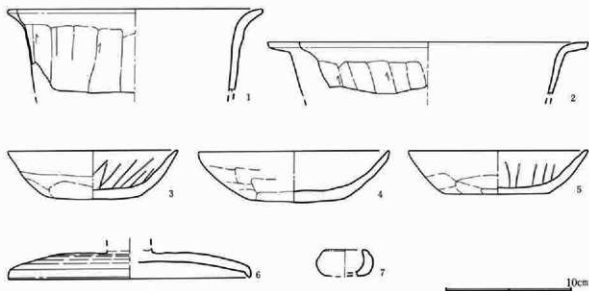
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

この中央のほとんどの石は火を受けた形跡が見られ、ひびがはいっている。赤く変色している石も見られた。取り上げる際、細かに砕けてしまった石もあるほどで、この遺構の性格を考える上で、ひとつの要素となろう。この中から、遺物の出土是一片もなかった。

周辺から、砂利層中に黒色土がある部分について、ピットとして掘ったが、この遺構をおおう建物跡を

想定させるほどの柱列は検出できなかった。

出土遺物は上記の石敷面、下部の礫層上面から出土した。しかし完形品はなくいずれも破片であった。これらから判断すると、奈良時代の所産と考えられる。また、この遺構は性格を明らかにする遺物の出土が見られなかったが、一般の生活跡とは考えられず、やはり、祭祀関連の遺構と考えた方が妥当と思われる。



第181図 III区石敷出土遺物実測図

III区石敷出土遺物観察表

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器器 裏	D f -59G	①27.4 ②— ③— ④口縁部片	①暗赤褐色 ②良・酸化焙 ③砂粒混入	外面割部は篋作り、口縁部は横撫で、内面割部は篋撫で。紐作り。		
2	土器器 鉢	D f -60G	①34.4 ②— ③— ④口縁部片	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	口縁部は外反する。紐作り。外面割部は篋作り、口縁部は横撫で、内面割部は篋撫で。		
3	土器器 坏	D e -58G	①13.4 ②7.4 ③3.8 ④片	①褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋作り、口縁部・器内面は横撫で。暗文。		
4	土器器 坏	D f -59G	①14.4 ②8.2 ③3.4 ④片	①暗赤褐色②良・酸化焙 ③1mm位の砂粒少量混入	体部・底部は篋作り、口縁部・器内面は横撫で。暗文。		
5	土器器 坏	D f -60G	①15.2 ②7.7 ③4.3 ④片	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下の砂粒混入	体部・底部は篋作り、口縁部・器内面は横撫で。		
6	須恵器 蓋	D f -60G	①19.4 ②—③— ④口～胴部片	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	輪軸整形。		
7	土器器 ミニ土器	D f -60G	①3.0 ②3.0 ③2.1 ④口～底	①暗赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	手握ね土器。		

4. 水田跡

(1) 水田跡の状況 (PL53)

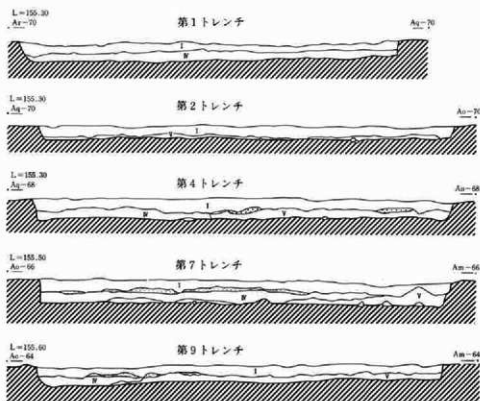
水田跡はIV区東端に位置している。面積は約1,000㎡である。この位置は本遺跡内で最も低い所において、IV区平端部と約3～4mの比高差を持つ。

IV区は全体に試掘トレンチをいれて、遺跡の状況を把握してから、調査した部分でその試掘トレンチに浅間B軽石とその下にやや粘質の茶褐色土、その下にシルト状で茶色の斑点を含んだ灰色の土が確認されたところから、ここを水田跡と考えた。この地層が分布している範囲を限定して調査を実施した。

耕作土を除くと浅間B軽石のおおっている部分は西側3分の1くらいで、東側では見られなかった。浅間B軽石の残っていない部分は茶褐色土も削られているところが多かった。浅間B軽石を除いたところ、茶褐色土の凹凸が検出されたが、畦畔は認めら

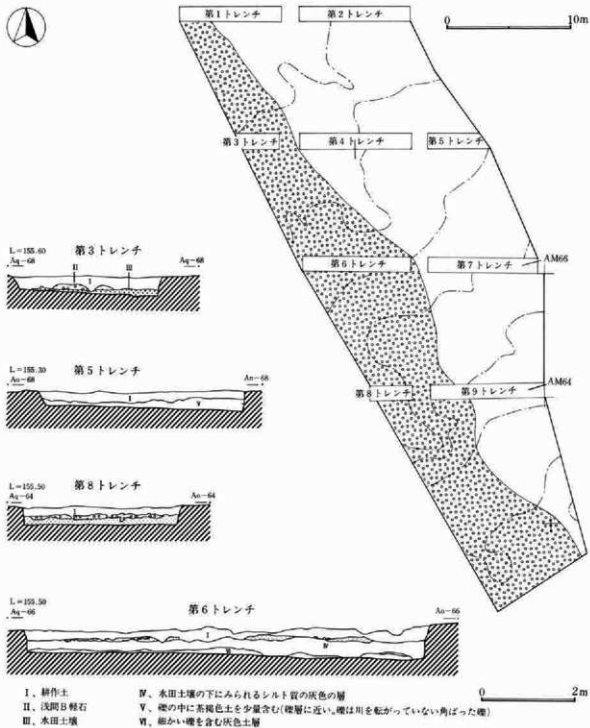
れず、水田の区画は明確にならなかった。この面を水田と考えると、北へ向って傾斜しているので、この方向に水を流していく、小区画水田が考えられる。しかし、水田耕作が行われたかどうかの決め手が検出できなかったため、古環境研究所にプラントオパール分析を依頼した。

田篠地区は耕作土に多くの礫が混じり、その下に砂利層、礫層が続くので水はけがよく、水田には適さず、畑作地帯となっている。しかし、雄川に近いこの付近は畑作地帯より3～4m低いため、伏流水が湧くところがあり、水田耕作が可能である。現在は畑作が行われているが、耕作土も上の畑に比べ、粒子が細かいやや砂質の耕作土である。



第182図 水田跡実測図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第183図 水田跡実測図(2)

(2) プラント・オパール分析報告

古環境研究所

① はじめに

田藤遺跡東端の低地部分では、浅間B軽石層の直下に茶褐色土層が認められ、水田跡の可能性が考えられていた。しかし、同層からは畦畔などの遺構は検出されず、考古学的に水田跡を立証するには至らなかった。

そこで、水田跡の分析的確認を目的として、プラント・オパール分析調査が行われた。以下に、その結果を報告する。

② 試料

現地調査は昭和162年9月7日に行われ、図1に示した各地点で試料を採取した。このうち、A～C地点は土層壁面、1～15地点は茶褐色土層の検出面である。採取にあたっては、容量50ccの採土管ならびにポリ袋を用いた。

基本層序は1層～4層に分層され、このうち2層は浅間B軽石を混在する層、3層は水田跡と見られていた茶褐色土層である。

採取した試料数は計30点であり、このうち24点について分析を行った。

③ 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定、試料土約1gを秤量、ガラスビーズ混入（直径約40μm、約0.02g）、脱有機物処理（電気炉灰化法または過酸化水素法）、超音波による分散（150W・26kHz・15分間）、沈底法による20μm以下の微粉子除去、乾燥、オイキット中に分散、プレパラート作成、検鏡・計数。なお、秤量は電子分析天秤を用いて1万分の1gの精度で行った。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を対象に、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

試料に混入したガラスビーズの個数（個/g）に、計数結果（プラント・オパールとガラスビーズ個数の比率）をかけて、試料1gあたりのプラント・オパール個数を求めた。これに仮比重をかけて試料1ccあたりのプラント・オパール個数を求めた。

このようにしてイネのプラント・オパール密度を測定していくと、水田跡が埋藏されている層にピークが現れるのが通例である。また通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上検出された場合には、水田跡の可能性があると判断している。

こうして求められたプラント・オパール密度に、表1の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重）をかけて植物体量（t/10a・cm）を算出した。これに層厚をかけて、その層で生産された植物体の総量（t/10a）を求めた。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

表1 各植物の換算係数(単位: 10^{-8} g) 藤原, 1979の第1表を一部改変

植物名	葉身	全部上部	種実
イネ	0.51	2.94	1.03
ヒエ	1.34	12.20	5.54
ヨシ	1.33	5.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ススキ	0.38	1.24	—

④ 分析結果

イネ、ヨシ属、タケ亜科(竹笹類)、ウシクサ族(ススキなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群について同定・定量を行い、分析結果の数値データを表2に示した。その他の分類群のプラント・オパールも見られたが、水田跡の確認が主目的であるためここでは割愛した。表3に、イネの植物体生産量の推定値と、その計算過程を示した。

図2に、イネのプラント・オパールの出現状況を示した。柱状図内のドットは、試料の採取箇所を示している。

図3に、イネ、ヨシ属、タケ亜科の植物体生産量と変遷を模式的に示した。柱状図内のポイントは最上面から50cm深の位置を示している。

⑤ 考察

(1) 3層(茶褐色土層)における稲作の可能性について

壁面採取を行ったA~C地点の3層では、すべての地点でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、BC地点では、イネのプラント・オパールが4,000個/g前後と比較的多量に検出された。同層を覆っている2層(浅間B軽石混じり)では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、700~1,600個/gとごく少量である。したがって、3層で検出されたイネのプラント・オパールは上層からの落ち込みとは考えにくい。これらのことから、3層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

1~15地点では3層の検出面から試料を採取したが、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。量的には700~2,700個/gと少ないものの、これらの地点周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) 稲の生産量について

各地点の3層で生産された稲穂の量を算出したところ、平均0.24 t/10 a・cmとなった。(表3参照)。同層の平均層厚7 cmをかけると、3層で生産された稲穂の総量は1.68 tと推定される。当時の稲穂の年間収量を10 aあたり100kgと仮定すると、同層で稲作が営まれていた期間は20年間弱と比較的短期間であったものと推定される。

なお、以上の値は、収穫方法が穂刈りで行われ、稲わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穂の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

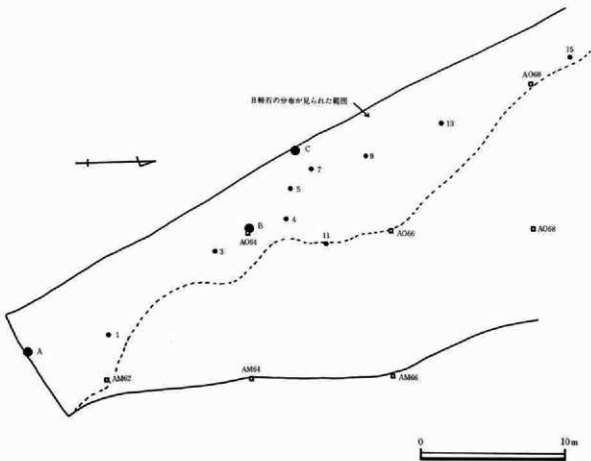
(3) 土層の堆積環境について

タケ亜科は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは湿地に生育している。このことから、両者の出現傾向を見ることによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

当調査区ではタケ亜科はほとんど見られず、3層より上層ではヨシが卓越していることが分かる（図3参照）。このことから、3層の時期になんらかの原因で湿地化し、そこで水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

- 藤原宏志・1976、プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の柱状体標本と定量分析法―、考古学と自然科学, 9: 15-29.
 藤原宏志・1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O.sativa* L.) 生産総量の推定―、考古学と自然科学, 12: 29-41.
 藤原宏志・杉山真二・外山秀一・1984、地層の区分と水田址の探査、那珂若休遺跡Ⅱ、福岡市埋蔵文化財調査報告書, 第106集: 11-15.
 藤原宏志・杉山真二・1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―、考古学と自然科学, 17: 73-85.



第184図 試料採取地点(富岡・田篠遺跡)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

第8表 試料I 18あたりのプラント・オパール個数

A 地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1	800	0	800	0	0
2	700	2,300	0	700	0
3	700	2,300	0	0	0
4-1	0	2,600	800	0	0
4-2	0	0	0	0	0

B 地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1-1	3,400	1,700	800	800	0
1-2	1,700	1,700	2,500	0	800
2	700	1,500	700	0	0
3	4,200	1,700	1,700	0	0
4-1	0	0	0	2,500	0
4-2	0	0	0	800	0

C 地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1	4,300	4,300	0	1,700	0
2	1,600	5,000	0	800	0
3	3,700	2,800	900	900	0
4	0	0	0	0	0

As-B直下

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1	1,700	1,700	800	800	0
3	1,700	1,700	0	0	0
4	1,900	6,800	1,900	2,900	0
5	700	700	1,500	0	0
7	900	900	0	2,700	0
9	800	2,400	800	800	0
11	2,500	0	1,700	800	0
13	2,700	6,300	1,800	2,700	0
15	1,800	1,800	900	0	0

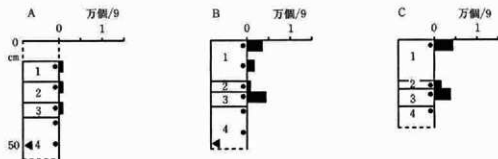
第9表 イネの生産の推定

A 地点		層名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数個/g	仮比重	P.O.数個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲粒重 t/10a・cm	稲粒総量 t/10a
1	10									
2	20	10	700	1.11	700	0.13	0.07	0.72		
3	30	7	700	1.17	800	0.15	0.08	0.58		
4-1	37	10	0	1.31	0	0.00	0.00	0.00		
4-2	47	—		1.31	0	0.00	0.00	—		

B 地点		層名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数個/g	仮比重	P.O.数個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲粒重 t/10a・cm	稲粒総量 t/10a
1-1	0									
1-2	10	10	1,700	1.22	2,000	0.38	0.21	2.06		
2	20	5	700	1.11	700	0.13	0.07	0.36		
3	25	7	4,200	1.29	5,400	1.03	0.56	3.89		
4-1	32	10	0	1.32	0	0.00	0.00	0.00		
4-2	42	—		1.31	0	0.00	0.00	—		

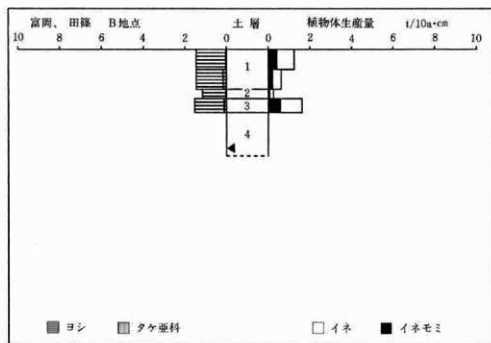
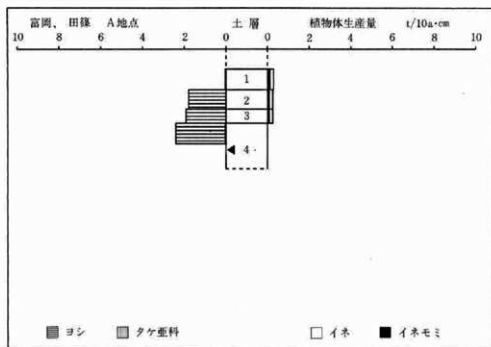
C 地点		層名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数個/g	仮比重	P.O.数個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲粒重 t/10a・cm	稲粒総量 t/10a
1	0									
2	20	4	1,600	1.11	1,700	0.32	0.18	0.70		
3	24	8	3,700	1.29	4,700	0.90	0.48	3.87		
4	32	—		1.31	0	0.00	0.00	—		

As-B直下		層名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数個/g	仮比重	P.O.数個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲粒重 t/10a・cm	稲粒総量 t/10a
1										
3				1,700	1.20	2,000	0.38	0.21	—	
4				1,900	1.20	2,200	0.42	0.23	—	
5				700	1.20	800	0.15	0.08	—	
7				900	1.20	1,000	0.19	0.10	—	
9				800	1.20	900	0.17	0.09	—	
11				2,500	1.20	3,000	0.57	0.31	—	
13				2,700	1.20	3,200	0.61	0.33	—	
15					1.20	2,100	0.40	0.22	—	

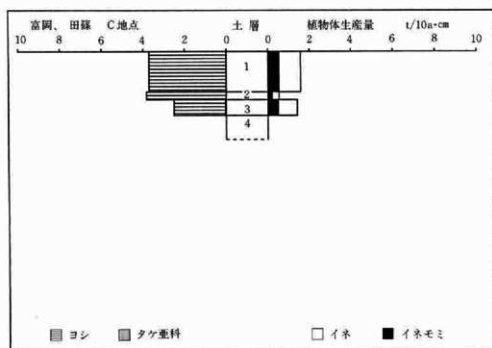


第185図 イネのプラント・オバール密度

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第186図 おもな植物の推定生産量(1)



第187図 おもな植物の推定生産量(2)

第10表 顕微鏡写真リスト (PL54)

No	プラントオパール	地 点	試 料 名	1987.12.24
				倍 率
1	イ ネ	No5	AS-B 直下	400
2	イ ネ	No11	AS-B 直下	400
3	ヨシ属	No13	AS-B 直下	400
4	ウシクサ族	C	1-2	400
5	キビ族	B	1	400
6	シバ属	C	1	400

5. その他の遺構

(1) 溝

溝はⅢ区に2条、Ⅳ区に3条検出されたが、いずれも人為的な溝とは考えにくく、田籾地区の平端部にかつて、氾濫した河川の跡と思われるものである。

Ⅲ区1号溝 (PL55)

本遺構はⅢ区北東隅の砂利層中に検出された溝遺構である。

溝の長さは現状で約28m、さらに北へ続く。幅は6～7mで、深さは最深部で50～60cmである。

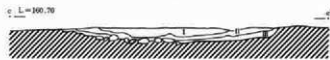
溝の内側1m程は棚状を呈し、中央部が、深く落ち込む断面形が見られる。

自然の氾濫による溝と考えられるが、埋土中より、100点余りの土師器小破片が検出されている。また、鉄滓が出土していることから、付近に小鍛冶の存在も考えられる。

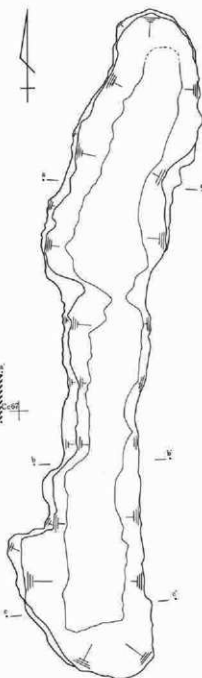
実測可能な土器は2点のみである。破片は平安時代のものが多いが、近世の磁器の混入もある。



- I、褐色土と黄褐色土がブロック状に混入、砂質である。
- II、黒褐色土で軽石粒を含む(黒色に近く、B軽石か)。
- III、黒褐色土で目層より緻密。
- IV、IIIに黄褐色土が混じる。



- I、粘土質で、粒子細かく黒褐色土。
- II、黒褐色土と黄褐色土。
- III、地山の黄褐色土。



第188図 Ⅲ区1号溝実測図

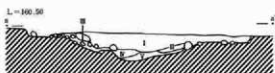
Ⅲ区2号溝 (PL55)

本遺構はⅢ区北東のCe-68・69, Cf-68・69グリット付近に位置する。

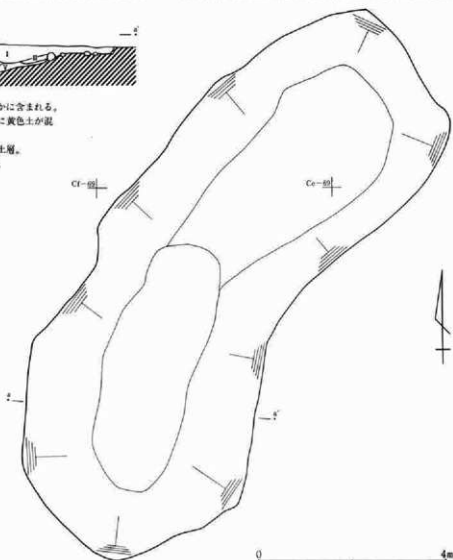
砂礫層中の確認で、黒色土を中心とした埋土で

あった。溝というよりも氾濫の中での窪地と考えられる。

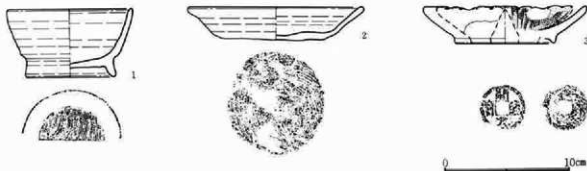
溝の長さは12mで、幅は4m程である。深さは最深



- I、黒色土に黄色と礫がわずかに含まれる。
- II、礫の混入少なく、黒色土に黄色土が混じる。
- III、こぶし大の石を含む黒色土層。
- IV、黄色土に黒色土が混じる。
- V、黄色土層(緻密)



第189図 Ⅲ区2号溝実測図



第190図 Ⅲ区1・2号溝出土遺物実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

III区1、2号溝出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	須恵器 高台付埴	Cm -70G	①(10.0) ②(7.2) ③5.4 ④口-高台	①灰白色 ②良・還元焰 ③緻密	輪縁成形。底部回転糸切後付高台。	III区東側 1号溝北	
2	須恵器 皿	Gf -67G	①14.0 ②8.1 ③2.6 ④片	①褐色 ②良・還元焰 ③緻密	輪縁成形。焼きみずみあり。	III区2号 溝	
3	近世磁器 高台付皿	—	①(13.0) ②(8.0) ③2.9 ④片	①明オリープ色 ②良・ 還元焰 ③緻密	口唇部段削りにより、花卉状呈す。付高台。	III区1号 溝	
4	古 銭		径1.5			「開元通宝」(鎌造年代唐高祖621)	

部で60cmを計る。

遺物は土師器、須恵器の小破片が30点余り、出土している。実測可能なものは一点のみである。出土

土器から、平安時代に、窪地としてあったと考えられる。

IV区1号溝 (PL55・56)

本遺構はIV区中央部に位置する。用地内を横断し、南から北へ向って流れたと考えられる。

幅は25.6mで、最も深いところは約1mである。IV区平坦部の礫層が大きく落ち込んで、この溝部を構成する。したがって、IV区には浅間B軽石上部に黒色土がこれだけ堆積しているところはない。

底部に、浅間B軽石が堆積しているところから、

平安時代には、溝、あるいは河川として、水が流れていたと思われる。

遺物は、傾斜部、底部にかなり多くの須恵器、土師器の破片が出土した。手捏ね土器が2点出土したり、厚手の須恵器が出土したり、バラエティーに富む。

IV区2号溝 (PL56)

本遺構はIV区中央東寄りに位置する。用地外から、北へ向かい、1号溝に合流する。

幅6～10m、深さは20cm程で、あまり深くはない。溝中より、35号住居跡、19～21号掘立柱建物跡が

検出されており、これらの遺構が存在した時期には、埋没していて、平坦になっていたと思われる。遺物の出土が少なく、小破片数点のみであった。

IV区3号溝 (PL56)

本遺構はIV区中央西寄りに位置する。砂礫層中の確認で埋没土は黒色土であった。

最大幅8m、深さが50cmと、浅い溝である。

この付近は砂礫層で、黒色土の分布が見られた部分を掘り下げたところ、49号住居跡とつながり、また、形も溝状になっておらず、溝というよりも、窪

蓋の際やや深くなった部分と考えた方が妥当と思われたが、遺物も出土しているの、溝として取り上げた。

遺物の出土は16点あった。土師器、須恵器の小破片であったが、その中に縄文時代の所産と考えられる大型石斧が含まれている。

(a-d'土層)

- I 耕作土(砂礫多い)
- II ところどころ小指大～径5～6cm大の礫を含む、黄土色しまりのある土b-b'地層断面の目・田に相当。
- III 縦指大の礫を含む、しまりのある茶色の土層、洗間日軽石も少々含まれている。
- IV 洗間日軽石、黒色
- V 砂礫を含む地山

(b-b'土層)

- I 表土
- II 黄土色、ところどころ縦指大の礫を含む、比較的しまりのある土。
- III 黄土色、あまり礫を含まず、しまりのある土。
- IV 洗間日軽石を含む、礫は少なく、多少砂っぽい茶色の土層。
- V 洗間日軽石、黒色、砂っぽい。
- VI 地山、削り過ぎ、砂礫を多く含む。



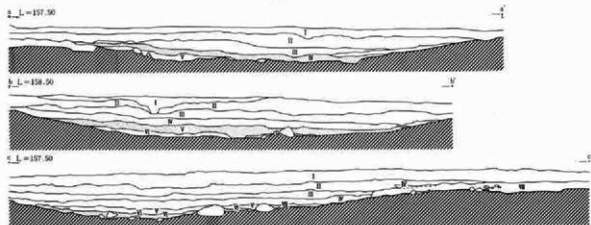
(a-c'土層)

- I 耕作土
- II A軽石の混入が見られる。茶斑点のしまる茶褐色土層。
- III 鉄分の凝集している茶斑点のしまる茶褐色土層。
- IV 洗間日軽石を少量含む茶褐色土層。
- V 洗間日軽石層が上の黒色土でよごれている層。
- VI 洗間日軽石層(純層)
- VII 粘質茶褐色土層
- VIII 小礫を含む茶褐色土層。

a-l = 137.50

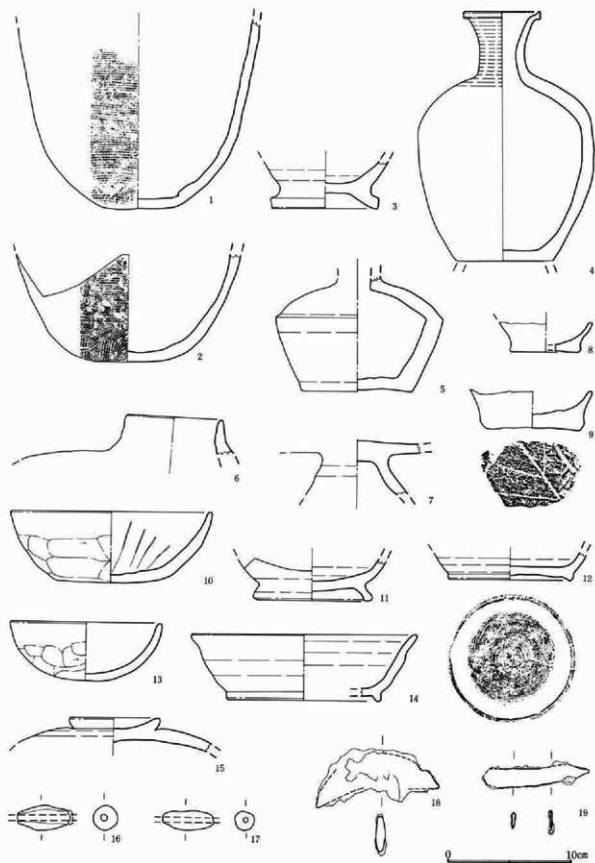
b-l = 138.50

c-l = 137.50



第191図 N区1号溝実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

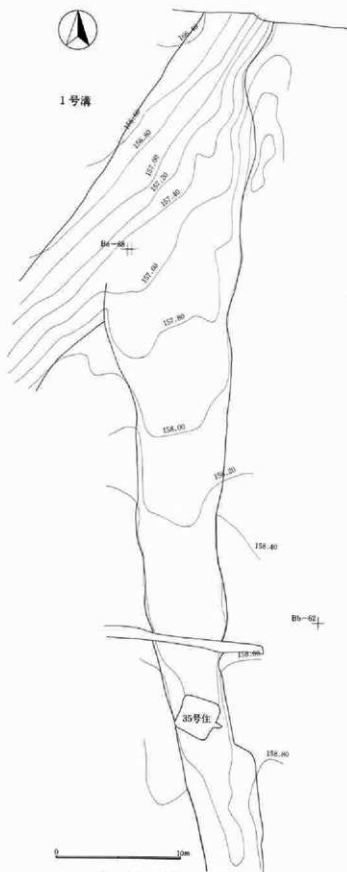


第192図 IV区1号溝出土遺物実測図

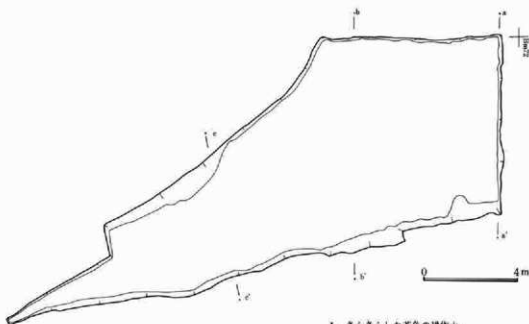
Ⅳ区1号溝出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	須恵器 壺	B f -68G	① — ② — ③ — ④割一部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	内面指頭凹痕、外面平行叩き目。		
2	須恵器 壺	B f -68G	① — ② — ③ — ④割～底	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	内面は青海波の叩目を撫で消している。外面は平行叩き目。		
3	須恵器 長頸瓶	B f -69G	① — ②11.3 ③ — ④底部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦軸整形。		
4	須恵器 長頸瓶	B f -68G	①(8.2) ②10.2 ③26.5 ④%	①暗青灰色 ②良・還元焰 ③緻密	紐作り後横軸整形。内面横撫で、外面寛整形。		
5	須恵器 長頸瓶	B f -68G	① — ②12.0 ③ — ④割～底片	①灰白色(内、橙色) ②良・還元焰 ③緻密	紐作り後、縦軸整形。		
6	須恵器 平	B k -62G	①(10.1) ② — ③ — ④口～割	①灰色 ②良・還元焰 ⑤1～2mm程の砂粒混入	寛整形。内・外面とも摩耗が著しい。		
7	須恵器 高 杯	B h -66G	① — ② — ③ — ④胴部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦軸整形。		
8	土 師 器	B k -62G	①(10.0) ②(7.4) ③0.0 ④底部	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	手握ね土器。	木高痕あり。	
9	土 師 器	B k -60G	①9.7 ②7.5 ③0.0 ④%	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	手握ね土器。	木高痕あり。	
10	土 師 器 杯	B e -69G	①16.0 ②(9.0) ③5.6 ④%	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。紐文。		
11	須恵器 高台付壺	B f -68G	① — ②(9.4) ③ — ④底部	①橙色 ②良・酸化焰 ③1mm程の砂粒混入	縦軸成形。付高台。		
12	須恵器 高台付杯	B k -62G	① — ②9.7 ③ — ④底部	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦軸成形。回転糸切後寛整形付高台。		
13	土 師 器 杯	B k -62G	①12.0 ② — ③4.6 ④ほぼ定形	①にぶい赤褐色 ②良・酸化焰 ⑤1～2mm砂粒混	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。		
14	須恵器 高台付杯	B k -60G	①(18.0) ②(12.2) ③5.2 ④口～底	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦軸成形。		
15	須恵器 蓋	B k -60G	① — ②(7.1) ③ — ④%	①灰色 ②良・還元焰 ③緻密	縦軸整形。		
16	土 師 器	B k -62G	径1.9 中径0.4 ④ほぼ定形	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密			
17	土 師 器	B k -60G	径1.5 中径0.3 ④定形	①橙色 ②良・酸化焰 ③緻密			
18	鉄 器	B k -60G	長さ9.7 幅2.8 厚さ0.7		鎌等の破片カ。		
19	鉄 器	B j -62G	長さ8.4 幅1.3 厚さ0.1		刀 子		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第193図 IV区2号溝実測図

L=159.50
4

- I. さらさらした茶色の埴作土。
 II. 手の平大の礫と米粒大の礫を含む黒色土層
 III. 米粒大の礫からなる層。
 IV. 手の平大の礫を多く含む黒色土層。
 V. 特おり規指大の礫を含むの細かい黒色土層、IVに近づくにつれ粘り気がある。

L=155.20
b

- I. ところどころに規指大の礫を含む茶褐色の粘り気のある土層。
 II. こぶし大の礫を含む地山から続くと思われる黒色土層。

L=159.20
c

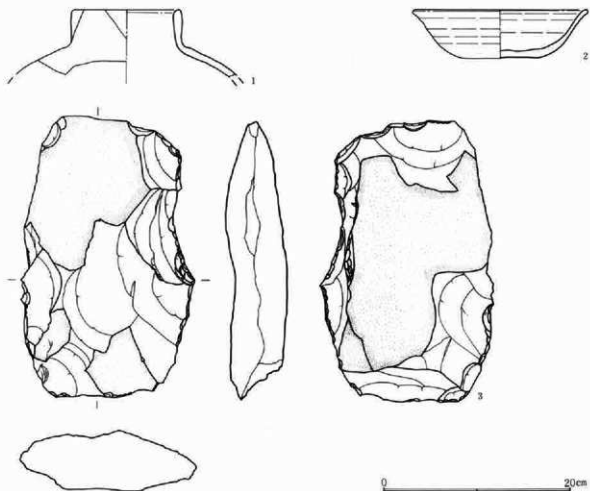
- I. 規指大の礫を多く含む黒色土層。
 II. こぶし大の礫を含む褐色土層
 III. 地山(茶褐色の砂礫層)

第194図 IV区3号溝実測図

IV区3号溝出土遺物観察表

図No	土器種類	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③耐高④残存	①色調②構成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器 壺	Bk -71G	①11.4 ②— ③— ④口~肩	①灰色 ②貝・還元胎 ③1mm程の砂粒混入	輪轆成形。	
2	須恵器 坏	Bk -70G	①(14.0) ②(6.0) ③4.8 ④口~底片	①黒色 ②貝・還元胎 ③緻密	輪轆成形。回転糸切末調整。体・底部とも摩耗が著しい。	
3	石 弁	BK -70G	長さ29 幅18.0 厚さ6.0 重さ5.2kg		上面・下面とも自然面を利用。使用痕は認められない。	輝石

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第195図 IV区3号溝出土遺物実測図

(2) 土坑 (PL57)

土坑はII・III・IV区で計7基検出された。特に性格の明確な土坑は認められなかったが、この項でまとめて取り上げる。

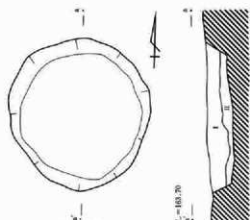
1号土坑

本遺構はII区中央西寄りのDt-60グリットに位置する。南3mに4号掘立柱建物跡が位置するが、北側

1号土坑出土遺物観察表

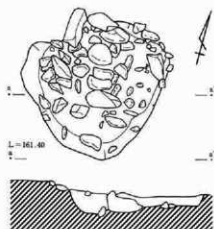
図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 部 坏	+20	①13.4 ②— ③4.5 ④片	①褐色 ②良・酸化層 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は覆削り、口縁部・器内面は横溝で。		

5 その他の遺構

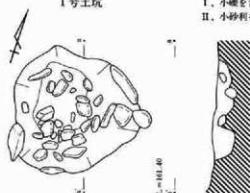


1号土坑

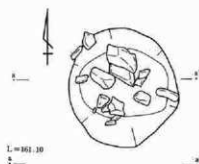
I、小礫を含む黒色土層。
II、小砂粒を含む茶色土層



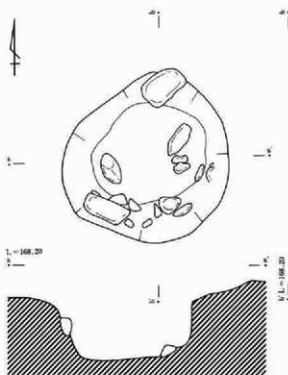
2号土坑



3号土坑



4号土坑

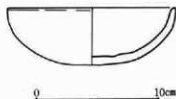
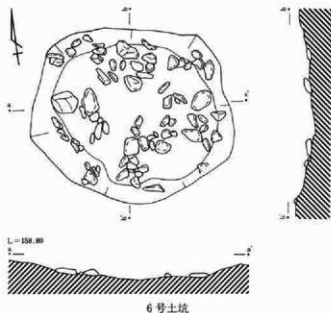


5号土坑



第196図 土坑実測図(1) (1～5号)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第198図 1号土坑出土遺物実測図

は遺構の分布の少ないところである。

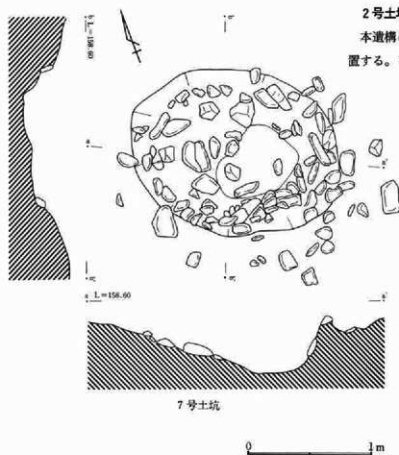
径1.20mの円形を呈し、深さは20cm程である。黄色土中の確認で、埋設土は黒色土であった。

出土遺物は3点の土師器である。本遺構内では、古い時期に属するものと考えられる。

2号土坑

本遺構はⅢ区中央部、Co-64グリットに位置する。この付近は礫層が傾斜し、ここに黒色土が堆積した部分である。掘り込み面はこの礫層より上と考えられるが、礫層での確認のため、20cmと浅い。大きな礫が土坑を埋めている。

径は約1mの円形を呈する。出土遺物はないが、埋設土から、奈良～平安時代の所産と考えられる。



3号土坑

本遺構はⅢ区中央部Co-65グリットに位置する。

2号土坑の北3mにあり、状況も酷似している。

径1mの円形状を呈し、20cmの深さをもつ。

4号土坑

本遺構はⅢ区中央部Co-65グリットに位置し、3号グリ

第197図 土坑実測図(2) (6～7号)

ットの北1mと近い。

4号土坑も状況は、2号土坑に酷似している。

径1mの円形状を呈し、10～15cmと浅い。

5号土坑

本遺構はIV区中央東寄り、Bn-66グリットに位置する。

この付近は大ぶりな礫層が露頭しており、実際の掘り込み面はさらに上と考えられる。埋没土は黒色土が主であった。

現状で径1.20mの円形状を呈する。深さは50cmを計る。

壁が直立しており、墓壇と思われる断面を呈すが、土坑の性格を示す遺物は出土していない。出土遺物は土師器小破片3点のみであった。時期は不明であるが、平安時代以降と考えられる。

6号土坑

本遺構はIV区中央東寄りBb-60グリットに位置する。

(3) 円形周溝 (PL58)

本遺構はIV区中央部南のBe-59グリットを中心に位置している。

遺構確認面は礫を含む砂利層で、礫を混入する黒色土の溝が一巡していた。

溝は上端で幅約1m、下端で約50cmである。径は外径約7m、内径約4mであるが、やや東西に長い。深さは10～20cmと比較的浅い。壁は砂礫のため、崩落しやすい。

溝に囲まれた部分も礫を含む砂利層で、中央にやや黒色土に近い部分があり、掘り下げたが、特に遺構を性格づけるような遺物の出土は認められなかった。

周溝内北側の窪地は、平石を敷いて、周囲に石を置いており、人為的な遺構と考えられる。また、中央部の窪地は東西に長く、長さ1.70m、幅50cm、深さ

比較的細かい砂礫層中の確認で、埋没土は黒色土であった。

現状で、径3mの円形状を呈する。深さは20cmと浅い。

出土遺物は皆無で、土坑の形状も不明確なので、氾濫の際の窪みと考えた方が妥当といえるが、土坑として取り扱った。

7号土坑

本遺構はIV区中央東寄りBb-62グリットに位置する。22号掘立柱建物跡が東2mにある。

確認面は6号土坑と同様の細かい砂礫層中であるが、6号土坑よりも深い。

現状で、径1.50mの円形状を呈し、深さは50cmを計る。

壁は40～45°で傾斜し、壁面にこぶし大の石をはって壁の崩落を防ぐようにしている。出土遺物はなく、土坑の性格を決める証左に欠けるが、土坑の形態からは墓壇の可能性が高い。

時期は不明である。

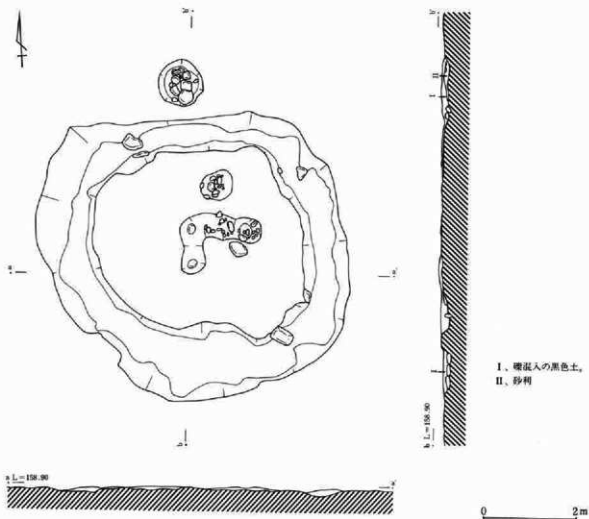
10cmを計るが、遺物の出土もなく、人為的かどうか不明である。

この遺構の北側に、恐らく関連する遺構と思われるが、径1mの円形のピットが検出された。

深さ10cmのところには径20cmの平石を敷いて、平坦な面を作っている。この平石の下は、自然堆積の砂利層になっており、この下に何かを置いたという形跡は残っていない。したがって、この平石を底面としたピット状遺構ということになる。この平石の上は、浅間B経石を含む細かい黒色土で埋まっており、周溝の埋没土とは異なる。黒色土中にも遺物の出土はなく、やはり、性格を決定するには至らなかった。

確認面から、奈良～平安時代の遺構と考えられよう。

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第199図 円形周溝実測図

(4) 石敷遺構 (PL59)

本遺構はIV区西側Bm-69グリットを中心に位置している。

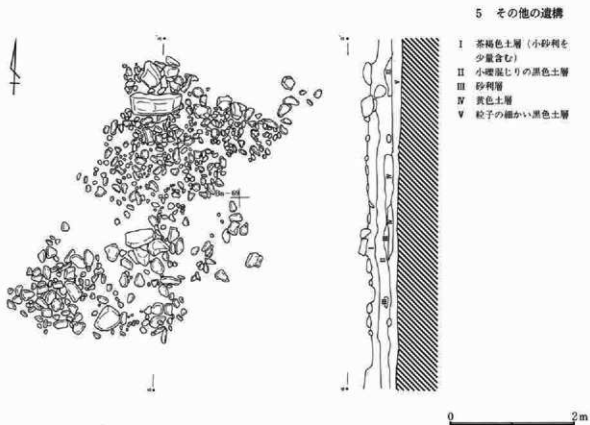
42号・43号住居跡から、南に向って帯状に分布している。黒色土層にかかっている。34号・41号住居跡はこの黒色土層中よりの検出であったが、石敷遺構はこの黒色土から茶褐色土上の遺構である。

北側に幅40cm、長さ70cm、厚み20cmの大石を据えこの石を中心として、南側に10~20cmの礎を敷いている。南側には、やや大ぶりの石が並ぶ。西側に続

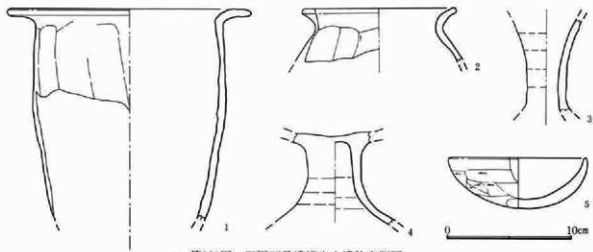
いていく石敷は自然堆積である。

出土遺物は、本遺跡内では古い方に属する。ただし、本遺構周辺の出土であり、本遺構の時期を決定できるものではない。

本遺構は、住居跡にほぼ等距離で囲まれていて、この石敷内に住居跡は複合していないことから、この時期に遺構として、あるいは住居跡不適地として認められていたと考えられる。よって、この遺構は奈良時代以前の遺構として考えられよう。



第200図 IV区石敷遺構実測図



第201図 IV区石敷遺構出土遺物実測図

IV区石敷出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②器径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成形・整形の特徴	備考
1	土器器 種	B P -68 G	① (26.0) ② - ③ - ④口縁部×	①赤褐色 ②良・酸化期 ③1~2mm程の砂粒混入	外面胴部は筒削り、口縁部は横削で、内面胴部は 縦削で。紐作り。		

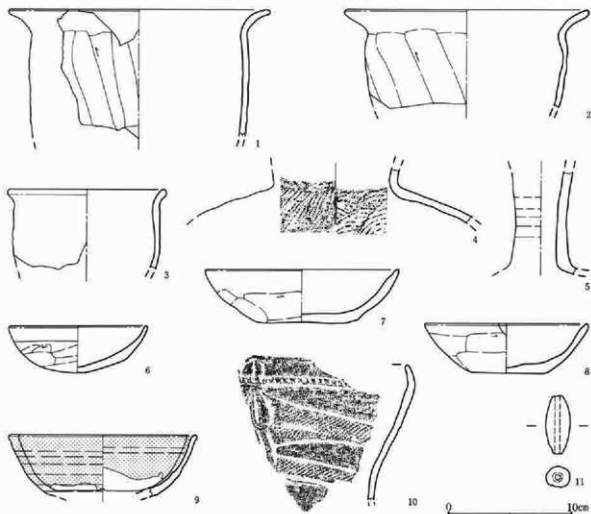
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

N区石敷出土遺物観察表

図 No	土器種 器 種	出土位置 (m)	量目 ①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
2	土 器 罎	—	① (16.0) ② — ③ — ④口へ割	①橙色 ②良・酸化焰 ③ 1mm以下の砂粒混入	外面割部は直削り、口縁部は横無で、内面割部は 笠無で。紐作り。	
3	須 恵 長 頸 瓶	B n -60G	① — ② — ③ — ④頸部	①灰色(一部黒色) ②良 ・還元焰 ③ 1mm以下砂混	縦縞整形。	
4	須 恵 高 杯	B n -60G	① — ② — ③ — ④脚部	①灰色 ②良・還元焰 ③ 1mm以下の砂粒混入	縦縞整形。	
5	土 器 罎	B P -68G	①11.0 ② — ③4.0 ④片	①赤褐色 ②良・酸化焰 ③ 1mm程の砂粒混入	体部・底部は直削り、口縁部・器内部は横無で。	

(5) グリット出土遺物

遺物の属する時代の異なるものもあるが、ほぼこ 土した遺物以外を以下のように整理しておく。
の時期に該当するものが多いので、遺構に伴って出



第202図 Bグリット出土遺物実測図

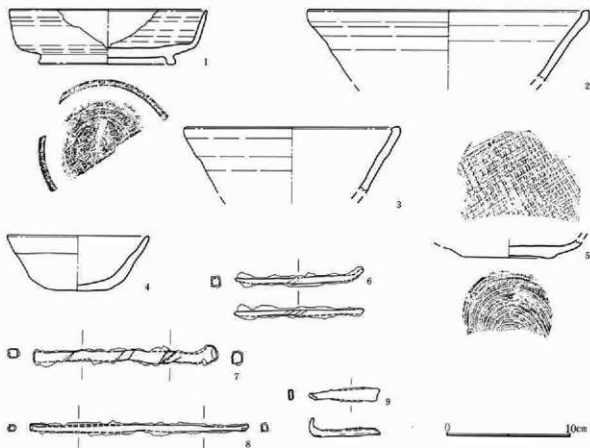
Bグリット出土遺物観察表

図 No	土器類 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 師 器 壺	Bm -67G	① 28.0 ② - ③ - ④口~胴	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm砂粒混	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm砂粒混	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 磨製で、紐作り。	
2	土 師 器 壺	Bm -67G	①25.8 ② - ③ - ④口~胴	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1mm以下砂混	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1mm以下砂混	外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は 磨製で、紐作り。	
3	土 師 器 壺	Bm -67G	①16.6 ② - ③ - ④口~胴	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	内・外面とも横撫で。	
4	須 恵 郡 大 壺	Bk -71G	① - ② - ③ - ④頸~胴	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	内面は青海波文。外面平行叩き目。	
5	須 恵 郡 兵 須 壺	BP -70G	① - ② - ③ - ④頸部	①灰色 (一部黒色) ② 良・還元焙 ③緻密	①灰色 (一部黒色) ② 良・還元焙 ③緻密	縦輪整形。	
6	土 師 器 杯	BP -67G	①11.0 ② - ③3.7 ④兜形	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm程の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
7	土 師 器 杯	Ba -66G	①15.4 ②8.0 ③4.1 ④%	①橙色 ②良・ 酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	①橙色 ②良・ 酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
8	土 師 器 杯	Ba -68G	① (13.0) ② (6.2) ③3.9 ④%	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③緻密	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
9	灰輪陶器 高台付埴 輪	Bc -60G	① (15.0) ② - ③ - ④高台無残	①灰白色 ②良・ 還元焙 ③緻密	①灰白色 ②良・ 還元焙 ③緻密	縦輪水挽き。内・外面とも施釉。	虎浜山1号
10	縄文土器 壺	Bc -68G	① - ② - ③ - ④口縁部片	①暗黒褐色 ②良 ③細砂粒混入	①暗黒褐色 ②良 ③細砂粒混入	磨消縄文。内面は無で。	後期
11	土 壺	BF -70G	長さ4.6 径1.9 孔径0.45				

Cグリット出土遺物観察表(1)

図 No	土器類 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	須 恵 郡 盤	Co -66G	① (15.8) ②10.8 ③4.3 ④%	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	縦輪成形。右回転糸切後付高台。	
2	中世土器	Ck -66G	① (30.0) ② - ③ - ④口縁部	①灰色 ②良 ③緻密	①灰色 ②良 ③緻密	横撫で。	内面径2 cm菊刻印
3	中世土器	Ck -64G	①23.0 ② - ③ - ④口縁部	①赤褐色 ②良 ③緻密	①赤褐色 ②良 ③緻密	横撫で。	内面径2 cm菊刻印
4	土 師 器 杯	Cm -62G	① (11.2) ② (5.5) ③4.3 ④%	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③緻密	①赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 摩耗のため篋削り痕不明。	
5	近世土器	Cc -60G	① - ② (7.1) ③ - ④底部	①淡黄色 ②良 ③緻密	①淡黄色 ②良 ③緻密	内面は格子目鉢線。施釉。外面も施釉。底部は回 転糸切。	
6	鉄 器	Cm -65G	長さ10.8 幅0.7 重さ16.5g			釘、ら線状に巻かれたものが見える。	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第203図 Cグリット出土遺物実測図

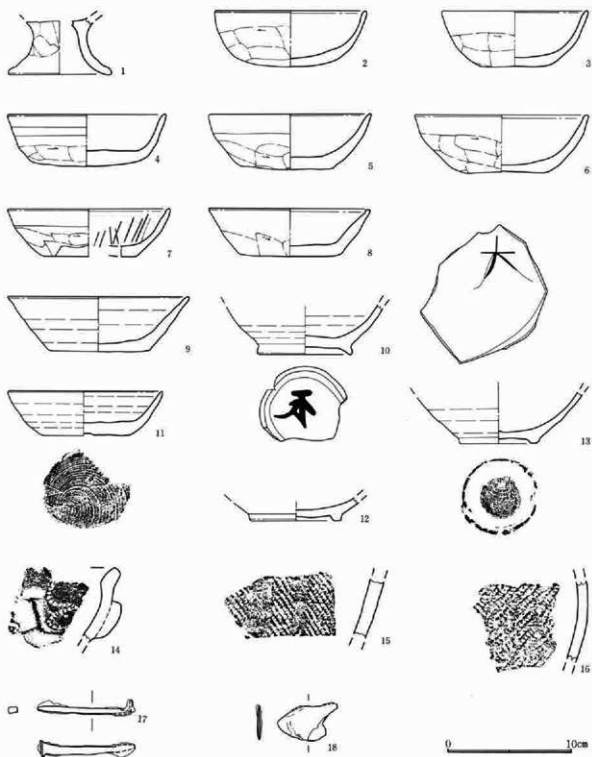
Cグリット出土遺物観察表(2)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
7	鉄 器	Cm -65G	長さ14.7 幅0.8 重さ30g			ら線状に巻かれたものが見える。	
8	鉄 器	Cm -65G	長さ17.4 幅0.6 重さ21.0g			ら線状に巻かれたものが見える。	
9	鉄 器	Cm -62G	長さ5.4 幅0.3 重さ9.0g			先端部が鉤状に曲がる。	

Dグリット出土遺物観察表(1)

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	土 器 台付壺	—	① — ② (11.8) ③ — ④ 脚部		①赤褐色 ②良・酸化焙 ③緻密	内面は横撫で。外面荒削り、周縁横撫で。	連結部穴 あき。
2	土 器 坏	Dc -56G	① (12.0) ② — ③ (4.4) ④ 欠		①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は覆削り、口縁部・器内面は横撫で。	

5 その他の遺構



第204図 Dグリッド出土遺物実測図

図 No	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①口径②底径 ③器高④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
3	土 師 器 坏	D9 -66G	①(11.6) ②(5.5) ③4.4 ④ $\frac{1}{2}$	①棕色 ②良・酸化剤 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は寛削り、口縁部・器内面は横撫で。		

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

Dグリット出土遺物観察表(2)

図 No.	土器種 器 種	出土位置 (cm)	量目 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調②焼成③胎土	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
4	土 器 器 環	D f -60G	①(12.6) ②(8.5) ③3.1 ④%	①黒色(一部褐色) ② 良・酸化焙 ③緻密	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
5	土 器 器 環	D p -64G	①13.0 ②7.5 ③4.3 ④完形	①にぶい赤褐色 ②良・ 酸化焙 ③1mm程砂粒混	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
6	土 器 器 環	D q -60G	①13.8 ②6.5 ③4.5 ④%	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒少量混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
7	土 器 器 環	D q -62G	①12.8 ②(7.3) ③3.3 ④口~底	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm程の砂粒混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。 暗文。	
8	土 器 器 環	D q -58G	①(13.0) ②(8.2) ③(3.8) ④%	①褐色 ②良・酸化焙 ③1mm以下砂粒少量混入	体部・底部は篋削り、口縁部・器内面は横撫で。	
9	須 恵 器 環	D q -67G	①(14.4) ②(8.0) ③4.3 ④%	①にぶい黄褐色 ②良・ 酸化焙 ③1~2mm砂粒混	縦縞成形。	
10	須 恵 器 高台付塊	—	① — ②7.3 ③ — ④体~底	①灰色 ②良・還元焙 ③緻密	縦縞成形。回転糸切後付高台。	墨書 「永々」
11	須 恵 器 環	D q -66G	①(12.3) ②7.0 ③3.5 ④%	①灰色 ②良・還元焙 ③1~2mm砂粒少量混入	縦縞成形。右回転糸切未調整。	
12	灰釉陶器 高台付塊	D q -66G	① — ②(7.2) ③ — ④底部	①灰白色 ②良 ③緻密	内面全面に施釉。東濃系。	
13	須 恵 器 高台付塊	D l -61G	① — ②6.0 ③ — ④%	①灰色 ②良・還元焙 ③1mm程の砂粒混入	縦縞成形。右回転糸切後付高台。	線 刻 あり。
14	縄文土器	D o -56G	① — ② — ③ — ④口縁部	①にぶい褐色 ②良 ③細砂粒混入	口唇下部に耳状の突起。	中期阿玉 台式。
15	縄文土器	D h -60G	① — ② — ③ — ④胴部	①褐色 ②良 ③細砂粒混入	外面縄文。内面ナデ。	中期加曾 利E式。
16	縄文土器	D m -60G	① — ② — ③ — ④胴部	①褐色 ②良 ③1~2mm程の砂粒混入		前期。
17	鉄 器	D q -67G	長さ7.5 幅0.4 厚30.7		釘	
18	鉄 器	D x -57G	長さ4.8 幅2.6 厚30.15		鉄鍔	

6. 考 察

(1) 住居跡の重複

本遺跡内では比較的重複例が少なく、編年作業の参考としては完全な資料とはいえないが、これを中心として土器の変遷を考えていきたい。

① 4号住居跡と5号住居跡

切り合い関係の把握が難しかったが、5号住居跡の方が土層断面の観察から、新しい住居跡であると確認できた。

② 2号住居跡と6号住居跡

6号住居跡のカマドが2号住居跡によって破壊されていたことから、2号住居跡が新しい。

③ 11号住居跡と13号住居跡

11号住居跡の西側石垣を13号住居跡が一部破壊しているの、13号住居跡の方が新しい。

④ 21号住居跡と22号住居跡

22号住居跡の北東隅を21号住居跡が切っているの、21号住居跡の方が新しい。

⑤ 34号住居跡と37号住居跡

34号住居跡の上に37号住居跡の床が確認できなかったの、切り合い関係では把握できなかった。

⑥ 39号住居跡と40号住居跡

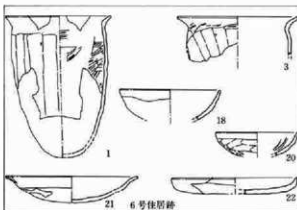
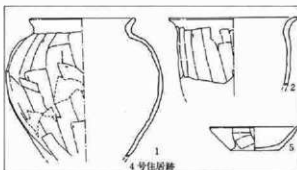
40号住居跡の焼土を含む床の続きが、40号住居跡の上に確認できたことから、40号住居跡の方が新しい。

⑦ 42号住居跡と43号住居跡

42号住居跡が43号住居跡を破壊している状況が把握できたことから、42号住居跡の方が新しい。

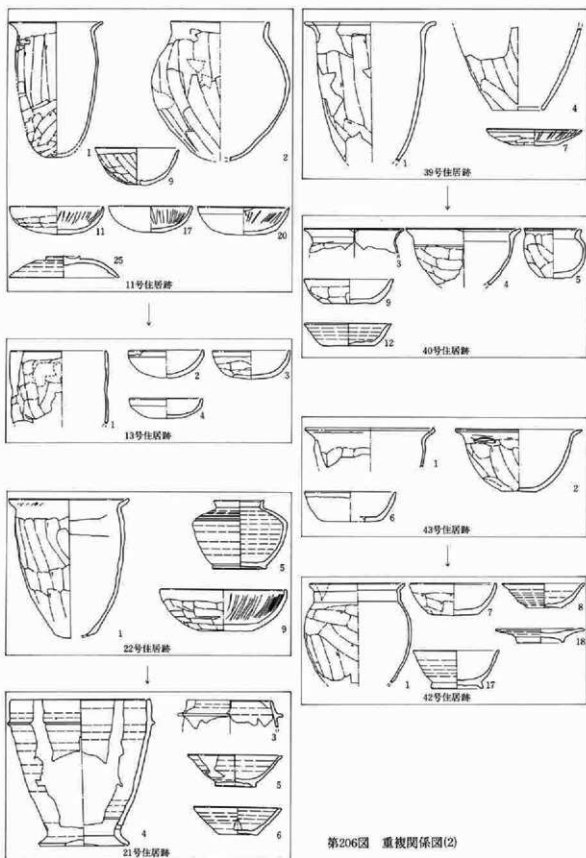
以下、①～⑦例(⑤を除く)を図示しておく。(図示した土器は前述の2分の1で、土器の数は選択し

ているので少なくなっている。なお、図№は前述のものとは一致する。)



第205図 重複関係図(1)

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第206図 重複関係図(2)

(2) 住居跡の分類と出土土器

① 住居跡の分類

本遺跡内の住居跡を以下のように分類した。ただし、完掘できなかったもの等、データ不足のものは除外した。

第11表 住居跡の分類

I 北	A (20㎡以上)	a、カマド床側	6、14、23、26
		b、カマド壁側	
カ マ ド	B (10㎡以上)	a、カマド床側	11、15、24、34、41、44、 45、47、50
		b、カマド壁側	1、22 (31、39は中間)
F	C (10㎡以下)	a、カマド床側	10、36、㉙、49
		b、カマド壁側	(4、13は中間)
II 東	A (20㎡以上)	a、カマド床側	
		b、カマド壁側	
カ マ ド	B (10㎡以上)	a、カマド床側	㉚、㉛
		b、カマド壁側	㉜、8、㉞、㉟、19、㉡ ㉢、㉣、㉤、㉥
D	C (10㎡以下)	a、カマド床側	3、7、㉦、38、㉧
		b、カマド壁側	㉨、㉩、㉪

○印は「コ」の字状口縁を持つ壺、回転糸切未調整の底部を持つ須恵器杯を出土する住居跡。

□印は羽釜を出土する住居跡。

② 出土土器の検討

I A a グループ (6・14・23・26号住居跡)

土師器壺 口縁部は外反し、胴部上位に最大幅をもち、斜縦位の寛削り。器内は比較的厚い。

坏 口縁部と体部を面す稜線を持つものと持たないものがあるが、持たないものは寛削りで口縁部と体部を面する。暗文をもつ。

須恵器短頸壺 縄織成形。底部寛調整。

須恵器の量は極端に少ないので比較のしようがないが、土師器については共通性をもつ。

I B a グループ (11・15・24・34・41・44・45・47・50号住居跡)

土師器壺 I A a のグループにはほぼ共通するものと11号住居跡にみられる球胴化したものがある。また、口縁部の折れ曲がらないもの(50号住居跡)と3種類のものがある。

瓶 11号住居跡の鉢状で中央部に小さな穴を1つもつ型と50号住居跡のように底が抜けて、ほぼ壺型に近い形と2種類ある。坏 I A a グループと同様であるが、やや平底の率が多い。

須恵器蓋 カエリをもつ。(11・34号住居跡) 全体として、I A a グループに酷似する。

I B b グループ (1・22・31・39号住居跡)

土師器壺 I A a グループに共通する。31号住居跡に球胴のものが出ている。

坏 やはり I A a グループに共通する。平底・暗文が多くなる。

台付壺 口縁部が短かく外反する。外面寛削り整形のもの(1号住居跡)と、器内の厚い整形の粗末なもの(11号住居跡)が出土している。

瓶 底の抜けた型のもの(39号住居跡)

須恵器蓋 31号住居跡から3個体出土しているが、いずれもカエリを持たない。

壺 骨藏器(22号住居跡)が出土している。

坏 底部回転糸切後、寛調整(31号住居跡)のものが出土している。

土師器は概ね共通性を持つが、個々に差のあるものが含まれる。

I C a グループ (10・36・46・49号住居跡)

土師器壺 I A a に共通であるが、46号住居跡のみ「コ」の字状口縁の壺を出土している。

坏 平底と丸底が混在する。

須恵器坏 回転寛削りの底部をもつ(10・36号住

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

居跡)削出し高台をもつ浅いものが出土。
共通性を持つ土器は少ない。須恵器環の特徴で考
えてよい時期のグループであろう。

ICbグループ(4・13号住居跡)

土師器壺 IAaに共通する。

環 4号住居跡は平底が多いが13号住居跡
は丸底が多い。

2軒のみであるので、特に共通性がいえるわけ
ではないが、概ねIAaグループと共通すると思えら
れる。

IIBaグループ(2・17号住居跡)

土師器壺「コ」の字状口縁を持つが、2号住居跡
の方がより明確である。

環 平底で、口縁部横撫で、体部篋削り。
器内厚い。

須恵器環 口径比が底径比に対して大きくなる。
回転糸切未調整の底部を持つ。

埴・皿 回転糸切後付高台をもつ。体部はやや
直線的に立上る。

いずれの土器にも共通性をもつグループである。

IIBbグループ(5・8・12・16・19・25・27・37・ 40・42号住居跡)

土師器壺「コ」の字状口縁、「コ」の字状口縁の前
段階、外反する口縁と3種類混在するが、
「コ」の字状口縁が主体である。

環 口縁部横撫で、体部篋削りで平底のも
のが多い。暗文をもつものが少なくなる。
体部篋削りのところを指頭丘頂で仕上げ
ているものもある。(27・37号住居跡)

須恵器壺 外面平行叩き目の大甕が出土してい
る。(12号住居跡)

環 回転糸切未調整の底部をもつものが主
体である。8号住居跡の環は篋調整を
しており、口径と底径の比からも、このグ
ループにははいりえない。

埴 回転糸切未調整の底部に高台を付けて
いる。

蓋 カエリをもたない。宝珠型・輪状のつ
まみをもつ(25号住居跡)がある。

以上のように異なる点が多く見られ、特に8・19・
25号住居跡は他の時代の遺物と考えられる。

IIc aグループ(3・7・35・38・48号住居跡)

このグループについてはそれぞれの中に、この型
式が多いというものが見出せないで、まともは省
略する。

IIc bグループ(9・20・21号住居跡)

土師器壺「コ」の字状口縁をもつ。

環 口縁部横撫で、体部篋削りまたは指頭
丘頂を残すもの。

羽釜 還元焰焼成で轆轤整形(21号住居跡)

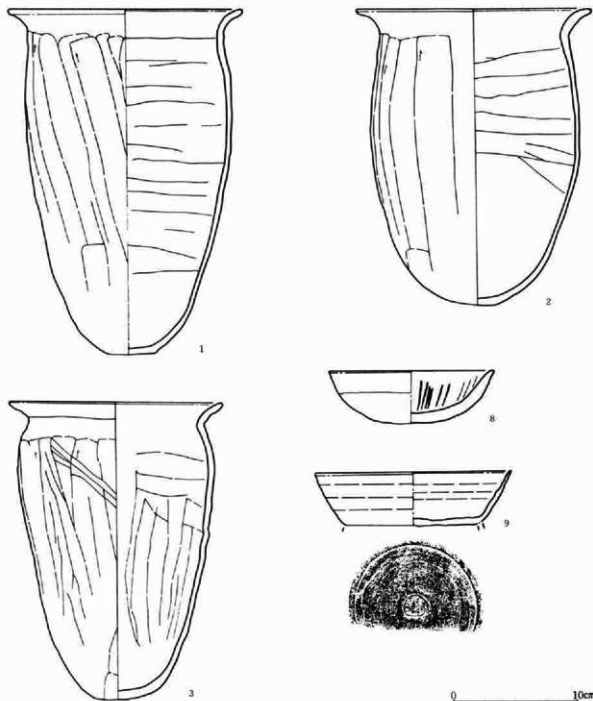
須恵器環 回転糸切未調整の底部をもつ。9号住
居跡の2個は酸化焰である。

以上、住居跡の型式をいくつかに分類し、土器の
面から、検討を加えたが、共通するもの、しないも
のがあり、住居跡の分類と土器の分類は必ずしも、
一致しないことがわかった。しかし、北カマドを持
つ住居跡と東カマドを持つものとの新旧、また、北
カマドを持つ住居跡で、大型のものと小型のもの
とは時代差があるということは、ほぼ明らかと考えら
れる。

(3) 出土土器の分類

本遺跡内では、重複関係や住居跡の分類から、住居跡の新旧の大まかな傾向は把握できた。しかし、前項の結論のようにこれだけでは土器の分類は不可能である。しかし、本県においては、井上唯雄氏、中沢悟氏、坂口一氏、三浦京子氏等の研究があり、

また、富岡市では「本宿・郷土遺跡」報告書で、富岡市教育委員会井上太氏の研究もある。これらの研究の成果をもとに、本遺跡の出土土器の分類を試みた。



第207図 I期の土器（7号住居跡）

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

〔I 期〕

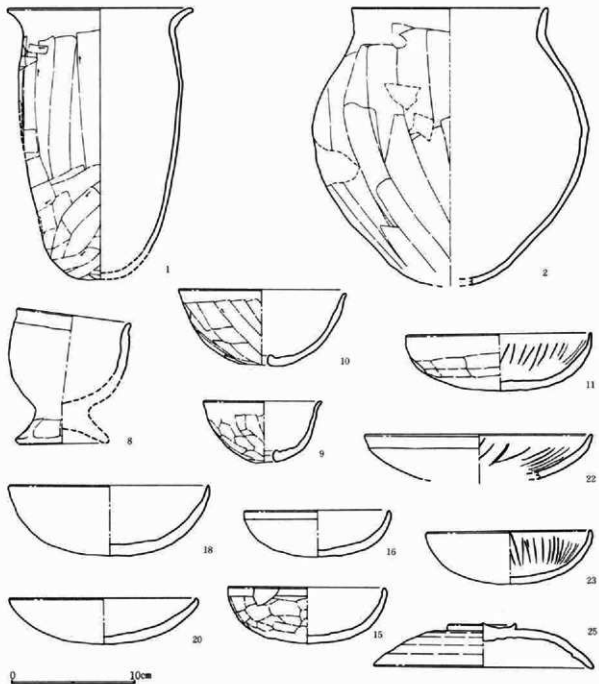
1・6・7・10・11・13・14・15・23・26・34・
38・39・41・44・45・49・50号住居跡、以上18軒。

比較的、残存状況の良好な住居跡（7・11号住居跡）の遺物を掲げ、代表させたい。

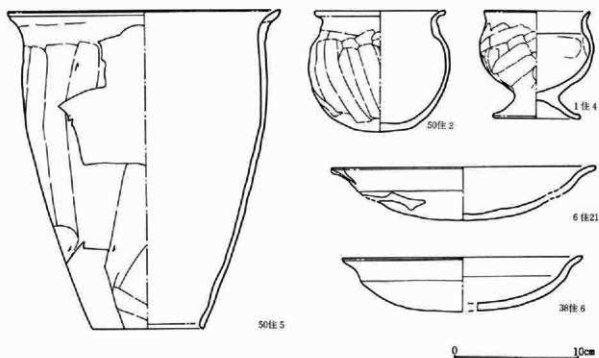
土師器壺 胴部中央から上部にかけて最大幅をもつ。斜縦位の篋削りを施す。口縁部は外反する。胴部が球状をもつものもある（11住-2）。底部は丸底に近い。

土師器甕 鉢状。斜縦位の篋削り。しかし、本遺跡内での出土は少ない。

台付壺 外面篋削り、内面横撫で。口縁部はや



第208図 I期の土器（11号住居跡）



第209図 I期の土器 (1・6・38・50号住居跡)

や外反気味。

土師器坏 体部、底部が鋭削り、口縁部、内面横

撫で。丸底気味。暗文を持つものが多い。

須恵器坏 浅い体部、比較的うすい器内。底部に
回転削りを施す。低い削出し高台がつ
く。

須恵器蓋 天井部から、緩やかに屈曲し、カエリ
をもつ。

他に50号住居跡の甕・小型甕、6・38号住居跡に
見られる、浅い土師器坏の出土もある。須恵器の出
土量は、かなり少ない。

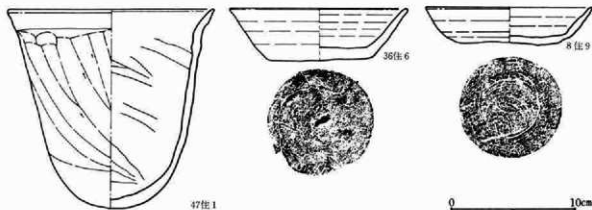
〔II期〕

3・4・8・22・24・36・47号住居跡以上7軒。

22号住居跡の遺物を掲げ、代表させたい。

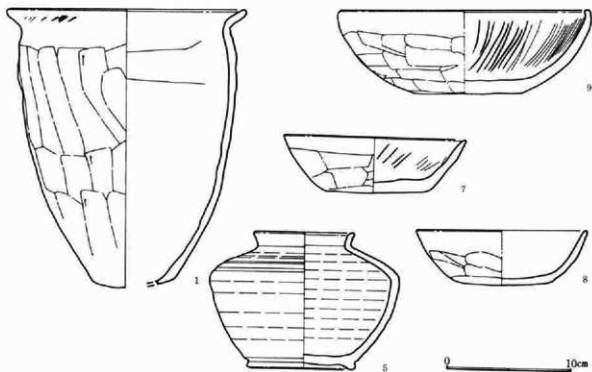
(II期の土器の特色)

土師器甕 I期に似ているが、底部がやや平底気
味である。器内はI期と同様厚い。



第210図 II期の土器 (8・36・47号住居跡)

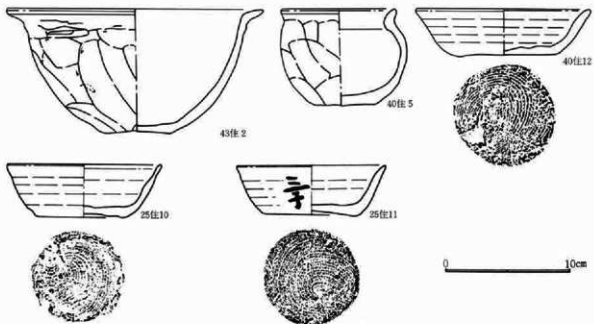
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



第211図 II期の土器 (22号住居跡)

土師器坏 I期とほぼ同様であるが、底部が平底化してくる。
須恵器短頸壺 底部から外反気味に立ち上がり、肩部で内傾し、口頸部は短く立ち上がり

やや外反する。
他に8号住居跡では、器内はうすく、浅い体部で底部回転糸切後、周囲調整による須恵器坏等が出土している。I期に続き須恵器の出土量は少ない。



第212図 III期の土器 (25・40・43号住居跡)

〔Ⅲ 期〕

9・25・31・32・40・43号住居跡以上6軒残存
状況の良い31号住居跡の遺物で代表させたい。

〔Ⅲ期の土器の特色〕

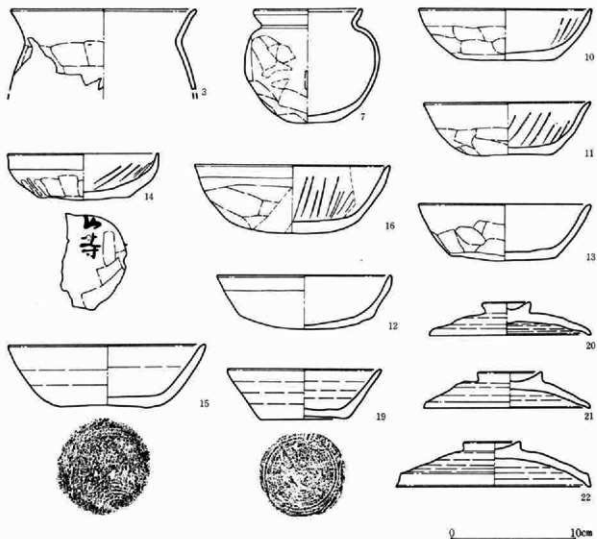
土師器壺 前期とは大きな相違が見られる。器内
はうすくなり、口縁部の外反傾向は所謂
「く」の字を呈する。また、胴部も丸味を
帯び、寛削りは斜縦位から、主に横方向
と斜め方向に変化する。

土師器環 平底化が進む。体部の寛削りと横溝で
の境目に稜を持つものが見られる。

須恵器環 直線的に立ち上がり、底部に回転糸切
後、回転寛調整が見られるもの、また、
酸化焙焼成のものも多く見られる。底部
から緩やかに立ち上がるものと直線的に
立ち上がるものがある。

須恵器蓋 輪状のつまみがつき、緩やかに口縁部
に至るものと、段を持つものがあるが、
いずれもカエリは見られない。

他に、この時期は、鉢（例、43住-2）の破片の
出土が多く見られる。



第213図 Ⅲ期の土器（31号住居跡）

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

〔IV期〕

2・5・12・16・17・18・19・20・27・28・37・
42・46・48号住居跡の14軒がこの時期にはいり、
本遺跡の中では多い。

残存状況の良い37号住居跡と42号住居跡で代表さ
せたい。

(IV期の土器の特色)

土師器甕 III期の甕の口縁部が「く」から「コ」に変
化し、胴部もやや丸くなる。胴部上位は
横方向の寛削り、下位は斜縦方向の寛削
りとなる。器内はうすい。

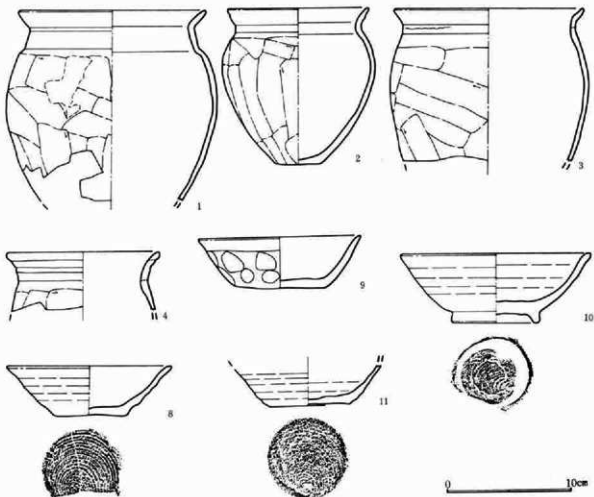
土師器坏 出土量が減少する。平底化が一般化し、
体部の寛削りが減少し、指撫による調

整方法が増えてくる。

須恵器坏 口径と底径比は、口径の方がかなり大
きくなる。8世紀の坏に比べ焼き締まり
があまくなる。底部は回転糸切未調整が
一般的である。

須恵器埴 回転糸切後、高台を付すものが多く、
坏に比べ、深い。体部も直線的に立ち上
がるものより、内湾するものが多くなる。

この時期、急に須恵器坏・埴類のしめる割合が多
くなる。他に、やや異なる型の須恵器皿（5住17）等
を掲げておく。

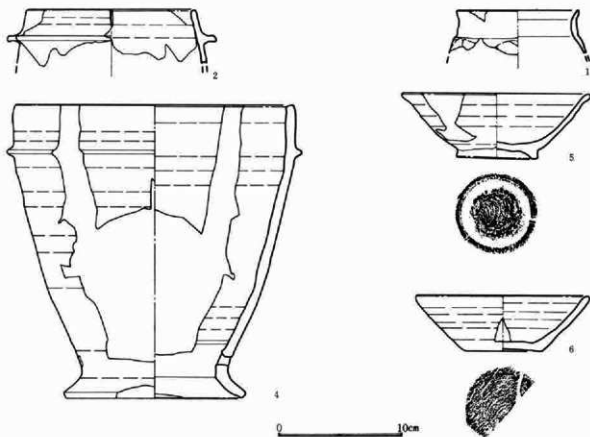


第214図 IV期の土器（37号住居跡）

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

〔V 期〕

21号住居跡1軒のみと少ない。



第216図 V期の土器 (21号住居跡)

〔V期の土器の特色〕

羽釜 この時期になると土師器甕の出土は非常に少なく、その割合は羽釜にとって変わる。還元焰焼成須恵器で、輪轆整形、比較的焼成はあまい。下半部は欠損しているが、恐らく、ツバの下部に最大幅がくるタイプと思われる。

甕 羽釜に類似するが、口唇部の立ち上がり直立で、器内が厚い。胴部に膨らみがなく自然にすぼまり、下部で外側に開

く。下部に穴が1個あけられている。

土師器小型甕 口縁部の「コ」の字状口縁の形が明確でない。恐らく台付甕になると思われる。

須恵器坏 IV期とほぼ同じ。

須恵器碗 IV期に似るが、口唇部のつまみ出しが見られる。つくりはやや粗雑、暗黒褐色を呈する。

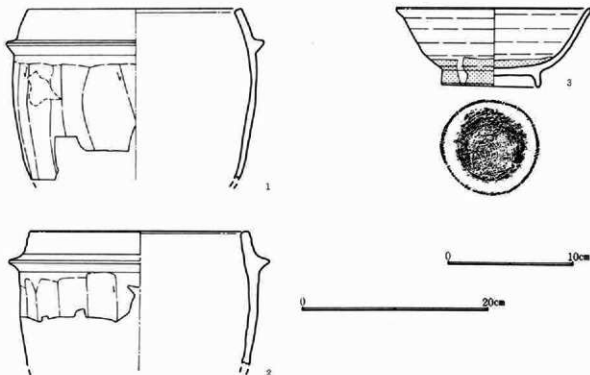
この時期の住居跡は1軒なので、資料不足は否めないが、羽釜の出現は指標となろう。

〔VI 期〕

V期と同様、この時期に比定できる住居跡は、IV区I号溝の東側に孤立する35号住居跡1軒のみである。

〔VI期の土器の特色〕

羽釜 V期の羽釜が還元焰焼成に対して、酸化焰焼成となり、輪轆整形が寛削り調整



第217図 IV期の土器（35号住居跡）

と同じ羽釜でも技術的に大いに異なる。

また、やや大型化の傾向もみられる。

灰釉陶器塊 本遺跡内唯一の灰釉陶器で、虎渓山1号様式に比定できる。

V期に続いて、羽釜が出土したが、タイプが異なる。

また、1点のみであるが、灰釉陶器も出土した。灰釉陶器の出土がこの時期までに1点のみというもひとつの問題点とすることができよう。

を呈しているといえよう。

参 考 文 献

- (1) 井上唯雄 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号 1978
- (2) 中沢 悟 「清里陣場遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業 図 1981
- (3) 坂口 一・三浦京子 「奈良・平安時代の土器の編年」 群馬県史研究 第24号 1986
- (4) 富岡市教育委員会 「本宿・郷土遺跡 発掘調査報告書」 1981

本遺跡内に、年代観をあたえる資料は検出されていない。そこで、前述の研究者の成果により、年代をあてはめると、

I期…8世紀前半、II期…8世紀後半、III期…9世紀前半、IV期…9世紀後半、V期…10世紀前半、VI期…10世紀後半

概ね、以上のような年代が考えられようか。したがって、あえて田窪遺跡の特色をあげると田窪遺跡は県中央部と比べ、須恵器の出土が少なく、その分土師器が多い。また、灰釉陶器の出土が少ないといった点がある。しかし、県中央部とほぼ同様な様相

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

(4) 住居跡の変遷

田籾地区は6～7世紀頃、多くの古墳が築造され田籾から善慶寺にかけて古墳群が形成された。

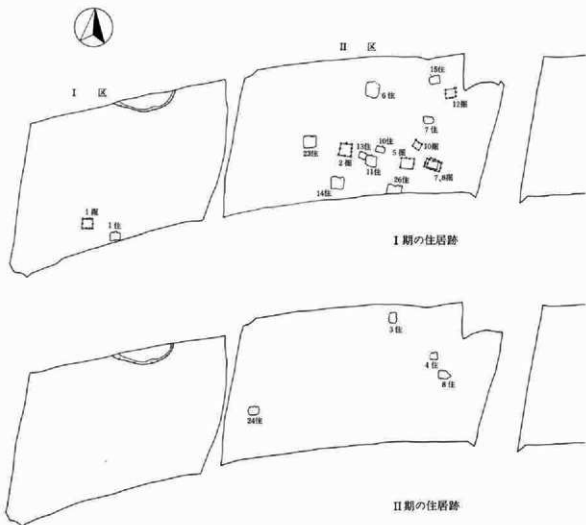
田籾上平遺跡には古墳が3基存在している。この古墳が築造された時代はいうまでもなく、墓域として、この地域は考えられていたであろう。本遺跡内には古墳時代の住居跡は確認されていない。

その後、8世紀になって、古墳時代の墓域・居住域の区別がうすれていく中で、本遺跡に住居跡を営んだ人々が移住してきたと考えられる。

I期—8世紀前半

この時期の集落は、1号墳、2号墳を挟んで東西対称な位置にある。また、この時期18軒と多く存在している。共通な事項を整理してみると、

- ・大型の住居跡はすべてこの時期に属する。
- ・平面形が大型～中型のものはほぼ正方形である。
- ・長方形のものはすべて東西に長い長方形を呈する。
- ・住居の壁に石垣を積む例はこの時期に属する。
- ・北カマドをもつ住居跡である。



第218図 変遷 図(1)

II期—8世紀後半

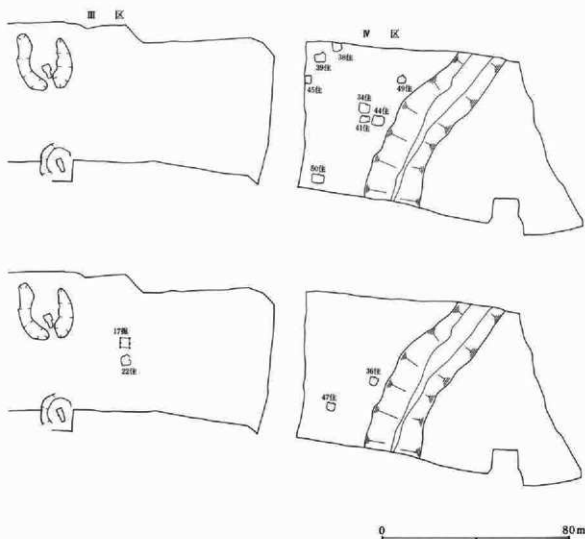
この時期の集落は竪穴住居跡と掘立柱建物跡が、1軒ずつ古墳の近くに位置しているが、傾向はI期に似ている。ただし、軒数は7軒で、少なくなってくる。II期以降、I区には住居は作られなくなる。II期の共通事項は、

- ・北カマドの住居跡が多い（3号・8号住居跡は東カマド）
- ・平面形は正方形と長方形が混在する。一般に長方形は東西に長い。

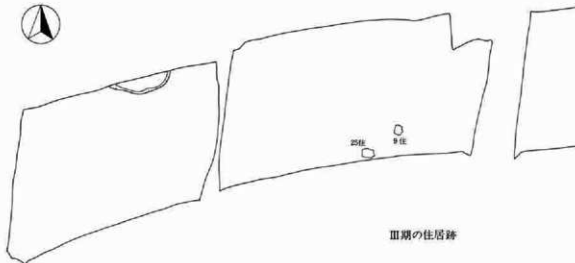
III期—9世紀前半

この時期の集落はII期に比べ、さらに減少するが、依然として傾向はI～II期に似ている。III期の共通事項は

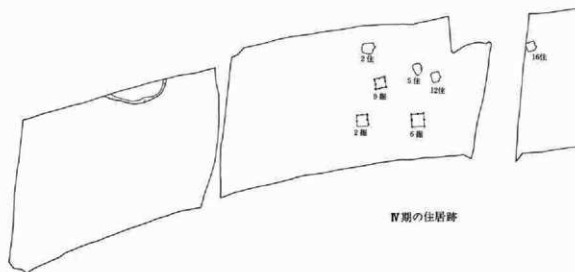
- ・カマドは東カマドになる。（31号住居跡のみ北カマド）—この時期が、北カマドから東カマドに変わる時期と考えられる。
- ・まばらではあるが、2軒ずつ対になって存在している。



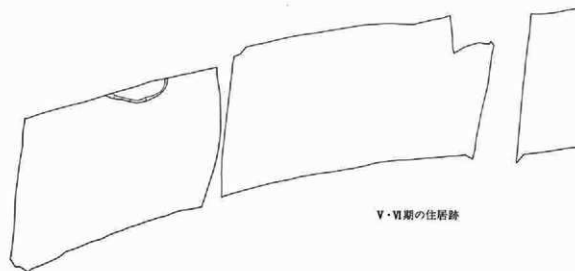
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物



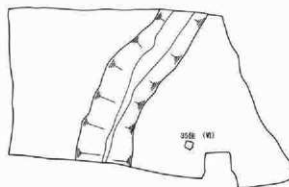
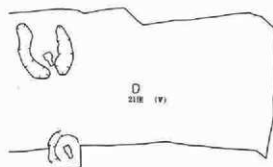
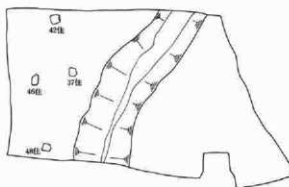
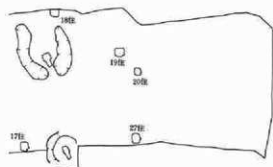
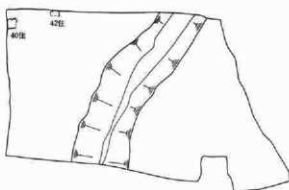
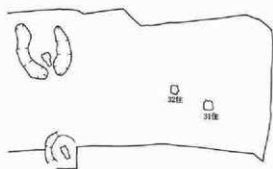
Ⅲ期の住居跡



Ⅳ期の住居跡



V・Ⅵ期の住居跡



0 80 m

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

IV期—9世紀後半

この時期になると、住居の位置は変化を見せてくる。以前、古墳を遠まきりにしていたのが、古墳に近づいていく傾向を示す。古墳の墓石に樹木が繁茂し、神聖な墓としての意識がうすれてきた結果ではなかろうか。また、この時期、住居の数が増加してくるのもひとつの特徴である。共通事項は、

- ・この時期の住居はすべて東カマドをもつ。(46号住居跡は北カマドとしたが、明確ではなかった。)
- ・平面形は正方形に近いものが多い。長方形のものは南北に長いものと東西に長いものが混在している。
- ・面積もほぼ一様である。

V期—10世紀前半

この時期に属する住居跡は1軒と少ない。III区に位置しており、他の地域には認められなかった。この時期に急に減少する理由はわからないが、この住居も恐らく集落の中の1軒であろうから、調査区域外に広がりを考える他はないであろう。

やはり、東カマドであった。

VI期—10世紀後半

V期に続いて1軒である。ただし、立地が遺跡地内の東端で、他の時期の立地とかなり離れている。この住居跡は溝の中に掘られていて、煙道を石で作っており、東カマドとはいえ他の住居と比べ、残存状況は良好であった。IV区は中央に大溝があり、この住居はこの溝の東にあって、さらにその東は崖になっているから、地形的にも孤立している。

本遺跡は8世紀から9世紀にかけて、集落として続いていた。10世紀頃になると、何故か住居の数が激減している。理由は本遺跡のみの調査では明らかにはし難い。将来、この周辺における発掘調査を待たねばその結論は出ないであろう。しかし、本遺跡内に限っていえば、8世紀から9世紀にかけて栄えていた集落は10世紀頃から衰退していったということは、事実である。

(5) 住居跡関連資料

- ①住居跡一覧表
- ②住居跡計測値一覧表
- ③住居跡出土遺物総数
- ④カマド使用石の計測値および石の種類
- ⑤掘立柱建物跡一覧表
- ⑥富岡市「本宿・郷土遺跡」報告書抜粋（富岡市史より）
- ⑦遺跡地全体図

第12表 ①住居跡一覧表

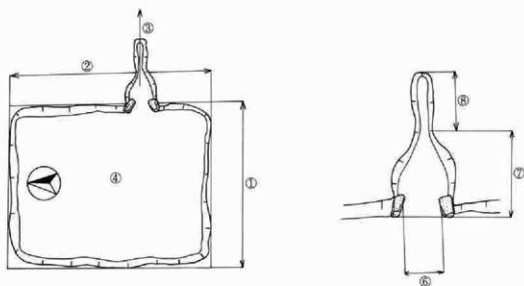
住居№	時期	平面形	方			柱 穴	備 考	
			住居壁	礎地部	石 材 について			上部欠損
1	8 C前	長方形	北 壁 側	礎地部	川原石、袖石と3石	×	×	
2	9 C後	長方形	東 床 側	礎地部	川原石、全面使用	×	×	焼失家屋
3	8 C後	長方形	東 床 側	礎地部	不 明	—	×	
4	8 C後	長方形	北 壁・床	礎地部	川原石、袖石	×	×	石の投げ込み
5	9 C後	長方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	○	×	石の投げ込み
6	8 C前	正方形	北	—	—	—	○	
7	8 C前	長方形	東 床 側	—	—	—	×	
8	8 C後	長方形	東 壁 側	礎地部	川原石	×	×	
9	9 C前	正方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	○	×	石の投げ込み
10	8 C前	長方形	北 床 側	礎地部	川原石、平石2枚	×	×	
11	8 C前	正方形	北 床 側	礎地部	粘 土	—	○	石の投げ込み
12	9 C後	長方形	東 壁 側	礎地部	粘土、川原石	×	×	焼失家屋
13	8 C前	長方形	北 壁・床	礎地部	粘土、川原石	×	×	
14	8 C前	正方形	北 床 側	礎地部	粘土、川原石	×	○	
15	8 C前	長方形	北 壁・床	礎地部	川原石、全面使用	○	×	石の投げ込み
16	9 C後	正方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	×	×	
17	9 C後	正方形	東 床 側	礎地部	川原石、全面使用	○	×	
18	9 C後	—	—	—	—	—	—	
19	9 C後	正方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	×	×	
20	9 C後	正方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	○	×	
21	10 C前	長方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	×	×	
22	8 C後	正方形	北 壁 側	礎地部	—	—	×	石の投げ込み
23	8 C前	正方形	北 床 側	礎地部	川原石	—	○	焼失家屋
24	8 C後	長方形	北 床 側	礎地部	—	—	×	石の投げ込み
25	9 C前	長方形	東 壁 側	礎地部	×	—	×	石の投げ込み
26	8 C前	正方形	北 床 側	礎地部	川原石、全面使用	×	○	石の投げ込み
27	9 C後	長方形	東 壁 側	礎地部	川原石、全面使用	○	×	
28	9 C後	—	—	—	—	—	—	
31	9 C前	長方形	北 壁・床	礎地部	—	—	×	
32	9 C前	—	東 壁 側	礎地部	—	—	×	
34	8 C前	長方形	北 床 側	礎地部	川原石	○	—	
35	10 C後	正方形	東 床 側	礎地部	川原石	×	×	
36	8 C後	—	北 床 側	礎地部	川原石	○	○	
37	9 C後	—	東 壁 側	礎地部	川原石	○	×	
38	8 C前	正方形	東 床 側	礎地部	—	—	×	石の投げ込み
39	8 C前	長方形	北 壁・床	礎地部	川原石、袖石	×	—	
40	9 C前	長方形	東 壁 側	礎地部	—	—	—	
41	8 C前	—	北 床 側	礎地部	川原石	×	×	
42	9 C後	長方形	東 壁 側	礎地部	川原石	×	×	
43	9 C前	長方形	東	—	川原石	×	×	
44	8 C前	長方形	北 床 側	礎地部	川原石、袖石	×	×	
45	8 C前	正方形	北 床 側	礎地部	川原石、袖石	×	×	
46	9 C後	長方形	北 床 側	礎地部	—	×	×	
47	8 C後	正方形	北 床 側	礎地部	川原石	×	×	石の投げ込み
48	9 C後	正方形	東 床 側	礎地部	川原石	×	×	
49	8 C前	正方形	北 床側?	礎地部	川原石	×	×	
50	8 C前	長方形	北 床 側	礎地部	川原石	×	×	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

第13表 ②住居跡計測値一覧表

住居No	東西長(m)①	南北長(m)②	主軸方位③	面積(m ²)④	カマド開口巾⑤ (cm)	煙突部長⑥ (cm)	欄間部長⑦ (cm)	残存高(cm)	備 考
1	4.28	3.08	N-10°-W	12.11	54	48	4	38	
2	4.98	4.40	N-78°-E	16.18	32	92	25	62	
3	3.00	4.44	N-80°-E	9.80	—	—	—	—	
4	3.94	2.86	N-21°-W	7.30	—	—	—	20	
5	3.30	4.68	N-65°-E	14.08	47	47	—	22	
6	5.50	5.84	N-0°-10°-W	32.12	—	—	—	—	
7	3.78	2.86	N-80°-E	8.34	—	—	—	—	
8	3.72	2.88	N-85°-E	11.60	—	—	—	—	
9	3.04	3.28	N-90°-E	8.14	40	40	50	27	
10	3.64	2.38	N-7°-E	7.70	50	38	14	24	
11	4.50	4.10	N-9°-E	15.40	35	40	—	20	
12	3.28	3.74	N-80°-E	11.76	40	17	—	34	
13	3.32	2.74	N-31°-E	7.61	34	28	14	20	
14	5.22	5.40	N-9°-W	33.83	30	38	—	40	
15	4.58	2.96	N-42°-W	13.38	30	50	—	20	
16	3.55	3.60	N-74°-E	12.28	34	40	30	22	
17	3.66	3.28	N-90°-E	11.72	45	60	—	22	
18	3.80	3.46	不 能	—	—	—	—	—	
19	3.76	3.46	N-85°-E	11.86	41	37	—	30	
20	2.90	3.10	N-82°-E	8.94	—	—	—	—	
21	2.62	2.92	N-81°-E	8.44	46	38	—	25	
22	3.28	3.88	N-15°-W	11.14	—	—	—	9	
23	5.00	5.20	N-3°-W	21.75	—	—	—	34	
24	4.48	3.18	N-15°-W	12.25	—	—	—	—	
25	5.90	2.94	N-90°-E	13.91	48	44	38	23	
26	—	—	N-7°-E	19.33	—	—	—	64	面積は発掘部分のみ
27	3.60	4.12	N-85°-E	12.33	42	48	—	8	
28	—	—	—	—	—	—	—	—	
29	4.88	5.50	—	16.37	—	—	—	—	
30	4.26	5.54	—	19.06	—	—	—	—	
31	5.40	4.46	N-4°-W	18.80	48	44	—	12	
32	—	—	N-78°-E	—	58	34	—	—	
33	3.02	—	—	—	—	—	—	—	
34	4.84	3.96	N-16°-W	14.27	60	—	—	30	
35	2.76	3.10	S-75°-E	7.80	—	—	—	—	
36	3.68	2.98	N-10°-E	8.01	—	—	—	—	
37	—	3.48	N-86°-E	—	50	70	—	19	
38	3.46	3.48	不 能	9.60	—	—	—	—	

住居№	東西長(m)①	南北長(m)②	主軸方位③	面積(m ²)④	ホマド開口巾⑤ (cm)	燃焼部長⑥ (cm)	煙道部長⑦ (cm)	現存高(cm)	備 考
39	4.34	3.20	N-85°-W	11.35	24	44	22	26	
40	4.04	3.58	不 能	13.94	—	—	—	—	
41	4.08	3.12	N-14°-W	10.25	—	—	—	69	
42	4.66	3.30	N-83°-E	11.79	60	30	38	56	
43	5.60	4.40	N-88°-E	13.91	—	—	—	—	
44	4.60	3.40	N-26°-E	15.48	60	20	—	28	
45	2.90	3.44	N-11°-E	7.72	54	36	20	28	
46	2.84	3.84	N-9°-E	8.92	50	62	—	—	
47	3.44	3.42	N-3°-E	10.14	—	—	—	40	
48	3.12	3.40	S-64°-E	8.96	—	—	—	38	
49	3.04	2.80	不 能	7.78	—	—	—	—	
50	4.76	3.38	N-8°-E	13.51	46	48	—	40	



模 式 図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

第14表 ③住居跡出土遺物総数

住居名	遺 物																出土総数	時 期								
	土 器				土 器				土 器				土 器						その他							
	杯	壺	台付壺	鉢	杯	壺	鉢	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器										
4	1	4	78	4	1												5	5	96	8世紀						
2	59	130	44	6,269	282	3,145	23	15		5	14	32	1	5	1	1	1	6	土師器片3 甕6 瓶11	29	1	30	4,060	9世紀		
3	18	1	2	2	30	18	154	1	1										2	1	4	4	282	8世紀		
4				5	19	25	294	2	2												6	6	6	257	8世紀	
5				11	7	3	124	2	5				1	2							18	18	138	9世紀		
4・5	177	1	116	119	49	1,242	1			18	1	9	1	11		6	2								1,764	—
6	309	475	67	7,426	316	3,692	49	13		9	7	3	2	3	5	1	3				3	29	29	3,454	8世紀	
7	53	73	40	2	52	35	332	15	4	4	1	3		1	4	3	1	1	1	1	10	1	11	629	8世紀	
8	49	132	1	84	425	3	7			2	1	3		3	1	2					11	11	11	711	8世紀	
9	39	13	40	1	49	38	641	10	2		2	1	11	1							5	5	5	642	9世紀	
10	31	60	9	15	11	335	7	5		1	1										15	15	16	476	8世紀	
11	60	1	117	13	56	24	290	18	7	3	1	2		1	1						25	1	26	682	8世紀	
12	60	45	75	78	800	12	30			35	2	31	5	4	43	6	3				20	3	1	236	1,212	9世紀
13	2			3	3	2	70	1		26	1	1										4	4	4	189	8世紀
14	23	37	4	4	8	7	176	6	2												7	7	7	289	8世紀	
15	29	15	10	4	30	8	194	3	1	2				7							10	10	10	282	8世紀	
16	16	12	6	16	23	118	6			11	6	1	1	2	20	3		1	1	1	5	5	5	244	9世紀	
17	1	4	2	1	43	62	902	30	6		97	75	42	1	2	1	1	2	5	2	14	14	14	1,278	9世紀	
18	4	6	4	4	112	2				2	4	1	2	3								4	4	4	146	9世紀
19	4	6	5	3	6	74	1	6	1	1	1	1	3								2	1	3	136	9世紀	
20	11	3	15	4	12	116	3	5		4	4	1		4							10	2	1	13	197	9世紀
21	29	10	9	15	12	257	5	1		1	1	1	9	1	1	1	1	1	1	1	10	7	7	358	10世紀	
22	19	10	2	3	2	15	192	7	4												2	10	1	11	249	8世紀
21-22	8			6	24	1				1	1														42	—
23	41	37	3	17	7	299	9	2	1	1				1		1	1	1	1	1	8	8	8	335	8世紀	
24	1	1	3		16	1				1												4	4	4	24	8世紀
25	65	123	5	45	82	240	5	3		8	4	3	18	1	1	3	2				13	13	13	568	9世紀	
26	155	176	131	6	42	4,356	30			9	17	11	3	1	22	2	6	9			5	5	2	7	2,130	8世紀
27	7	6	1	38	14	309	6	3		19	5	4	3	1	2						7	7	7	419	9世紀	
28	1			11	14	123	4	4		7	3	2		4	2						7	7	7	177	9世紀	
29	2	6	2	4	40	1				1		2	5												74	—
31	27	41	25	9	26	29	571	9	8		1	1	1	2	1	1	2	1	3	2	22	22	22	774	9世紀	
32				4	2	33	1							2	1	1					2	2	2	51	9世紀	
34	59	85	58	5	103	33	899	13	4		18	1	11	3	19	1	8	5	2	1	19	19	19	1,230	8世紀	
35	1	4	2		1	2															3	3	3	18	10世紀	
36	50	8	29	1	59	28	643	3	4		8	6	1								6	6	1	7	885	8世紀
37	19	41	7	1	21	14	224	4	7		16	7	9	3	2						12	12	12	338	9世紀	
38	22	24		5	9	5	253	1							1						8	8	8	338	8世紀	
39	29	56	5	36	16	304	3	3		4	13										7	7	7	463	8世紀	
40	13	10	11	7	24	16	172	3	7	1			3	4							14	14	14	273	8世紀	
41	56	55	18	6	56	22	737	10			9	7	6	2							3	7	7	7	998	8世紀
42	41	1	26	3	92	12	1,149	22	5		65	26	10	8							2	18	1	19	1,494	9世紀
43	89	78	3	45	25	828	3	1	2		1	21			7	1	2	1	1		8	8	8	1,116	9世紀	
42-43	1	1		2	2						1	1													13	—
44	6	7		2	3	11	93	3			2	1									7	7	7	131	8世紀	
45	29	21	4	25	24	247	20	8			1	1	1	1	2						17	17	17	387	8世紀	
46	2	2	1	2	4	35	4	3		11	9	7	1								1	6	6	6	83	9世紀
47	35	25	13	9	22	21	823	3	2	1			1	3	2						12	12	12	1,009	8世紀	
48	15	19	16	14	204	6	2	1	13	10	1										4	2	11	261	9世紀	
49	9	22	1	3	8	91	1	3						1	1						3	3	3	141	8世紀	
50	63	34	15	5	34	19	642	8	4		1										10	10	10	797	8世紀	

第15表 ④カマド石の計測値および石の種類

住居	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (kg)	備 考	
1	1	34	19	12	14	点紋緑泥片岩	
	2	32	18	15	11.2		
	1-①	30	12	6	3.8		
	1-②	13	4	2.5	0.2		
	2	32	22	8	10.3	点紋石墨緑泥片岩	
	3	26	9.5	8.5	3.4	点紋緑泥片岩	
	4	30	13	5	3.2		
	5	30	14	10	6.3		
	6	38	11.5	8	6.5	点紋緑泥片岩	
	7	38	18	14	13.4		
	8	44	18.5	5	7.1	点紋緑泥片岩	
	9	43	18	7	11.5	点紋緑泥片岩	
	10	34	13.5	6.5	4.1		
4	11	28	12	8	3.7	点紋網雲母石墨片岩	
	12	27	12.5	2.5	1.9	点紋緑泥片岩	
	13	31	14.5	8.5	4.9	緑簾緑泥片岩	
	14	27	14.5	7	3.4	点紋網雲母石墨片岩	
	2	28	9	7	2.4	蛇蝟岩	
	5	1	40	18.5	12	14.7	点紋石墨緑泥片岩
		2	39	14.0	10	10.6	点紋緑泥片岩
		3	32	13.5	11	7.6	点紋石墨緑泥片岩
		4	45.5	11.0	7	4.7	点紋緑泥片岩
		5	18	14	4.5	1.6	点紋緑泥片岩
		8-①	32	19	10	6.9	帯石片岩
		8-②	25	10	4	1	帯石片岩
		8-③	12	8	1.5	0.23	帯石片岩
8-④		15	6	2	0.3	帯石片岩	
8-⑤		17	6	1.5	0.16	帯石片岩	
8-⑥		9	4	3.5	0.16	帯石片岩	
8-⑦		15	5	1	0.16	帯石片岩	
8-⑧		11	5	2.5	0.12	帯石片岩	
9	36	11	6	4.1	点紋石墨緑泥片岩		
10	16	8	4	1.1			
9	1	29	11.5	9	4.9		
	2	30	14.5	11	7.8	輝綠岩	
	3-①	24	20	10	7.75	点紋網雲母石墨片岩	
	3-②	20	18.5	9	4		
	3-③	15	15	6	2.5		
	4	34	27	7	10.8		
	5	41	17	6.5	6.9	点紋緑泥片岩	
	8	29	19	9	5.4		
	9	30.5	18	4	3.2	網雲母石墨片岩	
	10	23	13.5	7	3.5	緑簾緑泥片岩	
	11	24.5	12	6	3.2	点紋緑泥片岩	
	12	43.0	24	13	26.7	点紋緑泥片岩	
	13	23	12	3	1.7		
15	20	13	7	1.8			
10	1	50	34	7	21.1		
	2	47	35	8	25.7		
	1	41.5	16	7.5	8.3		
	2	29	7	4	1.3	網雲母石墨片岩	
	3	33	12.5	5.5	3.1	点紋緑泥片岩	
	4	20	13	3.5	1.3	点紋網雲母石墨片岩	
	5	50	10	7	3.8		
	6	42.5	17	5	6.8	点紋緑泥片岩	
	7	31	11	6	3.65		
	8	26	11	4.5	1.6	点紋緑泥片岩	
	1	26.5	16	9	5.6	点紋石墨緑泥片岩	

住居	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (kg)	備 考	
13	2	14	12	4.5	1.4	点紋緑泥片岩	
	1	34	14	5	3.9	点紋石墨緑泥片岩	
	2	33	12.5	4.5	3.7	点紋石墨緑泥片岩	
	3	32	16	8	6.1	緑泥片岩	
	1	54	17	11	14.1	点紋緑泥片岩	
	2	32.5	15	2	2.4	点紋石墨緑泥片岩	
	4	26	27	14	13.7	緑色珪質板岩	
	5	12.5	11	3.5	0.85	蛇蝟岩	
	6	27	19	6.5	6.9	紅簾片岩	
	7	15	9	6	1.25		
	8	20	16	17	7.1		
	9	18	13	12	2.7		
	10	10	12	8	1.4	点紋石墨緑泥片岩	
	11	19	15	8	2.8	点紋緑泥片岩	
	12	22	21	9	7.2	蛇蝟岩	
16	13	27	21.5	8	5.9		
	14	26	17.5	6.5	6	網雲母石墨片岩	
	15	16	17	13	4.6		
	1	27	17	8	5.1	点紋石墨緑泥片岩	
	2	19	14.5	6	2.1		
	3	29	15	6	4.1	点紋石墨緑泥片岩	
	4	20	16	6	4.1	点紋緑泥片岩	
	5	47	23	12	15.2		
	6	23	17	4	3.6		
	7	42	21	12	10	点紋石墨緑泥片岩	
	8	34	16	5	4.6	緑簾緑泥片岩	
	17	1	21	11	8	2.85	
		2	27	9	5	2.1	点紋緑泥片岩
		3	27	13	5	5.1	点紋緑泥片岩
		4	19	9	4	0.85	点紋緑泥片岩
5		13.5	5	4	0.45	点紋石墨緑泥片岩	
1		25	15	7	4.4	点紋石墨緑泥片岩	
2		32	16	6	4.4	石墨緑泥片岩	
4		24	10	4.5	14.5	点紋網雲母石墨片岩	
5		37	18	10	11.9	点紋緑泥片岩	
6		35	18	12	9	点紋緑泥片岩	
7		34	16.5	6	6.7	緑泥片岩	
20		1	17	6	4	0.7	輝綠岩
		2	25	8	5	1.9	点紋石墨緑泥片岩
		3	20	4	4	0.5	千枚岩
		4	24.5	11	3	1.9	
	6	42	16	6	6.3	点紋緑泥片岩	
	7	36	12	6	4.2	点紋石墨緑泥片岩	
	9	16	12	5	1.2	斑岩	
	10	23	10.5	6	1.95	点紋石墨緑泥片岩	
	11	35	15	5.5	4.4	点紋石墨緑泥片岩	
	12	37	17.5	5	5.5	点紋緑泥片岩	
	14	20	7.5	4	1.05	点紋石墨緑泥片岩	
	15	26.5	15	1	1.05	チャート	
	16	15	12	7	1.7	点紋石墨緑泥片岩	
	17	25	8	6	12.5	斑岩	
	19	16	10	3	1	点紋網雲母石墨片岩	
20	24	9	2.5	1.2	点紋緑泥片岩		
21	23	16	6	2.2	点紋網雲母石墨片岩		
22	30	8	4	1.25	点紋網雲母石墨片岩		
23	30	9	4	1.45	点紋網雲母石墨片岩		
24	18	9	2.5	0.8	点紋緑泥片岩		
25	19	7.5	2.5	0.7			

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

住居	No	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (kg)	備 考
20	26	36	6.5	5	2.6	網雲母石塵片岩
	27	15	9.5	2	0.5	
	28	8	5.5	2.5	0.2	網雲母石塵片岩
	29	16	9	5	1.2	緑泥片岩
	30	13	8	3	0.4	
	31	29	14	8	4	緑雲母片岩
	32	34	7	7	2.1	点紋緑泥片岩
	33	20.5	8	3	0.9	点紋緑泥片岩
	34	24	12	5	2.1	チャート
	35	11.5	8.5	5	0.6	珧殻岩
	36	12	9	5	0.6	網雲母石塵片岩
	37	12.5	8	6	0.75	点紋緑泥片岩
	38	11	11	5	1.1	
	21	5	32	8	5	2
6		28	16	8	5	点紋石塵緑泥片岩
7		22	10	3	1.6	点紋緑泥片岩
8		31	15	8	5.3	
9		17	21.5	6	3.2	紅塵片岩
10		34	18	12	12	輝緑岩
11		16	12	8	2.3	緑色珧殻岩
12		18	10	3	0.9	点紋緑泥片岩
13		15	14	6	2.4	点紋網雲母石塵片岩
14		29	10	5	1.3	網雲母石塵片岩
15		29	12	3.5	3	点紋緑泥片岩
16		19	8	3	0.7	網雲母石塵片岩
17		26	10	4.5	1.8	点紋網雲母石塵片岩
19		14	11.5	4.5	1	点紋網雲母石塵片岩
20	18	7	2.5	0.45	点紋網雲母石塵片岩	
22	24	8	2.5	6.5	点紋緑泥片岩	
23	26.5	15	3.5	2.4	点紋緑泥片岩	
24	20	14	11	4	輝緑岩	
23	1	31	25	10	9.6	
	2	40	12	5.5	4.5	点紋緑泥片岩
	3	23.5	22	15.5	10.2	輝緑岩
	4	45	18	9	12.2	
	5	28	20	13	9.3	チャート
	6	27.5	18	9.5	7.4	輝緑岩
26	1	45.5	10	9	7.2	点紋緑泥片岩
	2	24	14	5	2.6	点紋石塵緑泥片岩
	3	28.5	15.5	6.5	3.7	紅塵片岩
	4	28	18.5	4	2.85	点紋網雲母石塵片岩
	5	29	13	7.5	4.2	網雲母石塵片岩
27	6	32	17	10	6.8	点紋石塵緑泥片岩
	1	20	11.5	7	2.6	点紋緑泥片岩
	2	19	13	7	2.3	網雲母石塵片岩
	3	21	15	7.5	3.2	点紋石塵緑泥片岩
	4	18	10	5	1.3	点紋網雲母石塵片岩
	5	23	22.5	8	6.8	網雲母石塵片岩
	6	26	15	7.5	2.75	点紋石塵緑泥片岩
	7	26	11	12	5.7	網雲母石塵片岩
	8	34	14	8.5	4.7	
	9	24	20	8.5	5.7	閃緑岩
	10	21	9	4	1.1	網雲母石塵片岩
11	38	19	7	8.4	点紋緑泥片岩	
12	35	12	7	3.9	網雲母石塵片岩	
13	17	11	2	1	点紋緑泥片岩	
34	1	35.5	15	4	4.4	網雲母石塵片岩
	2	44	15	7.5	9	網雲母石塵片岩
	4	42	16.5	8.7	11.2	理 石
	5	33	14.5	5	3.1	網雲母石塵片岩

住居	No	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (kg)	備 考	
34	6	8.5	5.5	3	0.5	点紋網雲母石塵片岩	
	7	33	11	6.5	4.6		
	8	43.5	14.5	7	7.8	網雲母石塵片岩	
	9	44	11	6	4.2	紅塵片岩	
	10	43.5	20	8	6.6	点紋緑泥片岩	
	11	31.5	17.5	4.5	5.0	石塵網雲母片岩	
	13	31	15	13.5	10.5	網雲母石塵片岩	
	14	51	14	9	9.6	点紋緑泥片岩	
	15	32	8	3	1	網雲母石塵片岩	
	16	26	12	5	1.85	石塵網雲母片岩	
	35	1	22.5	14	9	5.1	
		5	42	15	7	9.1	点紋緑泥片岩
		6	26	13.5	4.5	3.0	網雲母石塵片岩
		7	20	13	7	3.0	網雲母石塵片岩
9		32	30.5	5	8.9	点紋網雲母石塵片岩	
10		43.5	37	21	51.7		
11		37	17	11	9.1		
12		31	14	7	5.5		
13		23	20	5.5	4.4		
14		31.5	18.5	7	7.2		
37	1	28.5	17	7	6.3	点紋緑泥片岩	
	2	19.5	11	4	1.6	点紋網雲母石塵片岩	
	3	28	17.5	5	3.65		
	4	17	8	3.5	0.7	点紋緑泥片岩	
	5	21	6.5	6.5	1.0	点紋網雲母石塵片岩	
	7	26	20.5	4	5.1	点紋石塵緑泥片岩	
	8	23	8.5	3.5	1.0	点紋石塵緑泥片岩	
	9	23	11	5	2.2	網雲母石塵片岩	
	10	36	18	11	7.7	点紋緑泥片岩	
	11	15	12	5.5	1.8		
39	12	35	15.5	7	5.4	点紋緑泥片岩	
	13	24	13	4.5	2.2		
	1	35	18	8	8.6	点紋緑泥片岩	
	2	28	16	9	6.7	点紋石塵緑泥片岩	
	3	18	17.5	6.5	3.1	網雲母石塵片岩	
	4	14.5	12	10	2.9		
41	6	20	11	5.5	1.7		
	7	34	20	6.5	7.9	点紋石塵緑泥片岩	
	1	61	16	9.5	15.25		
	2	31	13.5	4	2.95		
	3	40	31.5	13	37.7		
	4	34	26	17	18.7		
	5	35	10.5	6.5	3.7	点紋緑泥片岩	
	6	36	19	10.5	12.8		
	7	41	25.5	14.3	24	石塵網雲母片岩	
	8	38	28.5	14	21.1	網雲母石塵片岩	
42	9	30	13.5	4.5	2.5	緑雲母片岩	
	10	21	17.5	7	5.6	点紋緑泥片岩	
	11	37.5	23	14	17.8		
	12	28	16	7	4.6		
	13	31	23	8.5	11		
	14	28	25	10	10.5		
	15	39	21	7.5	10.5	点紋緑泥片岩	
	16	47.5	26	14.5	26.7		
	17	18	14.5	6	3.3	網雲母緑泥石塵片岩	
	18	20.5	12.8	6.5	2.4	網雲母石塵片岩	
43	9	28.5	15	5	4.5	網雲母石塵片岩	
	10	27	18	9.5	5.3	網雲母石塵片岩	
	1	31	29	12	17.8		
2	34	28	14	22.6			

住居	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (kg)	備 考
44	1	33	13.5	6	4.9	
	2	32	14	4.5	3.8	
	3	37.5	25	10.5	19	
	4	24	21	11	10.1	
	5	24	18	9.5	6.8	
45	1	12.5	8.7	3.2	0.6	
	2	9	7.5	2	0.23	点紋石墨緑泥片岩
	3	37	20	5.5	6.7	点紋石墨緑泥片岩
	4	20.5	10	5.5	1.8	網罟母石墨片岩
	5	13	9	4.7	0.62	珪 岩
47	1	35	19	6.5	7	点紋緑泥片岩
	2	17	17	9.5	2.9	点紋緑泥片岩
	3	31	14	10.5	6.4	点紋緑泥片岩
	4	36	27	19.5	23.3	網罟母緑泥石墨片岩
	5	21	19	7	8.6	

住居	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (kg)	備 考
47	6	40	16	7	8.6	点紋緑泥片岩
	7	19.5	10	6	1.7	
	9	33	25	11	12.3	網罟母石墨片岩
	10	11.5	10	2	0.37	網罟母石墨片岩
	11	31.5	17	5.5	5.95	点紋緑泥片岩
	12	36.5	20	12	14.0	
48	29	31	19	4	5.6	
	30	24	10	3	1.5	点紋網罟母石墨片岩
	31	25	8	2.5	1.3	点紋緑泥片岩
50	1	51	28.5	9.5	16.8	
	2	43	32	8.5	19.9	点紋緑泥片岩
	4	47	24	9	15.5	
	5	34	12.5	5.5	4.1	点紋緑泥片岩
	6	23	13	8	3.2	点紋緑泥片岩

第16表 ⑤掘立柱建物跡一覧表

掘立No.	時 期	方 位	形 状	遺 物	桁 行	梁 行	備 考
1	8 C	N-84°-E	長方形(東西)		3 間	2 間	
2	8 C	N-89°-E	正方形	○	2 間	2 間	入 口
3	—	N-83°-E	正方形		2 間	2 間	
4	9 C	N-78°-E	正方形	○	2 間	2 間	入 口
5	8 C	N-84°-E	長方形		3 間	2 間	
6	—	N-80°-E	正方形		2 間	2 間	入 口
7	8 C	S-82°-E	長方形		3 間	2 間	
8	8 C	S-86°-E	長方形		3 間	2 間	
9	—	N-72°-E	正方形		2 間	2 間	入 口
10	8 C	S-67°-E	長方形		2 間	1 間	
11	—	N-75°-E	—		3 間	2 間	
12	8 C	N-72°-E	長方形	○	1 間	2 間	入 口
13	—	N-5°-W	長方形(南北)		3 間	2 間	
14	—	N-84°-E	正方形(東西)		3 間	2 間	
15	—	N-80°-E	正方形		2 間	2 間	
16	—	N-12°-W	長方形(南北)		3 間	2 間	
17	—	N-88°-E	正方形		2 間	1 間	
18	—	N-1°-W	長方形(南北)		1 間	2 間	
19	—	N-0°-W	長方形(南北)		2 間	2 間	
20	—	N-6°-W	長方形(南北)		3 間	1 間	
21	—	S-81°-E	長方形(東西)		2 間	1 間	
22	—	N-87°-E	長方形(東西)		2 間	1 間	

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

第17表 ⑥「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」(富岡市教育委員会 昭和56年) 抜粋

本遺跡で見る奈良・平安期の遺構は、99軒の竪穴住居である。古墳時代に引き続き、竪穴住居が作られる。第17表にその状況を記したが、時代と共に変化がうかがわれる。

本宿・郷土遺跡竪穴住居構造

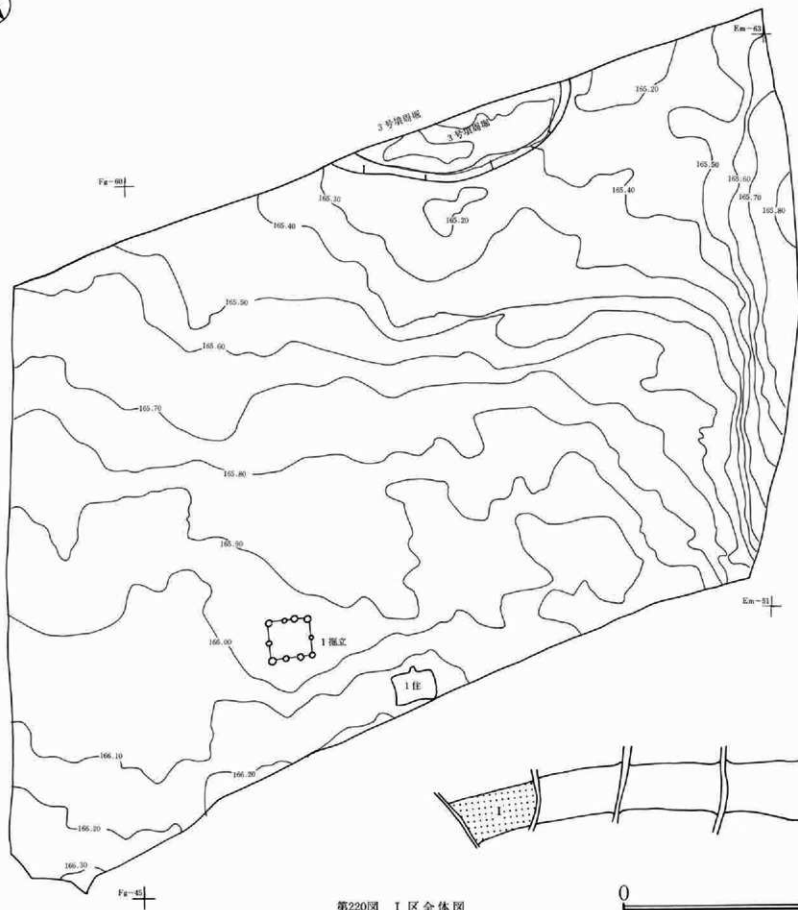
		奈良時代	平安時代(前)	平安時代(後)
形		東西方向に長い長方形。方形。	方形。	方形。南北に長い長方形。
広さ		中型～小型(平均14㎡)	小型(平均10㎡)	小型(平均12.5㎡)
貯蔵穴		ほとんどなし。	なし。	南東すみ・南西すみに出てくる。
柱穴		なし。	なし。	なし。
マ ド	構築材料	はじめロームが多いがやがて、粘土や石材が出てくる。	粘土や石材。	粘土や石材。
	位置	北壁中央南寄りが多い。	東壁中央南寄り。	東壁中央南寄り。東壁南東寄りも出てくる。
構造		壁内に軸を持つが厚かい。壁内にたき口があり煙道部は外へのびる。	壁際に軸石を置く。壁外に燃焼部があり煙道部は長く外へのびる。	同上。

本宿・郷土遺跡にみる奈良・平安時代の竪穴住居広さ(面積の計測できる64軒の住居跡から作成)

時代	編年	面 積						計	平均面積
		8㎡以下	8.1㎡ ～12㎡	12.1㎡ ～16㎡	16.1㎡ ～20㎡	20.1㎡ ～24㎡	24.1㎡ ～28㎡		
奈良時代	VI、VII	13軒	7軒	8軒	2軒		3軒	33軒	14㎡
平安時代 (前半)	VIII、IX、X	4軒	9軒		2軒			15軒	10㎡
平安時代 (後半)	XI、XII	4軒	9軒	8軒	3軒	1軒	1軒	36軒	12.5㎡

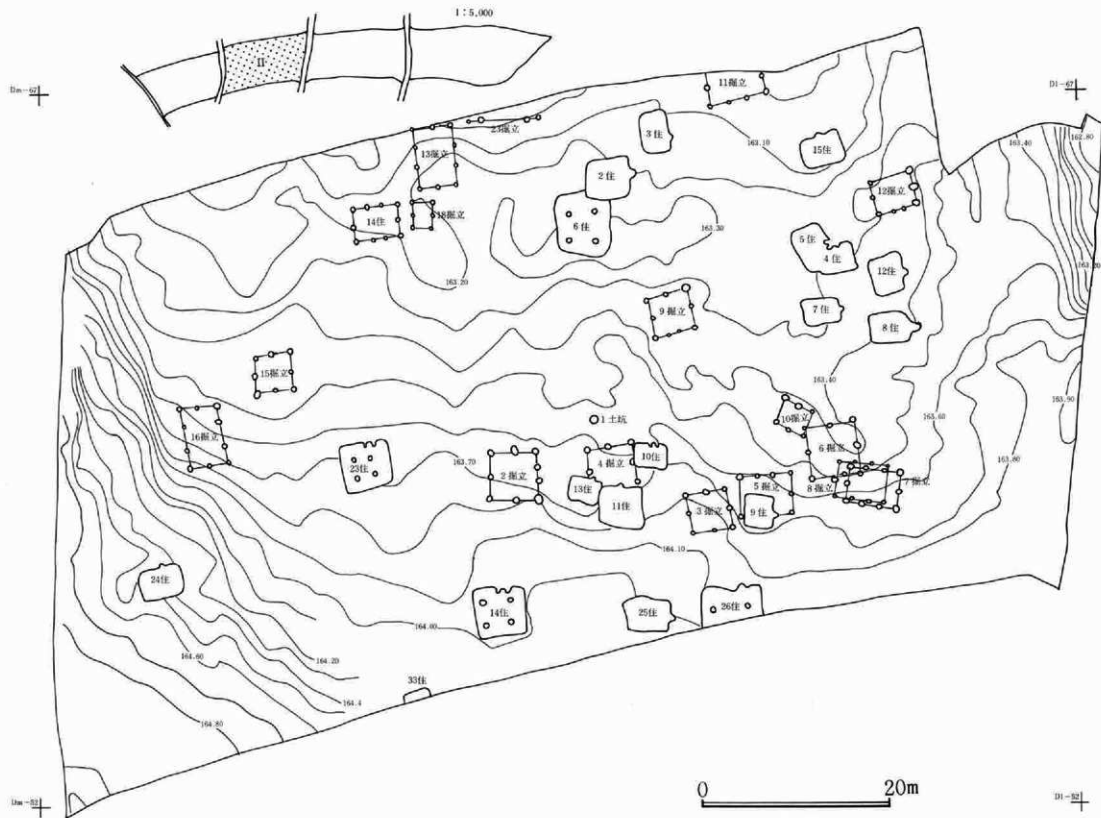
本宿・郷土遺跡出土土器の変化

区分	土器の種類	特 徴
VI	土師器 壺・甕・鉢 須恵器 坏・高台付埴・蓋	壺は長胴形。甕は少ない。鉢は例外的。坏は煎磨き。坏は回転旋切り平底。(7C未満～8C前半)
VII	土師器 壺・甕・坏 須恵器 坏・高台付埴・蓋	甕はやがて消滅する。坏は煎磨きなどがなくなり雑。須恵器は急増し、1住居1～2点出土する。回転旋切りの坏あらわれる。(8C後半)
VIII	土師器 壺・小形甕・坏 須恵器 坏・高台付埴	「コ」の字口縁の壺。壺は小型化してくる。坏はほとんど須恵器になり、回転未切腹を残す。(9C代)
IX	土師器 壺・小形甕・坏 須恵器 坏・高台付埴 羽釜(須恵質)	坏は例外的になる。羽釜が出現する。須恵器は雑なつくりとなる。(10C前半)
X	土師器 高台付埴 須恵器 坏・高台付埴 羽釜(須恵質)	壺の消滅。高台付埴の内面煎磨き・黒色処理。(10C後半)
XI	カワラケ状の皿形坏・羽釜・土釜・高台付埴	須恵器坏はない。土釜の出現。(11C代)
XII	土釜・坏・高台付埴・埴・高台付埴 取手付埴	羽釜は消滅していく。取手付埴が出現してくる。(11C代)

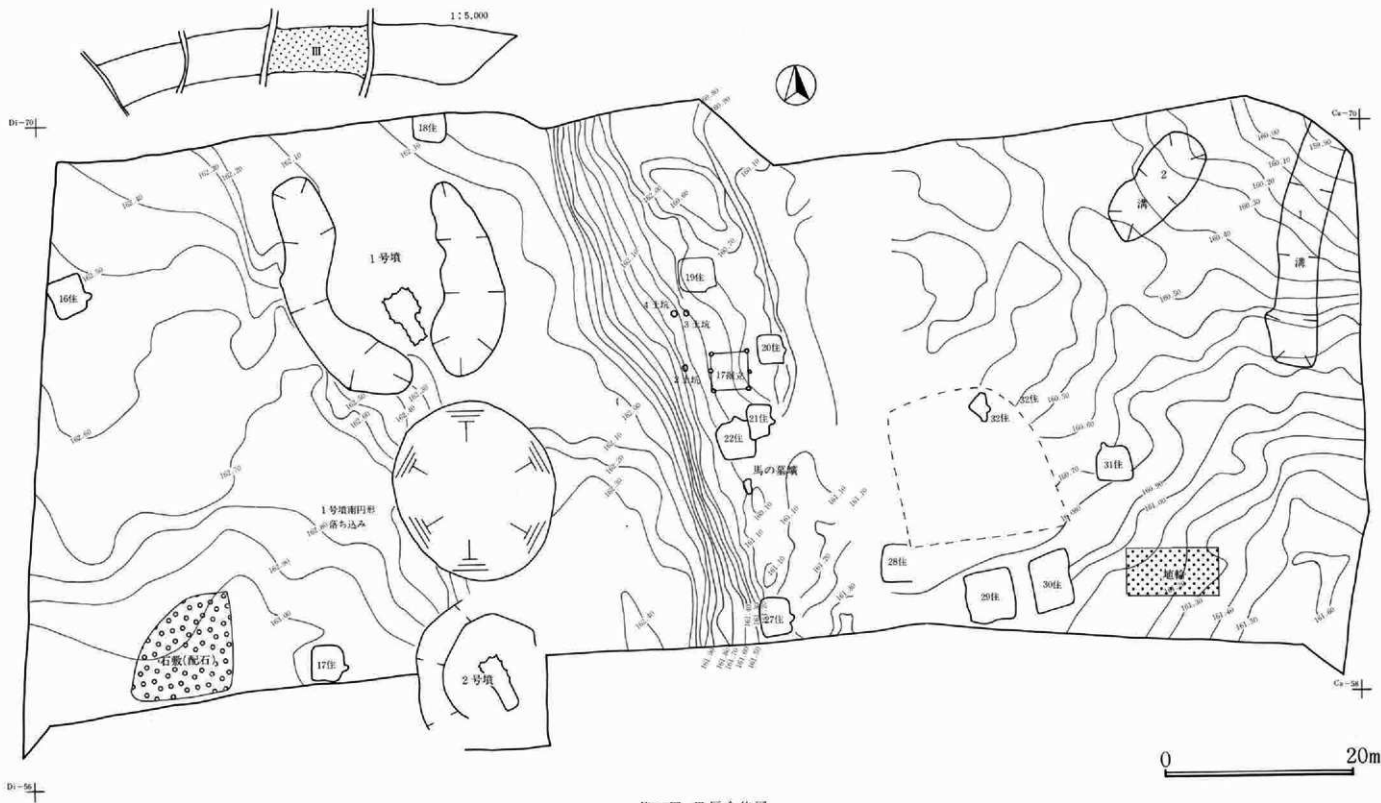


第220图 I区全体图

0 20 m



第221图 II区全体图



第222図 III区全体図



第223图 IV区全体图

(6) 炭化材の樹種

高橋利彦 (パリオ・サーヴェイ株式会社)

1 試料

試料は、2号住居址から検出されたもの66点、12号住居址から検出されたもの3点、23号住居址から検出されたもの7点の合計76点である。2号・12号住居址は平安時代のものとされ、2号住居址のほうがやや新しいと考えられている。23号住居址は奈良時代のものとされている。試料はいずれも住居址の床面直上から検出されたもので、建築材と考えられている。また、2号住居址は完全に埋積しない状態で、1108年の噴出とされる浅間B降下軽石層 (As-B) によって覆われていた。なお、作業の便宜のため、試料にはNa1~76の試料番号を付した(表1参照)。本文中では、試料はすべてこの試料番号で表す。また、同定作業の過程で、No24からは2種類、No64からは3種類の材が認められたためこれをNo24 a、b、No64 a、b、cと区別し、合計79点を同定した。

2 方法

試料を乾燥させたのち木口・柀目・板目三断面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版 (PL85~87) も作成した。

3 結果

試料は以下の8種類 (Taxa) に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などはつぎのようなものである。

・オニグルミ (*Juglans ailanthifolia*) クルミ科 No65、66

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2~4個が複合、横断面では楕円形、単穿孔を有する。放射組織は同性~異性III型、1~4細胞幅、1~40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄養価に富む。

・コナラ属 (アカガシ亜属) の一種 [*Quercus* (subgen. *Cyclobalanopsis*) sp.] ブナ科 No69、70、72、74、76、

放射孔材で、道管は横断面では楕円形、単独で放射方向に配列、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属 (カシ類) には、アカガシ (*Quercus acuta*)、イチイガシ (*Q. gilva*)、アラカシ (*Q. glauca*) など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木~小高木のウバメガシ (*Q. phillyraeoides*) も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林 (いわゆる照葉樹林) の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強韌で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

子は食用となる。

・コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp.] ブナ科 No24 a、28、64 c。

環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形~楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独、単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものとの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属 (落葉ナラ類) の中で、果実 (いわゆるドングリ) が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica*) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*)、カシワ (*Q. dentata*) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州 (丹波地方以北) に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州 (岩手・秋田県以南) ・四国・九州に分布する。このうち関東地方平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・櫓材などの用途が知られ、薪炭材としてはクスギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・コナラ属 (コナラ亜属クスギ節) の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.] ブナ科 No25、26。

環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では楕円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものとの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クスギ節は、コナラ亜属の中で果実が2年目に熟するグループで、クスギとアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クスギは本州 (岩手・山形県以南) ・四国・九州に、アベマキは本州 (山形・静岡県以西) ・四国・九州 (北部) に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクスギである可能性が高い。クスギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・枕材、櫓木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No 1、2、3、4、5、6、7、9、10、11、12、13、14、16、17、18、19、20、21、22、23、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64 b、67、68、71、75。

環孔材で孔圏部は2~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2~3個が斜 (放射) 方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形、単穿孔を有し、壁孔は交互に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬

で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫛木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No64 a,

環孔材で孔部は1~2列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線方向の紋様をなす。大道管は横断面では楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~10細胞幅、1~60細胞高以上。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹林の中で最良のものの一つに上げられる。

・サクラ属の一種 (*Prunus* sp.) バラ科 No24 b, 27,

散孔材で横断面は角張った楕円形、単独または2~8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III~II型、1~6細胞幅、1~50細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや明瞭。

サクラ属には、ヤマザクラ (*Prunus jamasakura*) やウワミズザクラ (*P. grayana*) など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木~低木である。このうちヤマザクラは、本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度~やや重硬・強靱で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

・ケンボナシ (*Hovenia dulcis*) クロウメモドキ科 No 8, 73,

環孔材で孔部は2~5列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では楕円形、単独、小道管は横断面では角張った円形~楕円形、単独および放射方向に2~3個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互に配列する。放射組織は異性III~II型、1~5細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状~翼状、散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ケンボナシは北海道(奥尻島)・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材として賞用され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。また、果時に果序軸上部が肥大し、これは甘味があって食べられる。

以上の同定結果を一覧表で示す(表1)。

4 考察

一般に、発掘調査によって住居遺構内から検出される炭化材はごく少数(量)にとどまり、2号住居址のように70点以上が確認・採取される例は稀である。ところで、古代の住居火災では、失火の場合でも消火活動

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

第18表 田篠遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	住居跡	整理番号	種名
1		1	クリ
2		3	クリ
3		4	クリ
4		5	クリ
5		6	クリ
6		7	クリ
7		8	クリ
8		9	ケンボナシ
9		10	クリ
10		11	クリ
11		12	クリ
12		13	クリ
13		14	クリ
14		16	クリ
15	2	17	クリ
16		18	クリ
17		20	クリ
18		21	クリ
19		22	クリ
20		23	クリ
21		24	クリ
22		25	クリ
23		26	クリ
24 a		27	コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種
24 b		27	ヤクワ属の一種
25		28	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種
26		29	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種
27		30	ヤクワ属の一種
28		31	コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種
29	号	32	クリ
30		33	クリ
31		34	クリ
32		35	クリ
33		37	クリ
34		38	クリ
35		39	クリ
36		40	クリ
37		41	クリ
38		43	クリ
39		44	クリ
40		45	クリ
41		46	クリ
42		47	クリ
43		48	クリ
44	住	49	クリ
45		50	クリ
46		51	クリ
47		52	クリ
48		53	クリ
49		54	クリ
50		55	クリ
51		56	クリ
52		57	クリ
53		58	クリ
54		59	クリ
55		60	クリ
56		61	クリ
57		62	クリ

試料番号	住居跡	整理番号	種名
58		63	クリ
59		64	クリ
60	2	65	クリ
61		66	クリ
62		67	クリ
63	号	68	クリ
64 a		69	ケヤキ
64 b		69	クリ
64 C	住	69	コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種
65		70	オニグルミ
66		71	オニグルミ
67	12	1	クリ
68	号	2	クリ
69	住	3	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
70		1	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
71	23	6	クリ
72		8	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
73	号	14	ケンボナシ
74		20	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
75	住	22	クリ
76		25	コナラ属(アカガシ亜属)の一種



2号住居跡



12号住居跡



13号住居跡

第224图 焼失家屋実測図

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

が行われたとは考えにくい。そして、新住居は鎮火をまってその場に再建するか、場所を替えて建て直したもののと思う。そうであるならば、住居を構築していた多数の木材は、基本的には残存しえないであろう。発掘調査によって検出される炭化材は、その材の一部が燃え出した時点で、例えば土屋根が崩落するなどしたために、土中に埋積したものであろう。こうして適度に炭化が進んだもの以外は、埋積しなければ燃えつきで灰となり、十分焼けなかった場合には土中あるいは空気中で腐朽・消失したにちがいない。したがって、各材が炭化材として残存できるかどうかは、出火から崩壊（崩落）までの間にどのように火が回り、またどこから崩れるかできまる。そして、構築材全体の残存率は、場合によって異なるものの、ほとんど0に近いといえよう。住居址検出材の少なさは、このことを示しているものと思う。このような状況の中で、わずかに検出された炭化材の樹種同定結果から、当時の用材や周囲の植生に言及することは、きわめて困難であるといわなければならない。

以下の議論は、上述のような制約があることを認めながらも、得られた結果が当時の用材や周辺植生をいくらかでも反映していることと仮定した場合、どのようなことが言えるのかという視点にたって行うものである。

3遺構全体で合計79点が同定されたが、クリ（62点）が最も多くアカガシ亜属（5点）・コナラ節（3点）・オニグルミ・クスギ節・サクラ属・ケンボナシ（各2点）・ケヤキ（1点）も少数認められた（表2）。強度や耐久性に優れているブナ科のクリやコナラ属の材が多いことから、材質の特長を熟知した上で目的的な樹種選択が行われていたことも十分考えられる。

ところで、23号・12号住居址検出試料中にはアカガシ亜属が認められているのに、最も新しいとされる2号住居では全く認められていない。2号住居址では、より軟質のオニグルミなども認められ、また遺構面全体で多数の炭化材が検出されていることから、クリを主に用い、カシ類はほとんどあるいは全く用いていなかったものと思う。12号・23号住居では、検出試料数も少なくどのような樹種を用いていたのかはわからないが、2号住居で、それまで用いていたカシ類を用いなくなったことは確かのようにある。高崎市日高遺跡では、古墳時代から平安時代にかけての堆積物(As-Bと榛名山二ツ岳火山灰に挟まれる)で、上層に向かってアカガシ亜属花粉の減少が認められている(徳永1982)。これは、森林の破壊と二次林の増加による見解もある(鈴木・能城1982)。あるいは、平安時代にはいつから、西毛地域でカシ類の減少という植生の変化があったのかもしれない。

一方、県内及び周辺地域での、試料と同時期とされる住居址検出の炭化材の同定はほとんどない。関東地方南部では、クリの例は少なくコナラ節やクスギ節の例が多い[例えば、埼玉県花園町耕田遺跡(バリノ・サーヴェイ株式会社1984)、同伊奈町大山遺跡(山内 文1979)、千葉県山田水呑遺跡(山内 文1977)、東京都日野市栄町遺跡(バリノ・サーヴェイ株式会社1986)など]。関東地方北部での類例は上記のように少ないが**、福島県内ではクリの例のほうが多く知られている[例えば、石川町大内B遺跡(嶋倉1986a)、相馬市北原遺跡(嶋倉1986b)など]。それらのうち、福島市御山千軒遺跡では、炭化材ではないが自然木と加工材の同定が行われている(嶋倉1983)。ここでは、自然木で針葉樹6 Taxa23点、広葉樹19Taxa76点が同定され、クリが最多の17点を占めるが、コナラは3点、クスギは認められていない。また、加工材のうち建築部材とされているもの68点の中では、ケヤキ(15点)・クリ(13点)・モミ(12点)が多く、クスギは1点、コナラは認められていない。このことは、あるいは当時の遺跡周辺の植生が、南関東よりも東北地方南部とより類似したものであったことを示しているものかもしれない。ただ、茨川市中筋遺跡では、同時期に使用されていたとされる隣り合った住居址間で、検出された炭化材がほとんど異なった組成を示していた例も報告されている(高橋1988)。したがって、これだけの結果から直ちに周辺植生の異同に結びつけることはできな

第19表 田篠遺跡出土炭化材の住居跡別の樹種構成

種 名	住居 址	2 号	12 号	23 号
オニグルミ		2		
アカガシ属			1	4
コナラ		3		
クスノキ		2		
ク リ		58	2	2
ケヤキ		1		
サクラ属		2		
ケンボナシ		1		1
合 計		69	3	7

いと考えている。

こうした問題は、周辺地域での類例を蓄積して解明していかなければならないだろう。

*：竪穴住居の土層植は、古墳時代のもっとされる子持村井峯遺跡（子持村教育委員会1987、渋川市中筋遺跡（渋川市教育委員会1987、1988）、大泉町専光寺附近遺跡【読売新聞1988・6・28付報道（月刊文化財発掘出土情報、1988・8号、ジャパン通信社、による）】の各住居址で確認されている。筆者は、これら最近の発掘例と発掘担当者の意見交換などから、竪穴住居は土層植が一般的なものであったと考えている。

**：大泉町御正作遺跡では古墳～平安時代のもっとされる10軒以上の住居址からの炭化材の検出・同定が報告されているが、どの遺構・史料が平安時代のものであるのかが明かにされていない（千野1984）。

引用文献

- 千野 裕道 1984 御正作遺跡より出土した木質遺存体の樹種について、「御正作遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」、大泉町教育委員会、402-403。
- 群馬県渋川市教育委員会 1987 渋川市発掘調査報告書第13集 中筋遺跡発掘調査概要報告書、16pp。
- 群馬県渋川市教育委員会 1988 渋川市発掘調査報告書第18集 中筋遺跡第2発掘調査概要報告書、51pp。
- 子持村教育委員会 1987 子持村文化財調査報告第6集 昭和61年度黒井峯遺跡発掘調査概報、18pp。
- パリオ・サウヴェイ株式会社 1984 台耕地遺跡試料樹種同定報告、「埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 関越自動車道関越埋蔵文化財発掘調査報告書—XIX—台耕地(II)」、埼玉埋蔵文化財調査事業団、308。
- パリオ・サウヴェイ株式会社 1986 日野市栄町遺跡試料材・種子同定報告、「日野市栄町遺跡調査概報II」、日野市栄町遺跡調査会、93-94。
- 嶋倉巳三郎 1983 御山千軒遺跡から出土した木質遺物、「福島県文化財調査報告書第109集 東北新幹線関越遺跡発掘調査報告VI 御山千軒遺跡」、福島県教育委員会・日本国有鉄道、付編9-31。
- 嶋倉巳三郎 1986a 大内B遺跡出土の炭化木、「福島県文化財調査報告書第163集 国営総合農地開発事業母地区遺跡発掘調査報告21 現映遺跡・堂平B遺跡・大内B遺跡」、福島県教育委員会・御福島県文化センター、162。
- 嶋倉巳三郎 1986b 北原遺跡出土の木炭、「福島県文化財調査報告書第166集 国道113号バイパス遺跡発掘調査報告II 北原遺跡・藩塚土器・原田遺跡（第二次）」、福島県教育委員会・御福島県文化センター、237。
- 鈴木 三男・能城 修一 1982 日高遺跡出土木材の樹種、「日高遺跡—関越自動車道（新西線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集—」、群馬県教育委員会・御群馬県埋蔵文化財調査事業団、372-379。
- 高橋 利寿 1988 中筋遺跡出土炭化材の樹種、「渋川市発掘調査報告書第18集 中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書」、群馬県渋川市教育委員会、42-47。
- 徳永 重元 1982 日高遺跡の花粉分析、「日高遺跡—関越自動車道（新西線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集—」、群馬県教育委員会・御群馬県埋蔵文化財調査事業団、349-356。
- 山内 文 1977 山田水呑遺跡の植物性遺存体、「山田水呑遺跡 上総国山田郡山口郷地定遺跡の発掘調査報告書 第2分冊」、日本道路公団・山田遺跡調査会、897-900。
- 山内 文 1979 木炭の分析、「埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 埼玉県立がんセンター地区埋蔵文化財発掘調査報告 大山」、埼玉県教育委員会、305-306。

(7) 胎土分析

群馬県工業試験場 花岡 敏一

小沢 達樹

群馬県埋蔵文化財調査事業団 依田 治雄

はじめに

1979年から始めた胎土分析は約650点を越え、現在に至っている。その結果、県内10か所に所在する窯跡群のうち吉井、藤岡、乗附(観音山)、秋間、中之条、月夜野、笠懸、太田窯跡群について傾向、領域を知るとともに消費地出土須恵器の同定をある程度可能にし、さらに各窯跡群の胎土傾向は立地基盤層と有機的な関係にある点もわかってきた。今回の分析は田藤遺跡出土の還元焰、酸化焰焼成の須恵器を主にし、10点を扱った。

なお、本稿の科学上の記述を花岡が、考古学上の

記述を依田が分担した。

1. 試料の選択

本遺跡内での分類で、9世紀前半とした9・31・41号住居跡出土の土器の中から、還元焰須恵器3点、酸化焰須恵器で硬質のもの2点、酸化焰須恵器で軟質のもの4点、土師器1点を抽出し、試料とした。

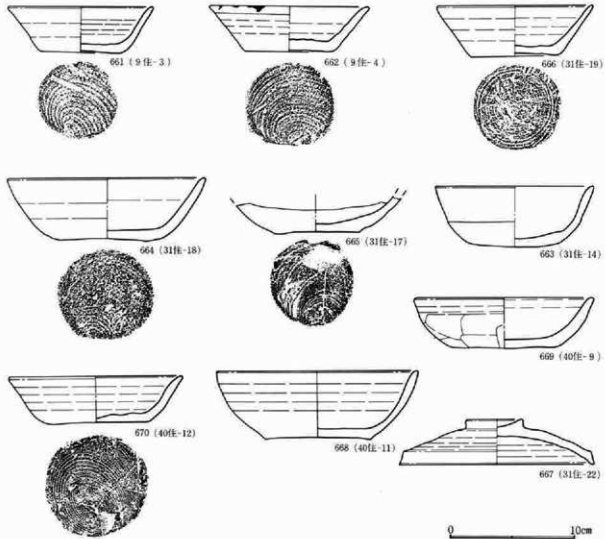
2. 分析の目的

①試料とした土器の産地同定

②同時期の住居で使用された異なった種類の土器の胎土分析の結果はどのような傾向を示すか。

第20表 胎土分析試料観察表

番号	種別	出土地	胎土の観察	推定製作地
661	須恵器・環酸化焰(硬)	9号住居 No3	内外面、断面ともに褐色を呈する酸化焰焼成の環。素地は均質で白色粒子を少量含む。また、所々に3~5mmのダイヤモンド質硬灰岩をわずかに含む。	吉井か藤岡
662	須恵器・環酸化焰(硬)	9号住居 No4	内外面ともに褐色を呈する。断面は淡い褐色ないしは灰色を呈する。素地はほぼ661と同じである。	吉井か藤岡
663	土師器・環	31号住居 No14	内外面、断面ともに橙色を呈する。素地は均質であるが、1mm程度の砂粒を多量に含んでいる。また、所々に2~3mmの片岩質の砂粒の混入も見られる。	藤岡
664	須恵器・環酸化焰(軟)	31号住居 No18	内外面、断面ともに橙色を呈する。素地は均質で夾雑物の混入は少ないが、所々に1mm程度の砂粒の混入が見られる。	藤岡
665	須恵器・環酸化焰(軟)	31号住居 No17	内外面、断面ともに橙色を呈する。素地は均質であるが、1mm程度の黒色の砂粒と白色粒子の混入が多く見られる。	藤岡
666	須恵器・環還元焰(軟)	31号住居 No19	内外面、断面ともに灰色を呈する。素地は均質であるが、白色粒子・黒色粒子を少量含む。また、1mm程度の砂粒の混入も少量見られる。	藤岡
667	須恵器・還元焰(硬)	31号住居 No22	内外面、灰色で、断面はやや濃い灰色を呈する。素地は均質であるが、白色粒子、黒色粒子が少量見られる。所々に1mm程度の砂粒がある。	栗岡か藤岡
668	須恵器・環酸化焰(軟)	40号住居 No11	内外面、断面ともに橙色を呈する。素地は均質で、白色粒子・雲母を少量含む。所々に1mm程度の砂粒を含む。	藤岡
669	須恵器・環酸化焰(軟)	40号住居 No9	内外面、断面ともに橙色を呈する。素地は均質で、白色粒子・雲母を少量含む。所々に片岩質の2~3mmの砂粒を含む。	藤岡
670	須恵器・環還元焰(軟)	40号住居 No12	内外面、断面ともに明灰色を呈する。素地は均質で、黒色粒子をわずかに含む。	秋間



第225図 鉛土分析した土器

3. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析試料は各試料を $10\mu\text{m}$ 以下に粉碎し、 $2\sim 3\text{g}$ を径 2.5cm の円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電機製KG-4型

X線管球：銀 対陰極

電圧・電流：50KV、20mA

分光結晶：Fe、Sr、Rbには LiF ($2d=4.028\text{\AA}$)

Ca、K、Ti、AlにはEDDT

($2d=8.808\text{\AA}$)

MgにはADP ($2d=10.648\text{\AA}$)

検出器：LiFを使用したとき、S・C、

EDDT、ADPを使用したときP・C

時定数：1

計数法：Fe、Ca、K、Ti、Sr、Rbはチャートにより、Si、Al、Mgは定数計数法による。なお走査速度は $4^\circ/\text{min}$ とした。

波高分析器：積分方式

測定線： $\text{FeK}\beta$ 、 $\text{CaK}\alpha$ 、 $\text{KK}\alpha$ 、 $\text{TiK}\alpha$ 、 $\text{AlK}\alpha$ 、 $\text{MgK}\alpha$ 、 $\text{SrK}\alpha$ 、 $\text{RbK}\alpha$ の各1次線を使用した。

X線照射面積： $20\text{mm}\phi$

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器 6 点

(295、310、336、345、360、380) を化学分析し、標準試料とした。

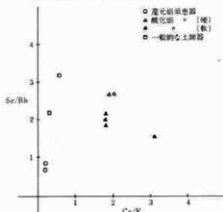
4. 結果

分析結果は表のとおりで、Ca/K、Sr/Rb について、近在の古窯跡群と県内の窯跡群の領域を示すグラフを載せた。

第21表 胎土分析成分表

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Sr/Rb	Ca/K
661(9住-3)	56.2	18.0	9.62	1.01	1.82	2.20	1.14	2.75	2.03
662(9住-4)	55.0	18.5	9.96	1.17	1.96	2.49	1.35	2.69	1.86
663(31住-14)	58.6	15.9	8.81	1.31	0.43	6.50	1.38	2.18	0.32
664(31住-18)	57.0	14.7	9.06	1.13	2.80	5.83	1.17	1.56	3.10
665(31住-17)	56.1	18.1	9.47	1.21	1.51	2.50	1.09	2.24	1.75
666(31住-19)	67.3	19.9	6.10	1.06	0.62	1.25	1.21	3.20	0.58
667(31住-22)	67.3	16.9	5.87	0.69	0.39	1.29	1.84	0.86	0.21
668(40住-11)	56.6	16.7	8.80	1.06	2.06	3.78	1.51	2.10	1.77
669(40住-9)	55.4	17.2	9.21	1.10	2.15	4.09	1.57	1.89	1.77
670(40住-12)	69.3	19.2	5.05	0.85	0.28	1.43	1.26	0.69	0.19

田篠遺跡のSr/RbとCa/Kのグラフ



①産地の同定について

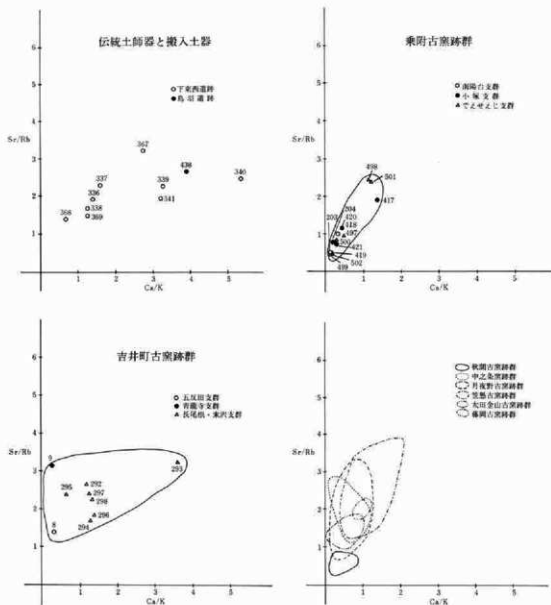
還元焙焼成の須恵器については県内の遺跡でその領域が資料として、まとまってきているので、それにあてはめて考えてみたい。

666は肉眼観察では、乗附(高崎市)か藤岡としたが乗附の領域とはやや離れ、藤岡の領域の周辺に位置し、かつ吉井の領域にも含まれる。

667の観察結果は666と同様の所見であったが、位置は藤岡からやや離れ、吉井の周辺にあって乗附の領域に含まれるので、ほぼ乗附産と考えてよいであろう。

670の位置は667に近いが肉眼観察では秋間(安中市)と推定され、その位置も秋間の領域に含まれているので、秋間産と考えてよいであろう。

群馬県内のSr/RbとCa/Kのグラフ



第22表 土師器類の成分 (注 Oによる)

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO(%)	MgO(%)	K ₂ O(%)	Sr/Rb	Ca/K
下東西遺跡	336	56.9	19.9	11.10	1.26	1.41	1.16	1.31	1.42	1.98
	337	57.2	18.9	11.05	1.22	1.57	0.77	1.28	1.61	2.35
暗文	338	61.3	17.8	8.20	1.15	1.48	0.69	1.51	1.30	1.72
	339	60.3	13.5	9.27	1.09	2.99	1.27	1.19	3.28	2.34
#	340	59.5	14.1	8.95	1.15	4.80	1.26	1.16	5.39	2.62
	341	61.1	13.7	9.00	1.06	2.84	1.14	1.15	3.22	2.02
土師質内黒	367	63.9	14.9	11.00	1.73	2.25	0.44	1.08	2.75	2.31
	#	368	74.8	17.9	3.80	0.92	0.46	0.58	0.88	0.70
#	369	64.5	16.8	5.85	0.86	1.36	1.57	1.38	1.29	1.54
	鳥羽遺跡 暗文	438	60.3	13.0	9.45	1.34	3.63	2.00	1.74	3.89

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

一方、土師器については胎土分析による領域の設定が難しく、資料不足がある。ここでは、前橋市下東西遺跡の例と比較してみたい。当遺跡の酸化焙焼成の土器は肉眼観察では吉井・藤岡とされ、分析値は663を除いては下東西遺跡と近い値を示している。既分析値とある程度似ていることがわかった。しかし、試料数が少なく、今後、試料数が増加したうえで検討を加える必要がある。

②について

ほぼ同時期使用の土器について観察の結果、必ずしも同一産地とは限らないということが考えられた。分析結果をみると、領域では一致が見られても、個々には相違が見られた。

3点の還元焙焼成の土器のうち666は Sr/Rb 3.2 Ca/K 0.58という値を示し、他の2点とは大きく異っている。観察結果は670が他の2点と相違を示したのに、化学分析では666の Sr/Rb の値に大きな変化が見られた。

また、2点の酸化焙焼成(硬)の土器は2点ともほぼ同様の値を示し、他の土器とは離れた位置を示している。

酸化焙焼成(軟)の土器4点中3点はほぼ同様な値を示し、硬質の土器とは異った値を示している。

県内の胎土分析資料

- a) 「土師の胎土分析」『塚崎古墳群』(群馬県教育委員会)1980 花園統一・石塚久則
- b) 「瓦の胎土分析」『天代瓦葺遺跡』(中之条町教育委員会)1982年 花園統一・大江正行
- c) 「湯井遺跡出土土師器の胎土分析」『湯井遺跡』(群馬県教育委員会)1981年 花園統一・真下高幸
- d) 「瓦の胎土分析について」『山王塚寺跡第7次発掘調査報告書』(前橋市教育委員会)1982年 花園統一
- e) 「土師の胎土分析について」『清里・陣場遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年 花園統一・中沢信
- f) 「敷田東遺跡出土土師器の胎土分析」『敷田東遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年 花園統一・中沢信 原雅信
- g) 「日高遺跡出土須恵器と瓦の胎土分析」『日高遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年 花園統一・平野進一・大江正行
- h) 「大館遺跡・金山古墳出土土師器の胎土分析」『大館遺跡・金山古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983年 花園統一・大西直広
- i) 「奥原・古墳群出土須恵器の胎土分析」『奥原古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983年 花園統一・石塚久則
- j) 「月夜野古宮跡群の胎土分析」『土師部会研究資料No.2』(群馬歴史考古学会)1983年 花園統一・大江正行
- k) 「須恵器の胎土分析について」『三ツ木遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1984年 花園統一・敷田陽一
- l) 「糸井宮前遺跡出土須恵器の胎土分析」『糸井宮前遺跡跡1』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1985年 花園統一・山口逸弘
- m) 「土師の胎土分析について」『吉田遺跡』(塚崎教育委員会)1985年 花園統一・加藤二生
- n) 「村主遺跡出土土師器を中心とした胎土分析」『大原II遺跡・村主遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1986年 花園統一・中沢信
- o) 「古墳出土須恵器の胎土分析」『下船牛伏遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1986年 花園統一・小島敦子
- p) 「胎土分析」『下東西遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1987年 花園統一・三浦京子

同じ酸化焙焼成で継続使用土器といっても、一概に同一といえないということが化学分析の結果からもうかがえ、肉眼観察の所見と同様な点が指摘できる。

土師器は1点のみの分析ではあるが、やはり前述の土器とは異った値を示している。

以上、4種類にわたって当遺跡内のほぼ同時期の土器について、分析を試みた。①で肉眼観察の所見と合せて産地を推定した。酸化焙焼成の土器にしても大抵ね、吉井の領域に含まれるが、それぞれの土器の特有の値を示し、領域内で異った部分を占めているのも興味深い点である。

土師の生産地・消費地の問題はこの時代のひとつのテーマとなっている。富岡市付近の集落跡の胎土分析については例が少なく、比較・検討の材料に乏しいが、今後、関越道上越線の調査が進み、報告がなされる中でこの問題は明らかになってくるであろう。

今回10点という少ない試料数ではあったが、群馬県西部地域の一資料として、比較・検討の際用いられれば、日高遺跡の結果がより明確になっていくと思われる。

※推定製作地、藤岡・吉井は瀬川流域の富岡群群の範囲で、本遺跡のある富岡市田沼もこの中に含まれる。したがって、富岡を含め考慮されるところである。

V 近世以降の遺構

1. 墓地 (PL59)

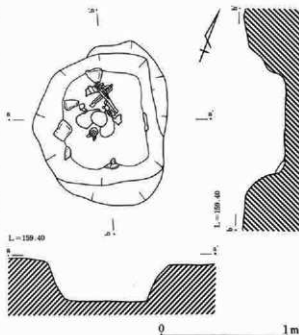
本遺跡内には、Ⅲ区に共同墓地、Ⅳ区に個人の墓地1ヶ所が存在していた。

墓地は基本的には全部それぞれの持ち主が、掘り上げて移転するというで話し合いがなされた。しかし、共同墓地で数ヶ所、個人の墓地で1ヶ所の墓墳を発掘した。共同墓地分は昭和にはいつのもので、ほぼその墓の主が特定できたので持主にお引取りいただいた。

Ⅳ区の墓地については1ヶ所発掘された。長い間に墓地の境界が移動したと考えられ、発掘した墓墳は境界外であった。(第226図)

Ⅳ区墓墳は一辺1mのほぼ方形を呈する。深さは現状で30cmであるが、実際の掘り込み面は現地表面と考えられる。骨の遺存状態から座槽の埋葬であろう。

検出した骨は、頭骨上部、^{きび}背椎骨、肋骨、骨盤、上腕骨、大腿骨骨等比較的良好な状態で残存していた。近在の人たちの話から、江戸末期から明治時代の墓と考えられる。



第226図 Ⅳ区墓墳実測図

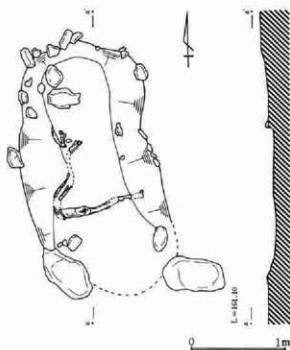
2. 動物の墓墳

本遺構はⅢ区中央部Cm-62グリットに位置する。

南北に長い墓墳で、長径2.70m、短径1.40m、深さ20cmを計る。

残存していたのは頭骨の一部と歯、背骨、足の骨の一部と考えられる。

墓墳の東10mに共同墓地が位置していることから家畜と考えられ、歯や骨の大きさから、馬の墓墳と断定した。



第227図 動物の墓墳実測図

VI ま と め

田篠遺跡は関越自動車道上越線建設に伴う事前発掘調査である。上越線は藤岡市から、鏡川に沿って西へ進み、長野県佐久市に至り、さらに新潟県へ通じる路線である。この地域はこれまで比較的大きな開発はなく、したがって、大規模な埋蔵文化財の発掘調査例も少ない。

上越線は多野郡吉井町から甘楽郡下仁田町まで、傾斜地、あるいは山間部を多く通過するが、田篠遺跡は傾斜地と丘陵地の間に在って、扇状地地形をなし、ほぼ平地に営まれた遺跡といえる。田篠遺跡の調査はこの地域の扇状地地形における遺跡のあり方を幾分か解明できたと思う。

遺跡の内容は縄文時代中期末の大規模な環状列石・配石遺構（来年度整理）、古墳、奈良～平安時代の集落跡が中心である。

古墳時代の遺構の調査は、主として1号墳、2号墳の横穴式古墳について行なった。これらの調査は、横穴式古墳の構築過程を具体的に復元することを目指して、詳細な調査を実施することができた。この調査を通して従来不明瞭であった群集墳における古墳造営の歴史的背景についていくつかの新知見を見出すことができた。また、現在でもさかんに進められている小規模な横穴式古墳の調査法について、ひとつのあり方を示すことができたと思う。

古墳の周堀から出土した2点の瓦片を手がかりに表面採集した瓦片と合せて、遺跡地付近に寺院跡を推定した。さらにその事を考えている中で遺跡内住居跡から出土した「山寺」「大公」「成」といった墨書土器を補強資料とし得た。2点の瓦片から出発し、大きな成果が得られた。

奈良～平安時代の集落については、約300年間にわたって、この地に住んだ人々の生活跡を調査し、8世紀前半からおよそ6期間に分類できる資料を得られた。また、土器の形態変化はほぼ県中央部と同様な変化をたどることも知り得た。しかし、反面、須

恵器の出土量が少ないことや灰軸陶器の出土量が少ないといった相違点も見られた。また、鉄器・紡錘車の出土もあったが、同時代の他の遺跡に比べると少ない出土であった。

3軒の焼失家屋の炭化材の同定から、どのような木を用いて住居を作ったか、また、当時の植生等種々のデータが得られた。

10点という少量の試料ではあったが、土器の胎土分析を実施し、須恵器の生産地を同定した。その結果、他地域からの搬入も認められたが、多くは地元で生産であったことを知ることができた。

祭祀跡と見られる奈良時代の配石遺構も発見されたが、性格を断定するには至らなかった。したがって、結論は周辺の調査を待たねばならない。

遺跡地東端には浅間B軽石（1108年）下の水田跡も出土した。扇状地において、水田耕作のできない地形の中で、やはり、鏡川に沿った低地では水田が営まれていた可能性の強いことがわかった。これもこの後、周辺の遺跡が調査された時さらに明らかにならう。

このように田篠遺跡の調査は多くの成果と課題を残した。将来、周辺の調査がなされた時、なおこの遺跡が明らかになっていくことを期待したい。

田篠遺跡の調査は、群馬県教育委員会、日本道路公団をはじめ、富岡市農協、富岡市教育委員会、田篠地区の方々、御指導・御支援、また、直接調査にたずさわった発掘調査作業員、整理補助員等多くの方々との協力のお陰で終了することができた。深く謝意を申し上げます。

写 真 图 版



遺跡地上空より(約1:10,000)

PL 2 航空写真



1 遺跡地より雄川上流を望む



2 遺跡地より鍋川方面を望む



1 遺跡地より下仁田方面を望む



2 遺跡地上空より

PL 4 土層



1 II区北側



2 III区北側(1号墳付近)



1 調査古墳全景(下1号墳 上2号墳)



2 調査古墳全景(南より、手前1号墳、奥2号墳)



3 調査古墳全景(東より、右1号墳、左2号墳)

PL 6 1号古墳



1 覆土除去後の状況(墓石の周堀内への崩落状況)



2 同左(西より)



3 墓石および周堀(南西より)



4 墓石の遺存状態(石室入口西側付近)



5 全景(南より)



1 前庭および石室入口(南より)



2 両左(南西より)



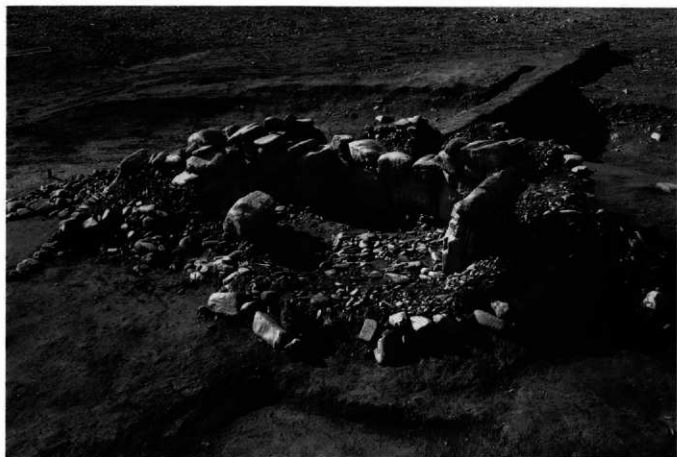
3 羨道部閉塞状態(南より)



4 同上(玄室より)



5 石室全景(閉塞除去後)



1 石室全景



2 石室入口



3 狭道左壁(入口側より)



4 狭道右壁(玄室より)



5 玄室左壁



1 裏込被覆検出状態(北より)



2 同左(西より)



3 羨道左壁の裏込め状態



4 宝室左壁の裏込め状態



5 奥壁背後の裏込め状態



6 奥壁石設置のための下部補強



7 裏込め除去後の石室全景(南西より)



8 同上(北東より)



1 石室の解体調査



2 同左



3 羨道左壁構築状況



4 右壁羨門石除去後



5 壁石使用石材 (左より羨道左壁、同右壁、玄室左壁)



6 石室構築面の機軸地形



7 石室解体調査終了全景



1 喪道部東側で確認された排水施設



2 同左(断面)



3 同上(上方)



4 南東部周堀出土の長頸壺



5 南東部周堀出土の長頸壺



6 北西部周堀出土の鉄劔

PL 12 2号古墳



1 調査前全景(北より)



2 攪乱状態にあった石室内



3 葬石および周堀(南東より)



4 全景(西より)



5 全景(南より)



1 石室および前庭(南より)



2 羨道部遺存状態



3 玄室より羨道部をのぞむ



4 奥壁



5 玄室左壁



6 墳丘盛土断面(墳丘北側)



7 裏込め被覆検出状態(北東より)

PL 14 2号古墳



1 奥壁裏込め状態



2 玄室左壁裏込め状態



3 裏込め除去後の石室全景



4 同左(西より)



5 同上(北より)



6 石室構築面の俯瞰地形



7 石室の解体調査



8 使用石材全容



1 3号古墳全景(東より)



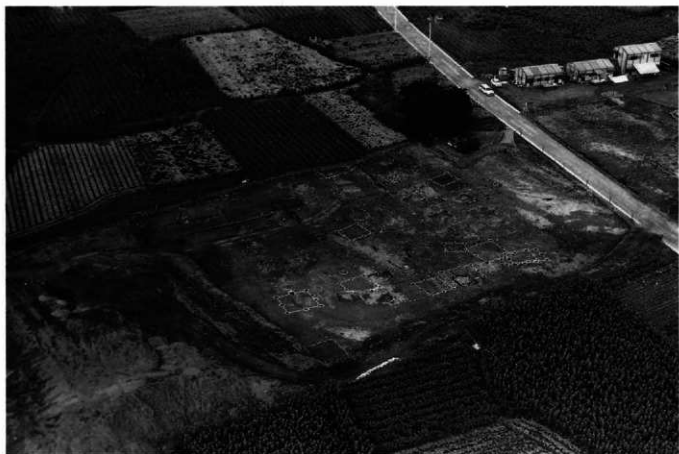
2 1号墳南円形落ち込み(北より)



1 II区全景



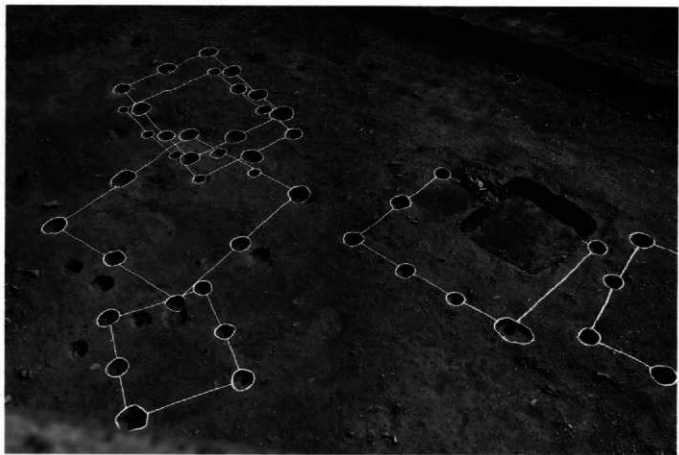
2 IV区全景



1 II区全景(南より)



2 II区全景(西より)



1 獨立柱建物跡集中区域(Ⅱ区)



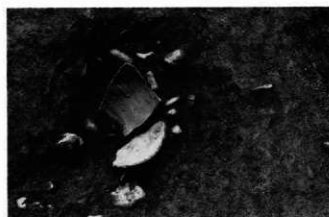
2 竪穴住居跡集中区域(Ⅱ区)



1 1号住居跡全景(南より)



2 1号住居跡礎跡



3 1号住居跡遺物出土状況



4 1号住居跡床下



5 2号住居跡木炭出土状況(西より)



6 2号住居跡確認面



7 2号住居跡全景(西より)



8 2号住居跡礎跡

PL 20 住居跡



1 3号住居跡全景(西より)



2 4号住居跡全景(南より)



3 4号住居跡遺跡



4 4号住居跡遺物出土状況



5 4・5号住居跡全景(西より)



6 4・5号住居跡床下



7 5号住居跡遺跡



8 5号住居跡遺物出土状況



1 6号住居跡全景(西より)



2 6号住居跡遺物出土状況



3 6号住居跡南壁石垣



4 2・6号住居跡床下



5 7号住居跡全景(西より)



6 7号住居跡遺物出土状況



7 7号住居跡竈跡



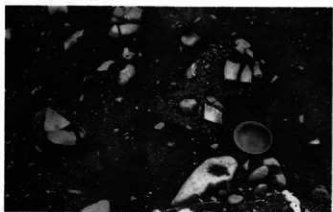
8 7号住居跡床下



1 8号住居跡全景(西より)



2 8号住居跡礎跡



3 8号住居跡遺物出土状況



4 同左



5 9号住居跡埋没状況



6 9号住居跡礎跡



7 9号住居跡全景(西より)



8 9号住居跡礎跡(上方より)



1 10号住居跡全景(南より)



2 10号住居跡竈跡(上方より)



3 10号住居跡竈前遺物出土状況



4 10号住居跡床下



5 11号住居跡全景(南より)



6 11号住居跡西壁



7 11号住居跡竈跡



8 11号住居跡遺物出土状況



1 12号住居跡全景(西より)



2 12号住居跡床下



3 12号住居跡竈跡



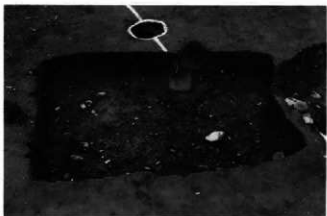
4 12号住居跡南東隅



5 12号住居跡木炭出土状況



6 13号住居跡全景(南より)



7 13号住居跡床下



8 13号住居跡竈前遺物出土状況



1 14号住居跡全景(南より)



2 14号住居跡礎跡



3 14号住居跡床下



4 14号住居跡礎跡(上方より)



5 15号住居跡埋没状況



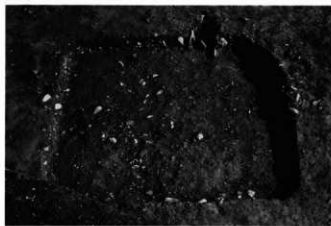
6 15号住居跡全景(南より)



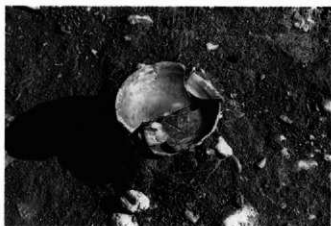
7 15号住居跡礎跡



8 15号住居跡東壁



1 16号住居跡全景(西より)



2 16号住居跡遺物出土状況



3 16号住居跡遺跡



4 16号住居跡遺跡場所



5 17号住居跡全景(西より)



6 17号住居跡遺物出土状況



7 17号住居跡遺付近遺物出土状況



8 17号住居跡遺跡



1 18号住居跡全景(西より)



2 18号住居跡遺物出土状況



3 19号住居跡全景



4 19号住居跡密付近遺物出土状況



5 19号住居跡遺物出土状況



6 19号住居跡床下



1 20号住居跡全景(西より)



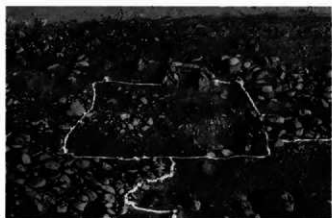
2 20号住居跡竈跡(1)



3 20号住居跡竈跡(2)



4 20号住居跡竈跡掘方



5 21号住居跡全景(西より)



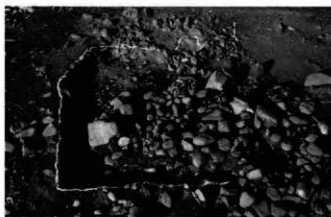
6 21号住居跡竈跡



7 21号住居跡遺物出土状況



8 21号住居跡竈跡掘方



1 22号住居跡全景(南より)



2 22号住居跡礎跡



3 22号住居跡遺物出土状況



4 22号住居跡遺物出土状況



5 23号住居跡全景(南より)



6 23号住居跡礎跡



7 23号住居跡炭化物出土状況(東より)



8 23号住居跡遺物出土状況



1 24号住居跡埋没状況



2 24号住居跡全景(南より)



3 25号住居跡埋没状況



4 25号住居跡全景(西より)



5 25号住居跡発露



6 25号住居跡遺物出土状況



7 26号住居跡全景(北より)



8 26号住居跡発露



1 27号住居跡全景(西より)



2 27号住居跡電跡(1)



3 27号住居跡電跡(2)



4 27号住居跡電跡掘方



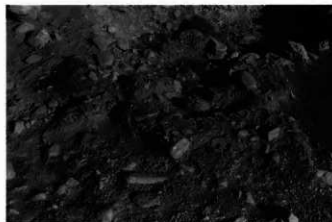
5 27号住居跡電跡奥壁部



6 27号住居跡床下



7 28号住居跡全景(西より)



8 28号住居跡遺物出土状況

PL 32 住居跡



1 29号住居跡埋没状況(北より)



2 30号住居跡埋没状況(東より)



3 29・30号住居跡全景(西より)



4 31号住居跡全景(南より)



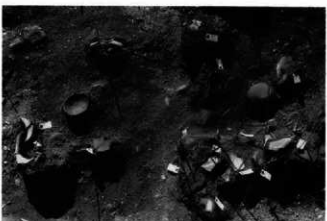
5 31号住居跡遺物出土状況



6 同左



7 31号住居跡遺物出土状況



8 同左



1 32号住居跡全景(西より)



2 32号住居跡礎跡



3 34号住居跡埋没状況



4 34号住居跡全景(南より)



5 34号住居跡礎跡



6 34号住居跡遺物出土状況



7 34号住居跡遺物出土状況



8 34号住居跡床下



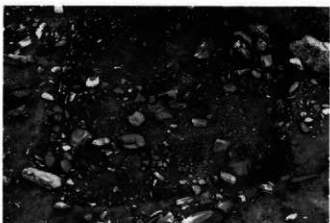
1 35号住居跡全景(西より)



2 35号住居跡竈跡



3 35号住居跡煙道下部の状況



4 35号住居跡床下



5 36号住居跡全景(南より)



6 36号住居跡床下



7 36号住居跡竈跡(1)



8 36号住居跡竈跡(2)



1 37号住居跡全景(西より)



2 37号住居跡竈跡遺物出土状況



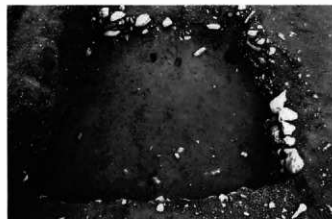
3 37号住居跡竈跡



4 37号住居跡竈使用石材



5 37号住居跡埋没状況



6 38号住居跡全景(西より)



7 38号住居跡南壁



8 38号住居跡竈使用と思われる石材(埋没石内混在)



1 39号住居跡埋没状況



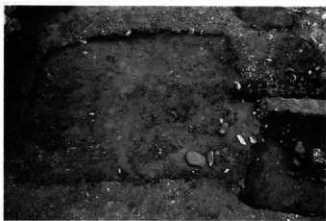
2 39号住居跡全景(南より)



3 39号住居跡遺跡



4 39号住居跡遺物出土状況



5 40号住居跡全景(南より)



6 40号住居跡遺物出土状況



7 39・40号住居跡切り合い部分断面



8 40号住居跡床下



1 41号住居跡全景(南より)



2 41号住居跡竈跡(1)



3 41号住居跡竈跡(2)(奥～煙道部)



4 41号住居跡南壁



5 41号住居跡床下



1 42号住居跡全景(西より)



2 42号住居跡礎跡



3 42号住居跡中央部遺物出土状況



4 43号住居跡礎跡



5 43号住居跡全景(西より)



6 43号住居跡床下



7 43号住居跡遺物出土状況



8 43号住居跡礎跡



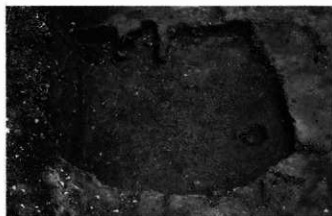
1 44号住居跡全景(南より)



2 44号住居跡竈跡



3 44号住居跡床下



4 45号住居跡全景(南より)



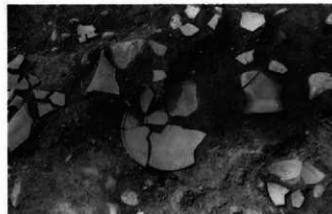
5 45号住居跡竈跡



6 45号住居跡遺物出土状況



7 45号住居跡遺物出土状況



8 同左



1 46号住居跡全景(南より)



2 47号住居跡埋没状況



3 47号住居跡全景(南より)



4 47号住居跡床下



5 47号住居跡竈跡(1)



6 47号住居跡竈跡(2)(奥～煙道部)



7 47号住居跡東壁



8 同左断面



1 48号住居跡全景(西より)



2 48号住居跡中央部(小鍛冶跡?)



3 48号住居跡遺跡



4 48号住居跡床下



5 49号住居跡全景(南より)



6 49号住居跡遺物出土状況



1 50号住居跡全景(南より)



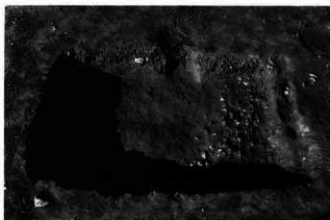
2 50号住居跡遺物



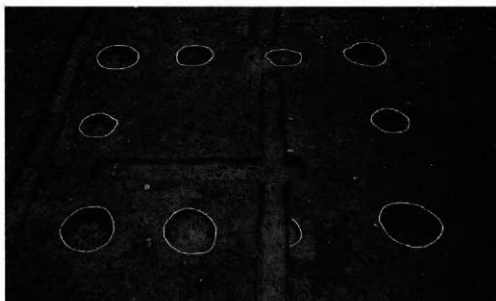
3 50号住居跡遺物掘方



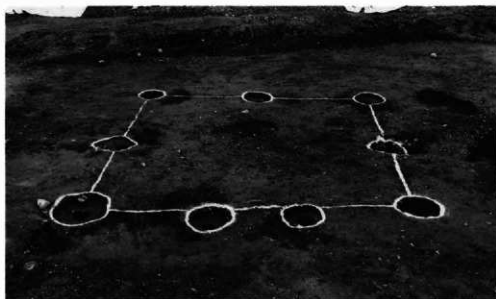
4 50号住居跡遺物出土状況



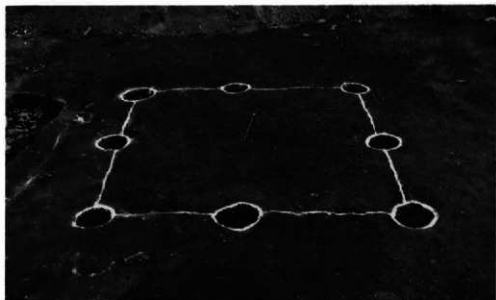
5 50号住居跡床下



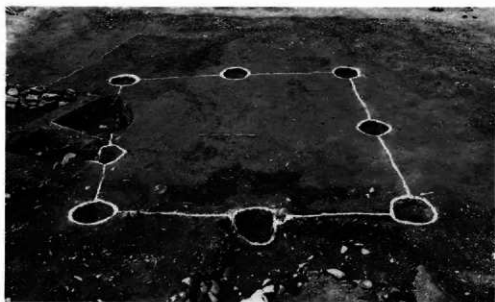
1 1号掘立柱建物跡



2 2号掘立柱建物跡



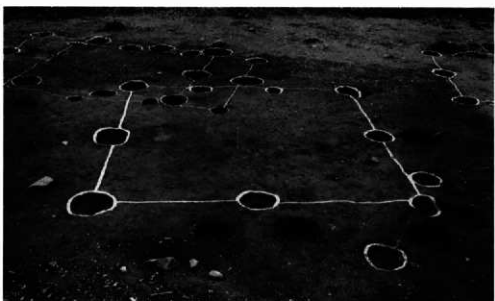
3 3号掘立柱建物跡



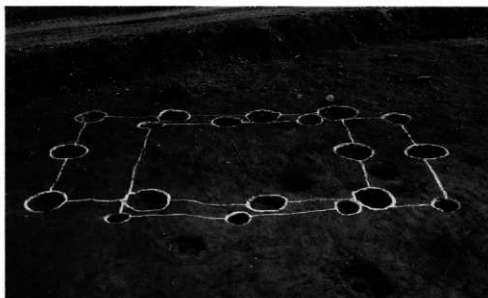
1 4号掘立柱建物跡



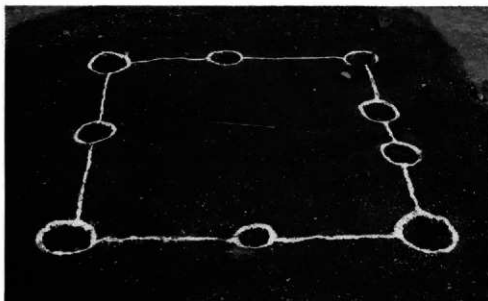
2 5号掘立柱建物跡



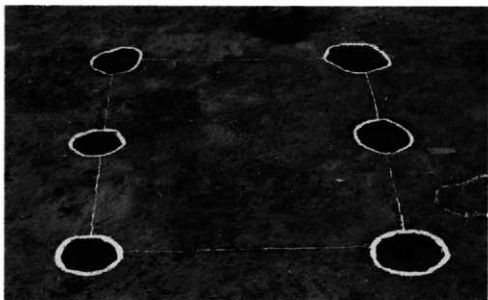
3 6号掘立柱建物跡



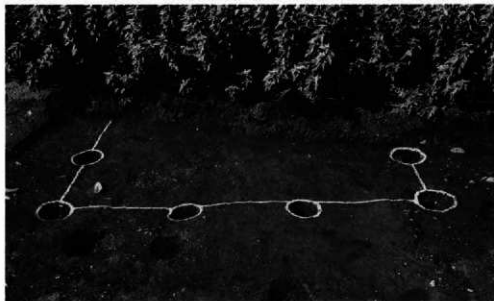
1 7・8号掘立柱建物跡



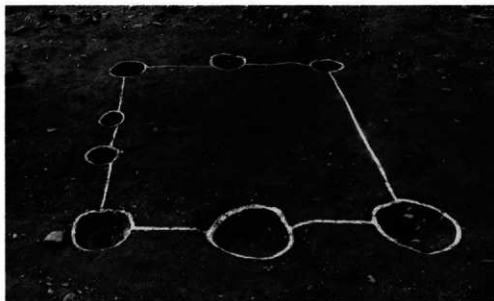
2 9号掘立柱建物跡



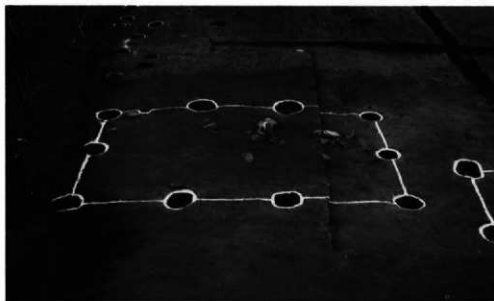
3 10号掘立柱建物跡



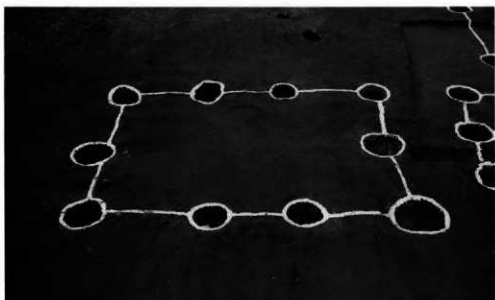
1 11号掘立柱建物跡



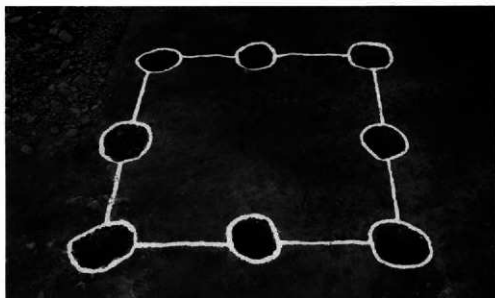
2 12号掘立柱建物跡



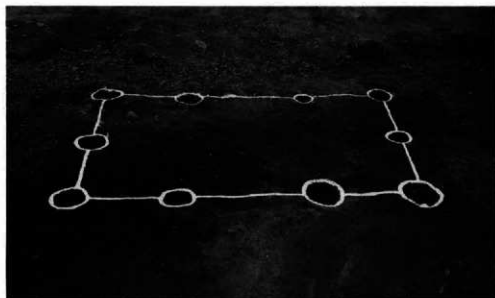
3 13号掘立柱建物跡



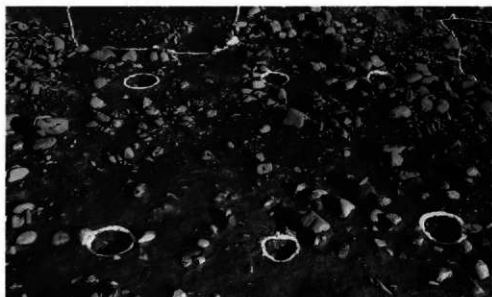
1 14号掘立柱建物跡



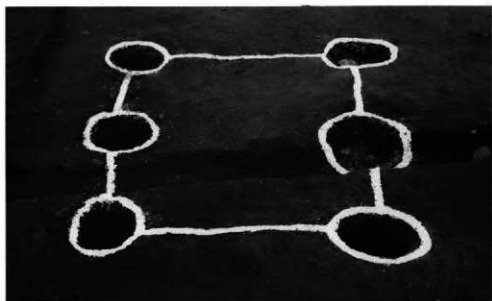
2 15号掘立柱建物跡



3 16号掘立柱建物跡



1 17号掘立柱建物跡



2 18号掘立柱建物跡

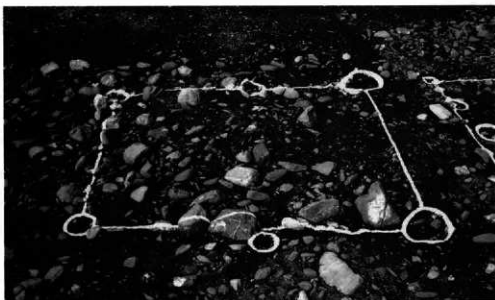


3 19号掘立柱建物跡

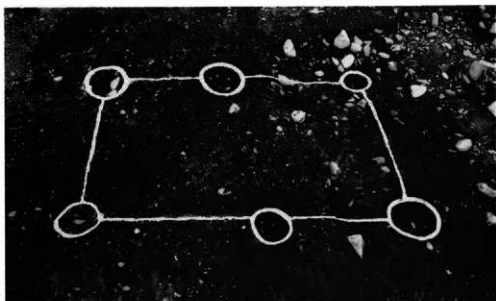
1 19・20号掘立柱建物跡

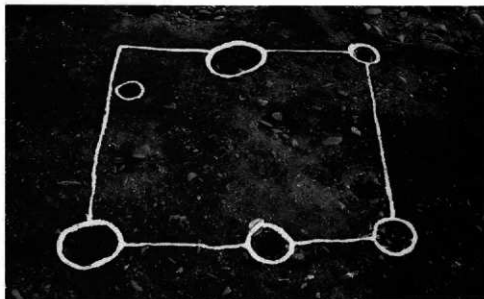


2 20号掘立柱建物跡



3 21号掘立柱建物跡

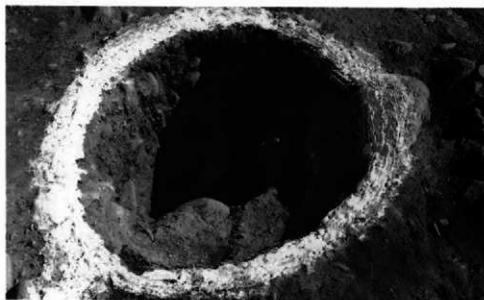




1 22号掘立柱建物跡



2 2号掘立柱建物跡
遺物出土状況



3 4号掘立柱建物跡
遺物出土状況

1 Ⅲ区石敷遺構(北より)



2 Ⅲ区石敷遺構



3 奈良時代配石遺構
(Ⅲ区石敷遺構下)





1 奈良時代配石遺構中心部



2 同上



3 同上(上部石を除いたところ)

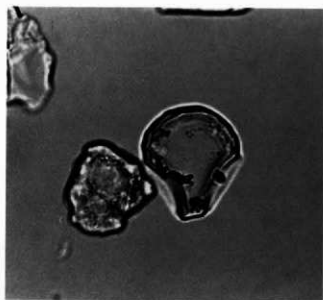


1 水田遺構(北より)

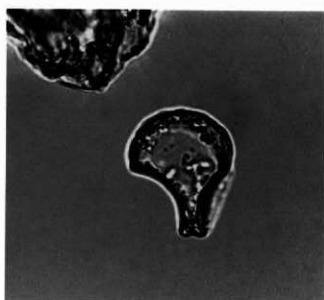


2 水田遺構(手前)(東より)

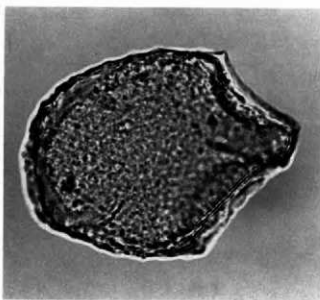
PL 54 プラントオパール標本



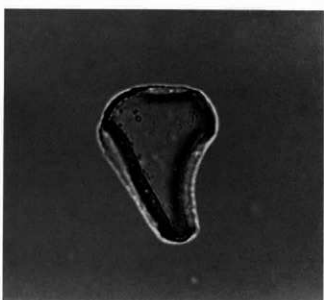
1 イネ



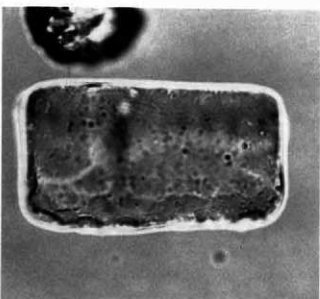
2 イネ



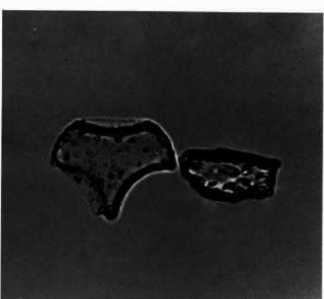
3 ヨシ属



4 ウシクサ属



5 キビ族



6 シバ属



1 田区1号溝(南より)



2 田区2号溝(西より)



3 田区2号溝断面(南より)



4 田区1号溝南半分(西より)



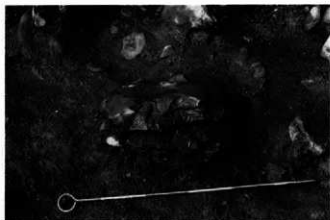
1 IV区1号溝北半分(南より)



2 IV区1号溝南半分(北より)



3 IV区3号溝遺物出土状況



4 IV区3号溝大型石弁出土状況



5 IV区1号溝と2号溝(向こう側)



1 1号土坑



2 同左遺物出土狀況



3 2号土坑



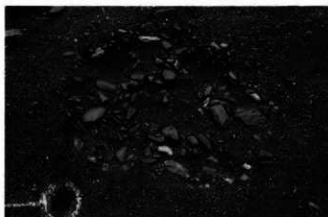
4 3号土坑



5 4号土坑



6 5号土坑



7 6号土坑



8 7号土坑



1 円形周溝(北より)



2 同上北側平石の状況



1 N区石敷遺構(北より)



2 同左(東より)



3 同上東部(東より)



4 同左断面



5 動物墓墳



6 墓墳



1 遺構を見る見学者



2 室内展示



3 展示を見る見学者



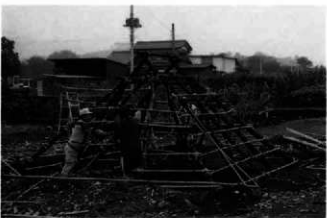
4 パネル写真を見る見学者



5 復元住居をつくる(1)



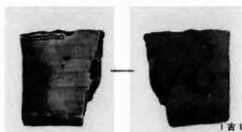
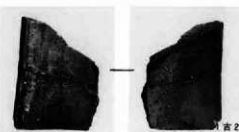
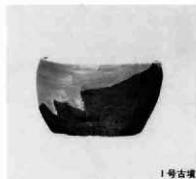
6 周左(2)



7 周上(3)



8 完成した復元住居



PL 62 2・3号古墳遺物



2古3



2古4



2古13



2古7



2古2



2古14



2号古墳



2古15



2古11



2古12



2古8



2古9



3古1



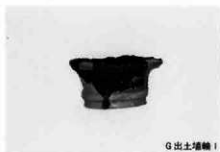
3古2



3古3



G出土埴輪2



G出土埴輪1



G出土埴輪3



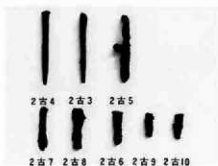
1古1



2古1



2古2



2古4 2古3 2古5
2古7 2古8 2古6 2古9 2古10



2号墳出土

墨書土器読み

「永の」「成」「山」「□(石の)」「寺」

「井」「三」「那(佛)」「丈の」

「石」「石」「大」「公」



D12



3佳1



31佳16



42佳16



2編2



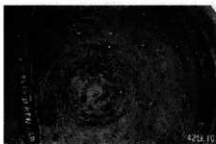
209.11



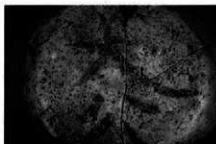
1古9



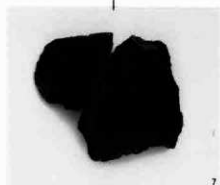
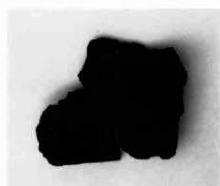
42佳11



429.10



67.8



3

5

7



6



4

50图11



1 住 4



2 住 9



2 住 15



1 住 1



1 住 3



2 住 3



2 住 11



2 住 23



2 住 8



2 住 16



2 住 24



2 住 21



2 住 17



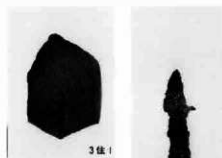
2 住 26



2 住 19



2 住 27



3 住 1



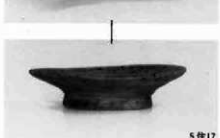
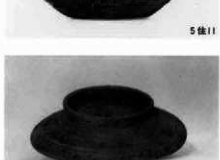
2 住 14

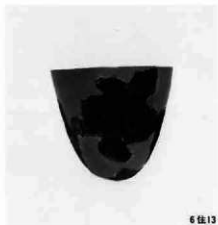


3 住 4



2 住 30







7住3



7住4



7住6



7住8



7住9



7住5



7住10



7住11



8住2



8住1



8住9



8住4



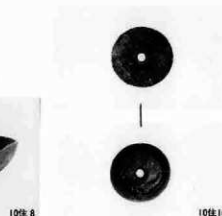
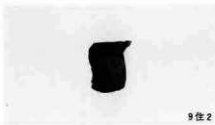
8住8

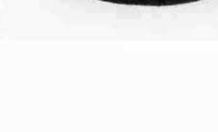
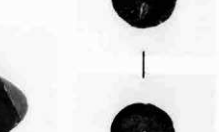


8住10



8住11







12住 1



12住 2



12住 4



12住 10



12住 6



12住 7



12住 13



12住 12



12住 26



12住 24



12住 16



12住 25



12住 22



12住 23



12住 17



13住 2



12住 15



13住 4



12住 21



13住 1



13住 3



14住 1



14住 2



14住 3



14住 6



14住 5



15住 2



15住 5



16住 1



15住 8



15住 3



17住 1



15住 10



17住 8



17住 6



17住 10



17住 11



17住 7



17住 9



17住 13



18住 1



18住 3



18住 4



19住 1



19住 2



19住 7



19住 3



19住 4



19住 6



19住 8



19住 9



19住 10



19住 13



20住 1



20住 2



19住 15

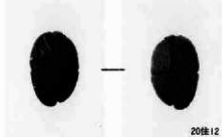
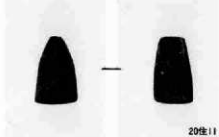


20住 3



20住 5

PL 74 住居跡出土遺物





22住 9



22住 10



22住 11



23住 1



23住 2



23住 3



23住 5



23住 6



23住 7



24住 1



24住 2



24住 3



25住 3



25住 1



25住 10



25住 12



25住 7



25住 11



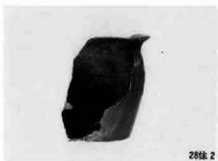
25住 13



26住 1



26住 4





31住20



31住21



31住22



32住2



34住3



34住1



34住4



34住19



34住9



34住11



34住13



35住1



35住2



35住3



36住3



36住4



36住5



36住2



36住6





40住9



40住10



40住14



40住11



41住1



42住3



40住7



41住7



41住6



42住2



42住1



42住6



42住7



42住18



42住10



42住11



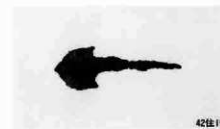
42住8



42住16



42住17



42住9



43住 1



43住 2



43住 3



43住 4



43住 8



44住 2



44住 5



44住 4



44住 6



44住 3



44住 1



45住 2



45住 6



45住 1



45住 7



45住 11



45住 12



45住 14



45住 15



45住 10



45住 18



46住 5



47住 6



47住 1



46住 1



47住 4



47住 5



46住 3



47住 7



48住 4



48住 8



48住 1



48住 3



48住 5



48住 7



48住 9



48住 10



48住 11



49住 2



48住



48住



49住 1



49住 3



50住 5



50住 2



50住 6



50住 7



2掘 1



2掘 2



12掘 2



4掘 1



4掘 2



III 2溝 1



IV 1溝 9



IV 1溝 8



IV 1溝 1



IV 1 溝 4



IV 1 溝 5



IV 1 溝 13



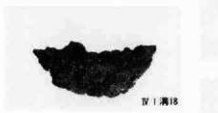
IV 1 溝 15



IV 1 溝 3



IV 1 溝 10



IV 1 溝 18



IV 3 溝 2



IV 石 1



IV 1 溝 19



IV 石 5



II 区 1 土坑 1



IV 石 3

IV 石 4



IV 3 溝 3



B 1



B 5



B 2



B 6



B 7

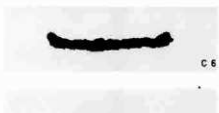
PL 84 グリット出土遺物



C1



C3



C6



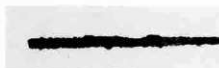
C7



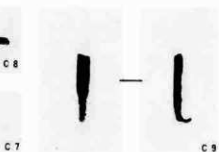
C8



C9



C10



C11



D1



D2



D3



D4



D5



D6



D7



D8



D9



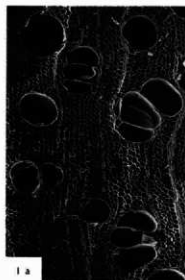
D10



D11



D12



1 a



1 b



1 c



2 a



2 b



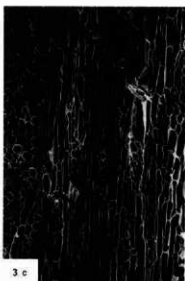
2 c



3 a

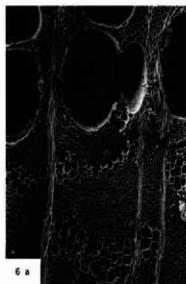
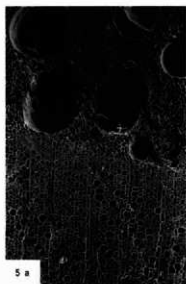
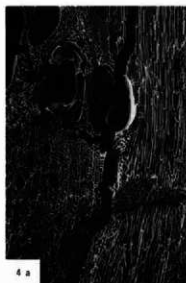


3 b

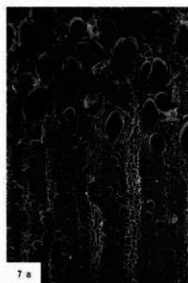


3 c

1 : オニグルミ No.65 2 : コナラ(アカガシ亜属)の一種 No.69 3 : コナラ(コナラ亜属コナラ節)の一種 No.24 a
 a; 本口×70 b; 径目×140 c; 板目×140



4 : コナラ属(コナラ亞属クスギ節)の一種 No.26 5 : クリ No.3 6 : ケヤキ No.64 a
a: 木口×70 b: 径目×140 c: 板目×140



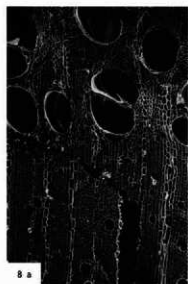
7 a



7 b



7 c



8 a



8 b



8 c

7 : サクラ属の一種 No.24 b 8 : ケンボナシ No.8 a: 木口×70 b: 柁目×140 c: 板目×140

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第34集

田篠上平遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第2集

平成元年3月15日印刷

平成元年3月20日発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北嬭村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北嬭村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社